
1stのリウマ

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1stのリウマ

【Nコード】

N9827L

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

美少女顔の三島竜真は二十歳の時、合コン帰りに異世界に落ちた。

それから5年、異世界にて冒険者の最高峰として日々をそれなりに楽しく過ごしていた。

単独であるいは仲間達と歩む彼の前に敵はない。彼の歩いた後ろには彼にときめくファン多数。

そんな竜真と愉快的な仲間達のお話です。

1・i s tのリウマ(前書き)

ほのぼのですが、残酷な表現があるので、ご注意ください。

1・istのリウマ

陽に焼けた肌に小麦色の髪を短く刈り上げた男は、昼の片付けに手を動かしていると、扉が開いた。

「酒を…」

黒くボロい覆面で目元と口元以外を覆い隠した男は、カウンター越しに冒険者達が集まる店のオーナーに酒を頼む。

男としては平均より小さめの身長と深紅の長剣、覆面でその名を知られている冒険者で、酒場兼宿屋を営むこの店を懇意にしていた。

「お帰り。リウマ、半年ぶりだな？」

「師匠、ご無沙汰してます。今回はサナラン半島を巡ってきました。」

「ブジュルムとバナハスはやっぱりまずいのかな？」

サナラン半島はバナハス王国の最西端にあり、サナラン半島にあるマケロ鉱山は大陸随一の良質な魔石の宝庫で、

ブジュルム王国はサナラン半島を狙い、バナハスとブジュルムの国境はいつもきな臭い状態だった。

「…多分、次はブジュルム国王による大規模な出兵でしょうね。僕にもギルドを通して依頼が何件か来てますが、僕は戦場で兵器扱いはご免ですよ。」

「ギルド最高位になるのも面倒だな。」

この場合ギルドとは冒険者ギルドの略称で、数多居る冒険者達はこのギルドを介して仕事を得て、日銭を稼いでいた。

数多居る冒険者達は、それぞれランク付けられ、下からE、D、C、B、A、3rd、2nd、1stとなり、3rdからは数字持ちと言われて、数字持ちは全体の1割、中でも1stは現在2名のみ在籍している。

覆面の男は1stの冒険者だった。

「何をおっしゃる師匠殿。」

そしてこの店のオーナーは元3rdとして、そこそこの名が知れた剣士だった。

「馬鹿言え、その師匠を2年で踏みつけて行った奴が」

「そう言う訳で、師匠。家の鍵。」

「どんな訳だ。まあ良い、しばらくはシュミカに居るんだろ。なら、手伝え。」

「わかりましたよ。準備してきます。」

軽口のやりとりの後に覆面の男は店を出て、オーナーは口元に小さな笑みを浮かべた。

久しぶりの我が家は少しも埃っぽくなく、師匠であるヨルが留守中

に掃除をしていてくれたことを証明していた。

男は覆面を外すと、伸びた髪を束ね、装備を外して、着替える。

「切らないとまずいな。」

ここに来てから黒みが増した漆黒の髪は、肩胛骨まで伸びていた。魔法で一般的に多い鳶色に変えた瞳を素に戻すと同じく漆黒の瞳。今年で25になるにもかかわらず、しみ皺のない色白の肌に薄い紅色の唇。

見事なまでに美少女顔だった。

緋色のリウマこと三島竜真^{みしまりゅうま}は大学2年、20歳の時の合コン帰りにいきなり異世界に落とされた。

元の世界でもただの童顔だった（周りから見ると美少女顔の童顔）が、この世界では際立った童顔になってしまった（美少女にはかわりない）。

何が際立つかと言えば、その髪と瞳の色だった。

まず黒とは魔物の色であり、人間には出現しない色。そのため、この世界に来て初めて出会った人間、3rdのヨルに討伐されかけたことが師匠のヨルとの出会いだった。

ヨルに言われて、顔を隠し、ヨルの冒険に付き合い、ギルドに所属し、各地を回った。

竜真のランクがAになった時、ヨルはこの街、シュミカに店を構え、冒険者を引退したのだった。

以来、竜真もこの街を拠点にして、冒険者として行動していた。

冒険者と言っても、採掘・採集・採取、護衛や戦闘、遺跡等の発掘、様々な仕事がある中で竜馬はそのどれもをこなす1st。

特に遺跡での古代文字の解読は魔術士ギルドのマスタークラスを誇

る為、遺跡発掘の依頼が名指しで舞い込むこともあった。基本的には1人で活動する単独冒険者である竜真は冒険者ギルド以外にも盗賊ギルド、魔術士ギルドと複数に登録している変り者である。

シユミカの端に小さな一軒家を建て、冒険に出る以外は冒険で手に入れた品や知識を整理しているか、ヨルの店 夜更けのエリアを手伝っていた。

シユミカの街に竜真が帰ってきたのは昼過ぎで、夜更けのエリアに手伝いに着た時には、早めの夕食を取りに来た者達で、店内は騒がしくなり始めていた所だった。

覆面を着けた竜真が入ってきた瞬間、場の空気は一瞬緊張したが、覆面の口元に浮かんだ笑みと、ヨルの待っていたの一言に空気は元に戻る。

「これ、向こうの金髪の魔術士がいるテーブルに、それから、こっちはインテリそうな剣士がいるテーブルな。」

有に3人前はある大皿を2つ、竜馬の前にさし出されるが、片手に1皿ずつ軽々持ち上げると、それぞれのテーブルに持っていく。

「リウマ、お前も腹ごしらえしておけ。」

カウンターまで戻ってきた竜真の前に5人前になる大量の料理が広がった。

「このまま食わずに地獄時間突入かと思った。」

「お前のことだ。そんなことしたら途中でへたばるだろ。」

目の前の料理を手を合わせて、お辞儀してから食べる。

久しぶりに食べるヨルの料理は、また生きて帰ってきたのだなど、いつも通り、竜真を感傷的にさせる。

今回は特に、嫌になる事件があっただけに、竜真は生きていることが、いかに大切なことなのかを改めて心に染み入らせた。

「やっぱり師匠の料理が1番だね。…2番はマチルダの血塗れモルグかなあ。」

「…リウマ、それは誉めてないぞ。1番はともかく、2番はゲテモノ専門店じゃないか。」

ヨルは丁寧ながら吸い込む様な勢いで、料理を食べている弟子の感想に待ったをかける。

マチルダの血塗れモルグは、シュミカの夜更けのエリアと同じく、冒険者の宿兼酒場の店で、主人のモルグを作る恐ろしいまでの真っ赤なゲテモノ料理達で、入る客を限定させていた。

入る客は限定しているが、ヨルの弟子のようにコアなファンが居るため、潰れることはない。

竜真を連れての旅途中に、竜真がどんなリアクションが見れるかと1度連れて行った所、マチルダに着く度に血塗れモルグでご飯を食べる羽目になり、モルグの料理が苦手なヨルは自業自得ながら、辛い思いをした経験がある。

「1番はいいとして、2番は他にないのかよ。」

脱力したヨルは次の竜真の言葉にぎょつとして凍り漬けになった。

「サマンの忍び亭やカロランの喜劇の過激屋とか、モラムの三つ葉のカダ亭なんかもいいね。」

どれをとっても、冒険者内で有名なゲテモノ専門店だった。

ヨルが自分の店はゲテモノ専門店ではないよなど、客に聞いて回ったのは、それだけダメージが大きかったためだった。

「ご苦労さん。それじゃあ、今回の話を聞かせるよ。」

夕食の混み時が終わり、大半の客が出ていくか、2階の客室に戻った後、竜真をカウンター席に座らせて、酒を出す。

「…今回はね。久しぶりに人間が嫌いになったかも。」

酒を呷って、竜真は切り出した。

「サマラン半島を歩いてきたのは、伝えたよね。サマラン半島にはブジュルム側から入ったんだけど、そこにシヨンって言う小さな村があったんだ。そこにはある風習があって、胎児を守り神と偽る人型の魔物に食わせていたんだ。」

「…」

ヨルの目が見開かれた。

魔物にも2種類いる。

獣型と人型。

割合的には冒険者の数字持ちと人型は似たようなもので、総数は少ないが、人型の個人個人の絶対的な力は軽く国を滅ぼす。

大概は人間に興味なく悠久の時を気ままに過ごすのだが、時折、暇潰しと称した遊びで国を滅ぼすようなことをやってのけるのだった。

「人型か…」

「完全なる人型。流石に手強かったけど、なんとか勝ったんだ…ただし、まる3日動けなくなつて、村人に助けられたんだけど、顔を見られて神様扱いされた。瞳の色を変える余裕がなくて、真っ黒のままだったから、祭り上げられて、それから20日、新しく村をまとめあげて…」

何かを思い出したのか、遠い眼差しであらぬ方向を眺める弟子を尻目に、ヨルはうんうんと頷いた。

「人型は顔がいいからな。確かに間違え」

カッ！

そんな音がした。

ヨルの右頬をすれすれにナイフが飛んで、壁に突き刺さった音だった。

「リウマハニンゲンダヨ。」

「顔がどうかしましたか？」

「イエイエ」

冷や汗を垂らしながら、弟子の顔を見るヨルはナイフを壁から抜いて竜真に返した。

「またナイフ投げが早くなったな。初動が全く見えなかった。」

「師匠、それ以上衰えたら刺しますよ。」

「…それは笑顔で言うセリフじゃないな。」

顔全体は覆面で見えないが目元と口元で竜真が笑っているのはわかる。

ヨルは自分の鍛練も1日のスケジュールに入れようと頭に浮かべたのだった。

1・i s tのリウマ(後書き)

ヨルは38歳ぐらいのわりとイケてるおじさんです。

2・リンク1st(前書き)

初の戦闘シーンです。
さらっと行きます。

2・ランク1st

「バムズの群れが来るぞお。」

シュミカで休暇状態の竜真がヨルの店で遅い昼御飯を食べていた時だった。

店はシュミカの入り口にあるため、慌てた大声が良く聞こえる。

バムズとは、Dランクの依頼書に良く出てくる魔物で、8枚の羽の生えた緑色で5メートル程の幼虫だった。

羽化するとバルマズと言う、一体でBランクの蝶のような魔物に変態する。

バムズは1体ならDランクだがそれ以上になると多いただけランクが上がった。

魔物に村や街が襲われる時には、冒険者は問答無用で武器を取らなければならぬ義務があり、せっかくありつけた昼ご飯を前に竜真はため息と共に剣を取り、店を飛び出した。

「群れの規模は？」

馬車の御者台で叫んでいた男に竜真は聞いた。

「バルマズとの混合だから繁殖期の餌狩りだ。50体規模だった。護衛に雇った冒険者達が戦っている。この先の街道沿い500メートルの場所だ。」

「あなたはギルドに行って、緋色のリウマが行ったと伝えてくれ。」

叫んでいた男は竜真の伝言に頷き、ギルドに走っていく。それを見てから竜真は戦闘をしている場所に駆け出したのだった。

「ミック、ハユルドさんは逃げ切れたかなあ。」

「ついでに街に知らせていてくれると生存率は上がるんだけど。」

「

赤毛の女は鋼色の髪の男に叫んだ。

鋼色の髪の男ミックは大剣を振り回し、バムズを切った。

「アナ、セザム、カザイン、戦線を50メートル下げろ。」

ミックが叫ぶと、仲間の3人は頷きあい、バムズの攻撃を避けながら駆け出した。

「あっ！」

アナが小石に躓き、転んだ。

「アナ！」

アナの後ろにバムズが触手を出して迫っている。

ミックが反転して、アナの近くに帰ろうとしたその時だった。

紅い風がその触手を細切れにし、バムズを三枚におろしていた。

「まだ、死人は出てない？」

アナを越して、バムズに対峙した覆面の男の問いにアナは首を立てに振って答えた。

「このぐらいなら僕1人で十分なので、シュミカで雇い主さんと合流して下さい。」

覆面の男はその言葉を言う間に簡単に10匹のバムズを切り捨てる。

「近くにいられると切り捨てそうだから、なるべく遠くにいてね。」
まるで今からボール遊びするからと言うような気軽な口調でそう言った覆面の男は、バムズの群れの真ん中に突っ込んだ。

それを見たミックが呆然としたままのアナの側により、アナを立てた。

その間もバムズの中心でバムズの巨体が千切れて飛び散り吹き飛ばす。いつの間にかアナとミックの側にセザムとカザインも寄ってきていた。

「忠告に従った方が良さそうだね。」

おっとりとした物言いが特徴のセザムが皆に提案すると、その光景に圧倒された3人はそれぞれに頷いたのだった。

商人のハユルドはシュミカの入り口で、シュミカのギルドマスター

と一緒に、バムズが現れた方角を眺めていた。
ハユルドがギルドでバムズ発生を伝えると、中にいた冒険者達が騒
めいたが、すぐにギルドマスターが現れたことにより、騒ぎはやや
終息した。

「緋色のリウマが行ったのですね。」

マスターはハユルドにあっさりと、それはもう安心だと言う笑みを
浮かべて、入り口で待ちましようかと告げた。

「ハユルドさん。無事でしたか。」

ミックの声にハユルドは駆け寄った。

ミック達のパーティは疲労からか、ゆっくりめに近寄ってきた。

「無事で良かった。」

善人な依頼人であるハユルドは護衛を務めるミック達に対して丁寧
な対応でいたために、ミック達からの信頼も厚い。

「君達のおかげで商品も無事だったよ。ありがとう。」

ミックとハユルドが握手を交わしていると、ミックにギルドマスタ
ーが話し掛けた。

「シュミカのギルドマスターのハアンです。バムズを食い止めてくれて、ありがとう。」

「お礼は私達ではなく、今戦っている覆面の男性に言って下さい。私達では食い止められませんでした。」

悔しそうに、でも強い者への憧れに似た視線にハアンは苦笑して、罪作りな人と笑った。

「ですが、あなた方が時間を稼いでくれなければ、ここまで群れがたどり着いたかも知れません。ありがとうございました。」

再度、礼を言われるとミック達はくすぐったそうに笑った。それを見て、ハアンは語り掛けた。

「彼は強かったですでしょう。是非、彼を目指して頑張ってくださいね。彼は冒険者ならば1度は憧れる1stですから。」

1st…目を見張ったミック達が絶句したのを悪戯が成功した少年のような笑みを口元に浮かべて、ギルドマスターのハアンは、どちらで待つべきでしょうかと、夜更けのエリアを見つめた。

「師匠、ただいま。」

竜真はバムズを掃討し、身体中についた粘液を自分の家で綺麗に落

とし、着替えてから、夜更けのエリアに向かった。

「おかえり。」

「服一式ダメにしたよ。」

「そこは普通なら、装備一式って言うんだぞ。」

剣1本だけを持って飛び出した竜真は帰ってくる時も剣を1本だけ持って戻ってきた。

「粘液塗れになると、防具の手入れが面倒でしょ。バムズ1万體とかならちよつと考えるけど。」

50匹は敵にならない。それだけの実力が1setにはあつたが、そんなことは当たり前なヨルはツツコミを入れることなく笑っていた。

「洗い流してから来たの正解。直帰したら店に入れないところだった。」

「だから、ご飯くれる?」

「その『だから』の使い方はどうかと思うぞ。」

「ふふつ…あつすいませんね。お2人の掛け合い漫才はいつ見ても面白いものなので。」

笑い声か聞こえて、ヨルと竜真は笑い声と言訳をした壮年の男を見た。

「ハアンさんが待っていたのを忘れていた。リウマ、ハアンさんが用だよ。」

ヨルが竜真に告げると、ハアンが奥の席から竜真に寄ってきた。

その口元はいつまでも少年の心を忘れていない男の笑みを浮かべているが、目元には息子程の年齢しかない竜真への年長者からの生暖かな眼差しだった。

「リウマが居てくれて、助かりました。ギルドを代表して感謝します。」

「気にしないで下さい。僕的には、今街中にいる冒険者に戦ってもらいたかったんですから。」

「ただ、リウマの業がちよいと派手で、バムズなら半径10メートル内は一瞬で掃討するから、他の冒険者がいると危ないし、ギルド規約上、最も強い1stが今回の件を無視もできない。面倒臭い奴だね。」

「ですから、冒険者達にはギルドの屋上で、リウマさんの動きをちゃんと観察するように言っておきましたよ。見学も勉強ですね。ただ今回は最も強くてAがお2人しかいませんでしたが、その方々を含めても、残像すら見えなかったそうですよ。」

1stの戦いぶりなんて、滅多に見れるものではない。

まだ数字持ちになっていない冒険者達には、かなり強い刺激になったみたいだったが、1stの実力に誰しもが呻くしかできなかったことについては、彼らに数字持ちに上がれる期待をかけてはいけないなと、ハアンは微笑む顔の裏で、人材の不足を嘆いていた。

無然としている竜真を面白がるヨルにハアンが笑いながら付け足した一言で、ヨルが爆笑して、竜真は空腹と脱力感でガツクリとうなだれたのだった。

2・ランク1st（後書き）

ハアンさんは50歳程の方で、2ndです。

当初、アハンさんでしたが、書いているうちに微妙な気分になり、ハアンになりました。

ヨルはかるーく命懸けで竜真をからかっています。

そんな2人の漫才はファンが多く、竜真が居る時には客が増えます。常連客はそーっと吹き出さないように見守っています。

3・弟子入り希望（前書き）

リウマのファンが1人増えました。
BLにする気はありませんよ。

3・弟子入り希望

「リウマさん」

「…師匠」

「まっ、頑張つて」

真っ赤な髪少年が竜真に弟子にしてくれとヨルの店、夜更けのアリアを訪れていた。

少年の名はフルウルと言い、シュミカで鍛冶屋を営むグラフの息子で今年14歳になる少年だった。

先週のバムズ熾滅を見ていたフルウルは、それからというもの竜真の後を雛鳥のように付きまとっていて、竜真も辟易していた。

ヨルはその状態をにやけて見ている、竜真はそんなヨルにイライラを隠さない。

「グラフさんにもよろしくって言われてるんだろ？」

ヨルに言われて、竜真は一層肩を落とす。

鍛冶屋のグラフには、いつも世話になっていて、フルウルのこともそれなりに可愛がっている、追っ払うわけにもいかず、竜真は悩んでいたのだ。

「14歳かあ。…フルウル、ギルドには登録しているのか？」

「一応、12歳になった時、父ちゃんと歩き回るために登録しました。レベルEです。」

それだけ聞くと竜真は頷いた。

「……一度だけだ。一度だけなら、お前がいける範囲のクエスト（依頼）に着いていってもいいよ。」

フルウルは飛び上がらんばかりに感激興奮して、竜真の手を掴んだ。

「負けたな。」

ケタケタ笑うヨルが竜真の肩を叩く。

「うるさいよ。師匠。」

「フルウル、2日以内にクエストをとってきて。内容は盗賊討伐や商人護衛とかは駄目な。」

ヨルにすっかり肘鉄を食らわせると、フルウルに説明を始めた。

「出来れば、採掘、採取、採集がいい。とってきたクエストに応じて準備をもらうから、ここにきてくれ。」

「はい。」

フルウルは一目散にギルドに走っていったのだった。

「リウマさん。あんがとよ。」

「なるべく無傷で済むように善処します。」

フルウルはすぐに鉱物採掘クエストをギルドから持ち帰ってきた。内容は青硝石と言う青く透き通った石を10キロ採掘してくること。とりあえず、フルウルと一緒にクエストに出ると言うわけで、竜真はガラフの鍛冶屋に挨拶に着ていた。

「フルウル、今から準備して、明日の朝、太陽が出る前に出発したい。正門に3時待ち合わせね。準備としては、鉱物が入る入れ物。携帯食2日分、水、武器防具。携帯するはし、着替え。何をどう持つてくるかも、フルウルにお任せするから、ちゃんと考えて持つてくるんだよ。」

ことなげなく準備する物を言つてのけた竜真にガラフは手強い師匠だと、にやけて息子を見ていた。

「それじゃあね。」

竜真が手を振つても、復唱していたフルウルは呟いていて、竜真とガラフは視線だけで笑い合っていた。フルウルの一点集中はガラフと良く似ていると、竜真は口に出さずに店を後にした。

「一応、及第点だね。」

フルウルの持ち物をチェックして、必要最低限の物はきちんと確保

している。少々、携帯食料のバリエーションが少ないのは仕方ないだろう。
携帯用のつるはしはガラフのものなのか、使い込まれていて、良いものだった。

「で、青硝石を取りに行く場所は決まってるの？」

「はい。父ちゃんに聞いたんですけど、南のアラムナ湖の周辺に良い場所があるらしいです。」

「ん。場所はだいたいわかった。さあ、行こうか。」

「はい。」

そんなやりとりをしていた夜明け前、今は日が上がって、そろそろ目的地につくかという2人は、その前に腹ごしらえの休憩を取っていた。

ただ珍しいことに竜真は覆面を外していた。

「フルウル…あまり見ないでくれないか？」

恥じらうように視線を反らす竜真にフルウルは、はっとして俯いた。

「でも、君があまり驚かないで居てくれて、とても嬉しいと思うよ。」

そう言っただけ微笑んだ竜真の顔が、街中でも滅多に見られない美少女の可憐な笑みに見えて、フルウルは高鳴る胸に戸惑っていた。

「り…リウマさんが、隠しているのは当然だと思えます。漆黑なんて初めて見ました。ボクも驚かなかったわけではないんですが、命の恩人のリウマさんに対して失礼なことではできません。」

なぜ、リウマが覆面を外したのかと言うと、唇前のフルウルが水辺でランクCのモノフと言う水の属性で蛇に似た魔物に襲われ、水に引き込まれたことが原因だった。

モノフを倒したまでは良かったのだが、触手がきつく巻き付いたためにフルウルが泳げなかつたので、藻掻きながら動かぬモノフの触手と共に水に沈んでいくフルウルを慌てて竜真は助けたのだった。

助けたのは良いが、覆面が水を吸い、竜真も窒息し損ねた。

しかたなしに覆面を取って、フルウルを見る。

フルウルは意識がないのか動かなかつた。

「うわぁ。えっと、脈、呼吸………ヤバい。なんだ、気道確保」

とりあえずの応急措置でなんとか意識を取り戻したフルウルが目を覚ました。

目を開けた瞬間、目の前に居る美少女にフルウルは驚いた。一般的な女性よりは短いが漆黒の濡れた艶めかしい髪。心配そうに見つめる鳶色の瞳。半開きの薄い紅色の唇は柔らかそうだ。その唇と自分の唇の間は僅か10センチ。

「おい。大丈夫か？」

フルウルがあまりに自分を見つめて惚けているので、竜真は眉間にシワを寄せて声をかける。

「はっはい。つつツゲホゲホッ」

慌てて返事したものの、フルウルは咳き込み、水を吐き出した。

「慌てなくていい。モノフは始末した。」

魔物が持つ核コアと呼ばれるギルドでの判定部位もきっちり回収した。魔物退治の場合は、コアが無ければ、基本的に依頼完遂判定されない。また、コアを集めてギルドに持っていくことによって、ランクアップと換金がされる。

今回のモノフはランクCのためにフルウルには荷が重すぎると判断し助けたが、竜真は敵が弱ければ手を貸すつもりはなかった。

「リウマさん。ありがとうございます。」

「フルウル、お礼はいらない。ただ、俺の顔のこと内緒な。ヨルシか知らないんだ。」

首をかしげて、唇に指をあてた竜真に見つめられ、フルウルは頷くしかなかった。

規程量の青硝石を2人で分けて持つ。良質の青硝石が割と多い穴場だった。

「フルウル、行こうか。」

「はい。」

「これなら夜までに帰れそうだ。無事に帰ることが冒険者の第1条件だからな。」

竜真に頭を撫でられ、覆面の下の顔をフルウル思い浮かべた。

「本当にありがとうございました。」

「その言葉はガラフの前に立ってからにして…シッ」

瞬時に変わる竜真にフルウルは頷いて、あたりを伺う。竜真もあたりを伺い緊張感を高める。

「上だ。」

竜真はフルウルの腕をとり、その場から横に飛び退いた。竜真達の居た場所には青く固い鱗の巨大な生物。

「ど、ドラゴン。」

フルウルの口から小さく驚愕に震えた声が出た。

「ああ、餌場だったのか。」

一方、竜真はあっさりと言い放った。だが、その直後の行動にフルウルは何もできなかった。身動きすらさせてもらえなくなった。

「フルウル、行くぞ。叫ぶなよ。」

竜真はフルウルを小脇に抱え、荷物を更に抱え、全力で走りだした。フルウルは叫ぶどころか、口が開けば舌を噛みそうだと歯を食い縛った。

「フルウル、生きてるか？良かったな。好戦的な奴じゃなくて」

呑気な声にフルウルに声をかける竜真にフルウルは1stってスゲーと感動した。ただ、スゲーしか頭に浮かばないほどに混乱もしていた。

フルウルと竜真の身長差は10センチ程。抱え込まれると、フルウルの目の前には地面があり、すれすれをもつスピードで走っていることにドラゴン遭遇以上の恐怖があった。これに加え、装備品や荷物を全て持ち帰ってきた竜真。

フルウルの体重は43キロに10キロの青硝石、さらに互いの荷物。

どう考えても竜真の体重より重いものを持つての逃走に改めて、1stは凄い存在なのだ、ちよつと勘違い気味に感動し、興奮しているフルウル。

フルウルから、何となく妙な興奮を感じて竜真はやらかしたと、うなだれたのだった。

その異能に気が付いたのは、ヨルに出会ってしばらくしてからだった。

俺のことは師匠と呼べと竜真に言った男は、とにかくお調子者でイタズラ好きだった。

「ねえ？師匠、それは新しい遊びですか？」

ヨルのイタズラを受けて、怒り狂う猪に追い掛け回されているヨルを呆れて見ていると、ヨルは助けると言いながら走り回る。

その時、なんとなく、なんとなくだが、走り回るヨルをひよいつと持ち上げ、後ろに飛びさると、猪は木にぶつかって気絶した。

持ち上げられたヨルは驚いて、持ち上げられたまま固まった。

一方、竜真は自分の行動に驚いて固まった。

因みにヨルと竜真の身長差は20センチ、体重差は25キロある。

「……………俺スゲー。」

「……………リウマスゲー。」

声がして互いに視線が交わると、竜真はそつとヨルを降ろしたのだった。

「なんかここに着てから、俺色々変わったかも……」

「……………リウマ。」

しんみりとした空気が流れる。

「今の内に猪を捌いちゃおうぜ。」

「…うん。なんか残念な感じだよ、師匠。」

ヨルの能天気な態度に場の空気は一転した。

気絶した猪に止めを刺すと、さっさと捌きだしたヨルはまだ落ち込む竜真をチラッと見た。

「リウマ、異能は剣が巧くなるまで隠しておけ。でなければ、お前は
この世界で生きていけない。」

「…ありがとう、師匠。」

「で、色々ばれたのか。」

面白がるヨルをジト目で見る竜真を尊敬の眼差しで見つめるフルウルと妙な三角の図だった。

帰ってきた2人はギルドでの換金を済ませ、鍛冶屋に帰宅した。

竜真はフルウルと別れて、夜更けのアリアに行く予定だったが、フルウルが付いてきてしまったのだった。

「フルウル、美人だったろ？」

「生まれて初めてこんなにも美人な人を見ました。」

「いいなあ。濡れ濡れなりウマ見たんだ。」

「濡れた黒髪って、エロですね。」

カツと気持ちいい程の音を立て、2人の手元にナイフが刺さる。ヨルの手元は若干切れていた。

「そろそろ怒っていいですか？変態オヤジと馬鹿ガキ……」

「怒った時や嘲笑う時は敬語になるよね。」

ヨルはあらぬ方向を向き、初めてナイフ投げを食らったフルウルは凍っていた。

「フルウル、僕の容姿や身体能力については秘密だからね。」

2人は覆面の奥に氷の微笑が見えた気がして、壊れたように首を縦に振っていたのだった。

3・弟子入り希望（後書き）

フルウル：14歳・赤毛・鳶色の瞳

150センチ、42キロ

目鼻立ちがくつきりした素敵少年。

あらゆる竜真の魅力に魅せられ中（笑）

普通に女の子が好きですが、竜真の顔を見てしまったがために、つい比べてしまい落ち込んでいる。

ヨルが猪にやらかしたこと。

眠る猪に気配なく近寄り、耳元に息を吹き掛けると言う意味不明な遊びをした。もちろん、猪は怒り狂い追い掛けたが、軽々しく逃げるヨルは猪に更に火に油を注ぐ存在だった。

4・旅立つ前に(前書き)

名指しの依頼が着たようです。

4・旅立つ前に

前回の旅から1ヶ月、竜真はヨルに旅に出ると告げた。

「今回はシャロルのミグからの依頼。ミグの依頼だと2ヶ月は軽いかな。」

「ミグかあ。また変なもの見つけたんだろ。」

「遺跡だって、時代的にはリユカ帝国の初期か出来る前みたい。」

リユカ帝国はこの世界で1、2を争う程に大きく、発展している。その歴史は3000年続き、飲まれ飲み込まれ、盛者必衰、様々な国が起きて沈みゆく中で、権勢を誇っていた。

長い歴史の土台となる発見になるのか、リユカの歴史研究者のミグから、かなり興奮しているらしい文面の手紙が届いたのは1週間前のこと。

「フルウルは置いていくのか？」

「なんで連れていく？」

フルウルを当然のように連れていくと思っていたヨルに竜真は驚いた。

「弟子だろ？」

「弟子にした覚えはない。1度だけクエストを手伝っただけだ。」

「あんなに懐いてるのに」

可哀想にと首を横に振っているヨルに竜真は少しだけイラツとした。

「リユカ帝国の古い遺跡は、特に魔物が強いから駄目だ。1年前に潜った所には古代神竜が居た。」

「でも、その古代神竜と友達になって帰ってきたの誰？」

「マリシュテンのことは特殊事例。不測の事態にフルウルとミグの2人を守るのは面倒くさい。それにミグは遺跡馬鹿の変態でも3rdだ。」

1年前、偶然にあつた帝国の古代遺跡に軽い気持ちで入ったら、最後に古代神竜マリシュテンに遭遇した。

まさかの遭遇。それまでの遺跡内に出てきた敵達との戦いで相応に消耗を始めていた矢先のことだったので、竜真は生きて帰れるかとたっぷり3秒悩んだ。

悩んだところで始まらない。竜真は剣を構えた。

戦いの最中、ボロボロになり、視界の邪魔になってきた覆面を外した時にそれは起こった。

《いや〜ん。かわいい〜。》

ピンクの思念が竜真の脳内に突き刺さった。

《うっそ、やだあ。男なのに可愛すぎる。ねえ、あなた、私とお友

達にならない？もう少し早くその顔見せてくれたら良かったのに。
》

日本での女子高生のノリにそっくりな思念は、どうやら目の前の巨大な古代神竜から来ているらしいと、そう判断した竜真はあまりの脱力感に目の前が暗くなった。

直後、まばゆい光が室内に満ち、竜真の目の前には黒髪の長身美女が立っていた。

豊かな胸に括れた腰。

正面にスリットが入ったロングスカートからは完全なる美脚が見えていた。

「あたし、マリシユテンね。あなたは？」

「竜真＝三島。」

「リウマ＝ミシマね。うちらの中でも、そうそう居ない迄の漆黑。綺麗ね。人間なのよね。珍しいわ。」

そう言ってマリシユテンは竜真に詰め寄るといきなり唇を奪っていった。

「リウマってドストライク、ど真ん中なのよ。」

「…いきなり舌までは驚くよ。マリシユテン。」

絡み付いてくる魅惑的な肢体に一応、男の子なわけで、竜真は反応してくる自分に別の意味で食われるかもと、古代神竜とどうお友達になるのか、頭を抱えたい気持ちになったのだった。

「それに、最後の敵がマリシユテンみたいだったら、尚更、フルウルは連れていけない。食われる。」

「美人なお姉様に食われるのは男の本」

カツ！

「本望だろ。」

カツ！カツ！カツ！

1本目を躲し、ニヤリとした瞬間、顔を回るように3本のナイフが通り抜けて、壁に突き刺さった。

「師匠の鍛練のお付き合いが出来て、僕も本望ですよ。」

「お前も本当に容赦ないよな。」

「用事があれば、今日の内にしてください。」

そう言って竜真は出ていった。

すっかり面白くなった弟子に、ヨルは帰ってきたら、どういじくり倒そうかと出発前から楽しんでいた。

4・旅立つ前に（後書き）

マリシユテン：古代神竜。

イメージはノリカさん。

かわいいもの好きな4000歳

嫌いなものはむさ苦しいもの。

その点、竜真は大ヒットらしい。

5・友との再会(前書き)

続々と出る新キャラ…

5・友との再会

「ミグ。久しぶり。」

「相変わらず覆面だな。」

待ち合わせ場所である帝国内の田舎町ナユタのギルドの中に居る冒険者の誰よりも立派な体躯で素手を得意とする体術家に見えるが、得手はショートソード、中身はリユカ帝国史オタクであり帝国史については変態気味な執着を持っていたりするが、趣味は被服や手芸、料理だったりするかわいい人である。

刈り込んだアツシユに藍の瞳。

ここまで濃い色合いの瞳はこの世界では珍しく、竜真はミグ以外知らない。

190センチを越えるミグと160センチの竜真。2人が並ぶと男女にも親子にも見える上に目立つ。

「…視線が煩い。場所を変えよう。」

「2人部屋を確保してある。一応、ここが拠点だ。」

「わかった。」

2人はギルドから外へ出た。

「ミグ、ありがとう。」

そう言つて、宿の部屋に入ると竜真は覆面を解いた。

「相変わらずの美人だな。これ付けてみないか？」

ごそごそと大きい体を小さくして、ミグが自分のバックパックから取り出したの薄い青のレースで出来た自作シュシュだった。

カツと爽快な音をたてて、シュシュにナイフが通つた状態で壁に刺さつた。

「変態め……」

かわいいものを愛することを変態とは言わない。

かわいいものを作ることを変態とは言わない。

ただ、自分に付けさせようとするのが竜真には我慢できない程度に嫌いなので、ミグは竜真にとって変態なのだ。

「初動が見えない上にシュシュの真ん中を通し、かつシュシュを傷つけない。…リウマ、腕を上げたな。」

「鍛練したからな。」

竜真をからかうヨルを的にして…

「またヨルを苛めたんだな。」

ヨルは相変わらずらしいな…

行間を読む会話もできるミグとの出会いは、マリシュテンと何をとは言わないが、色々と励んでいる時に、偶然にミグが通りかかってしまったのがきっかけだった。

ので、ミグは竜真の素顔を知っていた。

竜真に付いて、シュミカに行き、ヨルにも会っている。

ミグは竜真にとってかなり親しい人物なのだ。

「今回の目的地は？」

「ここナユタから50キロ南東に行くと迷いの森がある。その真ん中あたりで、マリシュテンの遺跡と同じぐらいの古さ。多分、マリシュテン（古代神竜）クラスは居るかもしれない未到達遺跡だ。今日は準備にあて、明日朝出発しよう。」

「ああ、わかった。」

竜真にとっては珍しい、同じ年の気心しれた友人との再会は、後に竜真にとってこの世界で最も出会いたくなかった存在との出会いを呼ぶのであった。

5・友との再会（後書き）

ミグ：25歳

手先が器用で乙メン。

外見はアレですが、中身はかわいい方です。

竜真の数少ない友人の1人。

ちなみにマリシュテンと竜真を通して友人になったミグはマリシュテンと度々会っている。

外見はアレだがミグが持つてくるお手製の可愛すぎる服や小物達にマリシュテンはメロメロにされていた。

6 ・天敵との初対面（前書き）

不本意な出会い

6・天敵との初対面

「ああ…最近のラスボスは変態ばかりだ。」

竜真は涙が出そうだった。

ミグが別の部屋で石板に夢中になっているのを余所に、探索を続けたのがまずかった…と、思いたい。
竜真はうなだれた。

「ミグ。少し周りを見てくる。」

「……………」

解説作業にすっかり夢中になっているので、竜真の声はミグに届いていないようだった。

ミグに声をかけるのを諦めて、竜真は部屋を出た。

マリシュテンの遺跡と対に近い形の今回の遺跡。

とりあえず、マリシュテンが居た部屋に近いような場所には近寄らないようにしておけば、なんとかなるだろうと浅はかに思ったのがまずかった。

まさかの途中の部屋で白金の毛で覆われた巨狼が待ち受けていた。

《…マリシュテンの匂いがする。》

目が合った瞬間、竜真はヤバいと思った。

このヤバいの意味は今から強い敵と戦闘する意味ではなく、変態と

対峙した時のヤバいだ。

神狼から出てくるオーラに敵意はなかったが、妙にピンクにぼやけた別の意志を感じた。

しかし竜真は目を合わせたまま、手足を動かさなかった。神狼の威圧感マリシュテンと出会った時を凌いだ。

「マリシュテン！」

逃げなければ！

そう思った時には竜真は押し倒されていた。

「愛しのマリシュテン。まさか君が来てくれるなんて。」

いつの間に関人間体になっていたのか、長い白金の髪に黄金の瞳の見事な体躯の半裸の男が竜真を押し倒している。

「その顔を見せておくれ。マリシュテン。」

止める間もなく、竜真の覆面を取り払う。

「…お前だ…かわいいな。」

誰だと聞きたかったのだろうか、竜真の美少女ぶりに眩きが疑問から感想に変わっていた。

「変態、どけ！」

次の瞬間、竜真の蹴りが男の局部を破裂させんばかりの勢いで炸裂し、男はふつとばされ、壁に打ち付けられた。

「マリシュテンの知り合いか？」

ポツリと呟かれた一言に男は即座に反応した。壁に半分埋まったままなのは気にしてはいけなйдらう。

「知り合いだとも。彼女まだ生きてる？あぁ、あの美しい髪、肢体… したいなあ。あの胸に包み込まれたい。」

絶対的な美形も変態だと魅力は激減されるらしい。残念感に竜真は勝てなかった。

「マリシュテンとそこまで匂いが移ることをするなんて… なんて羨ましいんだ。女の子同士の絡み… それも萌える。」

「バカたれ、俺は男だ！」

「何！男だと？そんなマリシュテンが男と… いや、その顔ならありだ。」

なにかだ…

竜真は何も言わず、後退った。

この世界に来て、変態遭遇率は意味不明なまでに高いと竜真は思っていたが、目の前の美形男は変態さが突出していた。

「逃がさないよ。マイダーリン。」

「誰がダーリンだ。」

竜真は眉間、喉仏、心臓にナイフを投げた。

それぞれに刺さったが、男は何のダメージも受けなかったらしい。

「そのツンツンした態度はマリシュテンに通じるね。タイプだ。」
ナイフを回収しつつ近寄ってくる男は元の世界ではたくさん居た、
この世界初になる真性の変態と竜真に認定される存在となったのだ
った。

「何を遊んでるんだ？」

「ミグ、変態だ！」

「大変と言いたいのか？」

「違う。敵が真性の変態なんだ。」

全身が鳥肌で覆われた状態で、冷や汗をかいてミグのいる部屋まで
逃げてきた竜真は、扉越しにいる変態と攻防していた。

「手伝え！ミグ。ああ、鳥肌とまんねえ。」

「わかった。」

反対からの圧力に全力で抵抗する竜真の後ろから、何のことかわ
からないミグが支えた。

「何がいるんだ？」

「だから、変態。」

「で？」

「多分、マリシユテンみたいな存在。神狼じゃないか？狼っぽかったし」

向こうから押ししてくる力は並みではない。1stと3rd2人がかりでも必死で押さえているが、かろうじて押さえられている程度だ。その説明で納得したのか、ミグは力を強めたようだった。

その時、反対側からの圧力が消えた。

「転移できるの忘れてた。」

涼やかながら、艶っぽい声が吐息と共に耳にあたる。ついでにサワサワと太ももを撫でる感触が気持ち悪い。

「なやー！」

「僕が居たのに扉越しにいちやついてたんだ。お兄さん、ちょっとシヨック。」

過去読んできたファンタジーの王道では、白金長髪はクールやインテリ系、若しくは狼で熱血漢なキャラが多く、こんな変態は居なかった。

外見をぶち壊しにする変態は嫌だ。

その前に誰と誰がいちやついて、誰が誰のお兄さんなんだ。

竜真は襲いくる脱力感と戦いながら、どう逃げるかに必死になって

いた1stにあるまじき混乱ぶり、ミグは1人冷静に突っ込んだ。

「俺はノーマルだ。いくら美少女顔でもリウマ相手には勃たない。」

「馬鹿、名前を言つな。」

名乗っていないので、男に名前は知られていなかった。

「リウマ…リウマ…リウマ…覚えた。久しぶりに来た人間。歓迎するよ。どうかな？ 閨を共にするのは…」

「しない。俺も完全なるノーマルだ。男相手は乗るのも乗られるのも勘弁だ。ついでに俺だけじゃなく、ミグの名前も覚える。」

「好み以外は覚えなない。」

竜真の一人称は基本的に僕や私。これが俺に変わる時には、混乱している若しくは侮られたくない場合が多い。

今回は後者のようだ。

「でも今回は、リウマの名前を覚えてくれたことだし、覚えておくかな？ それに彼からもマリシュテンの匂いがする。なんだろう？ これかな？」

手首についているレースのシュシュに男の視線が移動する。

「マリシュテンがくれた布で作ったからじゃないか？」

相手がなんだろうが普通に接するミグの背中に竜真は隠れた。

「加護付きの聖布を貰うなんて、君は神官か何かかい？でも、あの時、リユカ王が皆殺しにしたから、それはないか…」

「それはいつ、何があって？」

最後つぶやきになっていた語尾にミグが食い付いた。

巨体に近寄られ、男が押される。ミグに詰め寄られ、顔を引きつらせるのを見て、竜真はざまみろと思った。

「おい、ミグはリユカ帝国史マニアだから、ちゃんと話しないと離れないぞ。」

「…リユカ王ハムネアはね、神殿が権力を握るのが嫌で、四神神殿の神官を皆殺しに、殺せない僕らを封印して、神殿から出られなくしたんだ。退屈で死にそうになっている内に眠っちゃってさ、君達の気配がして起きだした。」

「四神って…ハルマのケザインに四神を祭っていた村があった。宗教的にはかなり衰退していて、その村と近隣の2、3の村しか崇拜してない。御神体は竜、狼、獅子、巨鳥だったかな。名前までは覚えていない。資料がシュミカにあるから、見ればわかるんだけど…」

「マリシュテン、ビシャヌラ、ヤシャル、アルシユラね。僕はビシヤヌラだから」

「そうそう、そんな感じ…ああ、そう言えば、本人がいるのか。」

先程までの喧騒はすでになく、研究者状態の冒険者達はそれぞれの脳内に描く学説に夢中になっていた。

「マリシュテン、ビシャヌラ、ヤシャル、アルシユラ………何だか発音が似ているものを知っている気がするぞ。………まりしてん、ビシユヌ……いや、びしゃもんもありか、ヤシャルは夜叉……アルシユラは阿修羅……でも毘沙門天ならせめて虎だろ。………」

「ハムネアと言えば、狂王ハムネアか、ハムネアの次代に1度革命が起きていたのは、つい先日、発見したから、つじつまはあう。成る程、宗教を潰したのか。しかし、四神教が復活しなかったのは何故だ………」

全く2人に相手にされなくなったビシャヌラはつまらなさそうに隅で拗ねていた。

2人に質問攻めにされ、ちよつと顔色を悪くしている古代神は、いつの時代も研究熱心な人間達に待ったをかけていた。

「流石に今日はもう止めてくれるかな。何年ぶりに人間と話してると思っっているのさ。喋るの疲れたよ。」

「わかった。リウマ、1度ナユタに帰ろう。」

ミグはビシャヌラに返事をする、書くところがなくなった紙をペラペラと捲った。

「そうだな。マリシュテンの時は色々でこんな事を聞けなかったし、

お前、変態だけど、中々いい奴だな。」

めったに見せない満面の笑みを竜真は浮かべた。

「リウマ、君はやっぱり素敵だ。」

「放せ、変態。」抱きつこうとするビシャヌラと竜真の攻防を余所にミグは資料を捲っている。
誰も収拾つける者は居なかった。

それから1週間、2人はビシャヌラの神殿に通いつめた。
その結果、ビシャヌラの依頼を受けたのだった。

「じゃあ、ヤシャルとアルシユラによろしく。」

遺跡の入り口で手を振る美形。

ビシャヌラからの提案はマリシユテンとすでに知り合いになっている2人にヤシャルとアルシユラへの使いをしてもらうこと。

ヤシャルの神殿はビシャヌラの神殿から真南に100キロ、アルシユラの神殿はマリシユテンの神殿から真西へ100キロ。
完全なる正四角形の形をとるらしい。

「ミグ、マリシユテンの神殿によって、アルシユラ、ヤシャルで、最後にビシャヌラで1周でどうか？魔法屋で通信機を5機買って四神殿1機ずつ置いて行こうかと思うんだけど…」

「それが出来たら3000年前がなんて身近になるか…リウマ」

「ミグ。」

力強く握手している覆面と大男の凸凹コンビ。

竜真はミグとの旅は当分終わらないだろうと、ビシヤヌラの神殿から離れながら思った。

遠く離れて行こうとする2人を見つめて、ビシヤヌラは小さな声で言った。

「マリシュテンの匂いと飾り、僕の髪があれば、通行手形には充分でしょ。」

2人を待ち受けるであろう困難に、ビシヤヌラは笑みを浮かべるのであった。

6 ・天敵との初対面（後書き）

ビシャヌラ：変態…

えっと…ツンデレよりツンツンが好き。

邪険にすると喜びます。

7・有名税の支払い（前書き）

下ネタだらけです（笑）

7・有名税の支払い

リユカ帝国、タナーナの居酒屋で、竜真とミグは飲んでいた。すると、隣の席の3人の女性から、聞き捨てならない会話が流れてきた。

「…で、リウマって短いし、持たないし、金払いは良かったからいいんだけど、あれじゃあ、余計に欲求不満になっちゃうわ。」

「名が知れてる冒険者って言っても、それじゃあねえ。」

竜真から流れてくる不穏な空気にミグはまたなのかと単純に思った。

「お姉さん達、ちょっと話を聞かせてくれるかな。」

「ミグ：僕って本当に有名人だよ。ビシヤヌラの所を発ってから4人目の緋色のリウマがいるよ。今度、各ギルド本部のマスターに提言しようかな。僕の名前を騙った冒険者はギルド証剥奪ってさあ。」

「…騙りが出した損害をリウマが払うのは馬鹿馬鹿しいな。とりあえず、そいつらの身ぐるみ剥がして金目のものは賠償に足りない分は肉体労働でもさせて弁償させないか？」

「いいなあ。ミグ、それいいね。」

ぼこぼこにした男の1人を足蹴にして、竜真は覆面越しに微笑んだ。

「覆面してるから、騙りやすいなんて思ってるから痛い目に合うんだよ。」

「…」

「しかも、僕を騙った奴が1番早漏ってどういうことさ。飲み屋でお姉さん方の話し聞いて、嘆かわしくて泣きそうだったよ。」

竜真が足蹴にして、足元に敷いている覆面を更に蹴飛ばした。

「あまりに嘆かわしくて、そのお姉さん達ナンパして足腰立たなくなってもらっちゃったけどさ。不名誉な噂は撤回しなくっちゃ。」

昨夜、別れる間に竜真が隣のテーブルの女性達に声をかけていたが、まさか3人相手にことに及んでいたとは…ミグは竜真の絶倫ぶりを知っていたため、女性達がどうなったかは想像に容易かった。

「…なんとかいいなよ。兄弟。」

ほにゃらら兄弟とは言ったものだが、竜真は覆面の男から足を退けても、男はただ呻くだけだった。

「まったくリユカ帝国にはしばらく来てなかったけど、行く先々で緋色のリウマが居ると嫌になるよね。まさか、最近、旅に出ていない場所で緋色のリウマ大量発生中とかないよね。」

「あり得ると思うけど。」

2人は男達を縄で締め上げると、ギルド証を没収して、町の警備兵達に引き渡すと、その町のギルドに行き、没収したギルド証をギルドマスターに渡した。

ギルドマスターは困惑顔でギルド証を受け取る。

「お話は聞いておりましたが、帝国内のギルドにて提言させて頂きます。ですが、リウマ様は覆面と偽装されやすい仕様ですので…」

「ギルドに内緒にしておきたかったから、覆面にしてたけど…すいません。マスター、こちらに来ていただけますか。」

竜真は物影でマスターに顔を見せた。

「これは…」

マスターは目を見張った。

ここまで美しい美少女は見たことがなかった。

「僕はこんな顔でも男ですよ。」

「まさか…」

竜真が決定的な証拠を見せると、マスターは納得して頷いた。

「…ご立派…です。それにその髪、確かに覆面を付けなければ、大変でしょう。」

竜真が覆面で顔を隠すと、マスターは物影から出た。戻ってきた男達にミグは笑っていて、気になった従業員達や冒険者達はそわそわしていた。

「リウマ、色々見せたみたいだな。マスター、リウマは色々と凄かったでしょう。」

「ええ、リュカの追求者ミグ。緋色のリウマ様のごことは、マスター会議で提言させて頂きます。」

こうして、緋色のリウマの情報が各地のギルドマスターに通達されたのだった。

シュミカにて

「リウマさんが、黒を持つ者をご存知でしたんでしょう？今、冒険者ギルドではリウマさんの容姿が話題になっているのですよ。」

「へえ。」

ハアンの何か言いたげな顔に、ヨルは何も言わずにニヤニヤしていた。

「なんでもリウマさんが覆面なのをいいことに偽物が大量発生したのが原因だそうです、今後、名前を騙るものが居たら、ギルド証剥奪だそうですよ。」

「リウマの大量発生………あははははははははは」

笑い始めたヨルにハアンはこれは駄目だと呟いた。

7・有名税の支払い（後書き）

ヨルにネタをハアンが提供した模様。

8・神殿の壁に（前書き）

マリシュテンの神殿につきました。

8・神殿の壁に

「マリシュテン。1年ぶりぐらいかな。」

「リウマあん~~~~あん」

目があった瞬間にマリシュテンに飛び掛られ、なおかつ熱いキスに見舞われ、竜真はマリシュテンを引き離れた。引き離されたマリシュテンは不満顔で拗ねた。

「マリシュテン、いきなりキスするのは止めようね。」

「また不粋な覆面しているのね。取りなさいよ。」

仕方なく竜真は覆面を取り去った。

「本当に綺麗ね。リウマ……」

「マリシュテン……ミグも居るんだけど。」

マリシュテンの電光石火のご挨拶にミグはどうしたものかと、思索していた所、矢先は急にミグに向かった。

「ミグも来てるの？ミグ、この前頼んでおいたドレス出来てる？」

「出来てますよ。」

マリシュテンの所へ行くと決めてから、ミグは宿に着くことに針仕

事をしていたのを竜真は知っていたが、それがマリシュテンからの頼まれごととは思っていなかった。

ミグのバツクパツクから取り出されたのは、淡い青色のドレスだった。

「イメージ通り。流石、ミグ。ありがとう。」

満足そうな満面の笑みで、早速ドレスをあてがうマリシュテンは10代後半の少女のようだった。

「凄いな。僕は裁縫と料理の味見に才能がないって師匠に言われててさ。自分の繕い物もままならないよ。」

「確かにリウマは裁縫はダメだし、ゲテモノ好きだからな…俺はお前が作った料理は食えない。」

竜真が感心していると、ミグは呆れ顔で返した。

竜真の作る妙に甘激辛い食べ物にミグは辟易していた。

マリシュテンはお気に入りのお気に入りの竜真に抱きつき、擦り寄っていたのだが、途中から変なものを見る目つきで竜真を見つめた。

「ねえ、リウマ…なんであの変態の匂いがするの?」

「ビシヤヌラのこと? 3週間前にあいつがいる神殿に偶然入ったんだ。」

「やだ、リウマ。あの変態に何かされなかった? 私の匂い、いつぱい付けておいたから、心配だわ。」

「大丈夫。確かな変態だけど、押し倒されたぐらいで済んだから。」

端から見てれば、美女同士の会話で目の保養だとミグは外野から見ていた。
ただし、方や男で方や竜なのを考えると、虚しい気持ちになっ
てくる。

放置されたミグはまだ続くマリシュテンと竜真のイチャイチャよりも壁に書かれている古代文字に目を向けて、徐々に視界から2人を消していった。

「マリシュテン、今日は君に用があってきたんだよ。」

途中から、マリシュテンによるキス攻撃が始まり、しばらく、竜真も何故ここに来たのかを忘れかけたが、ふと思いついた。

「用？」

唇が離され、不本意そうな顔で、竜真に抱きついているマリシュテンが可愛らしく首をかしげた。

「実はね、ビシャヌラからの依頼で神殿同士を繋ぐ通信装置を届けにきたんだ。」

「…変態と通信なんて嫌だわ。…でもリウマやミグが相手ならいいわよ。」

余程、ビシャヌラが苦手らしいマリシユテンにリウマは苦笑いし、通信水晶をマリシユテンに渡す。

「とりあえず、4つの神殿とミグが持つ予定。」

「リウマは持たないの？」

「基本的に通信装置の水晶が使えるのは5つまでなんだ。1stの僕より3rdのミグの方が対応しやすいことも多い。だから、ミグなんだよ。」

つまらなそうな表情を浮かべるマリシユテン。

「後、3つの神殿に向かう道中はミグと一緒にだから、いつでも通信して？」

「それなら許してあげる。」

「使い方は魔力を水晶に流し込んで会話するだけだからね……………ミグ？」

「…」

「ミグ？……………ああ、研究モードだ。これはしばらくダメだ。」

古代文字に夢中になっている友はともかく、マリシユテンに水晶の使い方を教えたい。ミグ用の水晶はミグの鞆の中にあり、いくら友人とは言え、人の鞆は開けられない。

ミグは壁を見つめて、はあはあしているのは見てはいけないものを

見ているかのように興奮している。

「なあ、マリシュテン。あそこに書いてあるのは何？」

「人の愛の行為の説明よ。」

「納得。」

壁一面に日本で言えば48手だのが言語で書かれていると考えれば、古代オタクとしてはたまらないだろう。

「ミグはこの部屋初めてじゃないだろうに、今更？」

「ああ、あれか？あの部分はリウマと私の」

「マリシュテン？」

声に怒気を込められ、静かながら迫力満点に自分の名前を呼ばれ、マリシュテンは小さくなった。

「怒らないでね。だって、あれだけの興奮は久しぶりだったんだもの。興奮を覚ますために日記にしてみたの。」

「あいつ…直にそれ見てるくせに、何で書いてある方に興奮してるんだ？」

あわあわと焦っているマリシュテンを軽く睨み付け、眉間に皺を寄せて、うなだれたのだった。

8・神殿の壁に（後書き）

マリシュテンはこっぴどりと怒られました（笑）

9・同郷の人（前書き）

マリシュテンの神殿で何かを発見してきました。

9・同郷の人

マリシユテンの神殿を去って、すぐの街でのことだった。ギルドで依頼状を眺めていた竜真はミグに尋ねた。

「ちょっとだけクエストしていいかな？」

1stともなれば、1回の依頼料が高いクエストが多いので、竜真が金に困っていることもなければ、やはり数字持ちなミグもそんなに金に困っていることもなく、目的地はあるが規制のないぶらり旅の途中、ギルドでの依頼を受ける必要はない。

「別に構わないけど…」

「じゃあ、これ、一緒にやってみる？」

そう言った竜真から出された依頼状はレベル2ndのものだった。自分は3rdだが、一緒に居る竜真は1stだ。格上の依頼も請けれる。ミグは依頼状を見た。

《依頼主：シグルドⅡマナタナルⅡフェブカ》

「リユカ帝国フェブカ領、領主シグルドⅡマナタナルⅡフェブカからの依頼だね。報酬も内容も良いから受けてもいいかなと」

《依頼内容：娘ナーミエの教育》

「リウマ…旅の途中なのだが」

旅の途中に教育係は時間がかかり過ぎる依頼になるのではないかと、ミグは眉間に皺を寄せたのだった。

「教育できれば問題ないんでしょ？」

簡単に言う竜真。

教育とだけしか書かれていない。何を教育するかまで書かれていないのは、クエストとしては難易度が高くなる。

確かに数字持ちはギルドから、貴族の習慣やマナーの講座をみっちり受けるし、専門的なことは生業としているから、数字持ちへの教育依頼は良くあることだった。

「決定でいいかな？」

ミグも何件かこういう依頼をこなしたことがあったので、竜真の指示にしたがった。

「1stのリウマです。隣に居るのは3rdのミグ。フェブカ領主様のご依頼の件でギルドより参りました。」

門番に告げると、門番は竜真を待たせて、館に入っていった。

「尊通りなら、手強そつな娘さんだぞ。」

「…手強い方がやりがいあるじゃない。」

ミグがこそりと呟けば、楽しそうに答えた。ミグは竜真を見た。覆面なので、竜真の顔は見えないが、妙にやる気満々な雰囲気はミグに伝わってくる。

噂ではナーミエは常に顔を隠していて、話を聞かないし話さない。なので、教師達は降参するしかないらしい。

「なあ、ミグ。常に顔を隠す誰かに似てないか？」

「何が言いたい？」

「言葉が話さないのは何故だろうね。もしかすると、話せないかも……」

笑った気配が竜真から流れ出してくる。

「楽しみだ。」

「お待たせいたしました。シグルド様がお会いになるそうです。」

執事が現れ、竜真達を案内する。

館内は品の良い厳選されたものが趣味良く並べられていて、ミグは時々頷いていた。

竜真は竜真で、この領主は善人が腹黒か計かっていた。

「シグルド様、お連れしました。」

「入れ」

思ったよりも若そうな声がして、竜真は意外に思った。入ってみると、やはり、思ったよりも若い。

「はじめまして、1stのリウマ殿、3rdのミグ殿。フェブカ領主シグルドと言います。」

シグルドは茶色い髪をオールバックにしたこれといってない平凡な印象の男だった。

「はじめまして、フェブカ領主様。1stのリウマです。覆面にて失礼致します。」

「はじめまして、3rdのミグと申します。」

方や背の低い覆面、方や大男、不思議な組み合わせの冒険者だが、数字持ちに対しての信用は高い。

しかも、覆面の男は1stを名乗る。

「1stの方と出会えるとは、ギルドに依頼した甲斐がありました。」

「希少動物みたいなものですからね。」

ははっと笑い、竜真はシグルドに握手を求めると、シグルドはその手を握り返した。

「それでは、ナーミエの家庭教師になっていたかどくに当たって、教養とマナーの試験をしていただきたいのですが宜しいですか？」

「ええ。もちろんです。」

数字持ちになるには教養やマナー講習である程度の点をとらなければならぬ。

更に2nd、1stとなると各国や各地方独特のものから各国の歴史から夜会や舞踏会用のダンスまでを叩きこまれる。

竜真は勿論、ミグも教師採用された。

シグルドが娘を連れてくる。

顔を隠した娘の手はアジア圏の人間にみられる肌色で、竜真は読みが当たったと内心喜んだ。

「これが娘のナーミエです。」

「…はじめまして、竜真＝三島です。」

うつむき加減で部屋に入ってきた娘が顔を上げた。

『三島さん？』

帰ってきた返事にニヤリと笑う。ここにきて、初めて出会った同郷の日本人。

『なみえさんでいいのかな？』

『はい。向井奈美恵と言います。良かった。日本人に会えるなんて嬉しい。』

『今日から君の教師になるんだ。その覆面をとってもらっても？勿論、僕も取るよ。ちなみに、後ろのでかい男はミグ。彼は僕の髪が黒いことを知っている男だから問題ないよ。』

そう言うと竜真は覆面を外した。ミグは竜真は見知らぬ人の前でいきなり覆面を外したことに驚いた。

竜真が覆面を外し、露になった素顔にシグルドと控えていた執事も驚く。

「リウマ、いいのか？」

慌ててミグが聞いた。

「大丈夫。シグルド様も執事さんも僕が素顔を晒したところで驚いてはいたけど、怯えなかっただろ。『向井さんも外してください。』」

「

最後の一言を奈美恵に向けた。

奈美恵は被り物をとった。

黒い髪は上手に巻き上げてある。うっすら化粧もしているようだが、基からの作りも悪くないようだ。

恥ずかしそうにはにかむ顔は可愛らしかった。

『改めて、自己紹介するよ。僕は三島竜真、こんな顔だけど性別は男で、25歳。20歳でこの世界に来たんだ。それから5年、ここで冒険者しています。』

『私は向井奈美恵です。こんな外見だけど、27歳でここに来たのは1ヶ月前でいいのかな。35日目になります。どうしてか若返っ

てしまったんだけど、鏡見て驚いたわ。どう見ても10代じゃない。」

『その事、シグルド様に伝わってる?』

『多分、伝わってないと思うのよ。名前は何か分かったけど、なんせ奈美恵もナーミエになってしまってるし…』

困惑の表情を浮かべている奈美恵は少し精神的に疲れているらしいことを竜真は読み取った。

『伝えても?』

『伝えてもらえる?』

嬉しそうに奈美恵は笑った。

今まで笑うことがなかった奈美恵を見て、シグルドは驚いていた。

「『いいよ。』シグルド様、彼女はどうも僕と同郷のようです。彼女について、どの程度ご存知ですか?」

「残念ながらナーミエと言う名前と10代の少女と言うことしか…」

何せ言葉が通じず、外見で判断した結果、娘として保護したのだ。

「詳細を聞いても?」

「ええ、とりあえずそこに座って話しましょう。ダナ、お茶を」

「かしこまりました。」

控えていた執事がお茶の支度を始める。

「ん、何から話しましょうか。」

シグルドはどう説明するかを悩んだ。

今から1ヶ月程前のことです。

満月が美しい夜でした。

寝ようと寝室へ向かい、ベッドに入ろうとして、そこに既に寝ている者がいることに気が付きました。

それがナーミエなんです。

黒は魔の色と言われていますが、彼女はその魔に見えませんでした。話を通じない彼女となんとか会話になったというか、名前がやっとわかったのが、それから1週間後。

なんとか話せるようにと教師を雇ってみたものの、顔も見せることが出来なければ、声を発することもなく、教師達は手の出しようもないと諦めていったのです。

これは単純にいい人属性かな。

竜真は心の中でクスクスと笑いながら、奈美恵についてシグルドに通訳した。

特に年齢についてはシグルドやミグ、その場に居ることを許可されている執事も驚いていた。

「本人曰く、若返ったようですが、中身は27歳という妙齢の女性ですので、扱いは大人の女性と同じにしてください。シグルド様？」

「私と3歳しか変わらないのか…」

竜真は苦笑した。

それもそうだろう。3歳しか変わらない彼女を娘扱いしているのだ。

「外見が外見なので、しかたありませんよ。因みに僕は25歳なので、やはり見た目で判断しないで下さい。」

更に驚いているシグルド達を尻目に竜真は奈美恵に話し掛ける。

『さて、奈美恵さん。あなたには魔法をかけなければならないんですが、手をとっても？』

『魔法？魔法なんてあるの？』

魔法と聞いて、奈美恵の目が輝いて、ファンタジーが好きなことを竜真に知らせた。

『この世界は剣と魔法がある世界で移動方法は徒歩、馬、馬車等かなり原始的で。黒は魔物、モンスターの色なので、僕達は顔を隠さなければ、殺される可能性が高いことを知っていて下さい。』

あなたは出会った方が良かった。シグルド様でなければ、殺されていた可能性があります。奈美恵さんはシグルド様の娘とされているので、屋敷からでなければ大丈夫でしょうが、言葉が話せなければ対応に困るでしょう。これについては英語の授業を受けるとでも考えてもらえば良いでしょう。それと、僕の場合は顔が顔なので、覆面で覆ってしまっていますが、昨日、発見した呪文で、髪を染めることができるようになりました。それと瞳の色を替えれます。質問はありますか？』

殺されるかも云々では怯えた表情を出したが、竜真の説明を聞いて、平常な精神を取り戻してきた用立った。

『お話を聞くと、竜真さんは魔法が使えるんですか？』

『これも一応、練習しましょうか。この世界に来たと同時に僕には髪や瞳の黒が濃くなる。言葉が通じる。魔力が強い。怪力と速さ。通常の人より強い等の異能が付きましました。なので、あなたにもなにかしらの異能というオプションが付いているはずです。』

『わかりました。これからしばらく宜しくお願いします。』

奈美恵が手を差し出すと、竜真も握り返した。

2人のこの世界の言語ではない会話を聞いていた他の3人に握手をしたまま簡単に説明した。

「彼女が適応できるように、教師役をさせていただきます。それと

…《美しき御髪を風にそよがせよ、その風の色は天に煌めく星》《美しき瞳は映すは何か、それは深緑の森》つとね。」

握手している手から何かのエネルギーが走ったようで、奈美恵は小さな悲鳴をあげると、シグルドは焦った表情を出した。次の瞬間、奈美恵の体が光り、体毛はプラチナブロンドに瞳はエメラルドグリーンに変化していた。

「シグルド様、解呪魔法を受けると戻ってしまいます。僕が旅立った後に解呪魔法を受ける機会があれば、また掛けなおしてあげてください。」

「は…はい。」

握手していた手を離すと、竜真は奈美恵に自分の姿を見せるため窓際に連れていく。

ガラスに写った自分の姿に奈美恵は心底驚いた。

『似合っているよ。もう少し地味な方が良かったかな?』

竜真は色彩が派手過ぎたかもと、少し反省したのだった。

9・同郷の人（後書き）

向井奈美恵：27歳だが現在の外見年齢は15、6歳。

シングル：30歳。かつこいいに括られるが平凡な容姿の平凡な領主
奈美恵を養女にしたが、実は3歳しか年が違わないと知り驚愕。

10・鬼のレッスン(前書き)

鬼が居たようです。

10・鬼のレッスン

「かなり出来てるね。」

正解で回答紙がかなり埋まっていたのに、竜真はにんまりと笑い、奈美恵は力尽きて、机に突っ伏した。

竜真のやり方は飴と鞭、いや、鞭と鞭と飴だった。

まずは発音と基礎言語が書かれた言語表を渡され、2日後にテストするからと笑顔で言い切った竜真。

テスト結果が悪かった1回目の後、目が笑っていない満面の笑みと言つ、怖い表情の竜真の手から顔すれすれにナイフが飛んだ。

「次は正解率90%が合格範囲だからね。」

2回目テスト範囲分は1回目テスト範囲分に上乘せされると言う形で行われ、冒頭に戻る。

「じゃあ、基礎言語はだいたいになったから、応用問題…と行きたいが、マナーとダンスも覚えてもらいたいし…」

『お…鬼だ。』

うるうると涙ぐむ少女に対して、そこそこ出来の良い生徒にニヤつく美少女顔の男。

「当たり前でしょ、僕は10日間で君を令嬢にするつもりなんだから。はい、日本語使ったからペナルティね。この階の廊下を綺麗な歩行で20往復。はい行った!」

日本語を使うことを禁止して、使ったらペナルティを科せられ、奈美恵はひいひい言わされていた。

「ほら、背筋伸ばして、頭の上の本を落とすなよ。顔は笑顔。」

ミグはそれを見ながら、自分の資料整理していた。

「笑顔、口角を上げて、少し目を細める。歯を見せすぎるな。何度も言わせるなよ。」

「はいいいいいい。」

普通の日本人はドレスなんて着慣れていない。

奈美恵も勿論着慣れていない上に笑顔付きの美しい歩行はまさに拷問だった。

「ミグさん助けてえ。」

「無理だ。」「無駄だ。」

ミグは竜真の気配で無理だと言い、竜真はミグは止めはしないことを知っていて無駄だと言う。

「そんなあゝ。」

「ほら、眉がハの字になってるぞ。これが終わったら、シグルド様とダンスレッスン。後5往復だ。」

ダンスレッスンと聞いて、ミグはシグルドの執務室に向かう。

教師として雇って3日しか経っていないが、シグルドは竜真の怖さ

を身に染みて知っていた。

何故ならば、奈美恵に完璧な令嬢としての仕草を求めるならば、シグルドも完璧を目指して当然という姿勢の竜真にダンスの下手さを知られてしまったのだ。

おかげで、シグルドは奈美恵がダンスレッスンする時には共に鬼の扱きを受ける羽目になったのだった。

「はい、終了。タナリーさん、奈美恵に湯浴みさせて、ダンスレッスンの練習着を着させてきて下さい。」

「かしこまりました。」

ちょうど、近くを通りかかったメイドのタナリーを呼びつけ、奈美恵を任せると、自分も着替えるために、与えられた部屋へと向かった。

完璧な美少女がそこに居た。

着替えてレッスン場に来た奈美恵は煌めく少女を…美少女顔の男、竜真を見て固まった。

『うわぁ…』

「ペナルティ…」

「何も言ってますん。」

竜真の桜色の艶めく唇から出てくる恐怖の単語が呟かれそうになると、奈美恵は怯えて青い顔を横に振った。

シグルドとミグも入ってきたが、竜真を見て、驚きに固まる。黒く艶めく肩を過ぎるぐらいの髪。

神が生け贄を求めるのなら、まず真つ先に名指しされそうな美貌。勝ち気に光る濡れた瞳からは有無を言わせない威厳がある。

煌びやかな衣装に王冠が頭にあれば、誰もが女王陛下と頭を下げていたに違いなかった。

「…おい、ミグ。何故、お前まで固まる。」

「いや…何故スカートを穿いているんだ？」

「決まっている。奈美恵に完璧さを求めるには足裁きは勿論、ドレスの裾裁きまでたたき込む。そのためには女役も必要だからだ。ミグ、身長差はありすぎるが、相手役になってくれ。シグルド様と奈美恵は壁まで下がって、所作を見て覚えて。とりあえず、同じことを2回繰り返し返してやるから、そしたら、お2方には実践していただきます。」

そこまで言うと、竜真は可憐な笑みを作る。

そこに居るもの全てが魅了されてしまふ笑みはミグを再び固まらせた。

「ミグ、動け。」

ウドの大木と化したミグに向かい、可憐な笑顔なのにどことなく怒気が含まれていると言つ複雑な表情になった竜真がナイフを取り出したところで、ミグが動きだした。

「まずは入場から、ほら、入り口に行くぞ。」

さっさと歩きだした竜真の後をミグは慌てて追った。

「はい、2回目終了です。次、シグルド様、奈美恵、入り口へ。」

「「はい」」

返事はしたものの、2人は体が動かない。

目の前で行われた、妖精の舞踏会が奇跡的に見れてしまったかのようなお手本に心底酔わされてしまっていた。

「動け！」

竜真の冷たい声に父義娘共々、体を震わせて、そそくさと移動したのだった。

「入ってきて、そう。1歩1歩を丁寧に、顔は笑顔。奈美恵、かなり良くなった。」

こうして、時に誉められながら、ナイフを投げられそうになりつつ、鬼の授業は進んでいった。

「はい、お疲れ様でした。汗を流したら夕食の時間です。」

既にこの家のタイムテーブルを把握している竜真の口から終了が出ると、シグルドと奈美恵はぐったりとその場に座り込んだ。

「シグルド様、完璧に変な癖は治りましたね。これからのレッスンへの付き合いは2日に1回でいいですよ。∴奈美恵はもう少しで及第点。」

「ありがとうございます。」

爽やかな笑みを浮かべ、奈美恵は喜んだ。

滅多に誉めない先生からの及第点は近いと言っ言葉は純粹に嬉しいようだった。

10・鬼のレッスン（後書き）

竜真さん…どこからナイフを出すのでしょうか？

11・希代の風使い候補（前書き）

本日もしごかれています。

11・希代の風使い候補

領主館の中庭に竜真と奈美恵が居た。

爽やかな風が吹き、緑が揺れ、ナーナの大きく白い花が咲き乱れている。

ミグは何かしら起こった時に対応できるように、少し離れた場所に立っていた。

領主館に来て6日目、竜真は奈美恵に異能があるかどうかを判断するためにまずは魔力測定と魔力の使い方から始めることにした。

「基本は感じることに。手の中に小さなボールを思い浮かべるんだ。体の中心から肩へ、腕を通り、手の平に…」

「…綺麗な赤ね。」

20センチ程離れた状態で、手の平を内側に向け、前に出し、集中しだした竜真の手の内には深紅の丸い固まりが浮いている。

まるで極上のピジョンブラッドのルビーの塊のようなそれに、奈美恵は感嘆しながら呟いた。

「見えるなら、奈美恵にも素養はある。真似してみて…まずは体の中心から肩へ、腕を通り、手の平に何かを通すイメージをして、手の平から手の中に小さなボールを作るように…ああ、君は柔らかな緑色だね。属性は風…治癒…防御…ってところかな。次は、そのボールを小さくするようにイメージする。手の平に戻す。戻されたものは体内に拡散させるよ。」

奈美恵も竜真に習い、同じようにしてみれば、奈美恵の手の中には、柔らかく光る翡翠のような光の塊が出現する。

それを観察してから、竜真は塊を無くす方法を練習させる。

「はい。良くできました。やっぱり魔法に関する能力値はかなり高いね。これを1回で出来る人はまずいない。」

自分も能力値はかなり高い方だが、奈美恵はそれを上回る能力値がありそうなのを感じている。

奈美恵は今まで感じたことのない疲労感に、地べたに座り込んだ。

「次は作ったボールを身体の周り回す。」

「ま…待って、体に力が入らないの。」

すかさず、次の練習に移ろうとする竜真に奈美恵は待ったをかけた。今日、初めての魔法学ということもあるので、竜真は休憩を告げた。

「30分休んでいいよ。ミグ。」

「なんだ。」

ミグの側に寄った竜真は奈美恵の才能について聞いてみた。

「普通の能力ある人間では1回であそこまで到達するのに、どんなに早くても3日はかかる。色が出るのはそれだけ属性が強いと言うことだ。あれだけの風属性の強い人間を見たことがない。」

「…希代の風使いの誕生かな。冒険者になれば、1stになれるのに…シグルド様には魔術士ギルドへの登録をするようにお伝えしておこう。」

力強いならば、なおさらに登録しておいた方がいい。力のコントロールは短期間過ぎて、教えることが出来ない可能性があるが、魔術士ギルドの同僚に教師に適役の人物がいることを竜真は知っていた。

ようやく立ち上がった奈美恵の側にミグと竜真が戻った。

「ああ、しんどかった。」

「そうだろうね。呪文なしの20センチ、純粋な魔力玉を作るのに必要な魔力は呪文ありの同じ物に比べて5倍かかる。この20センチの純粋な魔力玉が作れることが魔術士の認定を受ける最低条件なんだ。奈美恵はその点は既にクリアできた。しかも色付きだ。魔術士のマスターの1人として、是非とも魔術士ギルドへの推薦状を書きたいぐらいだ。」

短期間に冒険者ギルドにおいて1st、魔術士ギルドにおいてマスター、盗賊のギルドでは首領の称号を得た希有な人間の竜真の審査は非常に厳しい。

単一ギルドだけでなく、複数ギルドに所属していることが更に極めて竜真を偉大な人間と他者に認定させていた。

そんな竜真が手放して褒め称えることは1年に1度ぐらいしかない。

「竜真さんに誉められるのは嬉しいな。何せ滅多に誉めないもの。」

誉められて、奈美恵は嬉しい気持ちにで微笑む。

「奈美恵には才能がある。きっと風の賢者の称号は君の物になるはずだ。今日の練習終了後にシグルド様に魔術士ギルドへの登録について話します。」

領主館に来てから覆面を解いてあるので、竜真の表情はそれは良く見てわかる。

奈美恵の才能が嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべている竜真だが、遠くで皿が割れる音がした。

中庭にいる3人が音がした方を見ると、真っ赤な顔をした女性の召使が棒立ちになっている。

「顔面凶器って俺のことかな。」

「落ち込むなりウマ。俺は美人だと思うぞ。」

「そうです。竜真さんは美人さんだけです。」

喜色満面の笑みは少し萎れたような苦笑に変わり、それがまた守つてあげたくなる儂い風に見えて、別のところでカシャンと音がする。男性の執事が書類箱を落としたようだった。

「……」「……」「……」

「さっさあ、練習を再開しましょう。」

「あつ、ああそうだな。」

変な空気が流れた。

11・希代の風使い候補（後書き）

サブタイトルを顔面凶器にしたかった…

12・教育クエスト終了（前書き）

長袖にジーンズ、手袋、長靴、帽子と覆面の間しか見えない程に肌を露出しない生活なのに、何故か眉間を蚊にさされる…
こんちくしょー

12・教育クエスト終了

「さて、10日目です。」

竜真の笑みにただの朝食の場がキラキラ光っているような気がして、奈美恵はちよつとびくついた。契約は10日間。教育系依頼にしては異例の短さだ。

「今日で、終わりですか？」

「はい。終わりです。なので、今日1日かけて総復習代わりに試験したいと思います。」

総復習、試験の声に奈美恵の顔は青くなった。

基礎言語、歩き方から始まり、マナーや礼儀作法にダンスに魔法、
体術、剣術：

「えっと…それは今日中に出来るものなの？」

「もう所作や食事マナー、歩き方は採点済みだ。」

固まる奈美恵は恐る恐る竜真を見た。相変わらず、美しい美少女顔でにこやかに笑っていた。

奈美恵には竜真の笑みが怖かった。

「ご飯が終わり次第、基礎言語の試験、その後はダンスね。所作はその都度見ていくから。ダンスの後は昼ご飯。魔法学の座学の後には実践と体術・剣術の型ね。奈美恵の異能がほぼ僕と同じで良かった。その理解力と記憶力、体力、魔力は君を守るよ。」

この世界で生き残るためには、自分で身を守れなければならない。それはヨルとの初対面しかり、今までの生活が証明していた。

同郷の女性に日本に帰る方法を教えることはできないが、この世界で生き延びる方法ならば、竜真には教えることが出来るのだ。

出会った時にはすでに、最古の帝国の貴族社会に入ってしまったている奈美恵に出来る最大の応援は、動向が短期に変わる貴族社会に対応できるだけの知識と経験を甘えが出ないよう、これまた短期間に積ませることだった。

「はい。そこまでミグ相手に良く頑張りました。」

竜真は汗だくになり、肩で息をしている奈美恵の肩に手を置いた。

「ミグ、どうだ？」

「3rdクラスくらいには、すぐなれる。」

ミグもまた息を切らしている。

そんなミグの様子を見ながら竜真は頷いた。

「やっぱり異能か…多少の男女差はありそうだ。奈美恵は僕より記

憶力、理解力での異能発揮率が高い。それと力よりも速さに比率が向いている。」

「本当に魔術士ギルドだけではなく、冒険者ギルドにも登録してほしいと思う。」

3rdとして、冒険者ギルドにも戦力は欲しいと思ったミグの呟きに竜真は苦笑した。

「奈美恵、どう？冒険者ギルドにも登録してみない？数字持ちになれるよ。」

「貴族ってだけでも面倒なのにい。」

ぐったりとしている奈美恵の呟きに竜真は大いに笑った。

「まあ、言ってみただけだ。気にするな。」

「…ミグでも冗談言つのね。」

「いや、それなりに本気ではある。ギルドとしては数字持ちになれる奴はスカウトしたいからな。」

あくまでも真面目なミグに奈美恵は脱力しきった。

「ミグは基本的に冗談は言わない。奈美恵にはそれだけの実力がこの短期についた。何せ教師は1stと3rdでリユカの歴史の専門家もいたし、ただそれだけなんだ。試験は合格だ。着替えてからシグルド様の所へ行こうか。」

竜真は笑顔で言い切ると、ミグと奈美恵の肩を叩いて歩きだした。
竜真の後をミグが追う。

「竜真さん、ミグさん、ありがとうございました。」

歩きだした竜真とミグの背中に奈美恵の声がかかる。

2人が振り向くと、奈美恵は笑顔でお辞儀した。

10日間の鬼による授業閉幕。

12・教育クエスト終了（後書き）

同郷の人編、前後編で終わらせる予定が結局2倍になりました。

次回からまた旅が始まります。

13・ついてきちゃった人(前書き)

さすがに2日に1回更新が無理になってきたので、次話より週1にまでペースを落とします。

13・ついてきちゃった人

「うん。10日で1人頭金貨200枚：美味しい仕事だったね。」

金貨1枚は銀貨10枚、銀貨1枚は銅貨10枚に換算出来き、銅貨1枚は100円程の価値らしく、1日銀貨1枚あれば、人1人慎ましく暮らしていける。

「奈美恵の味方も出来た上にお金も貰える。ホント冒険者はやめられないよね。」

隣からクスクス笑う気配がする。街中を歩いているため、覆面で顔が隠れていても喜色満面の気配が隣を歩くミグには駄々洩れに伝わってくる。

「…2頭を追えば、2頭を。3頭を追えば、3頭を得るのがリウマらしいと言うか。シグルド様からの信頼を得て名を売るのも、得るものに入っているならば、一石四鳥か…」

「やだなあ。そんな損得尽くで行った訳じゃないよ。」

嬉々としている声に、ミグは絶対狙っていたはずだと思う。

「ところで、何故シグルド様なんだ？」

視点を変えて質問してみたら、竜真の気配が変わる。

「別にシグルド様はどうでも良かったんだ。奈美恵が目的だったんだから」

ミグは頭を傾げる。

「奈美恵は俺と同じだ。ならば、絶対に何かしらに頭角を出すはずなんだ。あの街で噂を聞いた時、ツーン…じゃなくてピーンと来た。」

「じゃあ、最終目的は？」

「先行投資だ。」

きっぱり言い切った。

足を止めて、自分を見上げる竜真の目が、覆面の合間から獰猛に光るのを見て、ミグの背筋に緊張が走る。

「ミグ、奈美恵はきつとりユカで何かをしでかす。楽しみにしてるよ。」

からからと笑い歩きだした竜真の後ろ姿を見ながら、ミグは領主館がある方角に顔を向けた。

フェブカ領主の館を出てから3日、次の目的地アルシュラの神殿に向かって順調に歩いていたのだが、前の街から着いてくる気配がし

た。

昼飯を食べてから、付いてきた気配を確かめるためにミグから離れ、フラムの街をぶらぶらと歩いていた。

向こうが追っている相手が自分だと確信すると、竜真は路地裏に入り、相手を待てば、その男はすぐに現れた。

「僕に何かご用ですか？」

「あっ……」

「あまりに古典的なことに引っ掛かるとドンビキい」

男は驚きに絶句している隙に、剣を取出し首筋に突き付けた。

「あれえ？見たことあるかも………執事君かなあ？フェブ力領主館の……」

それは竜真の顔を見て、書類箱を落とした執事の男だった。

「リウマ様。私を旅のお供にしてください。お願いします。」

「無理。」

突然の土下座に戸惑うこともなくすぐさまに却下を出すと、男は竜真にしがみつかんばかりの勢いで懇願しようとした。

「そこを何とか「嫌」」

「リウマ様」

たまにこの手の輩が現われては、竜真にきっぱりと振られて去って

行った。

「執事してなよ。」

「貴方に出会った後で執事なんてしてられません。」

「…無理だ。帰れ。」

この男はかなりしつこいタイプかもしれない。
竜真は遠い目をして、明後日を向いた。

「リウマ様……………」

捨てられた子犬のような瞳に見つめられ、竜真はこの男を諦めさせるにはどうしたら良いか頭を抱えた。

「リウマ、何だって?」

「僕と旅したいんだって」

ミグは食堂で竜真が戻ってくるのを待っていた。
戻ってきた竜真の後ろから現れた男に怪訝な顔を見ると、竜真に聞いた。

「盗賊ギルド頭目のニヤルマーと申します。3rdのミグ様、どう

かわたくしを旅のお供に」

男が初めて名乗った瞬間、竜真の頭の中には甥っ子にせがまれたゲームに出てきた猫の形のあるモンスターが頭に浮かび上がったが、それを頭から振り切り、疑問を1つぶつける。

「盗賊ギルドの奴が領主の館で執事していたのか？」

焦がれている竜真からの質問にニアルマーは嬉々として答えた。

「はい。盗賊ギルドに入ったのは、領主様のためなのです。盗賊団士の情報やギルドの情報で館の警備の強化をし、なおかつ、シグルド様の密偵としてのスキルを研ぐためでした。しかし、首領のリウマ様に初めてお目にかかり、どうしてもリウマ様の下で働けばと、執事の任を解いていただいたのです。」

竜真の頭の中に盗賊ギルドの組織図が浮かぶ。

下から三下、小頭、頭目、首領、大首領となっていて、竜真は面倒でしかないが、ギルドの支部長は首領以上となっている。冒険者ギルドより階級自体は少ないが、頭目から首領に上がるには冒険者ギルドで言う、ランクAから2ndになるぐらいに難しいのだ。

ニアルマーは頭目と言うことで、そこそこの腕前であることがわかる。

「首領だったって、僕には部下もないし、ギルドの仕事もしてないしねえ。頭目程度が俺達についてこれると思うなよ。ミグ、行こう。」

竜真はさっさと店を出た。後を追うミグが竜真の隣に並び、小声で聞いた。

「リウマ、いいのか？」

「諦めさせるから、手伝ってくれ。」

竜真はただでさえ秘密が多い。すでにニアルマーには顔を見られているが、その程度のかかり合いの奴を連れ歩く訳にはいかなかった。

2人の後ろをそろりそろり着いてくるニアルマーを気にしつつ、2人は速度を上げ始めた。

「え？」

その速度は馬並みにまで早くなり、ニアルマーがはっとした時にはすでにフラムの外れに後ろ姿があったのだった。

フラムの街の次の次の街、ルシアナまで走り抜けたリウマとミグは宿をとり、軽く走った汗をさっぱりと流し、食堂で夕飯を食べていた。

「そう…簡単に、撒けると、思わない、でくだ、さい。」

ぜえぜえと息も絶え絶えに机の脇まで来たニアルマーに2人は、ついつい拍手してしまった。

「着いてくるとは」

「まさか、着いてこれるとは思わなかった。それじゃ、また明日も追い駆けっこしような。ご馳走様でしたと」

にっこりと笑って、食器を片付けると竜真はさっさと自分の部屋へと去って行った。

その後ろ姿をニヤルマーは切なげに見ていたのだった。

翌朝、竜真とミグが宿を出ると、すでにニヤルマーが待ち構えていた。

「にっこない？」

「全く。俄然やる気になりました。」

闘志に湧くニヤルマーに軽く視線を向けてからミグを見上げた竜真は、ため息と共に提案した。

「仕方ない。ミグ、今日も軽く走っていこうか。」

「旅の日程が巻き返せそうだな。」

「ホントにねえ。」

ロスした10日を巻き返すようなハイペースに、もったのんびりお気楽旅のはずなのにと、ミグにすまないとだけ謝る。

「気にするな。久しぶりの走り込みで、体力を鍛え上げれると思えば、それも良かった。」

「ホント、ミグって良い奴だよなあ。」

竜真に可愛い小物や服さえあてがわなければ、比較的良識人な分類にミグは入る。

ルシアナのメインストリートを進行方向へ顔を向けると、竜真はミグの背中を軽く叩いた。

「よーい。ドン！」

掛け声と共に2人が走りだす。

ニヤルマーは頑張るぞと、気合い充分に追い掛けるのだった。

13・ついてきちゃった人(後書き)

また妙なキャラクターが出張ってきたよ。何者なんだニヤルマーめ
…ポケツトなモンスター臭い名前のくせに…

14・久しぶりの野営(前書き)

竜真さん鬼だ…

14・久しぶりの野営

「アルシユラの所には明日には着くだろう。しかし、あいつをどうするつもりだ？」

「どうしようか。街道を外れてみよう。宿には泊まらず、夜営にしてみるか。」

街道をひたすらに走っていく竜真とミグ。今は2人の後ろにニヤルマーの姿はないが、必ず夜には追いついてくるのだ。

走りながらもお喋りをしていたりするが、そのスピードは街道を歩く人間がぎよっとする程だ。

街道を外れると宣言した通り、竜真がいきなり街道を沿いの森の中へと突っ込んだ。

「アルシユラの神殿の場所に心当たりあるか？」

「心当たりはないが、もう少し南じゃないかと思う。」

「わかった。ミグ、気を付けてついてこいよ。」

「ああ。」

森の中は整備された街道と違い、足場も悪ければ、枝も張り出していて、走りにくいだけでは表現できない。

2人とも無言となり、緑の中をひたすらに走ったのだった。

「さす、がに、むりだ…」

「そろそろ夜営の準備をしよう。」

息切れもせず、あっさりと言い放つ竜真に、ぜえはあと息を荒くして、肩で息をしているミグは反応できなかった。

木の根元に上半身を預けて、竜真に水を飲ませてもらい、されるがままになってしまっている。

体が火照り、内側から体が燃えているような気さえしていた。

「ちょっと調子に乗って、2日分走っちゃった。ミグ、しばらく休んでいて」

そういうと、竜真はミグをおいて、薄暗くなってきた森の中へと消えた。

兎を2羽と薪を背負い、ミグの下へ竜真が戻ってきた。

「ミグ。遺跡らしいものを見つけた。多分、神殿で間違いないと思

う。…ミグ…起きろよ。」

疲労困憊で野宿にあるまじき熟睡ぶりに竜真は仕方ないかと呟き、火を起こし、兔を捌く。

「すまない。……………味付けだけは俺が……………」

竜真が帰ってきたのに気付いた時には、兔は捌かれた後だった。マズイとミグは起き上がろうとしたが、体がピクリとも動かなかった。

「塩を軽くかけるだけなら、大丈夫だろ。」

「……………」

それならば大丈夫かもしれない。…が、やはりミグは不安にかられた。

当初、夜営のつもりがなかったので、塩ぐらいしか持っていなかったのだが、竜真の料理には定評がないので、塩だけと言われても妙に不安があるのだ。

「とりあえず焼けた。肉しかないけど、ミグ食べるか？それでも食べさせて欲しい？」

「食いたいんだが、そちらに行けないんだ。」

「わかった。待ってて」

夜営用の道具から皿を出すと、肉を解してミグの側に寄ると、甲斐甲斐しく食べさせた。

自分の異能に付き合わせてしまって、悪いと思っていることらしい。

「味は大丈夫だな。良かった。」

「ひどいなあ。まあ、南蛮風とかの甘辛が舌に合わないのは知っているけどさ。出汁の観念ないし……」

あからさまにホツとしているミグに竜真はムスっとしながらも、給仕に勤しむ。

「なんだか変な気分だ。」

「……………さっさと食べ。」

「ふぐあ」

妙に嬉々としているミグは皿ごと口に押し込められた。蠢くミグを尻目に竜真は食事を始めた。

「おはよ。」

翌朝、竜真は近くに沢があったので、軽く顔を洗い、拭いながら戻ってくる。ミグが珍しく寝起き悪くボーっとしていた。

「……………」

「向こうに沢があつて、体を拭うには丁度いいぞ。」

「……………」

何も言わず。ぼけつとしている友人が心配になつて、竜真はミグに近寄つた。

「起きろよ。ミグ。昨日、そんなにキツかつたか？」

心配そうに眉間に皺をよせ、目尻を下げて、目の前で覗き込んできた美少女にボーっとしていたミグは驚いて、竜真の顔を頬に両手を添えて挟んでしまった。

「ミグう？」

「い…いや、ちよつ…ちよつと驚いただけだ。沢があるんだな。わかつた。汗流してくるから…」

名前を呼ばれることが何故こんなにも怖いのか、得体の知れない恐怖感に筋肉痛で軋む体を鞭打つて、竜真が指差していた方角に転がるように駆けていった。

残された竜真は、起きたなら、まっいつかと夜営の片付けをし始めた。

「ここだ。どうだと思う？」

昨夜、見つけた雑草に覆われた入り口に竜真はミグを案内した。桜色の可憐な唇をキュッと引き締め、睫毛が長く、つり目気味にくりとした目がミグを見つめる。

前回の2人で懲りたのか、竜真は人が周りにいないこともあって、朝から覆面をしていなかった。

「ここだと思う。」

「やっぱりそうか。じゃあ、入るとしますか。」

「ああ。」

謎の入り口に竜真の手がかかった。

14・久しぶりの野営（後書き）

竜真さんヒドイ

ミグ頑張ってます。

15 大食らいアルシユラ（前書き）

アルシユラの喋り方が面倒です。

15・大食らいアルシュラ

火の魔法をエネルギー源とするカンテラを片手に竜真が先導する形で内部に入り込んだ。

マリシュテンやビシャヌラと同じ様な内部に油断はせずとも足取りは確かだ。

「…」

微かな物音がして、竜真は足を止めた。物音にはミグも気が付いていて、同様に足を止める。

「ギジュー」

それは奥から駆けてきて、いきなり爪の長く伸びた前足で竜真に襲い掛かった。

竜真はカンテラを持ったまま、何時の間にもやら深紅の愛剣を抜いて、真っ正面から受けて弾く。

「ギユルル」

「こんなにでかいブルルは初めて見た。」

「普通だと僕の半分の大きさだけど、僕の背より大きいとなると…単体ランクEがBぐらいになるかな。」

喋りながらも襲い掛かる巨大な鼠もどきを軽く流している竜真にブルルが徐々に苛々してきている。

前衛だからか、それとも自分より小さいからか竜真を襲うブルルに

対して、ミグも愛剣を構えながら、ブロールと竜真の戦いを観察している。

「早いな…通常ブロールの2倍ぐらいか。」

「パワーもあるよ。そろそろ切っちゃっても構わない?」

「ああ。構わない。」

ミグが観察しているのを知っていて、竜真はブロールをいなしていたが、返事をもらい竜真は襲ってくるブロールに今度は真っ正面から剣を振り下ろした。

ただ真っ正面から剣を振り下ろしたただけだが、近場で見ていたミグの目にその剣先が見えていなかった。

まさしく真っ二つになったブロールを避けて、2人は先に進んだ。

「このあたりが居住区になるはずなんだけど。」

「そつだな。」

最奥の部屋まで後3部屋、竜真とミグはアルシユラを探してきた。

「ここにも居ないか。」

「まともな人ならいいんだけど…」

次々と扉を開けていき、とうとう最奥の部屋の前まできた。少々の緊張感を持ち、竜真は扉をあけた。

「……………うわ」

「居たのか？」

竜真が軽く驚いた表情を見せたので、ミグもその視線を追って先を見ると、部屋のだ真ん中に大の字になって10歳程の少女がぐっすりと眠り込んでいた。

「アルシユラなのか？」

「だと思っけど、この展開は読めなかった。」

前の2人は起きていた。

近くに寄って様子見しても少女は眠り込んだまま、微動だにしない。容姿は可愛らしいが、大の字で完全に口が開いていて、2人を油断させる。

「ミグ、マリシユテンと繋げてくれるか？」

「いいぞ。」

バックパックからミグが通信玉を取出し、魔力入れる間も彼女はぐっすりと眠っていた。

「マリシユテン様、お久しぶりです。」

「ミグ、久しぶり。新しいドレス出来た？」

マリシュテンは完全にミグをお抱えの針子と思っているようだった。竜真は若干呆れたように苦笑すると、ミグ越しに竜真はマリシュテンに声をかけた。

「マリシュテン、アルシユラのところに来ただけどき、アルシユラが起きないんだ。どうしたらいい？」

「無理よ。寝汚いのがアルシユラだもの。起きない。アルシユラの神官はまず朝一に風呂にぶち込んでたって聞いたわよ。」

ぶち込む 竜真とミグはどうするべきか目を見合わせた。

「後は、食べ物の匂いさせてみたら？三千年食べていないわけだから、垂涎かもよ。こうして話してる私の声も聞こえていないようだし」

竜真とミグはもう一度顔を見合わせた。

「食べ物か…行ってくる。ミグは鞆に香辛料入れてるよな。さつき通ったところに厨房らしきところがあったから、ミグはそっちの準備に行ってくれ。僕は水と材料を取ってくるから。」

方針が決まると、調理するミグが対象の好みの味を聞いた。

「わかった。マリシュテン様、アルシユラ様の好みは？」

「南部地方の料理よ。」

リユカ帝国の南部地方の料理を頭に思い浮べたミグが竜真に指示を出す。

「リウマ、兎を捕ってきてくれ。それとマティマティが味付けの要だから、それもよろしく。」

「ああ。わかった。ありがとう。マリシュテン。」

返事をしてから、マリシュテンに礼を言えば、マリシュテンからは嬉々とした声が帰ってくる。

「リウマの役に立てるなら本望よ。またアルシュラが起きたら教えてちょうだい。」

マリシュテンが通信を切ってから、竜真とミグはそれぞれに部屋を出た。

効果抜群だった。

「いい匂いがするう〜」

部屋に食べ物を持ち込んだ瞬間、アルシュラが目を覚まし、料理を持つミグに突っ込んだ。

「熱い〜美味しい〜美味しいの〜」

「……」

ミグからお盆ごと料理をぶんどると、アルシユラがガツガツと効果音がするような勢いで、感想を呟きながら食べている。

「おかわりい〜」

「ただいま」

即、空になった皿をミグに突き返すと、おかわりを要求する。

ミグはお盆を受け取ると、そそくさと部屋から出ていった。

嬉々としたアルシユラはうつらうつらとし始めた。

「えっ、待って寝ないで」

「……………あんた誰？」

慌て竜真がアルシユラに声をかけた。

返事はテンションを激しく下げた不審者に対するそれ。

「リウマ＝ミシマと言います。ビシャヌラ、マリシユテンの友人です。」

「変態とマリーの友達い？魔物があ？」

「僕は魔物ではなく、人間ですが、マリシユテンの友人ですよ。」

「ふうん…」

「…」「…」

会話が繋がらなくなり、無言になると、竜真は心の中でミグに早く来いと呼び掛けていた。

「ふう〜腹いっぱい〜」

アルシュラの口から満足の声が聞こえたのは、ミグが厨房と部屋の間に10回往復し、竜真が5回狩りに出かけた後だった。

30人前をペロリと食べたアルシュラは眠いのおと、語尾を伸ばしつつ、再びうとうとし始めると、竜真とミグは急いでマリシュテンを呼び出した。

「リウマ、ミグ、待ってたわよ。アル、寝ないでちょうだい。」

「ああ、マリーだあ。」

アルシュラの性格を知っているマリシュテンの反応は早く、アルシュラが起きる前に2人の相手はしない。

「アル、今、私の友達がそこに居ると思うんだけど」

「うん。いるよお。おっきいのおとお、ちっちゃいの。ご飯食べたのお。」

ちっちゃいのおっきいのは、竜真達には禁句だが、ズバリと言うアルシユラに対しては憎めず、竜真とミグが困ったように目で会話すると、明け透けに言う友人にマリシユテンが絶句した。

「……………ミグにでも作らせたのね。…リウマ、ズルいわよ。次に会ったら、ミグの料理だからね。」

「僕じゃなくて、ミグに言いなよ。」

マリシユテンの八つ当たりが飛んできたところで、竜真はここぞとばかりにマリシユテンとアルの間に入る。

「アルシユラ、マリシユテンといつでもお話したい？」

「変態はともかくう、マリシユテンとはあ、いつまでもおしゃべりしたいわあ。だって、お馬鹿さんがあ、神殿をお、ふうーいんしたから、アル暇で暇でつまらないんだもん。」

竜真はミグから通信玉を受け取り、アルシユラの脇に置く。

「じゃあ、ここにコレ置いとくんだけど、使い方は少し魔力を入れて、話したい相手を思い浮かべてもらえれば、それだけでいいからね。」

竜真はミグと視線を合わせると、マリシユテンとの接続を切った。

「いお？」

「上手、上手。」

アルシユラの手元からマリシユテンの非難の声が上がる。

「いきなり、切らないでちょうだい。あら、アルからなのね。私も嬉しいわ。」

こうして、始まった女達の会話についていけない竜真とミグはそつと部屋から出たのだった。

15・大食らいアルシユラ（後書き）

逃げました。

はい、女の会話の間に入るような不粋はしませんよ。

「マリー、あの小さいの食べたでしょ？」

「アル、食べたじゃなくて、食べられたのよ。」

なんて下世話な会話には入れませんよね？逃げますよね？

16・天然に間蝶（前書き）

再登場のあの方です。

累計PV3万、累計人数5千人、お気に入り登録50人突破、ありがとうございます。

16 天然に間蝶

アルシユラの神殿を抜け出てから2日、街道に出ようと歩いていたところ、マリシユテンからのお小言の連絡が入ってきた。

「リウマ、ミグ、なんで居ないのよ。」

「待つてられないよ。あれから2日経ってるって知ってる？」

一応、マリシユテンとアルシユラを気にしていた竜真とミグだったが、脱走してから、1時間、3時間、半日、1日と時間が経つにつれ、やはり出てきて正解と思うようになっていた。

「…それはごめんなさい。久しぶりだったから、話過ぎちゃって。でも、黙って居なくならないでちょうだい。アルがお腹減ったって騒いで大変だったんだから。騒いだら、眠くなったらしくって、寝られちゃったのよ。」

「うん、そんなところだと思ったよ。後はヤシャルんだけど、ヤシャルってどんな感じ？」

マリシユテンはいきなり押し倒してきたし、ビシヤヌラは尻を触ってくる変態、アルシユラは寝汚く大食らい、1人くらいまともなのが居てほしいと、竜真は心の底から思っていた。

「うん…知的探求心で常に知識を欲してる人？」

「……………どんな知的探求心？」

知的探求心、　また怖い単語が出てきた。と、竜真は身構える。

「なんでもよ。大衆文化から政治、音楽、魔物、なんでも。」

竜真とミグの視線が自然と合う。

互いの目が語っていた。

間違いなく変人の可能性がある…

「人格は私達の中では真面目な引率者タイプだから、あまり心配しなくてもいいわよ。」

変態と自由人を引率するようなタイプ…竜真の脳裏に父親のような人物像が思い浮かんだ。

竜真の父親は大学の教授で、民俗学の第一人者だった。齧れるものは何でも齧るとばかりに、父の書斎は様々な文献や漫画やら小説、雑誌に占領されていた。

そんな書斎がある家で暮らしている竜真が、多種多様な知識を追い求める変人に育ったことは間違いない。

大学の教授と言うことで、その交流も老若男女が揃う。それこそ十人十色、三者三様、様々な人間を相手に竜真が似た原形である美貌と穏やかな佇まいで、時に嗜め、時に褒めあげ、たまに褒め称えて、踏みつけて人を動かしてきた強者だった。

竜真は目的地にいる人物に少しだけ期待した。

竜真の口から期待がほうとため息として出ると、苦手視していると誤解をしたマリシユテンが大笑いしたのだった。

街道に戻り、アルシユラの神殿に近いゼダナの町に2人は居た。ゼダナは交易路の上であり、商人達の行き来のために人が多い。

「リウマ、もしかして…」

「ミグ、もしかしなくてもアイツだ。ブニャットだ。」

「ニヤルマーじゃないのか？」

「そう、ニヤルマーだ。」

ゼダナの入り口に座り込んでいる男が居た。竜真とミグには心当たりある姿だった。

「リウマ様、ミグ様」

「あつ、見つかった。」

嬉々として走り寄ってくる男に竜真が逃げようとする、ミグが竜真を捕まえた。

「ミグ？」

「かなり頑張ったようだから、少しは話を聞いてやらないか？」

ミグって、いい人なんだよねえ。

ミグを見上げて竜真はため息をつく、気持ちを入れ替えて、その

場に踏み止まった。

「ベルマまで行ったのですが、お二方が通った気配がなく、今朝ここまで戻ってきたのです。」

ベルマはゼダナから3つ離れた村で歩き旅なら行き帰り5日はかかる場所だとミグは把握していた。

ミグは竜真を見ると、ミグの視線を受けた竜真は仕方ないとばかりに盛大なため息をもらした。

「ニヤルマー、もう一度だけ話を聞いてやる。」

そういうと、竜真はゼダナの中へと入っていった。

ゼダナで宿を取ると、3人は部屋に籠もった。

「要約すると、僕が好きになりすぎたから安定した生活捨ててついてきちゃったと、…その好きって性欲の対象としての好き？」

覆面の解かれた美少女顔に覗き込まれ、ニヤルマーは顔を赤くしながらも慌てて否定した。

「ち、違います。リウマ様とそ、そのような…ただお側に置いてもらえたらと…」

赤くモジモジと話す男を痛い目で見ると、

「僕が何者でも？」

「リウマ様が神だろうが、魔物の人型だろうが、実は女性だろうが、本当に男性だろうが、リウマ様のお側でお世話が出来ただけでいいのです。」

「ミグ…困った。」

話にならない。竜真がなんであろうと目の前にいる男は肯定するだろう。

「これまでの奴らとニヤルマーは一緒なのか？」

ミグの問いに改めて考える。

竜真とパーティーを組みたい、子分になりたい、弟子にしてほしい、足下にされたい(?)、鞭で打ってほしい(?)、 % # ¥

〒 (え?) … 様々な要望を告げてきた今までの竜真との旅希望者とは、ニヤルマーは微妙に違う。仕えたいと言う希望に竜真は頭を抱えた。

「わかった。仕えたいって言われても給料は出せないから、パーティーとしてなら一緒に旅してもいい。基本、僕は自分のことは自分でやるから従者なんていらさないし、一介の冒険者が使用人を雇うと言つものないだろう。だから、君が着いてきたければ、一緒に旅しても構わない。ただし、1stに着いてくるんだ。クエストは超1級に危険なものも多い。死ぬなよ。」

「あ、ありがとうございます。」

感激しと泣きそうになり、目を潤ませる大の男を前にして、尻尾を振って喜ぶ犬を前にしている気分になった竜真だった。

「ところで盗賊ギルドには入っているみたいだが、冒険者ギルドには？」

やり取りを見ていたミグが聞いた。

「一応、ランクDです。あつた方が利便性が高かったので」

ミグがいつの間にか煎れたお茶を飲み、のほほんとニヤルマーが答える。

しかし、この会話に既視感を覚えた竜真が口を出した。

「なんのためって聞いていい？」

「シグルド様のお役に立つためです。」

「盗賊ギルドに入ったのも」

「シグルド様のお役に立つためです。」

「それだけのことをするのに、なんでシグルド様から離れるのさ。」

主人を思い、情報収集をするために2つのギルドに所属した男が、その主人を捨てて飛び出てくるのは納得いかない。

「シグルド様には各地を周り、たまに良い情報があれば、送ってほしいと…シグルド様は私を用人としたまま、リウマ様を追い掛けて良いと。それならば、リウマ様に断られても、いつでも戻ってこれると…シグルド様は本当にお優しい方です。」

戦略や謀略は関係なく、ただ人の良いシグルドが思い悩むニヤルマーを前にして、言っただろうことが推測して、竜真は単純に感心した。

天然で間蝶を作り上げる、いや、ニヤルマーが勝手になったのか…すげえ偶然。

まあ、ニヤルマーに給料が入ってくることを考えれば、僕が気を遣って依頼を増やす必要ないし、OKOK。

こうしてパーティーに新加入者が出来たのだった。

16・天然に間蝶（後書き）

ニヤルマー：23歳

栗毛にモスグリーンの瞳。

173センチ、58キロ

盗賊ギルド、冒険者ギルドに所属。

見た目は爽やかな好青年です。

17・幻想の英雄像（前書き）

リウマに初めて感想をいただけたので、嬉しくて追加です。
ありがとうございます。

これからも何か間違っていていくニヤルマーをよろしくお願いします。

17・幻想の英雄像

「おは…失礼しました。」

その男がまず学んだのは、竜真の部屋には返事が来るまでは入るべからずだった。

思いがけずして出会うことが出来、追いかけて仲間に入れてもらえた。従者お断り、仲間ならOKと言う破格の扱いに、男は歓喜して、シグルド様には申し訳ないが、リウマ様にお仕えますと心に決めた。

ゼナダの街に泊まることが決まり、竜真とミグとニアルマーは夕食をともしていた。

ニアルマーは当初、主人格である竜真やミグと同じテーブルに付くことは出来ないと言ったのだが、竜真の一緒の席に着かなければ、旅には連れていけないの一言に、ニアルマーは仲間に入れて下さったばかりか、席まで一緒にと行って下さるなんて、なんと優しい方なんだと、過大評価著しい感想を持った。

竜真にしてみれば、従者も使用人もいらなし、旅の仲間になるなら、当然の扱いなのだが、竜真とニアルマーは認識の違いは埋まらないようだ。

ニアルマーは竜真への過大評価により、より一層お勤めに励まなくてはならないと、心に勝手に秘めていた。

「ミグ、僕はちょっと出かけてくるよ。」

「ま、ほどほどにな。」

なんのことだかミグにはわかっていているようだが、ニヤルマーはわからず、竜真に付いて行こうとする。

「ニヤルマー、やめとけ。リウマのナンパに付き合っとな。」

「ナンパですか？」

すかさずミグが止めた。

ニヤルマーは目を見開き、ミグを見た。

「リウマも健全な男だからな。旅に余裕がある時は、ああしてナンパしてる。なんでも女の子が積極的で大胆なのは素晴らしいと思う。あいつは色々と凄いぞ。」

朗らかに笑うミグにニヤルマーが狼狽えた。ニヤルマーの中に竜真がナンパする等という軽々しさが無かったのだ。

1stと言うカリスマ性、奈美恵を教育した時の節度と礼儀正しさ、上品さ、その美貌が竜真と健全な男を結び付けていなかったのだ。

「ちなみにナンパの勝率は俺が見てきた中では100パーセントだ。逃げられた試しなし。流石1stだな。」

「はあ……」

「俺はそろそろ部屋に上がるがどうする？まあ、疲れとおけよ。」

「はい…」

まだ現実を受け入れられないニヤルマーはミグも居なくなった席でボケと座っていた。

「ミグ、ニヤルマー…おはよー」

そう言っただけで部屋から竜真が出てきて食堂に来たのは、2人が昼飯を食べていた時だった。

気だるい声と物腰は、ニヤルマーがすっかり入りかけた後もまだ、ほにゃららが続いていたからだろう。

「今回ののはイケてた…。」

「リウマがそんなこと言うのはマリシュテン様以来か…相手は人間か？」

「ううん。人型の魔物。」

「ま！ほによ？」

あっさり言い切った竜真に2人は驚いた。ニヤルマーは驚きのあまり大きな声が出たが、自我が戻ったミグに口を押さえられ、ニヤル

マーの声が籠もる。

「昨夜、美人さんが居たんだよね。ナンパしたら着いてきたんだけど、実は僕の魔力を奪い取るためだったみたい。まあ、精も魔力なんて微塵たりともやらなかったけどねえ。魔物は本当タフだよねえ。マリシュテン以来に腰がおかしいもん。あきらめない、あきらめない」

呆気に取られてるニヤルマーと、あっけらかんと魔物とコトに及んだと言った竜真に挟まれたミグは、どうこの場を収めようか、頭を痛めた。

「さあ、すつきりしたし、お腹いっぱい。ギルドに寄ってから次の街に行こうか。」

あくまでも爽やかな竜真にミグは訝しげな顔をしていた。

「ギルド？金は問題ないし、依頼も受けないのに何しに行くんだ？いつもなら女性を放置したままにはしない竜真が今回に限っては放置してきたことが怪しい。」

「報告。」

ニアルマーは未だに竜真と魔物がほにやららしたことが信じられなくて凍結していた。

その様子を見て、竜真は、はぁぁと長いため息を吐いた。

「昨夜、何かを受けたんだな？」

「最近、ゼナダで魔力を持つ冒険者が、淫魔にそれはそれは極楽を味合わされて、魔力を取られるんだって、人の形を取れるから、数字持ちの依頼としてファイリングされてたんだけど、最近ゼナダに数字持ちが来てないから、ギルドの内部調査って形でことが進んできたみたい。とりあえず街じゃあ戦えないから、淫魔と好戦してみても、淫魔の魔力吸引を封印してみたんだよね。マリシュテンの技って流石あ。ふぁぁぁあ。」

最後にあくびを付け足して、竜真は歩みだした。
その後ろ姿を見て、ニアルマーが打ち震えて呟いた。

「リウマ様は淫魔に勝ってしまうのですね。男として尊敬します。」

「ニアルマー、幻想を抱くな。」

ミグはそんなニアルマーを少し可哀想な者を見る目で嗜めたのだ。
だ。

17・幻想の英雄像（後書き）

ニヤルマー：何か間違ってることに気付いてくれ…とミグが生暖かな眼差しで見守っています。

こんな感じできっとニヤルマーは間違った方向へ向かうことでしよう。

ニヤルマー、現実を見ましよう

竜真さんは、お金に頼りめんどくさがり屋な上、ゲテモノ食いの美人狙いのナンパ野郎で、他人に厳しく自分に甘い人ですよ。

カリスマ性？気品？そんなもの必要な時以外ゴミ箱に捨てとけって言われちゃいますよ。

18・鬼畜な捕縛者（前書き）

今回、微妙に残酷なので注意。
でも書いてて楽しかった…

18・鬼畜な捕縛者

竜真の出で立ちは、基本的に深紅に身を包んでいる。

緋色のリウマの二つ名に、竜真が面白がって赤系統の色に身を包んでいるからだ。

背中にはバツクパツクを背負い、左の腰には緋色の剣を、右の腰には5メートル程の鞭を巻き付けて持っていた。

今はリユカ帝国の南部に居ることも手伝い、外蔭は着ていない。

頭は覆面に包まれて見えていないが、額には額当てが付けられていて頭の防御率をあげている。

「残念。僕の防具はこの素材以上の物質じゃないと、傷つかないよ。」

左腕の小手で山賊の剣を受けとめて、剣で胴をなぎ払うと、逃げ出した最後の1人を鞭で捕まえる。

男は恐怖に顔を強ばらせ、徐々に引き寄せられるのを必死で抵抗していた。

「全く、僕が討伐クエストを受けてる時に来なよね。ただ働きは嫌いなんだ。しかも激ダサな真つ赤な服着たりウマさんがいるってどう言うこと？本人相手に脅すなよ。しかも怪力なところだけとって変装するから、身長2メートルとか…ああ、完成度が低すぎる。情けない。」

「ひい」

引き寄せていた男の髪を掴み、顔を無理やり上に向かせる。

「襲撃に加わったので、お前等全員なの？」

「い…いや…」

「後何人？どこにいるの？」

「こ…こ…この、や、山の裏側の中腹にある廃砦だ。頼む。助けて。」

悪鬼のように山賊の仲間達を切り捨てていた男に捕まえられ、覆面越しに合う何ら感情がない目が山賊の男を見ている。淡々と行われる尋問は、山賊の男に恐怖を与えていた。

「まだ、後何人居るの？」

「5、50人だ。」

「ありがとう。」

顔を蒼白にしながら答えた男を手刀で気絶させると、竜真はピピンの街に戻ることに決めると、同行人達に手を振る。

「リウマ様、お強いです。」

2人が近づいてきた。

ニヤルマーが感激しながらも、竜真に水筒を手渡す。

「ミグ、ニヤルマー。ピピンの街に戻るぞ。貼ってあった山賊ベラビ団討伐クエストを受ける。」

付き合いがニヤルマーより長いミグは偽物とただ働きが気に食わないという竜真らしい理由がわかり、豪快に笑いだした。

「今回の偽物は出来が悪かったな。」

なんせ、本人とは似ても似つかぬ大男。しかも顔を隠すことすらしていない。あまりの出来の悪さに出会い頭に切り捨ててしまった。

「僕を腹立たせたこと、しばいてわからせる。」

「分かる頃には皆死んでるだろ。」

「まさか。残りの50人は生け捕りにしてやる。」

「50人を生け捕りですか？」

竜真の発言にニヤルマーが驚いた。山賊討伐クエストとなる大抵は切り捨てることになり、捕縛するのは警羅隊等も一緒に山賊達に対しての人数が勝る場合が大抵だ。

「ああ、剣の錆にする事さえ腹立たしい。」

気絶した男をひょいっと担ぎ上げると竜真はさっさと街に向かって歩きだした。

「ミグ様、50人を3人で捕縛するのでしょうか？」

不安そうに見つめられ、ミグは朗らかな笑みで答えた。

「まさか、50対1で捕縛するのさ。」

「は？」

答えるとミグも竜真の後を追った。

ニヤルマーは1人、茫然と2人の後ろ姿を見たのだった。

ピピンの街に戻った3人は冒険者ギルドに向った。

3人が街に入ると人々は皆、驚愕の表情で見やる。

「あはは、やっぱり僕が担いでいるからかなあ。」

「だから俺に貸せと言ったのに」

大中小、もとい、ミグ、ニヤルマー、竜真の3人の中で1番小さい竜真が軽がると別の男を抱えて、すたすたと歩いているのを住人達が見送った。

ギルドに入った瞬間、その男の顔色が一瞬だけ変わったのを竜真は見過ごさなかった。

「ミグ、左奥、ランク受付の近くに座っている青い外蔭の男だ。」

「ちっ。」

男が舌打ちし、逃げようとする、ミグがそれに立ちはだかった。

「くそっ」「きゃっ」

受付に座っている女性を男は人質にする。剣を首に突き付けた。

「…」

その場の空気が残念感に染まる。周囲の男を見る目は、お気の毒にと言っていた。

「なっ、なんなんだよ。」

「うふふ。冒険者ギルドの職員は最低でもAクラスからって決まってるんですぅ。」

「いっ！があっ」

腕を取られ背中に固定されると、机に体が押しつけられる。

受付嬢はにこやかに、その上にひらりと乗った。

「荒くれ相手の商売ですのえ。」

あくまでも笑顔を絶やさない女性に周囲の男はこええと脳裏を同じくしていた。

「さて、ベラビ山賊2人が捕まったわけだ。」

気絶した男を担いだままクエストボードに向った竜真はベラビ山賊討伐クエストを剥ぎ取ると、クエスト受付に持っていく。

誰もが動きを止めてしまった中、全身を赤の系統色に身を包んだ竜真が進んでいく。

それはまるで火の化身の様だった。

「1stのリウマ、3rdのミグ、ランクDのニヤルマーが受ける。俺達は数字持ちだが、ランクDのニヤルマーがいる。Aクラスの仕事は出来るだろ？」

「はい。承りました。ベラビ山賊、やつつけちゃって下さいね。」
人質になった女性と同じ顔の受付嬢が笑顔で書類に判を押す。

周囲は竜真が自分の名前を名乗った辺りから騒めいていた。

「さて、ミグ、ニヤルマー。いこっか！」

それは今からピクニックに行くような気軽なノリだった。

「本当にリウマ様お1人で捕まえてしまおうですね。」

竜真の進んだ後を長い縄を5本持ったミグとニヤルマーが付いて、気絶したベラビ山賊団の一味を片っ端から武装解除し縄で繋いでいた。

竜真が通った跡には死屍累々、否、気絶した男達がゴロゴロと転がっている。

すでに竜真の後ろ姿すら見えなくなっていた。

「僕は赤を纏うと言っても、材質や色のグラデーションとかに気を遣ってるんだよね。それをあんな完成度が低すぎる偽物を使って、なりすまそうとするなんて思わないでよね。」

側近達が次々と竜真の振るう鞭の餌食となり、残りは長だけとなっていた。

「そっそんな長い鞭を建物の中で使うなんて…」

砦の中でも謁見の間だったろう広間で、自分だけを避けて鞭が次々と周りの人間だけを妙に色目気だった声を挙げさせて屠るのは恐怖以外の何者でもない。

たまにもっととねだる声が聞こえたのは気にはいけない範囲だと長の脳が拒絶する。

「腕だよ。う・で。だって剣だと切っちゃいそうなんだもん。捕縛って決めてるからさ。」

「ばっ化け物。」

「そう、isstって化け物なんだよ。」

それが耳元で聞こえた瞬間、長は首に衝撃を受けた。竜真の手刀にベラビ山賊団の長が沈んだのだった。

「ああ、楽しかった。」

ピピンの街を出て、竜真は覆面の中で満面の笑みを浮かべていた。

「久しぶりの鞭は楽しかった。鬼畜だからな。」

「いやだなあ。ミグったら誉めないでよ。」

「誉めてない。呆れてる。」

その会話を聞いて、ニアルマーは改めて、竜真を素敵だと認識していた。

「リウマ様は素晴らしいのです。」

「ニアルマー…鞭で打たれたいと言いだすなよ。自分の属性が変わるからな。」

うっとり呟くニアルマーにミグは諭したのだった。

18・鬼畜な捕縛者（後書き）

こうしてベラビ山賊団の生き残りは竜真に捕まえられた男とギルドにいた男、長の3人以外は属性を変えられ、鞭を求めらるようになり
ましたとさ…

竜真こええ

ギルドのお姉さんはピピン名物、ランクAの三つ子の受付嬢でした。

19・蒼騎士プロス（前書き）

もう一人の1st登場

19・蒼騎士ブロス

ええつと…1stが2人も揃ってます。何が起こるのでしょうか？

ニアルマーは緋色のリウマ、蒼騎士のブロスの間挟まれて右往左往していた。

ピピンの街から2日、次のロドの町が見えてきたところで、竜真が足を止めた。

「よし、この町は迂回しよう。いや、街道を外れて夜営しながら先に進むか…」

竜真が前を向いたまま、後ろ向きな発言を呟いた。

ミグとニアルマーは滅多に見ない竜真の後ろ向きな姿勢に竜真を覗き込む。

「り…」

名前を呼ぼうとした瞬間、ニアルマーの口は竜真によって塞がれた。

「黙れ、僕を呼ぶな。」

切り付けるような厳しい小声で竜真はニアルマーを叱咤した。

ニアルマーの口をふさいだまま、そおっと、そおっと、気配を消して後退していく。

「リウマ…」

ミグがうつかり名前を呟いた。

その瞬間、ロドの入り口に入ろうとした男が振り向いた。

「げ！」

「緋色のリウマ！今日こそは私と勝負しろ！」

その大きな声は3人のところにまで十分に届いた。

「あれは…！」

ミグとニアルマーの声が被る。

大多数の冒険者にとって憧れの地位にいる男の1人、蒼騎士のブロス、デイスキア。

デイスキアの王弟にして、1stの称号を持つブロスは竜真が苦手な人物の1人だ。

「ほら見つかった！ああ、面倒くさい。それにしても、なんつー地獄耳なんだ。」

がっくりと肩を落とす竜真にミグとニアルマーは不思議そうにその場に佇む。

「あの馬鹿ブロスは、目が合う度に僕に勝負を挑んでくるんだ。」

蒼騎士ブロスを馬鹿呼ばわり出来るのは、この世界で竜真とブロスの兄であるディスクア王、それと侍女から冒険者に身を落とす羽目になった、ブロスの相方である2ndのメノーラだけだ。

「ブロス、メノーラはどうしたんだ。お目付け役なしに出歩くんじゃない！」

口を塞がれたニアルマーを挟んで、2人しかいない1stが並び立つ。

知る人ぞ知る、豪華な顔合わせなのだが、1人は猛り、1人は心底嫌そうな顔をしている。

ニアルマーはハラハラと動向を見守っていた。一方、ミグはただ成り行きを見守る。

「メノーラは先に町に入った。今日こそは勝負しろ。」

「いやーだ！面倒くさい。」

「緋色！男同士の真剣勝負を面倒くさいで終わらせるな。」

「何が真剣勝負だ。男同士の真剣勝負程下らなく面倒くさいものはない！」

「真剣勝負を馬鹿にするのか！」

「金にもならんことに命をかけたかない！冒険者が騎士道精神の奴だけしかいないと思うなよ。ってこんな会話を合っ度にしてることこそ不毛だ。馬鹿たれがお前の都合だけで勝負出来るか！僕は今、目的を持って旅をしている。いらんことで怪我をするなんて、それこそ馬鹿げたことだ。」

そこまで休みなしにブロスに向かって叩き斬るように言つと、ニヤルマーの口を未だ塞いだままロドに向かい歩きだす。不自然な姿勢のままニヤルマーは暴れることも出来ず、着いていき、ミグも終わつたのかと歩きだす。ブ羅斯は竜真に言われたことをじっくり噛み締めると、歩きだした竜真に言つた。

「パーティーを組んだようだな。ならば勝負はお預けだ。仲間が居る奴を斬るわけにはいかん。」

真剣勝負についての議論からズレた回答に竜真はミグとニヤルマーが居なかつたら問答無用で勝負になり、ロドが焦土になりかねなかつたと、内心、お預け発言をしたブ羅斯に安堵した。

宿の入り口に着くと、蜂蜜色の髪を緩くみつあみにした女性が立っていた。

「なんてこと！」

竜真達の後ろから歩いてきたブロスを見て、メノーラは逆毛を立てた猫のようになった。

「リウマさん、申し訳ありませんでした。いつもの如く大変ご迷惑をおかけしました。」

「いや、僕がパーティーを組んだから戦わないってさ。メノーラもいつまでも騎士道な王子様の保護者は大変だね。」

ブロスが蒼騎士と呼ばれ、1stにまで成れたのには、紛れもなくメノーラの優秀な補佐があったからだ。

「そんなことございませんわ。ブロス様もかなり庶民的になられましたわ。」

笑っていない目でブロスを睨んだまま、にこやかに笑うメノーラにミグとニヤルマーはうわああと、心の中で呟いた。

「メノーラは相変わらず素敵だね。今夜一緒にどう？」

「あら、また私を誘って下さるのですか？ふふ、リウマさんでしたら喜んで」

メノーラの手を取り、さり気なくエスコートして宿に入っていく竜真。メノーラと竜真から無視をくらい、尚且つ何年も一緒に居る想い人であるメノーラをいとも簡単に攫っていく竜真に対してブロスが呟えた。

「いつか必ず殺してやるわ」

「ブロス様、宿に入りましょうか。」

わななくブロスを生暖かい目で見ながら、ミグとニヤルマーは両側からブロスを抱えて宿に入ってしまった。

2人は脳裏で竜真はブロスを面倒くさがりながらも、徹底的にブロ

ス、で、遊んでいるのだなと思ったのだった。

19・蒼騎士ブロス（後書き）

酷い扱いのブロスさん登場（笑）

ブロスはメノーラが好き

メノーラはブロスが自分を好きだと知っているが、放置プレイ（笑）
竜真はそんなブロスをいじるのが好き（笑）

歪んだ三角関係です。

20・ロドの禁呪(1)(前書き)

シリアスです。

残虐な表現があります。

ご注意ください。

20・ロドの禁呪(1)

「緋色、どう思う？」

ロドのギルドにて、1stの2人が数字持ち専用の依頼書ファイルを覗いている。

数字持ち自体の人数が少ないので、数字持ちはギルドに立ち寄り、請ける請けないはともかく、必ず依頼書ファイルを見るように義務化されていた。

「そうだねえ。ゼナダで淫魔狩りしたから、今、懐は暖かいんだよね。ブロスが受けたら？」

ブロスの持つ依頼書を確認せずに返事をする竜真にブロスが声を大きくする。

「そうではない。この事件をどう思うかだ！」

「え」と“ロド警備隊と魔術士ギルドゼナダ支部の依頼”か：“女3人の惨殺体が発見された、いずれも乳房、子宮が抜かれ、髪を切られて、ロドのいたる場所に捨てられていた。”：“有資格は3rd以上もしくは魔術士ギルドマスター以上”

依頼書を読み上げる竜真の声がだんだんと堅くなる。

かなり大きな事件性のある依頼書に竜真は先程までのだらけた雰囲気捨て去り、臨戦態勢に入った。

ミグはそれを見て、珍しいと目を見張り、ニヤルマーは何事かとミグを見る。

ブロスは頷き、メノーラはブロスを見る。

「……………禁呪だな。…ブロス、禁呪の知識はあるか？」

「いや、俺は導士だからな。禁呪は詳しくない。あの時の状況で少し学んだぐらいだ。」

禁呪とは強大な力を持つ呪文が多く、尚且つ他人の命と引き替えにする倫理的に外れた魔術で、基本的には土のマスター以上が詳しいのだが、マスタークラスに上がると同時に講習を受けるため、どのマスターでも一応対応が可能なのだ。

依頼はミグ、ニヤルマーと受けるが、更に手が欲しいと判断した竜真がブロスに頼む。

「火のマスターとして、君に協力要請したい。水の導士ブロス、僕の補佐にまわってくれ。」

「わかった。」

ここに1stの共闘が決まった。

冒険者ギルドでは並び立つ2人だが、魔術士ギルドではマスターである竜真といち導士ではないブロスの間には越えられない壁がある。特に竜真は現ギルド長である火の賢者アサムの次代賢者とされていた。

竜真は受けると決めた瞬間から決めていた指示を混合チームに出すのだった。

「ギルドに請ける手続きをしたら、ミグ。今から書く手紙をゼナダ支部に持って行って欲しい。後、ミグは通信玉を1個置いていってくれ。」

「メノーラ、ブロスと僕、ニヤルマーは警備隊詰所に移動。僕とブロスは遺体の置場を確認に行く。メノーラはでロドの町の地図に遺体の置場を印付けて、情報収集。」

「ニヤルマーは…資格がないんだよな。僕とブロスでギルドに掛け合ってやるから、多分受けれるとして…一応僕についてきてくれ。多分それが1番危険で安全だ。」

竜真とブロスは1st、メノーラは2nd、ミグは3rd、そしてランクDのニヤルマーはロドの禁呪事件に挑むのであった。

ロドの警備隊詰所で、その隊長と依頼について、話を交わす。隊長は1stが2人もいることに驚き、全面的に竜真らに協力することを約束した。

警備隊の隊長、副隊長、竜真らが会議室の机を囲む。

「とりあえず3ヶ所見てきたが、意外に往来が多い場所もあった。メノーラが書き入れた地図を見ると弧を描いている…はい、ニヤルマー。これで気が付く事は？」

「えっと等間隔に弧を描くと言うことは、円になるということでしょうか？」

ニヤルマーの答えに満足したのが、竜真の聲が楽しげに弾む。

「多分、正解。メノーラ、警備隊やギルドで聞いた情報は？」

「死亡した女性達は年齢が15歳前後で半年前から随時行方不明になった少女です。ロドだけではなく、この現場の少女はピピンで行方不明になっています。ロド警備隊では行方不明者が他に居ないか探しています。冒険者ギルドでも少女探しの依頼を優先的に冒険者達にクエストとして配布しております。周辺冒険者ギルドにも協力要請しておきましょうか？」

「…多分、これが円になると考えると後5人は最低でも行方不明者が居そう。因みに発見された間隔は？」

「1ヶ月に1度、赤い月の日だそうです。次は10日後になります。」

次々と質問を飛ばしていく竜真に答えるメノーラ、そのやりとりを隊長と副隊長、それからニヤルマーはボーっと見ている中、竜真は難しい顔をしていたブロスを見る。

「ブロス…僕と君が出会った事件覚えてるよね？デイスキアでの連続少女失踪事件。ディアータ様のお供で3rdだった時だったかなあ？軽く3年前。」

身の毛もよだつ程の、一言で言えば、いやらしい事件だった。

「犯人を取り逃がしたからな。ディアータ様の弟子で土のマスターだった女だ。確か不老不死が目的で、少女達の一部を食っていた奴だ。デイスキア内で直ぐに検問を敷いたが逃げ切られた。」

当時デイスキアの花と呼ばれていた絶世の美女が起こした残虐でお

ぞましい事件。

「元土のマスター、ラウラーラっブリグスタ」

「デイスキアの有力貴族、現ブリグスタ公爵の妹だ。プラチナブロードを血塗れにした姿は未だに忘れられない。俺は当時2ndとしてデイスキア内を出歩いていたが、あいつを追って国を出た。メノーラ。どうやら国に帰れそうだ。」

ラウラーラを捕まえるまでは国へは帰らない。そう宣言して出てきたブ羅斯はメノーラに笑みを見せる。

「ラウラーラの可能性：やはりディアータ様と連絡を取る必要があるな。：全く、1つの街ごとに支部があればいいのに：賢者との通信は支部でしか取れない。次に動けるのはミグとの通信が取れ次第だが：とりあえず、これが円になるなら、ポイントごとに1度見ておく必要があるな。警備隊に見張りも頼んでおくか：」

竜真は翌々日にミグから通信が来るまで、情報収集に勤しんだ。

翌々日、20件以上に及ぶ少女の失踪事件に、近場の人買いの摘発たかだか3日だが数字持ちが3人も居ることが影響して、かなりの活躍だったのだが、さほど情報は集まってきていない。

詰所に集まって情報整理をしているところにミグからの通信が入った。

《リウマ、何がわかったか？》

「収穫は良くないな。ミグ、ディアータ様へ連絡取れたか？」

《ディアータ様は今、賢者の会合に出ていられるらしい。》

賢者の会合とは、火、土、風、水の最高位である4賢者が魔術士ギルドの総本部、叡知の塔にて集まることである。

賢者の会合中にたかだか1支部の通信は通らない可能性が高い。

「ミグ、ゼナダのギルド長に手紙を渡したな？導士を2人程借りて来てくれ。火と風が居るといいんだが…ミグは大地でプロスが水…4大元素の同じレベルでなければならぬ。宜しく頼む。」

《分かった。全速力でそちらに戻る。》

ミグとの通信を切った竜真に視線が集まる。

「あまり裏技過ぎて使いたくなかったんだけど…『我の影、我の僕、赤き血潮で結ばれし我が手足、火竜ジャラハラ、我が内より召喚』」

魔と呼ばれる中で、竜はかなり特別が存在だった。

最近では魔物と竜は別なる存在ではないかと魔術士ギルドでは見解を改めている。

竜の中でも特に4元素に沿った竜を竜王と呼ぶ。火竜ジャラハラは竜の中で火の王と位置付けられる超が付くほどの大物である。

呪文を唱えた竜真の前に現れたのは、竜真の装備している小手と同色の髪をしたミグ並みの長身の男で、金を帯びた縦長の瞳孔が人の異質さを醸し出す。

端正な美貌で竜真を慕っていることが全面でた笑みを浮かべて膝間付いた。

「ジャラ、アサム様は覚えてるな？今からアサム様の所に行き、僕と賢者様方の目と口となつてくれ。」

「かしこまりました。我が麗しの主よ。」

瞬時、ジャラハラが消えると、あまりのことに驚いた一同は何も言えなかった。

「次の赤い月の日までに間に合えばいいが……」

そんな中、何を気にするでもない竜真はポツリと呟いた。

叡知の塔の最上階に4人の人影があった。

長く白い顎髭を蓄えた赤いローブの老人。

穏やかな雰囲気身を纏うプラチナの髪の白いローブの中年女性。

ブロンドの緩やかな流れを持つ髪を独特に結い上げた黄色のローブを着た老女。

この中では一番若い40代の淡い水色の髪の蒼いローブの男。

火のアサム、風のフューリ、土のディアータ、そして水のクリシュナである。

歓談の最中、叡知の塔に魔術の気配がして4人が臨戦態勢に入るが、アサムがその気配に覚えありと、他の3人を宥めた。

「おや、我が麗しの弟子が用事の様じゃ。使い魔を飛ばしてきおつたわ。」

火の賢者アサムが長く伸びた白い顎髭を梳きながら、50センチ程の竜体に小さく姿を変えたジャラハラを呼び寄せた。

「火竜ですか…火のマスターリウマは高位の魔の使役まで行えるのですね。」

おっとりとした風のフューリが言えば、アサムがかんらんかと笑う。

「出したら餌を与えないといけないからと、普段は面倒くさがって中々見せてくれないのじゃよ。しかし、あの面倒くさがりが魔を超越す程の事があるとはな。ジャラハラよ。リウマと繋ぎなさい。」

アサムが促すと、ジャラハラは人型をとる。

無表情のジャラハラの口から竜真の涼やかながら、艶っぽい声が聞こえてきた。

《賢者様方、お久しぶりです。》

「つれない弟子よ。たまには顔を見せに来なさい。」

《アサム様、面白い発見があったので、今度お知らせに行く予定でしたよ。ところで、そこにディアータ様はいらっしゃいますか？》

「おるぞ。」

「久しぶりです。リウマ。」

ジャラハラが優雅に一礼してみせると、また無表情に話します。

《ディアータ様、ご無沙汰しております。禁呪の事件が発生しました。お知恵を拝借させてください。》

歴代の賢者は賢者のオーブと呼ばれる水晶に記憶を残している。中でも土の賢者のオーブには他の賢者のオーブより禁呪の知識が詰め込まれていた。

歴代の土の賢者はまたの名を禁呪の監視者と言う。

「禁呪？どのようなものですか？」

《町の中で円を描くように、少女の遺体が破棄されており、その遺体には乳房と子宮がございません。蒼騎士ブロスとともに現在、状況を把握に奔走しております。対策として4大元素の導士に結界を張らせる予定です。本来ならばマスターが4名揃えば効力としては有効なのですが…次の遺体の遺棄は恐らく5日後、赤い月の日です。場所はリユカ帝国、ロド。既に3名が殺されていて、最低でも後5名が被害にあう可能性があります。私、ブロスともにある特定人物を犯人だと想定しています。》

ジャラハラの口から語られる残虐な手口に他の賢者達の表情が険しくなる。

ディアータの表情は失望、絶望、諦め等を宿していた。

「ラウラーラ…ですか？」

《そうです。しかし、想定しているだけであり、確実ではないのです。一昨日から関わっています。情報がまだ少なく…少女の失踪情報等鋭意捜査中です。》

「わかりました。…町の形、それから陣の張り方等をこちらに伝えられますか？」

《ジャラハラを通じて可能です。》

「少女達は乳房と子宮を切り取られていたと…確かにラウラーラをしていたことと類似しています。ですが、他にそういった類のものが使われる禁呪もあります。人型の魔を使役する召喚、その陣の中に入った者達を全て魔に変換する。勿論、不老不死の秘術…他に情報が欲しいですね。不老不死なら同い年、同じ日に生まれた無垢な少女達を、魔の使役なら、同じ数の無垢な少年も居なくなっているはずです。魔への変換ならば、少女達の遺体の損傷に秘部への裂傷、つまり暴行された後が残っています。次の手掛かりを見つけたら、教えてください。」

《ご教授ありがとうございました。ディアータ様には申し訳ありませんが、ジャラハラを常に通信出来るようにお側に置いてもらえますか？》

「いいですよ。」

《ジャラハラ、ディアータ様にしばらくお仕えしなさい。次の命令を待て。…それではディアータ様、次の報告まで》

「土の、羨ましいのお。ジャラハラに竜の生態について教わりたいたのだが」

「それならわたくしもです。」

「私だって」

アサムを筆頭にジャラハラに詰め寄る3賢者をディアータは困った

ものではねと眩くのだった。

20・ロドの禁呪(1)(後書き)

4賢者が登場です。

ついでに使い魔君も…

使い魔君の餌、気になりますねえ(笑)

21・ロドの禁呪(2) (前書き)

中々進みません。

早く抜け出したい…

21・ロドの禁呪(2)

「さて、ディアータ様からの助言で新たに調べることができた。」
いきなり出てきた使い魔とその直ぐ後にはディアータとの交信と、
周りに度肝を抜かした竜真が、場を切り替えるように会議室にいる
メンバーの顔を見回す。

「今回の禁呪と近しい術もあるとのことなので、それを判別するた
めに情報収集をします。」

こんなにえげつない術が複数あるのかと、ブロス以外がどよめく中、
竜真が指示を出す。

「ニアルマー、警備隊と遺体の少女達の生年月日を調べる。他、失
踪者の少女達もだ。同じ生年月日の者が居たら報告してくれ。」

「メノーラはニアルマーの補佐をしつつ、警備隊、ギルドとともに、
やはり同じ年以下ぐらいの少年が失踪しているかどうかを調べてく
れ。条件は無垢なる少年だ。」

ニアルマーとメノーラ、警備隊の隊長、副隊長が頷く。竜真はブロ
スに視線を移し、辟易とした感情のまま言った。

「さて、ブロス。僕らが1番嫌になる調べ事だよ。遺体の安置所
に行こう。冷凍保存の少女達の遺体を調べようか。」

詰所の中を歩きながら、先程、誰にも説明しなかった術の説明をする竜真。

「ブロス、デИАータ様は不老不死の呪の他に2つの候補があると言った。人型の魔を役する召喚術、その陣の中に入った者達を全て魔に変換する術だ。」

ブロスは心底嫌そうな顔をした。正義感の強いブロスは、こうして人を贄にする魔法に人一倍の嫌悪感を抱くのだろう。

「それを皆の前で言わなかったのは…」

「禁呪の知識を広めるわけにはいかないからね。君は前回で禁呪に触れているから話した。」

ブロスはこういうところは相変わらず堅いのだなと洩らす。

「知る必要のないものに、危険すぎる術を教えることは出来ないのは当たり前でしょ?」

何を当たり前のことをと竜真は洩らす。

「普段からその堅い態度で居れば、信用に値すると思えるのだがな。」

「仕事は仕事。私用は私用。真面目と不真面目を使い分けてこそ、大人つてものでしょうに…そんなんだから、アジュールに遊ばれちゃうんだ。」

ブロスの兄であるデイスキア国王アジール「ディノ」デイスキアは、ブロスをそれこそ可愛がっていた。ただその可愛がり方がちょっと歪んでいて、ブロスで遊ぶことに生き甲斐を感じている。

アジールの名を出され、一瞬青ざめたブロスを見て、竜真が呟いた。「アジールも程々にしないと弟に逃げ切られちゃうぞ。」

「ん〜…厄介だね。禁呪の3種混合かあ。逆予防接種だな。これじゃあ、導士が4人じゃあ防ぎきれない。」

報告の結果、殺された少女の他、消えている少女のうち3人の生年月日が一緒な上、10歳程の少年が8人行方不明。遺体の方も暴行の後が見られ、竜真は頭を抱えた。

「緋色…」

「ディアータ様に報告してくる。」

竜真が頭を抱えた所など、見たことも聞いたことも食べたこともない一行は、竜真が退室した後、複雑な表情をしていた。

竜真が洩らした禁呪の3種混合という恐ろしい発言に魔術士ギルドに登録しているブロスは特に顔を引きつらせた。

ディアータは竜真からの報告を聞いて頭を同じく抱えていた。

《犯人は魔王にでもなるつもりでしょうか。使役と変化と不老不死の混合なんて荒技過ぎます。僕の考えていた方法では対処できないですよ。》

ディアータが受け継いだ賢者のオーブには様々な禁呪があったが、禁呪を混合させるやり方はなかった。

禁呪自体はマスタークラス以上の実力がなければ、本来なら防げない。

しかし、マスタークラスがそこらを歩いているのは稀だったりするので、竜真は四元素の導士を使い、対抗しようとしたのだ。

「確かに導士では無理ですね。…マスターでもどうかと…賢者がすぐにもそちらに行けると良いのですが…」

《…ディアータ様、高いところ平気ですか？》

「何やら考えがあるのでですか？」

《ジャラハラに乗れば4人なら簡単に…巨大な竜ですので、かなり目につきますが彼に任せれば大丈夫でしょう。》

竜真の声を発しているジャラハラを見つつ、ディアータは絶句した。

高齢になった自分が竜に乗って移動すると言う。

《…賢者様方に来ていただくのは、あまり考えたくない手だったのですが、ジャラハラを控えさせていた“最悪のもしも”のようです。》

「そうですねえ。私とアサムが竜に乗っても大丈夫でしょうか？」

《ジャラハラは火竜王。アサム様なら嬉々として乗られるかと…乗せると騒いでいたので…ジャラハラなら、風圧も気温差も感じさせない技量を持っていますよ。》

「…そうですねえ。」

嬉々とはしゃぐアサムを思い描き、しょうがない同僚に苦笑した。ジャラハラに対する他3名の興味津津な発言で、ジャラハラに乗ると言えばついてきそうだと苦笑いが続く。

《何か用意するものがありましたら、こちらで用意しますが…》

「今から賢者の会を開きます。準備はこちらで出来るだけします。必要なものがあれば、お願いするかもしれません。」

「陣を敷き始めたと言うことは、魔術の発動が開始されたと言う事。きちんと止めなければ、歪みが生じます。歪みはやがて災いとなってロドに降り掛かるでしょう。」

《僕らが魔術が完全になる前に来たのは幸いでした。》

「ええ。反則だらけのリウマさん。ジャラハラも反則ですが、火の

マスターだけでなく、実は4つの元素全てにおいてマスタークラスだとか、しかも1stで…私も長いこと生きてきましたが、希有な存在です。あなたに野望がなくて、本当に良かった。」

《風来坊が1番気楽ですよ。だから、どのギルドに所属しても、役職にはつかないのですよ。野望があるとすれば、時々美味しいご飯が食べれて、時々美人さん相手に遊べれば文句なしです。》

「男性としての平凡な夢を語るには、実力がありすぎるのが無欲に見えるのでしょうか。四元素のリウマ、弟子のあなたのために我ら四賢者は必ず行きますからね。次の赤い月の前に…」

《ありがとうございます。》

「そうそう。犯人は必ず触媒鉱石を大量に買い占めていると思われるます。これだけの術を触媒なしにできるわけありませんから。」

《失念してました。触媒…確かに触媒は必要ですね。自分にあまり必要ないものだと思わがちになってしまいました…ご教授ありがとうございました。》

「それではロドでお会いしましょう。」

《お待ちしております。》

口を閉ざして魔導書の片付けに戻ったジャラハラを見ながら、他の賢者に通じる通信玉に手をやり、通信玉を見る。

「お聞きの通りです。」

《さて、何を支度するかの？》
《我ら禁呪の防護は中々行うことはないのでお教え願えますか？》
《火竜王に乗れるなんて、好奇心を刺激しますね。》

「ブロス、君に頼みたい。次の少女の遺体が見つけるより先に犯人を特定したい。ニヤルマー共に触媒鉱石の流れを調べてほしい。」

「そうか、そうだな。触媒なしにこれだけの術を組むのは難しい。わかった。警備隊とともに調べよう。」

ハツとして、ブロスは竜真の覆面の中の表情を見るように見つめて頷いた。

「よろしく頼む。メノーラは僕と宿に行くよ。」

「何故メノーラを連れていく…？」

顔をしかめて、自分の好きな人物を連れ立って行くこととする竜真を止めた。

返ってきた答えは、竜真が面白がって笑いながらで、だが、ブロスが目を見張るものだった。

「お客様をもてなすのに、女性の感性は必要事項でしょ？なんせ口には二度とない行幸だ。」

「まさか」

行幸の一言で、ブ羅斯は息を呑んだ。

「正解。四元賢者様方が乗り出される。つまり、ロドに賢者様方が来るのだ。」

賢者が現場に出てくる自体はそうそうない。

しかも4人が揃ってなど聞いたことがない。

竜真が次代賢者と名高いマスタークラスと言えど、4人全員を呼ぶパイプがあることにブ羅斯は驚いたのだった。

「君を含めて集まる4人の導士は四元賢者の手足になってもらってもりだから、早めに情報収集をよろしく頼む。」

一導士でしかない自分が賢者の手足になれることに、魔術士としてこれ以上ない喜びを感じてブ羅斯はニヤルマーを促す。

「わかった。ニヤルマー殿、行きましょう。」

なにやら力強く息まいて、ブ羅斯はニヤルマーを伴い部屋から出ていった。

「それから隊長さん、副隊長さんは賢者様方の訪れを内密にお願いします。」

とりあえず、隊長と副隊長に釘をさすと、竜真はメノーラを連れ立って、会議室から出た。

残された2人は顔を見合わせ、片田舎で想像以上の大事件が起きている時に、1stが、竜真が来たことを喜んでいた。

21・ロドの禁呪(2) (後書き)

ディアータ様、何爆弾置いてるんですかぁ〜！と叫びたくなりまして。

反則のリウマさんだって……………どんな風呂敷広げますか。

はい。

ピジョンブラッドな魔力玉以外にも属性色を出せるのですよ。

あえて人前では火属性しか出してないチートぶりをディアータ様

暴露…

いやんです。

22・ロドの禁呪(3)(前書き)

まだロドから抜け出せない…

22・ロドの禁呪(3)

赤の月の日前日、ロドで馬車を借りると、中にクッションになるものを載せ、乗り心地を良くすると、竜真は御者台へ座った。目的地はペンとロドの中間地より若干ロドよりの場所。

「はっ」

ロドから覆面の男が飛び出した。

「ニヤルマー、メノーラ、どうだった？」

集まってきた2人に報告をブロスが求めると、メノーラとニヤルマーが次々と口を開いた。

「ええ。3年程前から触媒が置いてある、おおっぴらに開店していない店で1回につき、少しずつですが、定期的に触媒を買いに来るローブの魔術士がいるそうです。店が中々見つからず、やっと見つけました。」

「これは私には分かりませんが、触媒の名前は紅硝石、蒼硝石、黄硝石、緑硝石。乾燥したバリアルスの葉、シギダラの舌、ムリユーラの耳、ガダブロの尾です。他にもかなり貴重な品も買っていったようです。」

メモを捲りながら、ニアルマーは困惑顔で聞けば、ブロスも肩を竦めた。

「俺にもわからんな。禁呪はマスタークラス以上の担当だ。まあ、いい。緋色が帰ってきたら分かるだろ。」

「リウマ様はどちらに行かれたのでしょうか？」

ニアルマーは一緒に行動していたはずのメノーラに尋ねた。

「リウマさんですか？宿の仕度が終わってから姿が見えませんよ。」

「私事は最低だが、仕事に対してはプロ中のプロだ。何か単独行動での対策を行っているのだろ。何せ、奴以外に禁呪に詳しい者がいないのだからなら。」

ふんと、鼻を鳴らして、ブロスが吐けば、ニアルマーがうっとりと讚える。

「リウマ様は本当に素晴らしいお方です。」

「傾倒するのも程々にな。さあ、ローブの人物の特定を急ぐぞ。」

「はい。」

「は、はい。」

ここまで竜真に傾倒する者を見たことがないブロスは、若干引き気味にニアルマーに忠告すると、

町中を歩きだした。

「詰所が騒がしいと思ったら、ブロス殿下がいらっしやってるのか。」

プラチナブロンドの髪を腰まで流し、ローブだけを羽織った女がけだるげにカウチに寝そべる。

「リリイシユ。」

「なあゝに？ラウ」

空間が歪み、舌つたらずな返事と共に1人の少女が出てきた。

黒く長い髪を風もないのになびかせて現れた少女はカウチの上に寝そべる女の足元に座ると、女を見上げた。

「わらわの天敵が現われてのう。このままでは計画通りに赤い月ごとと言っわけにはいかなかったのよ。」

「ふゝん。ラウがご主人様になるの、凄く楽しみなのに…じゃあ、やっっちゃおうか？」

女が頭を撫でれば、少女は嬉しそうに目を細める。

「わらわは次の月の為に準備せねばならぬ。未通娘の血を浴び、無垢なる男を無垢なまま墮落させ、死んだ娘の屍を魔物に凌辱させる。」

美しきわらわは更に美しい存在にならねば世界の損失よ。」

傲慢過ぎる女の嘲笑は少女、リリイシュに心地よく聞こえる。

リリイシュが人間であるにも関わらず、主と慕う女は、人を捨てるため念入りな準備をしてきた。

3年前は失敗したのは当時師弟関係にあったディアータに勘ぐられたことから始まった。

今、ディアータはここにはいないと女はほくそ笑む。

「リリイシュねえ、ラウの世界を敵に回しても、自分の為だけに動くところが好きよ。」

「リリイシュ、世界はわらわの為にあるのよ。」

「じゃあ、リリイシュはラウの敵を抹殺してきます。」

あくまでも軽いノリの少女は、妖艶な笑みを浮かべた女に満面の笑顔を見せると空間の歪みに身を沈めた。

少し時間が遡る。

風吹く丘の上で竜真は待っていた。

馬車の御者台で寝そべり、雲の流れをのんびりと見ていると、知った足音が聞こえてきた。

台から降りて、足音が聞こえた方に歩き出す。

「ミグ。待っていた。この2人が火と風の導士だね？」

ロドにいたると思っていた人物が目の前に現れ、ミグは驚いたが立ち止まり、連れてきた2人を紹介した。

「火の導士オリエンと風の導士キュルアだ。冒険者ランクは双方Bだそう。彼らは2人で旅をしているらしい。」

「ん。好都合だ。1stのリウマだ。宜しく頼む。」

突如現れた覆面が1stと言う大物だったことに2人は驚いた。求められた握手にオリエンは興奮し、キュルアは冷静を装いつつも緊張した面持ちで答えた。

「今、かなりの大事件に関わっていてね。君達には手伝いをしてもらいたい。ミグと通信した時より事情がかなり変わって来てる。待ち人をここで待つ間、説明しよう。」

「えっと……すると、私達の仕事は賢者様方のお手伝いでよろしいのですか？」

キュルアが確認の意味を含めて問う。

「そうだよ。本当はもっとメインの仕事だったんだけど、導士では太刀打ちできない。それに、魔法の素養のないものを賢者様方のお側には置いておけない。こう言ったことでオリエン、キュルア、宜しくお願ひします。ミグも事情が変わり済まない。」

「構わないが……もしかして、待ち人とは賢者様方のことか？」
ミグが引きつって聞いた。途端にオリエンとキュルアが顔を青くして固まった。
それを見て、竜真の口元がニイッと笑う。

「正解。ジャラハラ、降りておいで。」

竜真は簡単に言ったが、地が揺れることなく、それは降りてきた。あまりに巨大であり美しく、恐ろしいもの。
ミグもオリエン、キュルアも口を開けて街道を降りてくる恐ろしいものを見て固まっていた。

「ド…ドラゴン」

3人として旅先で竜と遭遇したことがある。しかし、通常サイズより5倍はある。

「で、でかい」

キュルアとオリエンは腰が抜けて、へたりこんだ。

「僕の使い魔だから気にしないでいいよ。ジャラハラ、ご苦労だったね。この事件が無事に終わったらご飯上げるからね。」

竜真に頭を下げた巨大な竜の頭を撫でてやると竜真は賢者達を下ろすよう命じた。

「このような場所でお迎えすることになり、申し訳ありません。」
頭を下げる竜真によいよいとアサムが顔を上げさせる。

「よいよい。火竜王に乗るなど出来ぬ経験じゃ。」

「敵に見つからぬようにするにも、この方が良かったのでしょう。」
ディアータが竜真の意図を汲み取り、微笑んでいると、人型に戻ったジャラハラにフューリが絡んでいた。
風の賢者だけあって、ドラゴンの背中が気に入ったようだ。

「乗り心地が素晴らしかったですわ。ジャラハラ、ありがとうございます
いました。」

「水の賢者よ。腕を離してもらえぬか。」

「リウマ、今度は僕の所に弟子に来てほしいな。これで全員制覇だよ。」

「フューリ様、ジャラハラを離してください。クリシュナ様、次に叡知の塔に向かった時には是非にお願いいたします。」

少し混沌としたやり取りをしているのをミグとオリエン、キュルアが呆然と見ていた。

「1stのリウマは本当に凄い方なんですな。」

「いや、俺もこれほど迄とは思わなかった。」

ミグはここにニヤルマーが居たら、大興奮に竜真を大絶賛しているだろうと、つい最近仲間入りした男を思い出し、はあっとため息をついた。

ロドまでもうすぐと言った場所まで来て、突然馬車が止まった。荷台にいるミグに竜真が声をかけた。

「ミグ、すまない。御者を変わってくれ。行き先、ロドの詰所だ。」

「どうした？」

「町中で戦いの気配がしている。ゆっくり来いよ。敵に賢者様方を気取らせたくない。」

ミグが御者台に來ると竜真が降りた。

その時、ミグの耳元で頼むと聞こえた気がして、竜真が降りた場所を見た時には、竜真はそこに居なかった。

「ブロス。メノーラ。」

竜真が駆け付け、敵と対峙していたブロスと敵の間に入り、剣を向ける。

「緋色。クツ…」

剣を杖に立つブロスを確認して、前を向けば、そこには見たことがある人物の面影があった。

「あらあ？その気配。知ってるう。」

「僕ももう少し大きかったけど、君を知っていきそうだ。ゼナダの一夜は楽しかったでしょ？」

竜真の不謹慎に楽しげな声に後ろで聞いていたブロスとメノーラが同時に非難の声を上げる。

「緋色…」

「リウマさん…」

覆面の竜真に覚えがある少女は憤慨した。

「リリイシユの吸淫を封じたでしょ。それにラウの為に集めてきた淫力取っちゃうから、集め直しもできないし、大変だったんだからあ。」

「いやあ、何か悪用されそうだったし？名前、リリンじゃなかったの？リリイシユちゃん」

ゼナダで出会った淫魔とまさかここで会うとは、依頼は受けておくものだなと、竜真がのんきにしていると、リリイシュが逆毛立てた猫のように聞いた。

「そういうアナタの名前は何なのよ。」

「知りたければ、僕に着いておいで。」

竜真は町の外に向かって走り始め、リリイシュもそれを追った。それまでのやり取りを見ていたブロスらも町の外に走りだした。

ブロスらが竜真達に追い付いた時、竜真がリリイシュの懐に入り、突き刺していた所だった。

「もお、たかだか人間にここまでにやられるなんて、リリイシュ、ラウにいらないうって言われちゃうじゃない。」

「たかだか人間：言ってくれないか。僕はこう見えて、人型との対戦経験が、それこそ人間にしては多めなんだ。ちよつと前もリビエダって言う胎児を食べてたのと戦ったよ。しかも今回は1人じゃない。」

町の外に出るまでにそれなりの接触があったのだろう。互いの服が所々破けていた。

前回は1人で懲りたが、今回は1stと2ndが居る。それだけでも竜真の心の中には余裕があった。

「リビエダ…リビエダ…あれ？チムチャックのご主人様がそんな名前だったような…」

「チムチャック…確か戦いの最中にリビエダが喚びだして、食われてた人型がチムチャックだったような…」

ゼナダ以外の共通点があったことに竜真は驚いたが、それは人型の少なさを考えれば、当然かもしれないと戦闘中に気の抜けたことを考えている。

「ご主人様に食べられるなんて、なんて素敵なお。リリイシュもラウに早く食べてもらえるように…ラウの邪魔する奴、やつつけちゃわないと」

身悶えて、戦闘意欲が増したリリイシュが、黒々とした光を両手に纏わせた。

「メノーラ、ブロス、ちょっと下がってないと危ないよ。リビエダは接近戦、チムチャックは遠距離戦…君は何戦が得意かな？」

「さて、リリイシュを倒したことだし、ラウラーもやつつけちゃおうか。」

戦いの最中のやり取りでラウがラウラーと分かった竜真がまたも簡単そうに言う。

その竜真の覆面が裂けて、目から下が晒されていた。

「緋色：貴様、女だったのか！」
竜真の顔を初めて見たブロスが天然を發揮した。

「違うから、ボクっ子とか言うジャンルじゃないしい〜。れっきとした男。ね？メノーラ。」

そこでメノーラにふるのは竜真の愉快犯ぶりが如実に現われるところだった。

「はい。リウマさんは大変“ご立派”な男性ですわ。」

竜真の意図を汲み取り、ブロスをからかう辺り、メノーラもいい性格である。

「緋色、やはり貴様は殺す。絶対殺す。」

ブロスの雄叫びを軽く流して、竜真はロドに向かって歩いていった。メノーラは生暖かい眼差しでブロスを見守るのであった。

22・ロドの禁呪(3)(後書き)

ニヤルマーとブ羅斯はオチ担当です。

23・ロドの禁呪(4)(前書き)

ロドの禁呪編終わりいゝ。
長かった…

23・ロドの禁呪(4)

ロドの警備隊詰所には、そうそうたる顔触れが揃っていた。数字持ちが4人、内2人が1st、更に四元賢者がいる。

まるでこれから魔王と対峙するかのような顔触れ。

警備隊の隊長、副隊長は、あまりに荘厳な面子に踊る心臓がいつ口から飛び出すかと言う程に緊張を強いられていた。

「リウマさん、気にしないで下さいね。弟子に引導を渡すのも師匠の役目です。」

哀しげなディアータの背中をポンポンと叩き、アサムが竜真に首を振った。

竜真は頷くと会議の進行を促した。

「リリイシュを殺した今、ラウラーラの居場所は分からなくなってしまいました。」

明日にはまた1人の遺体が増える。

その前にラウラーラを倒すことが必要だ。

「いや、来る途中、ディアータ様とも話したのだが、不老不死はともかく、他2つは魔法陣の中心にいる必要がある。」

理知的な顔立ちのクリシュナが、不敵に笑い、竜真に安心を伝える。

「つまり、彼女は円の中心になる場所に居を構えている。ということですね。しかし、円の中心地は…建物がないのだが…」

ブ羅斯はここ数日、ラウラーラと思われるローブを着た者を探していた。
町のあちらこちらと歩いたが、円の中心は路地になっていて、人が住んでることはない。

しばしの無言が場を支配した。
その時、警備隊の隊長がハツとして立ち上がった。

「……………っ！地下に遺蹟が。確か、この辺りに小部屋が何個かありました。出入口はこの地下牢にもありますので、そちらからお入りください。」

「ありがとうございます。隊長さん。警備隊とメノーラとニヤルマーは住民の避難。賢者様方は陣の外側から別の陣を張り、導士はその補助、僕は…やっぱり、ラウラーラを殺してくるのは僕しかいないのか。」

方針は決まった。

隊長が話している最中に辺りを竜真が見回すと、皆頷いた。
ラウラーラの居場所さえわかっていたら、やることは決まっているのだ。

「リウマ、ラウラーラを殺した上で、私達の魔法陣の中心で最後の楔を打って欲しいのです。」

苦笑いした竜真に、ディアータは面倒ついでですがと最重要事項を告げる。

「楔ですか？」

「あなたの能力でしか出来ないのです。リウマになら分かるでしょう。」

四元素全てに属性がある竜真にしか出来ないことと告げるディアータに、竜真は重要局面がほぼ全て自分に関わるのだと、やはり苦笑いした。

「…方法はどのように」

「私達からの呪文を1つにまとめて中心地に打ち込むと言ったところでしょうか。詳しいことは秘伝なので、後程。」

やはり、この場では教えてくれないらしいと、竜真はあえて分かっていた感想を思い浮かべ、会議が終わりを告げる。

「賢者様方の魔法陣の配置が出来次第に、作戦決行となります。」

「では、住民達を陣の外へ避難させ始めます。」

「では、我々もさっさと仕上げてしまおうかのお。」

竜真が立ち上がり、メノーラ、ニヤルマーが退出するとアサムが笑いながら立ち上がった。

ラウラーラの目の前に、自分を主と慕ってきた少女の魔物よりも美しい存在がいた。

黒髪の美しい、新たな少女は可憐な笑みを浮かべて言った。

「リリイシュが素敵なことをしてるって教えてくれたから、来てみ

たの。」

ラウラーはリリィシュよりも上位種が来たこと笑みを浮かべた。ブ羅斯はリリィシュの手に掛かっただろう。

そして目の前にはリリィシュよりも上位種がいる。

儀式の成功がいと簡単に思い描け、高笑いすら出てきそつだ。

「なれば、見ていておくれ。後1人の血を浴びねばならぬのよ。邪魔者さえ来なければ、赤い月ごとにしばらく儀式を続けたものを…念のために今日、禁呪を発動させるつもりよ。」

女は忌々しげにつぶやくも成功を確信し、口元には笑みが浮かんでいる。

「…後1人しか少女達は生きていないのだね。」

自分達が動いたことで、もう暫く生きていられたはずの少女達は死んでしまった。

目が焼けるように熱くなる。

こんなにも怒りに目が眩むのは、いつ以来だろうか。花咲くような笑みと可憐な声はすでに消え、上位種の少女の口から漏れた声は、ぎよつとする程に低くかった。

「ラウラーラッブリグスタ、貴様を禁呪使用の罪により、魔術士ギルドの四元賢者の名において断罪する。」

「な…」

防護呪文を唱える隙もなかった。

ラウラーの命は、上位種だと思った少女が一瞬動いたかと思えた

ときには、既に潰えた。
ラウラーラには初動すら見えることなく、顔は驚きに崩れたまま、あまりに簡単に消え去ったのだった。
その生への執着とは反対に、あまりにも簡単に…

ジャラハラに通信させ、ディアータに説明を受けながら、竜真は呪いの封印を行い、それから、生き残った者達を探すため、部屋から出た。

エンカウントする魔物を倒し、移動した先には、血の匂いと死の気配に満ちた部屋があり、中に入ると巨大な檻が2つ。檻には1人の少女と、また別の檻には2人の少年が居た。

それとは別に死体をまさぐる1人の男。

その男を一瞬にして切ると、竜真はラウラーラの部屋から持ち出した檻の鍵を使い、檻を開けた。

少年達はボロボロながら服を着ていたが、少女は裸だった。

「…助けが遅くなって済まない。」

その凄惨な現場に、竜真は生き残った3人に詫びた。

「あんたが来なかつたら、俺らは死んでた。ただそれだけだ。…生き残りが居ただけでも良かったと思いな。俺はシン、横に居るのはロイ、あっちの女の子はバレイラだ。」

その場で最年長だと思われる少年は虚ろな目のまま答えた。

竜真は着ているワンピースを脱いで、少女の体を隠す為に着せた。

「短いズボンを穿いたのは正解だったな。」

「ふっ…美人な姉ちゃんだと思ったら、美人な兄ちゃんだったか。傑作だな…」

虚ろに笑うシンに、竜真は困ったような顔をする。

「お兄さんは美人なお兄さん過ぎて、顔を出して世間様を歩けないだよ。」

「奴隷商人に真っ先に売られる顔してるのも損だよな。」

竜真は目視で3人の肉体的なダメージを確認した。

「そうだね。でも、僕に目を付けた奴らなら、確実に返り討ちにしたよ。組織も散々壊滅させてきたけど、本当にうじゃうじゃいるんだよね。」

竜真は虚ろな視線で身動きしないバレイラを抱き上げると、少年達に声をかけた。

「シン、ここを出る。」

「…ああ。おい、ロイ。出るぞ。」

「…う…あ…ああ…」

「チツ…薬が効いてきたな。ロイ、しっかりしろ！生き残れたんだ。墮ちるな。」

「シン、どうした？」

竜真はバレイラを抱いたまま、シンの傍に行く。シンはロイの肩に手を当てる揺すっていた。

「ロイが墮ちる。せつかく生き残れたのに…」

希望に訪れた絶望にシンは虚ろな目から悲しみを溢れさせていた。

「見せて、さつき薬がどうか言ってくれただけ…」

竜真はシンにバレイラを預けて場所を譲らせた。

「サヤナヤの葉とブルの根を煮込んだ薬だよ。リリイシュとかいうのが、俺らを墮とすために作ったとか言ってた。くそ、ちっこい奴からロイみたいになっていった。最後には魔物になっちゃまって…」

「…ディアータ様、サヤナヤの葉とブルの根の薬に対する薬はありませんか？」

《……直ぐに戻ってきて下さい。薬を調剤します。》

「シン、バレイラを連れてくるんだ。俺はロイを運ぶ。」

筋肉質で細身の竜真が、やはり細身であるとしても、同じぐらいの

身長のロイを軽く持ち上げるのを見て、信じられないとシンが呟く。

「こんな顔でチビで細くても、僕は1stだ。これぐらい軽いものさ。」

バチつとウインクをシンに飛ばして、軽やかに走りだす。

途中、エンカウントしてくるものをやはり軽くいなしていく姿をシンは信じられないものを見る目で追い掛けたのだった。

事件から1ヶ月経ち、賢者達は帰り、プロスらも国へ帰った。

ロイの看病をディアータから命じられた竜真とミグ、ニヤルマーがロドに残っていた。

「本当に君ら、僕に着いて来る気かい？」

シンとロイとバレイラが頷く。

15歳のシン、13歳のロイ、ロイと同じく13歳のバレイラ。

ロイは命は助かったが、髪と瞳は黒く変質してしまい、惨劇を経験したからはバレイラは声を失った。

シンは飄々として、竜真に答えた。

「俺らは孤児だから、親は居ない。きつとあんたなら、この状況の俺らを見捨てないと思うんだ。」

「やなこと言うね。…しかたない。君らに生きるすべてを教えてあげ

る。 大変な目にあっても、後悔しないでね。」

覆面越しに笑う竜真の顔はそれはそれは可愛らしかろうとミグは明後日の方向を向き、ニヤルマーは弟子を取るのですねと大絶賛し、シンは少し早まったかと持ち前の危険察知能力を発揮させていた。

23・ロドの禁呪(4)(後書き)

新キャラ3名追加です。

24・新たな日常（前書き）

新キャラ3人の紹介編

0時更新出来ませんでした。

ごめんなさい。

24・新たな日常

ロイの体調が良くなり、ロドの宿屋で6人がそれぞれで旅支度をしていると、竜真がロイを手招きした。

「さて、ロイ。それ、目立つから色変えところか。」

笑いながら竜真が呪文を唱えると、ロイの髪は水色に、瞳は蜂蜜色に変わった。

「…」

「元の色忘れたから、これでいいよね。」

「リウマさん、適當すぎでしょ?」

バレイラは驚き、シンが突っ込みを入れた。ロイはされるがまま。竜真はけたけた笑う。

その様子を見ながら、ミグは今後の竜真への突っ込みが楽になったなとにやつく。

ミグの予想ではシンが突っ込み、ニアルマーがイジラレ決定。

ロイは無表情、バレイラは声を出せない現状だが、ロイはボケ、バレイラは突っ込みの可能性が高そうなと考えて、ふと気付いた。

子ども3人、童顔1人、従者1人…俺はいんそ…

「あれ?ミグ、何1人でダメージ食らってるの?」

竜真があどけない笑顔で聞いた。

「いや、なんでもない。ところで、家庭教師の時から疑問だったのだが、それでお前は自分の髪色を変えないのか？」

「うん。覆面から出るから瞳は変えてたんだけどね。髪も変えられるようになったから、髪も変えて、全面を出してもいいんだ。でも、それすると、今度は顔でトラブルになるんだよ。一時期、髪だけ隠してうるちよろしてたら、ナンパ人買い山賊エロ権力者…1週間でどれだけ始末したやら。」

清々しそくに遠くを見た竜真に全員絶句した。

「確かに顔は出さないほうがいいかもな」

あははと空笑いしてシンがあらぬ方向を見て、他の人間も頷いていた。

「しかし…シンもバレイラもロイも中々、ニヤルマーもそこそこだし、ミグだって男前、目立つパーティーになったね。」

竜真がふふつと笑うと、互いが互いを見回した。

「まあ、何かあっても大丈夫。危害を加えてきたら、ボッコボコにするからあ。」

どこか薄ら寒い雰囲気纏って、顔に覆面を巻いていく竜真をニヤルマーが手伝う。

「君らが世を渡るすべを身につけるまで、守るのは僕だからには、君らは最も危険で最も安全に楽しんで育つてね。」

覆面越しですら、最高にあどけなく美しい顔で笑っているのが分かり、ミグはしあさつてな方を向き、シンは少し顔を青くしている。ニヤルマーは何故か感激して嬉しそうに破顔し、ロイとバレイラは顔を見合わせた。

「さて、装備は済んだかな？次の町へ行こうか。」

最後に緋色の剣を差すと、竜真はドアの前に立って振り返った。

「体力をつける為にも馬車はしばらく買わないから。頑張って歩こうね。」

街道を6人が行く。

ロドで冒険者ギルドに登録して、子ども3人は新米冒険者となった。その内、資質を見極めて、別のギルドへの登録させることを考える。もともと孤児で、生きるためにナイフファイトを覚えたシンにはナイフ以外にショートソードを持たせ、竜真がロイの看病をしている1ヶ月の間にミグが扱いを仕込んだ。

巨体に見合わぬ敏捷性を持つミグの得手はショートソードだ。

昔、アックスや棍棒に武器変更したら？と、竜真に言われたが、体術とショートソードで大概のことは乗り切れているので、変更する予定はない。

武器を限定しているミグに対してニヤルマーの得手は何でもだった。背中にはボウガン、腰にはロングソード、手首には暗器が隠されて

いる。

遠近攻撃、暗殺、何でもな装備は勿論、主人のシグルドを守るためだったのだが、未だにそこまでしたのに、何故、旅に出たのだと竜真に不思議がられていた。

言葉を失っているバレイラはニヤルマーを師事し、何故か暗器の使い方を早々に覚えていた。

その事をバレイラに聞くと、バレイラはニコニコと可憐な笑みを浮かべた。

「うん。武器を使えるようになったから、よしとしよう。」

1ヶ月でそこそこの筆談ができるようになったのだが、バレイラが笑顔だけですませたことに対し、竜真は何も言うまいと明後日を向いた。

ロイは薬の後遺症か、魔力が強くなっていることから、旅立つ前1週間で、竜真が基礎をたたき込んだ。

勿論、ムチとアメで…

シンが得手があつて良かったと、影で喜んでいたのであった。

竜真を先頭に殿をミグが守り、真ん中に新米4人を入れる。

背から言えば、バレイラ、ロイ、竜真、シン、ニヤルマー、ミグとなるが、強さを優先させると竜真、越えられない壁があり、ミグ。

またまた越えられない壁があり、ニヤルマー、シン、バレイラ、ロイとなる。

育ち盛りとは言ったもので、保護されて、食が保障されてから、シンの身長は竜真を若干追い越した。バレイラも痩せ細りから、ちょ

っと細かいかなぐらいまでに回復したのだ。

馬車なしに、休み休みでも歩かせて、子ども達に体力をつけさせることを目的にヤシャルの神殿手前まで進む予定だ。

「ミグ、次までどのくらいだったっけ？」

ミグの真横に来て、竜真が訪ねる。

次とはヤシャルの神殿のことだ。

「3つ先の村までは普通に行ける。」

「わかった。」

小声での会話を終わらせて、竜真はシンの横へ行く。

その後ろ姿を見て、ミグは全員に話すのかと眉を潜める。

「シンシン」

「リウマさん…その呼び方はちょっと。」

見上げる目線で、可愛らしく名前を呼ばれ、シンが嫌そうな顔をした。

「うわっ！」

次の瞬間、シンの顔すれすれを何かが飛んできた。

それはシンの顔に直撃するのをそれで、後ろの木に刺さった。

「ミグ、ニヤルマー。ロイを守れ。シンとバレイラは…」

「いや、俺も是非守られた「前衛を試してみようか。この攻撃からするに、相手はちょっと大きめなカタツムリ、ランクEのマスターツムリだ。弱点は貝の入り口辺に見える青い突起。やばそうなら手伝うから、2人で攻撃してごらん。ただし、さっきの黒い液体を食らうと溶けるから、当たらないようにね。」

ガンバレエと愉快そうな声は2人の背中にぶつかった。

バレイラが転んでしまった瞬間、紅い風がマスターツムリを瞬殺した。

「これから、こうしてランクの低い敵に当たった時に戦ってもらうから、鍛練するように。ロイもね。」

声は楽しそうだが、シン、バレイラ、ロイを見る目はけして笑ってはいない。

その迫力満点さに紅い鬼神が居たと後に3人は語った。

そして、シンとバレイラは肩で息しながら悔しそうに、ロイはびくびくして、竜真を見つめる。

「さて、次は頑張ろうね。」

首をかしげて、可愛らしい声が、その場に響いた。

ミグとニヤルマーは、うわあ〜スパルタあと有らぬ方を向いていたのだった。

24・新たな日常（後書き）

前回のラウラーラ、あまりにもあっさり倒してしまったので、あっさり過ぎないかと、尋ねられました。

竜真さんに聞いてみましょう。

「竜真さん。ラウラーラとの決着があまりにも簡単すぎではないですか？」

「あのね、あの任務は、子どもの保護が最優先なの。あいつが、残り1人とか言うから、かなり腹が立ってね。実力差自体はあんなものですよ。魔術士は詠唱させる暇がなければ、詠唱させなければ、倒すこと自体は難しくない。それにラウラーラが話している最中にも賢者様方から準備できたよって連絡入ったし、山場だと思っけど、さっさと片付けたんだよ。おかげで封印もうまくいったし、ロイも助けられた。

さっさと終わらせて良かったんじゃない？」

だそうです。

疑問、解決しましたかねえ。

作者的には少し苦戦してもらおう予定だったんですが…

「ラウラーラよりも賢者様方の方が手強いね。何あの術、凄い難しかった。」

ディアータ様の術の方が面倒だったようです。

以上、作者でした。

25・夜の祭り(前書き)

若いねえとちよつとオヤジくさい竜真さんです。

25・夜の祭り

ロドから2つ先の村ベルガデイは、その小ささから、冒険者ギルドがない。

宿は1軒しかなく、全戸合わせても30軒程しかない。そんな小さな村に竜真達はたどり着いた。

「ようこそ。ベルガデイへ。」

宿の親父は飄々としていて、胡散臭い笑顔で一行を迎えた。

「2晩お世話になりたいのですが」

ミグが聞くと、親父の視線がまんべんなく一行に注がれてから、親父は喜んでと告げた。

「ねえ、ミグ？」

「わかるが…様子見しよう。」

夕食を食べながら、竜真はミグに訳知り顔で訪ねる。

ミグの方も心当たりがあるようで、残る4人が首をかしげた。

「リウマさん。どうかした？」

シンが代表して聞くと、竜真は肩をすくめた。

「うん…ミグう？」

「一応、言っておいた方がいいだろう。」

珍しくミグに助けを求めろ。

ミグの知人にベルガディ村出身者が居て、この村の他にはない祭りについて教えてくれたことがあった。

「そーなんだけどさあ…確かにこの時期に着ちゃったのは事故みたいなものだし…ニヤルマーはいいんだよ。大人だし…」

「…」

ぐだぐだ言う竜真をバレイラが円らな瞳で見つめる。

ロイもまた純粋な眼差しで竜真を見る。

「まあ、うかつに外に出られるよりいいか。」

竜真は頭を掻いて、ミグが説明に困った顔をしていると、主人である親父のモルが新たな料理を持ってやってきた。

「おや、そちらのお二方はご存知でしたか。」

「僕らは参加しないので、部屋に閉じこもってます。一応、宿内に居れば、巻き込まれませんよね？」

そここのところも聞いておかないと、行動範囲が宿内か、部屋内かでは、その差は大きい。

「…若い女性達は期待していたようなので、参加されないのは非常に残念です。もしかすると、祭りが始まれば、宿内でも巻き込まれるかもしれませんが、参加されないのであれば、部屋で皆様で過ごされた方がよろしいかもしれません。後で、お部屋の方に一晩籠もれるだけの飲食料をお持ちします。」

そう言っただけ料理と笑顔を置いて、モルは去っていった。

「リウマ様？」

ニヤルマーが不安そうに竜真を呼ぶ。

「ミグ…サポートをよろしく。」

そうして、竜真は口を開く。

「僕達も祭りの具体的な日にちは知らなかったんだ。ただし、内容は知ってた。この村は独特だね。子どもは村全体で育てると言う習慣がある。何故ならば、村全体で子どもを作るところから始めるからだ。」

村全体で作る？と言った所で気が付いたのは大人のニヤルマーと育ちの関係でシンだった。

なるべく下品にならないように伝えようとしているので、ロイとバレイラには具体的にどうとは伝わっていないさそうだった。

竜真はミグを見ると、ミグは頷いた。

このまま説明を続けても良さそうだと判断して続ける。

「今夜はその…村全体で子どもを作る日にあたり、命中率はかなり

高い。多分、モルさんに残念と言われたのはミグやニアルマー…シンも含まれるかなあ。それに僕もか…旅人の血は村の血を濃くしたためには、必要で、祭りに参加したい近隣の住人も来る。つまりだ。今夜、外に出たら最後、自分の子どもができると思ってもらえれば、…部屋から出れないよね？」

ニアルマーとシンはブンブンと顔を縦に振る。

ロイとバレイラは具体的には何が行われるか分からないが、周りの反応が微妙なので、とりあえず、頭を縦に振る。

「さて、そろそろ部屋に行こうか。」

「始まる前までにな。」

ミグの一言に全員が頷いたのだった。

「これは…」

「これほどは…」

「凄いですね…」

「…」

村全体から上がる嬌声、うめき声にシンは前屈みになりながらも、バレイラの耳をふさぎ、顔を赤くしていた。

「シン…まだまだだね。」

竜真は平然とロイの耳をふさいでいる。

ミグとニヤルマーもまた前屈みに顔を赤くしていた。

「これじゃあ、眠れないね。」

「ていうか、リウマさんは何の反応もしねえの？」

目の前の美少女顔の男は、にっこりと笑いながら、平然として答えた。

「2人と違って適度に相手見つけて抜いてるから。こんな音だけで反応はしません。」

ふふつと効果音が出そうな程の余裕っぷりにニヤルマーが「流石です。リウマ様。」と、誉め讃える。

「そんな訳で、君らも抜いてくるといいよ。」

あまりの明け透けさに3人が顔を見合わせる。

シンは下に目を移し、バレイラの耳は離せないと、少し哀しげだ。

「シン、行ってこい。若い奴が我慢してるのは可哀想だ。」

ミグがその様子を見てシンと交代する。

シンは部屋付きの廁へと走り去った。

「若いね。」

「若いな。」
「若いですね。」

少年の後ろ姿を残った大人達が生暖かな目で見送った。

竜真とミグは徹夜して、バレイラとロイの耳を守った。

ようやく声が止んだのは、夜明け間際だったのだ。

シンとニアルマーは何回か駆け込んだのち、眠りにつき、バレイラとロイは人肌の温もりと歩き疲れで早々に寝ていた。

竜真とミグはリユカ帝国の古代史と当時の都の位置や国境について、モルが持ってきていた飲食物を片手に語り明かしていた。

没頭できさえすれば、ミグも周りはどうでも良くなり、コントロール出来ていた。

「流石に一寝入りしたいな。」

「確かに。」

2人はニアルマーを起こすと、しばらく寝る旨を伝えて、次の瞬間には眠りの世界に旅立っていた。

竜真が眠りすぎて、少し遅くなったが、夕方、携帯食や必要物資を買って宿に戻ると、モルは「今夜も参加されませんか」と、聞いてきた。

「…祭りの期間はどのくらいですか？」

「1週間ですよ。」

何かにハツとして、竜真が恐る恐る尋ねれば、モルは「知らなかったんですか？」と驚いていた。

一行は顔を見合わせた。
うち4人が頷く。

「今から発ちます。」

「今日は初日より早い始まりなので、危険ですよ。昨日より3時間早いです。」

竜真が総意を告げれば、モルは苦笑した。
後、1時間もすれば、祭りは始まってしまふ。

「じゃあ、予定通り明日発ちます。」

「そうですね。本当に参加されないのですね。では、また夜食を用意しておきますね。」

部屋に戻ると竜真とミグは仮眠1時間を取り、始まりを告げる鐘が鳴る前にシンとニヤルマーが寝る。

バレイラを竜真が、ロイをミグが担当して耳栓をすると、今日も趣

味の分野を語り明かしたのだった。

朝、再び竜真とミグが、仮眠を取り、残念ですとモルに言われながらも昼前に村を出た。

「シン。凄い体験だったね。」

「そう…ですね。」

シンとニヤルマーはややお疲れ気味のようだ。

「でも、もっと凄い場所もあるから、気をつけてね。」

シンと2人の大人はギョツとして、竜真を見る。

「そういうのも、教えてあげるから。」

シンは壊れたように、必死に首を縦に振ったのだった。

25・夜の祭り（後書き）

シン…憐れ（笑）

はい。若いんです。

ニヤルマーは女慣れしてません。

ミグはそれなり…

竜真さんは卓越してます（笑）

大人組はロイとバレイラを健全に育てようとしております。

26・竜真先生の講義（前書き）

竜真さんのチートぶりが発揮中です。

26・竜真先生の講義

「水汲み…遅いなあ。」

シンがつぶやくと、その場に居た保護者の2人は眉を潜めて、顔を見合わせる。

竜真は胸元から懐中時計を取出し、時間を確認すると、さらに顔を険しくさせた。

バレイラとロイが水汲みに出て2時間。

水汲み場所はミグが見つけてきて案内した。

そのミグは料理をするためのハーブ類を探していた。

ニヤルマーは薪拾い、竜真とシンは狩りに行き、そして夜営地に戻ってきていた。

「…ニヤルマー、ここで見張りを頼む。シン、ミグを探してきて。

ミグと一緒に探索に加わって欲しい。僕は2人を探してくる。」

竜真はあつという間に木々の間に消えて、シンはミグを探しに出る。ニヤルマーはいつでも夜営が出来るが、いつでも撤収も出来るように準備に入った。

森の中は静かに暮れようとしていた。

「ミグさん。」

「シンか、どうした。」

シンがミグを発見したのは、夜営地から15分程進んだところだった。

ハーブ類の葉や花を丁寧に摘んでいる巨漢を見つけたシンは走った。ミグはシンの様子から、何か不測の事態が起こったのだと読み取ると問う。

「水汲みに行ったバレイラとロイが戻って来ないです。リウマさんと俺が夜営地に帰ったのは散開してから一時間。ニヤルマーさんが一時間半。ミグさんが案内した場所は夜営地から」

「10分だ。リウマは探しに行ったのか？」

たかだか10分の場所だが、ロイもバレイラも可愛らしい顔立ちをしている。

ロドでかなりを潰滅させたからと言っても人買いが居なくなった訳ではない。

何か合ったのではないか。

ミグとシンは水場に走りだした。

「居ない……」

心配に揺れる思考を律して、竜真は考えた。

川沿いを歩いてみたが、水汲みの道具すら見当たらない。

「この場合、無理矢理連れていかれたのではなく、自らの足で付いていったと考える方が妥当かな。」

また川沿いを夜営地に向かい、歩いていくと、ミグとシンが現れた。

「リウマ、どうだった？」

「下流5キロ以内に2人は居ないし、道具すらなかった。」

「そんな……」

ミグが竜真に聞き、ぜえはあと息を荒くしていたシンが泣きそうになる。

シンは息を整えようと、上体を曲げていた。

「リウマさん、これ何かわかりますか？」

シンの足元に透明な小さな粘着性のあるものが落ちていた。

「……ミグ、やばい。」

それを見ていた竜真がミグを見る。

「……………ああ、ヤバそうだ。」

ミグも座り、何かを確認したらしく、辺りを見回す。シンは訳も分からないまま、2人を見下ろしていた。

「大抵、奴の住みかは川沿いの洞窟にある。下流にはそれらしきものはなかったから、上流だろう。奴なら薬草が必要だ。ミグ、分かるか？」

「ああ。だが、ここらに生えているか？」

「亜種スライム、ブルブルが住む場所には必ず生えている。ニヤルマーを連れて、探してくれ。」

「だが、奴は強いぞ。」

「大丈夫。倒すのは問題ないけど、少し手伝いは欲しい。シン、付いてきてくれ。」

「はい。」

方針が決れば相変わらず行動は早い。

竜真の速さは重力を全く感じさせないもので、あっという間に置いていかれる。

早い…すげっ…

「…うん。追い付けないよね。」

気付けば竜真は足を止め、シンの隣にいた。

「はあはあはあ…かはっ…ふう〜」

「はい、力抜いてね。」

「うわああ!」

あまりの速さに追い付けないシンが足を止めて、息をしていると、いきなり体を持ち上げられた。

それから川沿いの石がゴロゴロと転がっているのを異様なスピードで通り過ぎるのを見ながら、シンは恐怖と戦うのだった。

「何て言うか…その手の性癖の人間が物凄く悦びそうな光景だ。」

「リウマさん、言うに事欠いて、今それ言うの?」

シンが不謹慎を咎めると、竜真はごめんごめんと軽く謝り、腰から鞭を取る。

「あいつの中から2人を取り出す。…そうだなあ。右に10メートル。走れ。」

「いつ」

シンが驚きながらも、きちんと反応してみせ、走りだす。次の瞬間、竜真の手元から鞭が伸び、ブルブルの中に取り込まれている2人を絡めると、シンに言った方へと放ると同時に、竜真も走り、ロイを受け止め、更にバレイラを受け止めたシンを支える。

「リウマさん、無茶にも程がある。」

「でも無理だと思ったらやらない。言っただろ、手伝いが必要だつて。」

竜真は喋る間にも覆面外し、外陰をシンに投げる。

「2人の身体をそれで隠して、動くな。動くと言った首が飛ぶからな。」

その声は普段の緩さからは、到底想像できない厳しいもので、シンが指示通りに動いたのを見ると、殺気を当てて、動きを牽制していたブルフに立ち向かう。

「通常スライムと同じように亜種スライムのブルフの弱点は色によって異なる。通常のスライムと違い、核の周りに強固な防壁があることと、毒性の高さにより、そのランクは単体でAだ。速さもあするため、3rdでも下手すると死ぬ。」

シンに向かって説明しながら、獲物を横取りされて怒るブルフと間合いを詰める。

「こいつは魔術なしでは倒せない。若しくはちょー剛腕ね。見本だよ。こいつはやや青がかつてるから、弱点は炎。風で増幅。『炎の絡め手、風の絡め手、炎鎖は愛撫する。』『炎の鎖は火の王の意志』

『炎鎖縛爆裂』」

ブルフの周りを業火が意志を持ったように走ると、次第に炎によりブルフがす巻きにされる。その炎が内側に向かい、腹から揺れるような音を立てて大爆発が起こる。

瞬間、その炎に向かい、剣を構えていた竜真はその剣を振り下ろし

た。
キインと何かに当たった音がする。

「属性から火と風のおわせ術で燃やし尽くして、剛剣で貫く。1人ではこれがベスト。普通のパーティーなら、魔術士に属性なしの攻撃させて、核をぼこぼこ殴っている内に防御が弱まるのを狙う。近づくと麻痺毒に会うから、気を付けること。以上、リウマさんの戦闘講座でした。」

竜真の足元には、真つ二つの核が転がっていた。

鮮やかで見事なまでに簡潔された戦いにシンは見惚れていた。
竜真が3人の下へ戻る。

「服溶かされちゃったねえ。」

「バレイラは外陰で包んだけど、ロイは覆つぐらいしかできないし……」

「ミグに縫ってもらおうか。」

どうしようと聞けば、あっさり竜真が言い放った。

「え？知らなかった？ミグの特技は裁縫なんだよ。」

シンが目を丸くさせたのに、竜真はニヤニヤして言った。

覆面はされていないので、美貌丸出しなのだが、ニヤニヤ笑う顔が残念な気がして、シンは視線を反らした。

ミグが自分の外陰を外して、服を作り、竜真が2人の治療に当たる。それを気にしながら、ニヤルマーとシンが飯の準備をしていた。

「流石、ミグ。きっとバレイラは喜ぶよ。」

「リウマ、もう少しさっぱりとした方がいい気がするのだが…」

「ニヤルマー、手伝って。いやいや、ミグ、違うよ。そこをタグとって、ヒラヒラ感をつけるのが可愛いんじゃないか。」

ニヤルマーを呼び出しながらも、竜真はミグの服作りに口出していた。

「シン、もう少し、ハーブを細かく切ってから入れてくれ。だがなあ、邪魔にならないか？」

「ニヤルマー、ロイの背中をこちらに見せて。だから、邪魔にならない。可愛らしさを出すには、必要なんだ。そのフォームでシンブルなのを華やかにさせるんだ。下にズボンを履いても、女の子らしさは忘れちゃいけない。」

2人ともてきぱきと作業をさせながら、バレイラの服について語り合う。

そんな器用さをみせる数字持ち達、特に女の子の服の可愛らしさについて熱く語り始めた美少女顔の竜真に若干シンは引いていたのだ。

26・竜真先生の講義（後書き）

聴講生はシンのみでした。

竜真さんは最強キャラですよ。

簡単に話しながらも、強めのモンスターを一断ちです。

27. どこまでも (前書き)

どこまでもアレな人です。

27. どこまでも

ルテイルの街。

ブルフに襲われ、まだ回復しきれないバレイラとロイのために急遽立ち寄ることになった。

覆面をロイの腰巻きにしているために、竜真は素顔を晒している。といっても、その髪や瞳は深紅に染められ、ある種の神々しさすら醸し出していた。

ミルテイルの街中に居る者は、竜真を見た瞬間に口を閉ざし、見惚れるままに一行を見ている。

一歩進むことにそれは広がりを見せて、目的の布を売る店に着く頃には、呆然と一行を囲む人垣が出来ていた。

「覆面をしている理由がよく分かった。」

「はい。」

「これ、凄いを通り越して不便だな。」

それぞれに感想を述べながら、ミグとニヤルマー、シンは店に入らず、外を固める。

竜真がロイとバレイラを伴って、店に入った。

「ロイは青かなあ。バレイラは僕と同じ赤系がいいかも。どう思う？」

「僕は何でもいいです。」

あまり表情が変わらないが、少し嬉しそうに見えるロイがポツリと

眩く。

《これがいい。リウマさんに似合う。》

「うん、僕に似合っても仕方ないんだ。」

黒板に書かれたバレイラの感想に苦笑し、2人に聞いても仕方ないと諦めた。

「ミグ、来て。」

ミグが入ってくるのを見て、竜真は探した布をミグに見せる。濃紺から白のグラデーションが効いた美しい布と、華やかな赤い布だった。

ロイの優しげな風貌とバレイラの勝ち気さが良く表現されている。

「いいんじゃないか？」

「ありがとう。じゃあ買ってくるよ。僕も覆面用の布買わなきゃ。」

嬉々としている竜真が店主に向かうと、破顔して会計をねだる。ガタガタドタンと激しい音がたつて、驚いたミグが竜真が行った方を見ると、店主が顔を真っ赤に染めて倒れたところだった。

「リウマ、会計は俺が変わる。」

竜真と立ち位置を変えて、竜真を自分の体で隠す。

「お代はいくらになりますか？」

店主は腰が抜けたようだ。

ようやく復活した店主と会計が出来て、即、覆面用の布を顔に巻き付ける。

「顔面凶器って僕のことって自覚したよ。」

「リウマさんは綺麗なだけです。」

《そうです。リウマさんは綺麗なだけです。》

ロイとバレイラの援護に竜真が苦笑する。

自分の素顔を見ただけで、人生を脱線させた男と実際に行動を共にしているのだ。

「また、リウマ様との旅志願者が増えないか心配です。」

そうニアルマーは完全に踏み外していた。

「ニアルマー…：そうそう簡単にパーティーを増やすつもりはないんだけど…」

ジト目でニアルマーを竜真がにらむ。

「ニアルマーさんて、本当にリウマさんが好きなんだな。」

「一目惚れらしいぞ。」

「え?」

シンがポツリと洩らすと、ミグがにやっとして言った。

シンは思わず、ニヤルマーを仰視する。

「ミグ：冗談はホドホドしてくれ。そして、シンも信じるな。」

竜真の突っ込みにミグが笑う。

シンは2人に挟まれ、顔を左右にしていると、ニヤルマーがおつとりと笑む(M)。

「リウマ様をいつでも拝顔できるならば何をおいてでも、お供いたします。」

「…ニヤルマー：何の力説なんだ。」

竜真は脱力感に体に乗っ取られていた。

《ニヤルマーさん、綺麗な者を見るのは至上の幸福なんだって言うてたよ。》

袖を引かれてバレイラを見れば、黒板に書かれた言葉に竜真は更に体を沈ませた。

「にやゝるうゝまあゝ変態を教えるな。」

「バカを教えるな。」

「それはないでしょ。」

「ニヤルマーさん…」

「え？え？変なこと言いました？」

それぞれが呆れ、また、苦笑してニヤルマーの肩を叩いていく。
ニヤルマーは困惑した。

「ミグ、センスいい」

さっそく宿に入り、仕立てた新たな服を着て、嬉しそうにしている
バレイラは可愛らしく華やかな笑みを浮かべている。

「ミグさんすげえ。」

「ええ。このデザインはロイ君とバレイラの可愛らしさを最大限に
活かしています。」

「ミグさん、カッコいい。ありがとうございます。」

《かわいい。ありがとう。》

次々に言われるミグへの賛辞にミグは照れも手伝い、いつもよりぶ
つきらぼつに「俺は縫っただけだ」と呟いた。

「布選びもデザインもリウマの担当だ。」

「裁縫の腕がなければ再現できるものか。」

互いが自分より如何に相手が優秀かを言い合い始める。

しばらく互いを誉め合うのが続いていたが、それを止める強者がい

た。

「ミグさん、リウマさん、ありがとうございました。」

ロイが丁寧に頭を下げ、バレイラも黒板に嬉々として、もう一度礼を書いた。

「礼を言われることはしてない。」

息がぴったりだ。

そんな2人にシンが呆れる。

「2人がすごいのは分かった。誉めあいもそれまでにして、そろそろ夕食時だから行きませんかあ？」

「え？そんな時間？ほら皆行くよ。」

「はやっ！」

すでに扉の外に出た竜真の切り替えの速さに、シンが突っ込んだ。

《リウマさん、カッコいい》

「ニヤルマー、バレイラを染めるな。」

黒板に感想を書いたバレイラを見て、ミグがニヤルマーを嗜める。ロドで武器訓練でバレイラの近くにはニヤルマーが居た。すでにバレイラはニヤルマーに染められつつあった。

「ごめんね。」

食堂には竜真が見たい野次馬が殺到していた。

「僕がどんなに偽物が出てても、覆面を取らない理由がわかったでしょ」

「仮面じゃダメなんですか？」

「1部が見えないと、人間は好奇心が沸くんだよ…っていうより、襲われる回数が増えたから駄目。」

目の前の5人前がどんどん胃袋へ納まっていく様子をシンは啞然と、ロイは顔を背けて、ミグは平然と、ニアルマーとバレイラは目を輝かせて、各々が竜真を見ている。

「いつも思っけど、どこに入るのさ。」

シンが嫌そうに言う。

「異次元」

竜真が適当なことを言うと、ミグが笑う。

「気にしたら負けだ。だから、バレイラ、ニアルマーに染まるな。」

《リウマさん、素敵です。》

竜真が食べている様子を師弟揃ってうつとりしているのを2人以外が嫌そうに見ていた

「ロイもよく食べるな。それ何杯目？」

シンがふと隣を見るとロイはシンの2倍食べていた。竜真とロイに挟まれていたシンがげんなりさせていた。

「シンは小食だから余計に思うところがあるんだろ。」

「そう言うミグさんも体のわりには食べないよね。」

「消費の効率がいいんだ。」

向かいに座るミグは大柄な割にあまり食べない方ではある。

「実はいっぱいご飯を食べないと、顔が維持できないんだ。」

「は？」

「え？」

「本当ですか？」

《！！》

「皆、冗談だ。リウマ、信じそうな嘘はやめろ。」

こうして野次馬が多い中、周りを全く気にしない一行により楽しい夕食の時間は過ぎていった。

27. どこまでも (後書き)

バレイラ…こんな子じゃないはずなのに…おかしいなあ

やっぱりニヤルマーに預けたのが間違いだったか。

28・悪い子にはお仕置きを(前書き)

再び竜真の属性攻撃

28・悪い子にはお仕置きを

ルテイルで1週間ゆっくり静養し、また何事もなく次のダレト村に着いた竜真達は、宿がないために村の外で野営をしていた。

「さて、明日から数日だけ、僕とミグが別行動する。課題を出すから、3人はニヤルマーと一緒に行動するように。」

そう言った竜真の手元から1枚の依頼書がニヤルマーに手渡された。

「僕らが居ない間にこのクエストをしてもらおう。『リドムス退治』ね。ここから10キロ程行った場所にある農村からの依頼で、リドムスを退治してもらおう。ランクEの依頼だから、比較的安全だと思う。因みにリドムスを知ってる人、手を挙げて。」

ロイが手を上げた。

ロイ以外は知らないらしい。
皆、出身が街中なのかもしれない。

「僕の生まれた所、リドムスがいっぱい居た。いつも女王まで駆除しきれなくて、年に1回、ギルドに頼んだの。」

「リドムスってどんなんだ？」

「んとねえ。黄色の角が生えた、2メートルぐらいの黒いミミズ。」

「」

「」

《》

竜真とミグ、ロイは知っているが、存在を知らない3人は想像で気持ち悪さを体感していた。

「因みに女王は角が3本に瑠璃色の鱗が一部ある。女王はランクCだから気をつけてね。ちゃんとコアを持ってこないと、ギルドでお金貰えないから、注意すること。因みに瑠璃色の鱗は良い値段で売れるから、とってくるといいよ。」

「ちょっと待て。」

いつも通り口調が軽い竜真にミグが待ったをかける。

「何？」

「何じゃない。皆のランクを知ってて言うのか？いや、お前の事だから言うんだな。」

「まあね。だって、僕らと時間が空けば殺陣してたんだもん。実質ランクは皆Cぐらいになるだろ。」

ニヤルマーはそれなりだが、子ども達は若さも手伝い、かなり覚えがよく、確かに実質ランクは高くなっている。

シンは速さに際立ち、ミグもハツとするような1打を出すようになった。

ロイは魔力の強さも手伝い、詠唱できる呪文が多くなった。

バレイラは暗器の扱いもさるものながら、ロングソードまでの扱っても慣れてきた。

「このクエストが出来たら、帝都リユリタでランクバトルに出ても

らうからね。団体戦でランクCの試合で1位になり、Bへの昇格を目指してもらおうよ。」

冒険者ギルドでランクを上げるには2つの方法がある。

1つは地道にモンスターを倒していくこと。モンスターの換金部位を持っていき、ポイントを上げる。一定ポイントがたまれば、自動的に昇格できる。

2つ目はギルド主催の総当たり戦の試合で1位をとること。個人、若しくは、団体戦で勝てばランクを上げることができる。

個人戦は単独行動の冒険者が出ることが多い。

また、いくら団体戦でメンバーのランクが上がる言っても、団体戦で1勝も出来ない者は上がらないという、厳しいものだった。

「詳しいことは皆には言えないが、僕は今、ミグに雇われている立場で、目的を持って旅をしている。これから先、ミグがパーティーを抜けることを考えれば、パーティーのランクの底上げは必要不可欠なんだ。」

一瞬、全員の視線がミグに向かうと、ミグは頷いた。

それはいつかミグがパーティーを抜けると言う返事だった。

「多分2ヶ月後にはリユリタに着く予定ではあるから、それまでにシンはさらに速さを上げること、ロイは四元素魔法中級の精度を上げること、バレイラはもう少しロングソードでの打撃力を上げる。そして、ニアルマーは3人の穴埋め的な動き方で補助するように。メニューはそれぞれに任せるから、しっかりね。ミグ、準備に行こう。」

有無を言わずに竜真はミグを連れて部屋を出る。

中に残った4人の中に嬉々としている男が1人居た。

勿論、ニヤルマーだ。

「ねえ、ニヤルマーさん、なんでそんなに嬉しそうなの？」

「う、嬉しそうに見えますか？」

シンが呆れて言えば、ニヤルマーはにやけていた。

「嬉しそうだね。」

《嬉しそうね。》

ロイとバレイラの同意にシンが頷く。

「嬉しいですよ。さて、さっそくお仕事の準備に行きましょうか。」

「え？今から？」

「ロイ君、リドムス退治に必要な道具等ありますか？」

「…見つけしだい潰すだけですよ。」

可愛らしい男の子から、えぐい言葉が飛び出したことにニヤルマーとシンが明後日を向く。

「じゃあ10キロってーと、半日の距離だから、軽い食べ物類を調達して、装備品の見直しと…」

「とりあえず行きましようか。」

急ぎに出ようとするのは、普通のニヤルマーにはない反応だ。

シンが不思議に思っていると、ニヤルマーが続きに言った言葉が解答になった。

「早くしなければ、リウマ様のお買い物の手伝いができません。」

残念な…

残念です。

流石ニヤルマーさん。

断言したニヤルマーはブロンドの煌めく髪を手櫛で梳き、きりりとした顔は品の良ささえあるのだが、竜真マニアっぷりは非常に残念で、シンとロイが脱力し、バレイラは賞賛する。

何となく不穏な空気を感じたシンがバレイラを見るとバレイラはさも当然とばかりに頷いている。

「…俺…どこまで突っ込みをしたらいいんだろうか。」

シンはポツリと呟いた。

「ヤシャルは獅子だったな。」

「獅子だねえ。どんな性格だか…」

2人は前の町で買い忘れた外陰用の布を買い求め、近場の食堂に入っていた。

「ミグありがとう。」

「どういたしまして。」

「やっぱり、隠すものがないと心許ないな。」

「確かに」

仕上がった外蔭を装着し、酒を煽る凸凹コンビ。

「ヤシャルの後、もう1度、ビシャヌラの下へ行き、リユリタに向かうで構わないか？」

「ああ。1度家にも帰りたいからな。まさか4ヶ月留守にするとは思わなかった。」

ツマミを食べながら、酒を煽り、ミグが苦笑する。

ミグの家は帝都リユリタに近い街シャロールにあるのが、普段は城の中で資料室の管理をしつつ、史書の編纂等をしているため城に一室借りて暮らしている。

一介の冒険者なのに資料室の管理をしているには理由があった。

竜真に変態と言わしめるほどの歴史オタクのため、帝国史に造形がかなり深い。さらに新たな学説を数多く打ち建てるミグを放置は出来なくなっていた。

王家より直々に史書の編纂を頼まれたのだが、資料室のあまりの管理のなっていないさにミグが整理をした。

誰よりも資料室に居る時間が多いミグがそのまま管理人になってしまったのだった。

4ヶ月放置すると資料室がどうなっているのか、ミグの不安は大き

い。

「師匠には最低2ヶ月とは言っておいたし、どうせハアンさんから色々なネタを貰って、ばか笑いしてるに決まってる。∴しかし、師匠にも4人を引き合わせるのか∴嫌だなあ。」

ヨルが竜真を可愛がっているのを知っているミグは嫌そうに肩を上げてみせた竜真を笑う。

「ふっ∴喜んで、お前を弄るヨルが目に見えるようだ。」

「ああ〜やだやだ。」

体格差は親子程だが、気の合う友人同士、ニヤルマーが合流する以前のよな風景に竜真は笑う。

「大所帯になったよね。1stのリウマとえば、単独行動の冒険者だったのに。」

「そうだな。」

いつになく過去を振り替える2人は、少し前のように会話を楽しめる、ゆっくりとした時間を田舎料理をつまみに堪能している。

「とりあえず買い物もしたし、そろそろ野営場所に戻ろうか。」

「まあ、ニヤルマーがお前を追ってきているはずだから、シンあたりが火の番をしているんじゃないか？」

「言ってる。じゃあニヤルマー達に見つからないように帰らなきゃ

ね。」

竜真の悪戯心を疼かせるのが、相変わらず上手いなとミグはこの場に居ないニヤルマーに苦笑した。

「シン。この人達誰？」

荷物を荒らし、シンが殴られている。

そんな場面に帰ってきた竜真は覆面を取り、可愛らしい笑顔を作つて、殴られているシンに聞いた。

「お！可愛い娘と旅してんじゃねえか。」

質の悪そうな冒険者のパーティーのようだ。

シンを3人がかりで、荷物を2人が物色していた。

にやつき、好色を全面に出した男達は現れた美しい竜真に殺到する。その際にミグが陰から現れ、シンを保護すると、竜真が花が咲いた笑顔を見せる。

「よくも僕の愛弟子を痛め付けたね。」

次の瞬間、大の男5人が文字どおり吹っ飛ぶ。

口がひしゃげ、鼻が曲がり、腕が有らぬ方を向き、苦悶の表情を浮かべ、それぞれが同じ場所に重なるようにして倒れた。しばらく竜真が倒れた男達を鞭で打つ。

男達が苦悶の表情の間に妙に色めく表情が見え隠れする。

気が済めば、武装解除をあっという間にしてのけ、竜真が鼻で笑う。

「さてと、物色した物も返してもらつよ。それからギルド証ね。あら、魔術のギルド証もあるし、盗賊ギルド証も…各ギルドに通達するからね。そのつもりで。私刑より社会的制裁の方が質が悪いことを思い知りなさい。1stのリウマの連れに手を出したことを後悔してね。」

手早く手持ちのロープで男達を縛ってみせると、竜真はシンの元に向かう。

シンはミグに支えられ、竜真が自分に絡んできた連中がぼっこぼこにするのを見ていた。

「リウマさんはつええや。」

「ああ。1stだからな。」

竜真がかっこつけて言えば、ミグが呆れていた。

「これから先、奴らは苛められれば苛められる程喜びを感じるようになったな。」

ある意味属性攻撃だな。そんなことを呟くミグを不安そうにシンが見る。

「へっ、どういふこと？」

「「じらじら。シン、気にしたらいけない世界があるって言うことだよ。」

ミグを嗜め、覆面をし直した竜真が笑って言った。
そうこうしている内に、複数の足音がこちらに向かってきた。

「ああ。帰ってきたね。」

竜真ら3人が顔を向けた方から、ニヤルマー達が歩いてきたのだった。

28・悪い子にはお仕置きを（後書き）

今回ミグさんについて書きましたが脳内設定のみで書いているため、忘れていたりしたものを書き足すのに四苦八苦。そろそろ設定集をまとめた方がいいかなあゝ

29・驚愕(前書き)

ここをロドから書きたくてウズウズしてました。

夜明け前の早朝にニヤルマー達と別れ、竜真とミグは森の中へと歩を進める。

木々の間を何事もないように進む2人だが、足元の条件は悪い。大中小の岩や石、草木が生い茂り、虫の巣が張り巡らされ、動物の気配もあちらこちらから感じると同時に魔物の気配も感じられる。動物が逃げないのなら、そう強いものではないのだろう。

「そろそろ村から30キロか。一休憩しようか。」

「ああ。日頃ゆったりとしているツケに合った気分だ。」

「30キロを2時間か…」

まあまあペースだなと、呟くとミグは時間を気にしている竜真の手元の時計に目をやった。

「あんまり人前で時計を出すなよ。」

「シユロウドの品だから？」

時計とは富裕層の持ち物である。

特に竜真が持っているのは、ディスクアが世界に対して誇る名工、シユロウドによる作で見える人が見れば垂涎で喉から手どころか、足まで出てしまいそんな逸品である。

上蓋には竜真がモデルをした彫り物がされており、その美しさはシユロウドでさえ、その出来具合に惚れ惚れとした自慢の一品。

高価かと問われれば、小国の国家予算並みと答えられる品だが、それ

を無造作に持つ竜真にとっては、ただの時計だと答えるのみだ。時計自体が高価な品なので人前で出すなと言うミグだが、竜真があつさり言った一言に絶句した。

「シユロウドさん、1週間も絶賛しながら僕を缶詰めにして彫ってたよ。」

それはシユロウドの工房作ではなく、名工直々に作り上げたということ。

ミグは背筋がぞくぞくとさせ、時計を凝視した。

「シユロウドが作ったのか？」

「うん。僕モデルの限定1品だつて。」

次の瞬間、ミグは雷に撃たれたような衝撃を受けた。

シユロウド作で…上蓋のモデルはリウマで…限定1品…

「そんなもの鍵を千個付けた金庫に入れて、誰にも見つからない場所にしまえ。」

その価値を竜真以上に把握したミグが叫んだ。

「たかが時計で大げさな」

「それ1個で戦争が起きるかもしれん名品だ。その出所は誰にも言つなよ。」

言ったら最後、血で血を洗う恐るべき事態になるだろう。

「へえ〜。でもシュロウドさん、銘を外側にはつけていないって言うてたし、僕がこうして使っているのが安全じゃない？」

そう言われてしまえば、ミグは頷くしかない。

竜真よりも強い“人間”はおいそれとは居ないのだから。さらに言うなれば、竜真の装備品の全てが特注品であり、防具や武器の類も生半可な冒険者では揃えられない逸品揃い。当代の名工達が、竜真に惚れ込み作った物ばかりであった。

実を言えば、竜真はそれだけで庶民の一家が一生遊んで騒いで飲み食いしても買えないような代物で体を固めている。

「僕がこのまま売られたら、城が建つんじゃないかなあ。」

けして冗談にならない冗談である。

竜真が時計をほいっとミグに渡す。

手の中に納まった途方ないものをまざまざと見つめた。

「いい品だろ？滑らかさといい、光沢といい、文字盤の字は各種寶石を削りだし埋め込んでいる。」

ミグが息を飲む。

色とりどりの文字列が宝石はかなり小さく加工してある。

「凄いなあ」

「凄いのは、シュロウドさんの熱意と執念。僕と出会ったのは、ラウラーラの事件があった時なんだけどね。森で魔物を斬った後に、水浴びしていたらさあ、後ろから悩ましい？やましい？色めきだった気配がガンガンしてきて、振り返ったら、涎を垂らさんばかりに興奮したオジサンが1人。怖いよねえ。いきなりモデルになってく

れえ〜って抱きついてきたから、うっかり投げちゃったんだけどさあ。」

ミグの想像するに、かなりいい具合に投げたのではないだろうか。以前投げられた人を見たことがあるだけに笑うに笑えない。なんせ、投げられたのは世界に名立たる名工なのだ。

「そしたら、後ろからオジサンを探しに来た弟子が顔を真っ青だか真っ赤だか真っ白だかにして大混乱。それから熱意と執念に負けてモデルになっただけ、食われるかと思う程の迫力だったなあ。」

弟子も弟子で、師匠が投げられて真っ青、投げた竜真を見て真っ赤に、どうしたら良いかで真っ白になったのだろう。

名工が執着する程の美が目の前の覆面の中に詰まっている。そんなことに妙な感動を抱きつつ、ミグは竜真に時計を返した。

「いよいよだね。」

「ああ。」

竜真とミグはヤシャルの生活区域の手前まで来ていた。

竜真の懐中時計の件でミグの驚きをかっさらった竜真と興奮が覚めたミグは淡々と歩き続け、ヤシャルの神殿にあっさり到着した。

中は他の神殿より綺麗に整えられ、ヤシャルが活動状態にあることが見えた。

「まさか、こんなに綺麗だと思わなかった。」

「本当にな。」

さていよいよ、先に覆面をとり、居住区域に向かう扉に手をかけ、開けた瞬間…

「嘘だ。」

思わず固まった。

あまりの衝撃に竜真が固まっている。

ミグも見たこともない書棚がずらりと並び、本が溢れている場所だったが、そこは竜真にとって見慣れた場所。

「あれえ？竜真君、おかえり〜」

のんきな声が聞こえてくるが、竜真は驚きのあまり動けない。

目は見開かれ、桜色の柔らかそうな唇は間抜けに開かれている。

その唇はわなわなと震えていた。

「リウマ？」

竜真がここまで動けないのを見ないミグがのんきな声の主と竜真を交互に見る。

「父さん？」

「う〜ん。まさか竜真君がそっちから来るとは思わなかったよ。いつからそっちにいるのさ。」

優雅にお茶をしながら、竜真の顔を年相応に成長させた美形がいる。

「父さん？」

ミグは竜真の一言に訝しげに問う。

「　　っ！！父さんがまさかヤシヤル？」

「そうだよ。さて、この時間軸をいじらないと。軽く10日ぐらい経つちゃうからね。それまでそこから動かないで。入っちゃダメだよ。」

扉で固まる竜真とミグを余所に指をぱちりと一鳴らし。

その手を右から左へひらりとさせれば、ポロシャツにスラックスからこちらで一般的な装束に変わる。

黒く豊かな髪は腰まで伸び、頭には金環がはまる。

手をぱちんと打ち鳴らせば、竜真の父の書斎から王侯の執務室ような部屋に一瞬のうちに変わった。

「はい。お待たせ。今お茶出すから待っててねえ。」

いそいそと準備に行く変貌した父に呆気にとられて、竜真は動けない。

「リウマの父親なのか？」

「…そう…らしい。」

未だ惚けている竜真が心配になってくるミグだったが、展開が展開

だけに自分もどうしていいかわからない。

「ほらほら、そんなところに居ないで入って来なよ。」

まるで近所のおじさんのように気軽に声をかけられても戸惑うばかりだ。

「竜真君、驚きすぎですよ。」

「父さん、驚かすにはいられないでしょ。」

そう言いながらも、完全にヤシャルとしての姿になった父親に少々でも慣れてきたのか、竜真が部屋に歩を進めた。

まだどこからか出したのか、いつの間にやら応接セットが広げられていたが、すでに気にすることなく竜真はソファに座った。

「さて、竜真君がそっちから来たなら、きちんと出自とか語らないといけないのかな？」

「できればお願い。」

竜真も混乱しているが、ミグも混乱している。

ミグ1人がソファに座ることに躊躇していると目の前の超絶美形がにっこりと笑う。

「竜真君にお友達ができて良かった。」

「ミグ、変なことになって、ごめん」

ミグはまばゆいまでの2人の奇跡の美形を前に途方にくれた。

29・驚愕（後書き）

まさかまさかの父登場です。
事情説明はまた次回。

30・竜真の熱意(前書き)

サブタイトルが苦しいです。

30・竜真の熱意

「で、父さんは3千年前にこちらに渡ったと、でも向こうじゃあ30年前だと…向こうの10年はこっちの千年…途方も無い話だね。」

気が付けば、優雅なティータイム状態になっていた。

竜真の世界のケーキを食べながら、ミグは感動していた。

「こっちの王の馬鹿さ加減に嫌気がさしたんだ。おかげで未知と会えた。未知は本当に可愛かったんだ。当時10歳になったばかりかなあ。『お兄ちゃん、とっても綺麗ね』ってさあ。あの時点で2千年歳は過ぎていた私にとって“お兄ちゃん”は衝撃だったなあ。」

「いや、僕にとって10歳の未知さんに一目惚れした父さんに衝撃だよ。」

ミグは静かに聞いていたのだが、いかんせん突っ込み所が多く、頭を悩ます。

竜真の父であるヤシャルの話をまとめると、魔王による肅正の後、各神殿は閉ざされた。

ヤシャルはそれまで研究していた異世界に渡る術を使い渡った。

何も分からず好奇心のままにうろろし、いきついた先に居たのが竜真の母である三島未知子である。

当時10歳だった彼女に拾われ、政界の裏首領と言われた未知子の祖父、三島双衛門に佐伯獅子王として、しばらく仕え、異世界を知った。

未知子が16歳の時、全く年を取らないヤシャルに双衛門が相応に年が取れるなら取れと、苦笑しながら命令したのはヤシャルにとつては未だに笑いの壺だった。

その16歳の未知子と結婚し婿養子になると未知子が将来通うであろう大学の研究室へと入り、双衛門の付き人を離れた。その美貌から老若男女を虜にし、双衛門の付き人を離れるときには数多くの国会関係者を泣かせたのだった。

異世界に来て10年経ったところで、ふと元の世界が気になり戻ってみると、なんと千年の時が経過していた。

以来、こちらの世界と竜真の世界を行き来している。

向こうの時間で1年に1回は丁寧に掃除しているらしい。

「君達はこの世界の創世神話を知ってる？」

竜真は頷き、ミグは首を振る。

「竜真君が知ってて、ミグ君が知らないの？」

そう問われたミグが、竜真を見ると、竜真は首をすくめた。

「ミグじゃあわからないかもね。リユカからかなり離れたハルマ国のケザイン地方に小さな集落群があつて、ミグには前に言ったかな。四神教を唯一とする村があつた。その星見の神官が語ってくれたんだ。」

ヤシャルは竜真の話を聞く態勢になり寛ぐと、ミグはどうするか迷った末に少し姿勢を崩した。

そんな2人の様子を見てから竜真は語りだした。

「1人の神がいた。」

神の名はリユカリリノーラ。

男神でもなく、女神でもないその神は何もない空間を切り開いた。

切り開かれた空間を摘んで大地を、撫でて空にした。吐息で風を生

み、涙で海を作った。土を捏ねて山を作る。

こうして様々なものを作ったりリユカリルリノーラはふと世界に淋しさを感じた。

生き物の息吹きが足りないと感じたりユカリルリノーラは動物を作り出した陸の統治者獅子、空を統べる鳥、輪を尊ぶ狼、そして守護する竜。リユカリルリノーラに作られた彼らとリユカリルリノーラにより、様々な動物が生み出された。そして最後に人が生まれた。リユカリルリノーラの姿と同じ姿をした動物が人。人は知恵と力を使い爆発的に増えていった。

だがリユカリルリノーラはそれを懸念した。人が多くなればなるほどに世界に澱みを感じた。

澱みは次第に形作り、魔となった。人々は争いと平和を繰り返した。その度に魔は増え、強くなっていた。リユカリルリノーラは4体の動物に命じて人を束ね、導くよう頼み、次の世界へと旅立った。4体の動物はそれぞれに人を導いてきたが、ある日全員でまとめようと話し合い、1つの国を作った。これをリユカと言う」

今の竜真はひどく神秘的だった。

途中、途中に入れるヤシャルのお茶を優雅に飲み、語る姿は、ただお茶を飲み喋っているだけのはずなのに、この世界の始まりをミグは見た気がした。

「確か要約するとこんな感じ。星見の話はさらに長かったんだけど、その時、メモできない状態だったから要所しか覚えてない。」

ミグがなんだか残念な気持ちでいると、ヤシャルが引き継ぐ。

「リユカリルリノーラは星作りの神の1人、神作りの神の1人なんだよ。私達は四神として3千年前までリユカを見守ってきたんだ。当時リユカ、1国しかなかった。それがいつのまにやら…今…」

「21」

言葉に詰まるヤシャルに竜真が手助けする。

「21カ国か。増えたよね。原因は私達がリユカの王に助言してきたのが、ぶつりと絶えたからなんだけどさ。しかも今のリユカ帝国の王様、リユカリルリノーラの血が入ってないし……」

「リユカの王はリユカリルリノーラが最初に血を混じり作った人の子孫なのですか？」

その意外なことにミグがつい反応する。

「そっだよ。リユカの王は本当に一子相伝。1人しか産まれない子に総てを伝える。でもリユカリルリノーラの血は絶えていない。それは分かるんだ。きつとどこかにいる。けど、探すつもりもない。竜真君がいずれ旅していくうちに出会うかもしれないけど。」

ちらつと竜真を確認するとヤシャルはニヤニヤしている。

「こちらで10年、20年うろつろしても向こうじゃさほどの時間も経っていないことだし、しばらく自由にしたらいいんじゃない?」

「…僕はこちらで年をとる?」

竜真がふと疑問に浮かんだことを述べる。

ヤシャルはさあてと顎に手を当て、首をかしげた。

「まあ、元々こちらでは年を取りにくいんじゃないかなあ？私の特性の遺伝がこちらで出まくりだし。魔力、体力、筋力、その他もろもろ？」

ふふふと笑う姿は確かに竜真と似ているところがあり、ミグは竜真が神子であるのかと、なんだか残念のような、嬉しいような、大興奮なような、なんだかよく分からない気分になっていた。

「どうせなら今夜はここに泊まってく？向こうの食材類持ってきてあげるよ？」

ふと思い出したようにヤシャルが言えば、竜真は目を輝かせた。今日のように竜真の表情が様々にかわるのは珍しい。

ミグは竜真もヤシャルの子ではあるが、人の子なのだなどと笑った。

「何笑ってるの。父さん、醤油と味噌と顆粒出汁が欲しい。出汁の観念がないのは耐えられない上に、僕のレポートリーから行くところじゃ南蛮風料理しかできない。」

ミグに対して突っ込みを入れてから、5年間焦がれていた調味料をリクエストする。

「お祖父様に最高と言わしめた僕の料理…とまでは言わないけど、こちらにはない美味さの料理を食わしてやる。」

ミグに向かって、カ一杯のやる気漲る宣言をする竜真にヤシャルは

ニヤニヤしている。

元々、料理が好きで、特に出汁。

昆布やかつおぶし、その他もろもろの出汁について、こだわり、すまし汁は亡き祖父、双衛門が美味いと褒め称えた程だった。

出汁の材料を集めなくとも、顆粒出汁があれば、この異世界で冒険者としてフラフラするには及第点だった。

「その様子じゃあ、僕の特製魔法具に入れてあげた方がいいかなあ？」

「特製魔法具ですか？」

聞かない言葉にミグがおうむ返しに聞く。

「私の研究成果で、向こうとこちらが繋がった道具入れて、向こうで足してやれば、こちらで使った分を補える。そうしたら、旅の途中で困ることはない。」

「ありがとう。」

可憐な花のような笑顔を振りまき、竜真がヤシャルに礼を言えば、ヤシャルがからかう。

竜真にとっては久しぶりの再会は、ゆっくりゆっくりと親子の団欒として過ぎていくのであった。

30・竜真の熱意（後書き）

次は神殿、お泊り。

31・異世界人

「これは…美味しいな。」

ヤシャルに用意してもらった材料が調理され、食卓を飾る。

ミグは見たことのない材料が、見たことのない食事が並んでいる中、恐る恐るフォークで突く。

1口、また1口と口に運ぶ。

ミグの口にあつたようだ。

「調味料万歳。」

竜真は小さく呟き、ミグが見たことのない棒を2本を巧みに使い、かなりの早さで目の前の料理を口に持っていく。

普段も大いに食べる竜真だが、今の竜真はアルシユラ並みの食べっぷりだった。

ミグの前までも棒は延び、皿の料理をかつさらっていく。

「リウマ、その棒はなんだ？」

「これは『箸』って言う、料理を作ったり、食べる時に使う道具なんだ。この『箸』は食べる用の箸なんだ。お祖父様に頂いたこの箸は特別。世界に1本しかない。時計と一緒に名だたる名匠に作られた。」

「はし、こめ、みそしる、…改めてリウマが異世界出身と言つことを認識したよ。」

「ミグ、僕の料理、おいしいだろ？」

「ああ。この『味噌汁』、美味しいな。」

ほのぼのと進む夕食の時間。

ヤシャルは気を効かせて、退いていた。

ヤシャルから、この神殿を自由に使用していい許可をもらい、必要な食材等を置かせてもらい、神殿から竜真の世界に出入り出来るようになった。

竜真は旅をしながら、自身の世界に戻る方法も探していた。

「確実に帰れるのが分かっているかいらないか、かなり重要だから嬉しいね。」

それはそうだとミグは味噌汁を飲みながら思う。

自分が異なる世界に飛ばされたら、きっとリウマのように構えてはられない。

そう思うと竜真が何を思い、こちらで暮らしてきたか気になった。

「リウマ、いや、竜真が正しい発音なのか。竜真はこちらに来て、どうして、こういった生活をしようと思ったんだ？」

竜真がどうやって、こちらに来たのか…

竜真は意味深な笑顔で微笑んだ。

31・異世界人（後書き）

短っ！

次回、昔を振り返ります。

ところで、ニヤルマー達…無事なんだろうか？

ポケットなモンスターのB&Wをプレイ中

4つ目のジム前に鍛えています。

シママ進化したあ。

次はモンメンとコロモリだあ〜

32・出会い

「また竜真の1人勝ちかよ。」

「九十九、うるさいよ。」

三島竜真はその日、合コンで来た女子軍の視線を総なめにして、1人入れ食いのち、友人、九十九忠昭つくもただあきとともに、駅に向かって歩いていた。

「竜真…キミ、最高何股したことあんの？あのモテ方異常だよ？」

「15股。いきなり女子に囲まれて、私達と付き合ってくださいって…」

「…俺、なんてコメントしたらいいのか分からない。」

アルコールもそこそこに入り、陽気に友人と語り合い、駅前で別れる。

竜真は駅の反対側の入り口に向けて歩き続け、駅を抜け、商店街を抜けようとしていた。

人気は既になく、竜真は颯爽と歩いていた。1歩1歩と足を進めていったのだが、一瞬、階段で足を踏み外したのと同じ感触がした。目の前には普通の住宅地を車2台がギリギリに通り抜けれる程度の真っすぐな道が続いている。

足元はズブズブとアスファルトに沈んでいく足。

「突発的一部液化化現象？」

膝まで沈んだ時、異変が起きた。
竜真を6色の光が囲み、竜真は眩しそうに目を閉じた。

「夜が昼に、街が森になった…」

日本にはない植物群に囲まれて、竜真は頭を抱えた。

「時差ボケ起こしそうだ。」

先程まで道を同じくしていた九十九が居たら、気にするのはそこなのかと突っ込んだだろう。

気に入った人にはボケ倒す性分としては九十九の突っ込みは楽しくて仕方がないが、すでに九十九とは別れているし、あたりに動物の気配がない。

竜真はどうするか思案した。

太陽…は、ある。空気も申し分なさそうだ。顔が変わって…たりもしないかな。

気配は…少ない。

さて、見たことのない植物だ。

虫は……うん。見たことない。30センチの蛾はちょっと微妙。ここはどこだろうか？

太陽が中天ならば昼だと推測できる。

「とりあえずは水の確保かな。」

竜真は適当な方向へと歩きだした。

「綺麗な池だ。」

アクアマリンのような水面に植物の緑が写り込み、えもいわれぬ美しい風景が目の前に広がっており、竜真は純粹に感動を味わっていた。

「水浴びして、仮眠をとるか…」

あくまでも現実的な竜真としては、水の確保、睡眠による意識の覚醒と体力回復、適当な武器（先程拾った先の鋭い棒）に食料の確保（鞆の中にチョコと飴に栄養補助食ゼリーがあった。）だった。とりあえず目的は果たしたので、後は体力回復が問題だった。

何せ授業が6限までフルに入っていた上、体育教科もある日で、脳と身体を使った1日の締めくくりは合コン。

夜まで積極的に活動し、後は帰って寝るだけ…のはずなのに、また昼からサバイバルでやり直し。服を脱ぎ、池に入る。

半身まで浸かったその時だった。

がさがさと茂みが揺れ、1人の男が現れた。

「…」

竜真と目が合った男が、無言のままに剣を抜き放った。

竜真は一切視線を逸らさず、じっと見つめる。

「まさか人型に会うとは……」

言葉は聞こえるのか。話しても通じるのかなあ。

「僕は人間なので、もちろん人の形をしているのですが、とりあえず、剣をおさめていただけませんか？」

「お前…その容姿で魔物ではないと言うのか？」

魔物とは黒を纏う異形のこと。

時として国を滅ぼしてきたのは黒を纏いし美貌の人型の魔物。

この世に気紛れに関わる彼らを倒すことは、ある種、冒険者達に目標とされてきた。

「僕は産まれてから20年、この容姿で人間として過ごしてきたんだけど……」

池から覗く半身は細身で色白く、濡れた黒髪が張りつき、ちらりと見える美貌は男が今まで見たこともない美少女とも言えた。

「とりあえず、服着ていい？寒くなってきた。」

「ああ、すま……………」

了承を聞き、さっさと池から出た竜真の全身を見た男が驚愕に固まる。

「…男…なのか？」

「女の子に普通はこんなご立派なのついてないでしょ。」

顔とブツを見比べて固まる男に、竜真は呆れたように苦笑した。
これが師匠、シュミカの3rd、ヨルとの出会いだった。

33・都合よく(前書き)

32での竜真のバッグは今も使っている赤いカバンですが、中に入っている食料品が女子っぽい(笑)です。

筆記用具、ルーズリーフ等も入っています。

15股：しかも女性陣が全員同意の上…なんとコメントしたらいいのかわからない(by九十九)

33・都合よく

「黒が魔物の色ねえ〜。」

頭をがしがしと搔いて、胡坐で地べたに座る竜真に、ようやく警戒を解いた男が近場に座る。

「リウマは本当に美少女顔だなあ。それで黒髪黒い瞳なんて言ったら、確実に殺される。」

ニヤニヤしている男は青年と言っても、30代ぐらいの男臭いイケメンで名をヨルと言った。

焼けた肌に短くした小麦色の髪がよく似合っている。

無精髭が似合う男で、日本なら海辺でサーフィンしていそうだった。「可愛い顔でも立派な男だから襲わないで下さいね。中には可愛い顔なら男でも厭わない変態がいるので」

「そうかそうか、幼いのに苦労してるな。」

「さつきも20年って言いましたよ？ってことは俺は20歳なんですよ。幼くはないですよね。」

若干人の話を聞かないところがあるヨルに、竜真は「この人めんどくさい。とかなんとか考えながらも、1人では危険極まりない世界だ確信した。」

「えっと、ヨルさんは旅人ですか？」

自分の使い道はよく知っていて、なるべく可愛らしく聞いてみる。

「こつ見えても3rdよ。」

サードを守っているわけじゃなさそうだから、何かのランクかな？
竜真は自慢げに言うヨルを気分よくさせながら、少しでも情報収集
しようとお話を続けた。

「凄いなえ。」

「数字持ちはかなり少ないからな。」

数字持ちねえ。

「3rdかあ。じゃあヨルさんは強いんだね。」

「そうだな。2ndにゃあ勝てんが、ランクAが10人程度なら軽
く勝てるだろうよ。まあ魔術士が混ざっていたら苦戦するかもな。」

やはり何かのランクらしい。

ラノベの冒険者ギルドのようなものかもしれない。

「3rdの実力って、平均的にそのぐらい？」

「いんや、俺は3rdになりたてだから、まだまだだ。2ndに近
い奴は更に強い。」

3rdの下にランクAで上に2ndがいるみたいだ。最高位は1
stなのか？

質問をしていると竜真は小腹が空いてきたのでついでに聞いてみる

ことにした。

「ところで今はお昼ですか？」

「ああ。なんだ、わからないのか？」

「そう。気が付いたらここから少し離れた場所に居たのですが。」

「なんか面倒に巻き込まれたんだな？」

「多分。何せいろんなコトが分からない上に、ここがどこかも分からない。分からないコトだらけで困ってるんです。」

曖昧に嘘は言わないが、決定的な真実も告げない。

いいように言葉を積み重ねるヨルに便乗する形で本題を切り出した。

「ここを抜け出して暫く、僕を度の道連れにしてもらえませんか？」

33・都合よく(後書き)

ヨルの容姿の描写がやっと出ましたね。
さて、瞳は何色でしょう？

竜真さんのヨルの利用計画発動です。

34・リラックスに（前書き）

今日が水曜だと忘れてました。

34・リラックスに

「まあ、こんな感じでヨルと出会って、まずは冒険者ギルドに登録したかな。」

うふふと笑う竜真は捜し出してきた取って置きのワインを取り出してきて開封した。

「これは？」

「父さんのワイン。因みにワインは向こうのお酒の一種ね。僕の産まれ年のもので、向こうでは20年ものだけど、父さんがいつこちらに置いたかが問題なんだよね。長ければ軽く百年以上ものとか言う話だもの。」

と、いいながらも楽しそうに開封作業にあたる竜真。

ミグは呆れ、苦笑いする。

「あくまでも現実的に前向きなんだな。」

「そうだねえ。僕の世界では書の文化が物凄い発達しているんだ。こちらで紙と言うと基本的に城での重要書類なんかに使われて、黒板にチヨーク、もしくは木片に炭が庶民の普通だよな。だけど……」
竜真は鞆を漁るとルーズリーフと読み終えた小説を取り出す。

「向こうではこれが庶民の最低でも使える紙なんだ。因みにこれが本ね。」

ミグが絶句しているのを確認しながらも話を続ける。

「この書の塊である本は様々な分野や思想、娯楽で溢れるように世に出てきているんだよ。そんな本の中には僕みたいに異世界に来てしまうなんて言う話も沢山あってねえ。これら話は作者による想像上のものでも、擬似体験的に考えることによつて、僕がこれからをどうしようかと想像もできる。まあ、想像だけであり、《事實は小説よりも奇なり》と言う言葉もあつて僕は僕の好奇心や探求心のまにここにいるんだ。」

ワインをグラスに注いで、飲みながら話は続いていく。ミグは匂いを確認しながらワインを飲み、目を輝かせた。

「竜真の世界は魔法がないが、こちらの魔法ある世界よりも発達しているのだな。」

「魔法がないからでしょ？それに魔物も居ない。」

「それにしても竜真の魔力の色よりも深い赤だな…そして美味しい。」
ワインを気に入ったらしいミグが杯を空ける。
竜真はその様子を見ながら、再び少し前を思い出した。

出会つてからしばらく経つたある日、ヨルが竜真の見たことのない鳥を捕まえてきた。

「師匠？それどうするの？」

「食べるに決まってるんだろ。」

「なんだ、食ったことないのか？バルマフって言うんだが、これが中々美味くてな。」

竜真の目の前でさっさと捌いていくヨルをじつと見て、持ち前の前向きさにより、これをどうやって捌くのか、料理するのかを観察する。

こうして野生動物を捕まえて捌いて食べるということは当たり前にならなければいけない。

熱心に見る竜真を誤解してか、ヨルはケラケラ笑いながら竜真の背中を叩いた。

「そんなに腹が減ってたのか！」

「違う！」

当初、武器はなく、護身に習っていた体術が戦いのメインだった竜真が初めて使えるようになった武器は剣ではなく鞭だった。

武器屋で得物を物色していたところ、面白そうだと鞭を手を取った竜真。

何度か試しているうちに、意外と上手くコントロールが効くと気が付き、隣の店で買い食いしていたヨルが持っていた骨つき肉に照準を合わせ掠め取る。

それを一口食べると、啞然としていたヨルが怒りだした。

「あ、美味しい。」

「リウマ、てんめえ」

「おじさん、これ貰うよ。」

「おう、ありがとさん。」

憤るヨルを無視して武器屋の親爺に代金を渡し、竜真は逃走したのだった。

「竜真とヨルは最初から竜真とヨルなのだな。」

「そうかもね。なんせ師匠は遊び心の塊だもの。さて、今日はここでおしまいにしてようか。」

そう言って、竜真は自分の手元を片付け始める。

「わかった。明日はどうする？」

ミグもこれ以上は竜真は話さないと判断し、自分の手元を片付け始めた。

「父さんに奈美恵のことを聞いておきたいし、父さん待ちかな。」

2人は片付けをしながら、衝撃から出来上がった1日をリラックスした片付けでおしまいにしたのだった。

34・リラックスに（後書き）

ヨルと竜真はだいたいバカなことをしている。

いつまでも男は少年なりました。

ミグは聞き役に徹します。

35・今後の予定(前書き)

再びパパ登場

35・今後の予定

「竜真、ミグ君。お待ちせ。」

三島獅子王としての姿でヤシャルが現れたのは、翌日の昼過ぎであった。

ミグは初めて見るデザインの衣装だが、一般的に壮年の男性が着るようなポロシャツとスラックスなのだが、意味なく溢れる知性と色気は竜真の親だと思わせる。

「どうも」

ミグが簡単に挨拶すると、獅子王は頷いて返した。

竜真は軽く手を振って挨拶に変えると、用意しておいたティーセットを使い、お茶を用意した。

全員が席に着いたところで、竜真が口を開く。

「父さんに話しておきたいことが3つあるんだ。」

「なんだい？」

「1つ目は本来の目的、ここに来ることになったきつかけで、ビシヤヌラ、マリシユテン、アルシユラに渡したんだけど、これ、通信玉を渡しに来たんだ。ビシヤヌラからの依頼。報酬は過去の知識つてところかな？ 神殿巡りをするわけだから。思わぬ収穫が多々合ったけど。」

竜真は父に通信玉を渡した。獅子王は渡されたそれを興味深そうに見た。

「こんなものも開発されたのか。うん。じゃあ、受け取っとくよ。それから?」

「2つ目、今、3人の子どもと言っても売られてしまった子ども達を育ててるんだ。」

「てことは、その子らの預け先が決まる、ないし、その子らが大人になるまでは帰ってこないってことかな?」

「さすが、父さん。だから、僕はしばらく帰れない。」

「こつちのことは任せてくれてかまわないよ。で、もう1つは?」

会話のテンポは早くミグは見ているだけだ。

親子にしてはフランク過ぎないだろうか。と、庶民層から王族を知るミグとしては違和感を感じてしまうが、現在ヤシヤルは別世界にいるし、竜真はその別世界の人間であることから、親子間のやりとりも、向こうの世界では一般的なのかもしれないと推測する。

「こちらに日本人の女性が来てる。向井奈美恵さん27歳。現在は何故か若返ってしまって10代の少女として暮らしてる。」

そう言って携帯を取出し、写しておいた顔を獅子王に見せた。ミグは何か小物を出した竜真が以前見たナーミエの詳細で鮮明な絵姿に驚く。

「それは困ったね。向こうの1年はこちらの100年に充たってしまっから」

「詳しい資料はこれね。彼女はリユカ帝国のフェブカ領主の所にいるから、1度見てやってほしい。念の為ね。」

竜真はルーズリーフにまとめた資料を獅子王に預ける。

やりとりをじっと見ていたミグだが、ふと気付いて自分の鞆から通信玉を取り出した。

「竜真、そのためにはお前がこれを持っていた方がいいのではないか？」

「かもしれないね。」

と、本来、ミグが持ち続けるはずだった通信玉を竜真が受け取ることになった。

「次は僕の番だね。言った通り、向こうの1年はこちらの100年にあたる。で、だ。こちらでそれなりに年月が経ってしまうと、向こうで1年経つ間はかなり老けることになる。だから、竜真君に僕の力が半分は受け継がれていることを考えて、その受け継がれたヤシャルの力を引き出してあげる。向井奈美恵さんだっけ？彼女も早めに手を打ってあげないのかな。」

「ん、わかった。ああ、ビシャヌラ、マリシュテン、アルシュラにも連絡してあげてね。」

「はいはい。さあ、両手を出して。」

「ミグ君、少し下がって。」

竜真に両手を差し出させ、獅子王はヤシャルの姿に戻ると、ミグを

下がらせ、竜真の手を握る。

一瞬、竜真の身体がこの世を取り巻く全ての元素、光、闇、火、水、土、風に対応した色に輝いていく。

「はい。おしまい。さて、僕は向井奈美恵さんが気になるから、様子を見てくるよ。」

簡単に終わらせ、次にはヤシャルの姿は神殿の外に向かう扉の前にあった。

早い

ミグはこんなところも竜真は似たのだなと、またも共通点を見つけ一人頷いている。

そんなミグを余所に、竜真とヤシャルの会話は続く。

「父さん、奈美恵さんをよろしくね。でもって、彼女、今は10代になってることから、きつと27歳の元年齢になるまでっていうのがキーワードな気がする。」

「竜真君はそのままだったのに、彼女は違った。確かに何かありそうだね。まあ、竜真君は僕の血縁だから、こちらに来たのもわかるけど…また何かあったら、通信玉で連絡するよ。」

そのままヤシャルは扉を擦り抜けていった。

それを見送り、竜真はミグを振り替える。

「ミグ、行こうか。そろそろ戻らないと奴らより先に戻れない。」

「確かに心配だ。」

ニヤルマー達は無事にクエストをこなしただろうかと2人は思いを

馳せた。

35・今後の予定（後書き）

むだに色気過多が親子へのミグの評価です。

三島親子としては、ミグが自分達の美貌をスルーする能力に非常に好感を持っていたりします。

…ミグの好きな人、ないし、恋人をも少ししたら出そうか迷い中…

36・帰ってみれば(前書き)

ニヤルマー達は…

36・帰ってみれば

三晩戦いが続き、倒したリドムスは3桁を越える。

一体一体の強さはたかが知れているのだが、量が量だけに全員それなりに疲れていた。

「やっと出た！女王だ！」

シンは疲れていただけでなく、リドムス退治に飽きていた。

まだ50体ほどに阻まれているが、その先に角3本の巨体。女王がいる。

「ニアルマーさん。ようやくです。」

ロイは女王の存在に気が付いていないニアルマーに声をかけた。

1体のリドムスに止めをさしたニアルマーが女王を見ると同時に指しを出す。

「バレイラ、シン君の所へ。ここは私が引き受けます。ロイ君、全体攻撃して撃破してしましましょう。それからシン君、バレイラへの付与効果よろしく。」

「はい。『暁の炎、日昇る炎、全てを照らし焼き尽くせ！あかつきしやつか暁灼火』、
『漲る炎、纏う熱、与えたまえ！炎火剣』」

ロイが放った魔術でリドムス達は半減した。

ニアルマーは切り込んで更に減らしていく。

シンとバレイラは武器に付与効果の魔術をかけられ、女王と対峙していた。

「バレイラ、右から、俺は左から」

シンとバレイラの様子を見ながら、ニヤルマーは時にロイに援護させ、確実にリドムスを減らしていく。

「はい、最後の1匹です。私も女王に向かいます。ロイ君。私にも付与効果をお願いします。そして、状況を見ながらですが、休んでください。」

「やった。」

ロイはひとまず戦線を離脱出来ることに喜んだ。

「終わった…大量発生にも程がある。くっそ、べとべとだ。」

絡み付いてくるリドムスの体液に鬱陶しそうにしながら、女王の角と、鱗をとる。

こうして最後までできちんと仕事を果たそうとするのがシンの几帳面な性格の表れで、ニヤルマーはそれを頬笑ましげに見ていた。

バレイラとロイはすでに近場の木に寄りかかり、完全に休憩中だった。

「奴らの行動が太陽が沈んであけるまでっていう限定なのが救いでした。」

「うっ…眠い…」

ニアルマーが1人納得していると、ロイが目を擦っている。

「ロイ君、今日は帰り支度があるので、昼間は寝ないでください。明朝出発しますよ。」

《昼夜逆転した》

バレイラも眠そうだ。

「来て1日、その日の夜から3日続けて戦闘、帰りに1日ってところか？」

「そんな所です。日が出てきたから村長のところへ行きましょう。」

村長宅では風呂の用意が出来ているだろう。

4人は清々しい顔で疲れた身体を労りながら歩きだしたのだった。

ダレト村に着いたニアルマー一行は、竜真とミグを探して、村唯一の食堂に向かった。

「おつかえりい」

「怪我はないか？」

竜真の周りには、この小さな村の中でも可愛い、美人と評判の女性達が群がっていた。

ミグは呆れていたが、やはり男であるため、竜真のおこぼれでもちやほやされるのは、それなりに楽しい。

2人がちやほやイチャイチャと周りとしていると、シンがやってきた。

「…これはどこをどう突っ込んでいい？」

「リウマ様…はっ！ロイ君、バレイラ、見てはいけません。外に出ていきましょう。」

シンががっくりとしている。

ロイとバレイラは興味津々に見ていた。

竜真もミグも若干脱がされかかっけていて、真っ昼間から少年少女が見るべき光景ではない。

うっとりと思っていたニアルマーはハツとしてロイとバレイラを外に出した。

「アハハ、世の中、気にしちゃいけないことが、たくさんあるんだよ。」

「シン、よくあることだ。俺は外に出る。」

ミグと竜真は乱れた服を直すと呆然と立ち尽くすシンに声をかける。

「え？ちよっ！ミグさん。」

さっさと外に出るミグを余所に竜真は女性陣にハグしながら別れの挨拶をする。

「シルクちゃん、リマちゃん、ルシアちゃん、ゾルアさん、ミクリアさん、ベルトラさん、またねえ」

「リウマさんのいけずう」

ルシアが6人を代表して竜真に拗ねた表情で言えば、竜真は苦笑して言った。

「そ、僕はいけずうなの。さ、シン、行くよ。それともお姉さん達に抜いてもらう？」

「なっ！」

笑いながら去るリウマの後ろ姿を女性陣に囲まれ抱きつかれたシンは呆然からハツとして慌てて追い掛けるのであった。

36・帰ってみれば（後書き）

シン落ちです。

顔を真っ赤にした少年…可愛いですねえ（笑）

真っ昼間の食堂で大人組はナニしてんだか…

37・変態と偶然（前書き）

サブタイトル：ああ何も言わないで

37・変態と偶然

村から出て半日、夜営を始め、皆で火を囲む。

日が暮れてきて辺りを暗闇が覆ってきた。そんなおり、シンが半日感じていた違和感を呟いた。

「なんつーか…リウマさん、変わったな。」

「どこが？」

竜真が首をかしげ聞けば、シンはうーんと考え込みながらも答えた。

「雰囲気つーか、気配つーか…近寄りがたい…でも近寄りたい？夜の帝王つーか、でもいかがわしくなくて…」

「へえ…ミグ。」

「そこまでの確だと驚くな。」

竜真は目を見張り、ミグも感心する。シンは照れたように頭を掻いたのだが、ニヤニヤしながら竜真がぞわぞわするようなことを言った。

「ニヤルマーさんなんか、目が合わせられないみたいだぜ。」

「ニヤルマー…」

残念な男ニヤルマーがそこに居た。

そう言えば、今日はニヤルマーが久しぶりに会ったのにもかかわら

ず、まとわりついて来ないと竜真が思い至る。

「り…リウ…マ様…」

「ナゼ赤くなる？」

動悸息切れ赤面。

ミグは若干引いた。

「拝むな！」

「ニアルマーさん、鼻血鼻血！」

ロイが慌てて近場の布を押しあてた。

ポタポタと鼻血を垂らしながら、止まらぬ涙を拭いもせず、覆面の竜真に対して拝む残念な男ニアルマーに竜真は全身に鳥肌を立たせた。

「泣きながら鼻血出して拝むとか、立派な変態になりやがって…
治癒！」

「ミグさんは、リウマ様とご一緒していて、何も思いませんか？」

竜真がニアルマーの鼻血を止めると、ニアルマーは食い付くようにミグに迫る。

迫られたミグはニアルマーから視線を外し、竜真を見る。

竜真は鳥肌を撫でて宥めていた。

「俺は竜真がそんなに変わったとは思えんが、変わったのならその原

因も知ってるからな。別に何とも思わん。ただ、覆面をしていても色気がただ漏れになったからには、覆面を取ったらどうなるやら。」

「確かにね。怖いもの見たさにやってみる？ミグは凄いな。僕ら親子を見ても平然としているなんて奇跡だね。」

竜真の口からふと出た言葉がニアルマーの琴線に触れる。

ニアルマーはミグに迫るように近づいた。

「……………のですか？」

「ニアルマー？」

いきなり目の前に顔が近づき、咄嗟にミグはニアルマーの顔面に手をやり、ニアルマーとの距離を強引にとる。

そのまま力任せにニアルマーを座らせると、ミグは火から離れて座った。

「リウマ様のお父様を御覧になったのですか？」

「落ち着け！まあ…竜真の何倍か知的でカリスマ性があり、色気過多な美形壮年だった。」

「父さんのことをそんな評価してたんだ。」

「み…見たかった。」

「泣くなニアルマー。」

嘆くニアルマーに鳥肌を立てた竜真とミグが怒鳴る。混沌としている大人組を余所に、シン、ロイ、バレイラはマイペースにご飯の支

度を終えていた。

4日ほど野宿が続き、久しぶりに街に一行はたどり着いた。

「ここは華やかな街だね。全体的にいかがわしい感じ…情操教育上は通り過ぎたいかもお〜。」

「リユカの花街と言われる街、サーナターナだ。」

竜真が覆面の中で眉間に皺を寄せていると、ミグは溜め息混じりに答えた。

「あの寂れた村の次の街がここって何か間違つてない？…あれ？でも…前の村にやたら色気過多な熟女が多かつたのって…」

「花街の女は、ある程度歳が行けば、近隣の村に下げ渡されているらしい。……………」

リユカでも随一の歓楽街サーナターナ、昼から男も女も客引きにせつせと働いているが、ここが更に盛るのは夜が更けてから。

露出の高い衣装の女達が店の入り口に並び、男性旅人を引き込もうとし、女性旅人には軽薄そうなみめ麗しい男が誘う。

子ども達3人を真ん中にし、3点で囲むようにして街を過ぎようとしていたところミグの足が一軒の店の前で止まった。

「ミグ？」

先頭から離れ、竜真がミグを覗き込む。

「……………義姉さん？」

ぼそりと小さく声が漏れたのを竜真は聞き逃さなかった。

「お姉さん？」

「いや、まさか…しかし…あつ待て竜真！」

戸惑うミグを余所に、ミグの視線の先に居た女性の下に竜真が行けば、ミグは慌てて静止した。

「この人？」

青ざめた顔を突き合わせたまま動かないミグと女に竜真はため息をつく。

竜真は一瞬の思案ののち、振り返って皆に伝える。

「ニヤルマー、この街で泊まる。3人から絶対に目を逸らすな。シン、ロイ、バレイラ、絶対に僕かミグが居ない時は出歩くな。絶対にだ。宿は…冒険者ギルドの施設を借りよう。ところでお姉さん、1晚いくら？」

ミグの姉らしき女に尋ねるも反応がないため、ちょうど通りかかった店の男に聞くことにした。

「あ、店の人？この人いくら？」

「ミグリース？彼女なら1晩金貨5枚だ。売れっ子でこの店の3位だからな。それにもうすぐ身請けも決まりそうだから、ミグリースを買っなら今だぜ。」

「じゃあ倍払うから1晩2人でよろしく。」

「うちは1対1しか受けてない。」

「抱くの1人だけならいいだろ？見てるだけって興奮するんだ。ね？金貨10枚。」

「仕方ないなあ。話つけてくるよ。」

そう言つて男は立ち去り、ミグは呆然と男についていくように奥に入った女を見つめていた。

竜真はミグの背中をポンポン叩く。

竜真は店の中に顔を入れ、受け付けで年季の入った女と軽く話をし、店から出た。

「さて、ギルドに行こうか。」

まだ呆然としているミグの背中を叩くと一行はギルドに足を向けたのだった。

37・変態と偶然（後書き）

何故か人気があるニヤルマーです。

ニヤルマー…それ以上の進化は竜真に嫌われるぞ。

38・夜、明ける

ミグには血のつながらない姉が居た。

両親が連れ子で再婚、のち、離婚で義母と義姉は出ていき、父は他界、家族はバラバラになったのだが、その家族の1人とまさか再会するとは思っていなかった。

ミグリースこと、リーシャ。義姉は今、絢爛な檻の中でミグと向き合っている。

「リーシャ姉さん…なぜ…」

「母が…母がああ後、旅の途中、しかもこの街で病に倒れたの。…この街で13の年の女の子ができる仕事なんて決まってるわ。」

そんなシリアスな場面を竜真はちびりちびりと酒を飲みながら眺めていた。

「で、どちらが私を抱くの？そっちのお客さん？それともあなた？」

「姉さん！」

あくまでも店の女として振る舞おうとするリーシャをミグは哀しげに留める。

「こっちはこの商売15年してんのよ。もう少しで身請けもしてもらえる。よつやく幸せになれるの。」

そう叫ぶリーシャは決して幸せそうではなく、リーシャはそんな様子なのだが、ミグはリーシャを見れないようだった。

「…ん、ミグ、リーシャさん、ちょっといいかなあ？」

視線だけを動かし竜真を見るリーシャと、いきなり割り込んだきた竜真にホツとしたような表情を浮かべるミグに竜真は戸惑ったが、ままに言う。

「リーシャさんを身請けする人ってどんな人？」

「……………」

「言えないような人なのかな？そう例えば、君を身請けした後も客を取らせそうなゲスっぽいとか？それとも…そう、縄で縛ったり、女を叩いたり殴ったりしないと興奮できないゲスとか？」

後者の例えにリーシャの顔が一瞬引きつったが、また無表情に戻る。ああ、やっぱりとだけ思うと竜真はまた黙る。竜真はちょっとだけ言ってその場から離れた。

残された姉弟は各々に途方に暮れていたのだが、しばらくしてミグが口を開いた。

「姉さん…身請けしてくれる人のこと好きなのか？」

「…好き嫌いなんて感情、身請けするしないに関係あるの？金出せば、身請けできる。される。そういうものでしょ？」

少々自棄に聞こえなくもないが、苛々の籠もった返答をしたリーシャは酒を注いで呷る。

「ところで…1人居なくなっただけど、あなたが私を抱くの？」

胸をはだけさせ、ミグの膝の上に乗って、リーシャは皮肉に笑う。
そんなリーシャが居たたまれないのか、ミグははだけさせた胸元を
静かに直すと、リーシャをそっと抱き締めた。

「ミグ…なんで今更…」

苦虫を噛み締めたかのように表情を歪め、ミグの胸を拳で叩く。

「姉さん…姉さん………リーシャ…」

激しく暴れるリーシャをミグは掻き抱いた。

「女将。」

「なんだい？」

竜真が受付に行くと、先程、挨拶に来た熟女が居た。
全体的に熟成されたエロスを感じさせる女は思っていたよりも気軽に答える。

竜真は単刀直入に言った。

「ミグリースの身請け代はいくら？」

「ミグリース？あんたもかい！金貨50枚だ。残念だがミグリースは先約だよ。」

話をする気がないのか、最初から竜真を相手にしない。リーシャの相手は横槍が入るとまずい相手なのだろう。

「手付けの金もらった？」

察するも竜真は引くことなく質問を続ける。その態度に女将は訝しげだ。

「いや、まだだが……」

「じゃあ僕が先に払うことにしよう。先方より金貨10枚多く払うよ？」

払ったもの勝ちでしょと続ける。そんな竜真を門前払いするかのようにならぬ女将は金貨10枚を訂正した。

「……50枚」

「10枚」

「40枚」

掛け合いは続く。

「20枚」

「30枚」

女将が30枚と言った後で竜真がにやりと笑った。

「30枚多くね。金貨80枚か…紙ある？後、きちんとお使いできる人かな？」

女将が手を叩けば、1人の男が紙と筆を持ち現れる。

その紙と筆で一筆書くと、竜真は封をし、男に預ける。

「これを持って冒険者ギルドに持って行って、受け取ってきて。…ちなみに何かおかしなことが起きたら、一瞬でこの店がなくなるからね。これを猫ババしようと思わないこと。3ギルドを敵に回しちゃうよ。」

竜真が何かを呟けば、男の身体が2色に輝き、手紙が青白く輝く。

「一体な…」

いきなりのことに男が怯んだ。

「君がこれを持っている間、絶対に物理、魔術、双方の攻撃を食らわないっていう魔術。ただし、有効期限は3時間。もう1つは追尾、有効期限は僕が解くまで。これをどこかに持ち去ったら、地の果てまでもつてこと…ね？」

こともないとばかりに言っただけの竜真に女将は目を見張り好意を面に出した。

「あなた……あなたなら、あの子へのあの変態の執着を防げるね。」

いいよ。ミグリースの身請けを受けようじゃないか。金貨30枚だけでもいい。その他にあの子に執着する変態について何とかしてくれたらね。」

身請けを申し出た人間を女将は心底嫌いな様子だ。

「いいよ。その変態は誰？」

「ここの街の領主の甥っ子さ。ご領主は良い方なんだがね…」

歓楽街を治めるに於ては善良にして、明朗な老領主は陰鬱となり易いサーナターナの癒しとして政務に励んでいるのだが、この甥っ子と言うのが性格、性癖ともに最低な男だった。

「因みにそいつはどこに住んでる？」

「そろそろ今晚もミグリースを苛めに来る時間さ。」

「ふ〜ん…じゃあ部屋を1つ貸してよ。それと…女将の腕。」

いたずらっ子のような竜真の口調に女将はさも愉快と目を見張った。

「君、君、金貨30枚なら手持ちにあるから行かなくていいよ。」

竜真は男から渡したものを返してもらい、尚且つ術を解いた。

「いつもの部屋ではないのか？」

「そうなんですよ。申し訳ありませんね。じきにミグリースを連れてきますから」

領主の甥ガボットは女将に案内されたが、いつもの部屋でなければ、いつも先に来ているミグリースも居ない。

どいうわけだと問いたただせば、女将は飄々と答える。
そこへ1人の少女が現れた。

「失礼いたします。」

「なんだ。っ！お前は？」

静々と現れた少女が顔を上げた途端、叱責しようとしたガボットは目を爛々とさせて少女を捕まえた。

「申し訳ありません。部屋を間違えてしまいました。」

おどおどとまごつく少女にガボットは息巻いて、まだその場に居た女将に言った。

「女将！」

「はい。ガボット様。何かご用でしょうか？ミグリースはじきに参りますか…」

「ミグリースはもう良い。今日はこの娘にしよう。」

「ですが…」

「良い。いけ！」

女将と少女が目配せしほくそ笑んだとも知らず、ガボットは女をがちりと抱えている。

女将が頭を下げ、部屋を出ると、ガボットは女を褥の上に放り、いきなり平手で張った。

「…」

女は驚いたとばかりにガボットを見つめた。

ガボットはこの目の前の希少な美姫をいかにして料理しようかと息巻く。

「ガボット様、お辞め下さいませ。」

その造形は麗しい人形のような女からか細い声が聞こえてくると、ガボットは更に興奮して、女に襲い掛かった。

次の瞬間、ガボットにとって最悪な状態へと状況は転換した。

ガボットにとつてありえない事態が起こったのだ。

まさか女人、しかもか細い少女に蹴飛ばされ、壁に背をぶつける等、ガボットにはあつてはならないことだった。

ガボットが茫然と少女を見ていると、少女は立ち上がった。ただし、その手には使い込まれた感のある鞭を持っている。

「女将さんがミグリースを限界まで身請けさせなかつた訳だ。」

先程までの少女の声ではなく、聞こえてきたのは青年らしい男の声。

「この時期に来れた事を運命に感謝しなくっちゃ…それと、僕を殴ったね。性格転換がいい？それとも性転換がいい？」

女 もとい竜真は世にも恐ろしい凄艶な笑みを浮かべ、バシッと鞭を床に叩きつけた。

娼館にガボットの悲鳴がこだました。

爽やかな青空の下、娼館の前には店の女達が勢揃いしていた。

「ミグリース…いや、リーシャ、今までご苦労だったね。」

「女将さん。姐さん、今までありがとうございます。」

女将とリーシャが抱き合い、挨拶をしていると、竜真がミグの背を叩いた。

「女将さんがリーシャさんの身請け話を防いでくれていたおかげだからね。ミグも感謝しなよ。」

「女将さん。姉を今までありがとうございました。」

「あたしとしちゃあ、その覆面の御方に感謝だね。うちで働いてもらいたいぐらいだ。」

昨夜、絶世の美少女に変身した男がガボットを攻め立てる様を女将は後始末に呼び出されるまで部屋の脇で見ていたのだった。悲鳴が嬌声に変わり、いつしか懇願へと変わる様は見事な調教ぶりだった。

「そのことなんだけど、かなり念入り教育したんだよね。まあ、性転換とまでいかないけど、性格、性癖転換させちゃったから、今ならつねただけで快感にのた打ち回るんじゃないかなあ。ご領主への手紙も一応届けておいてくれる？」

話を聞いているうちに女達は嬉々と、男達は青ざめていく。

ミグも何をやらかしたら、童真にそんな徹底教育をされる羽目になるのかと顔を青ざめた。

女将は手紙を受け取る。

「御名前をいただいても？」

「1stのリウマ。名前ぐらい聞いたことあるでしょ？さあ、ミグ、リーシャさん、行こう。」

その後、歓楽街サーナターナは後々領主となったガボットによって、女性上位の女の街へと変貌を遂げるのだった。

38・夜、明ける（後書き）

殴ったね…の後に親指が勝手に親にもぶたれたことないのにと動いてました（笑）

ガボットさんは後に名領主となりました。めでたしめでたし。

後はミグとリーシャをいかにしてくつつけるか…

竜真君の今後に請うご期待（半分冗談に受け取ってくださいな。）

39・ありがとう(前書き)

39話目で副題ありがとう…はい、だじゃれです(笑)

39・ありがとう

《ありがとう。》

サーナターナから1日歩き続け、次の町への街道筋、また1人増えた一行は夜営に入っている。

食事を終えて、片付けも一通り終わって、バレイラはリーシャに髪を結びあげてもらった。

バレイラにお礼を言われたリーシャは目を細めてバレイラの頭を撫でていた。

気持ちよさそうにとろんと目蓋を落としているバレイラに、周りの大人や兄貴分達は、ほんわかと温かい気持ちを心に灯していた。

「こういう平和が1番だねえ。」

「竜真さん、じじむさいよ。」

マグを片手にお茶を飲みながらの感想にシンがかさず突っ込んだ。

「じじむさいって…シン、君ねえ。じゃあ、シンが思ってる冒険者ってどんなもんよ?」

思ってもない切り返しに、シンははてと思う。

シンが初めて冒険者と言う者を意識したのはいつだったろうか?

まだ幼子だったおり、孤児院は単に子ども世話をする場所ではなく、単なる寄せ集めにする場所で、困窮していたあの日。

森の中は危ないと知りながらも、食べられる野草を探していた。

その時現れたのは猫が巨大化したかのような魔物。

幼心にシンは死ぬんだなと自覚した。

しかし、いつまでもその瞬間は来なかった。

シンの前には1人の男が居た。

アツシユの長い髪を一括りにした長身の男はショートソードを手に魔物を退治した。

「坊主、怖い思いをしたな。」

そうやって男はシンの頭を一撫でしてくれたのだった。

「爽やかな笑顔と温かい手と…ホツとする強さの男かな。」

「グフっ…」

シンが思い出を吐露し、柔らかな顔で過去の自分の英雄を思い浮かべていると、ミグがお茶を吹き出し、信じられないとばかりにシンを見る。

「アツシユの長い髪を一括りにした長身の男…ねえ」。

冷やかしの童真の声にミグは視線を明後日に向ける。

「まさか！」

「きつと覚えがあるんだろうねえ。顔が真っ赤かだよ。ミグ。」

シンが目を見開く。

竜真はニヤニヤしている。

「運命です。」

その時、目を輝かせてニヤルマーが感激していた。

「私と竜真様が出会うのも運命なら、ミグさんとシン君が出会うのもまた運命なのです。」

その場を白けた空気が漂う。

今まで黙っていたロイがニヤルマーの背を叩いた。

「ニヤルマーさん。煩惱は閉まっておこうね？」

すっかり寝入っているバレイラ以外は白けた空気の中、そろそろ寝るかあとそれぞれに寝入り場所に移った。

明け方、シンがボーっと日の出を眺めていると、隣に音もなくミグが座る。

「ミグさん…あんときもだけど、他にも色々と死にかけたことあるんだ。でも、こうして今生きてる。それは1番最初に俺を助けてくれたあんたのおかげだ。ありがとう。」

ミグはシンの頭をがしがしと撫で付ける。

シンはその手の暖かさに嬉しく幸せになる。

「シン、お前がここまで生きてこれたのはお前の力だ。…シン生きててくれて、ありがとうな。」

清かな朝はほのかな温もりとともに2人を包み、また旅立つための力となった。

39・ありがとう(後書き)

ニヤルマー…痛すぢる。

そして、ロイ君キツいよ。君…

40・狩りの始まり(前書き)

なんだか設定が増えました…作者もそっなの?とビックリ)
;

40・狩りの始まり

「バレイラ右から、シン左へ真ん中は私が行きます。ロイ君は風の攻撃をお願いします。」

ニアルマーの指示に3人が動く。ロイは詠唱し、ニアルマーが次に出す合図を見計らう。

「ホント楽だね。」

「楽だな。」

「あなたは戦わないの？」

のほほんとひなたぼっこをしている竜真とミグをリーシャが呆れたように見ている。

「「あいつらの修行にならない」「」

「…あなた達、相思相愛よね。」

異口同音にリーシャは目を見張り、弟に仲の良い友人ができたことを微笑ましく思う。

「それほどでも」「

「竜真とは気が合う」

「呆れた。ところで1stとか3rdとかって冒険者ギルドのランクよね。」

「そうだね。」

「具体的な強さってどうなの？」

門外漢であるリーシャにとって冒険者ギルドとは謎の存在だ。

現に目の前の2人以外の4人が必死で戦っているのを余裕で見ているのを疑問に思うのだ。

ミグが答えた。

「あいつらが戦っているのはランクBの魔物だけど、ギルドランクBで1対1で勝てるという意味で、Aなら万が一でも死なないで勝てる。3rd以上なら秒殺できる。」

リーシャは黙って聞いている。

「俺でも1分かからない。竜真なら10秒」

「まさか。5秒だよ。」

本当に秒殺するようだ。

説明を竜真が変わって続ける。

「基本的に3rdなら1人で街を落とせる。2ndで皆。」

「1stなら？」

物騒な話にリーシャは緊張してきた。震える唇で問う。

「国を落とせる。」

あっさりと言い放つ竜真だが言っていることは滅茶苦茶だ。

しかし、それは事実であり、真実だ。

「それだけに数字持ちになるにはかなりの壁がある。数字持ちになつてからの壁は更に厳しい。」

ミグは3rdだが、2ndに上がるには鍛練が足りない。

1stに至っては教養から何からが違う。

竜真の動きは決して粗野ではない。

貴族、王族の家庭教師もできるのだから、優美優雅気品等も条件に上がる。

強さといったら、竜真1人で国を壊滅させれるだろう。

「僕ら数字持ちはある種の兵器でもある。先日、ブジュルムとバナハスの戦争に対してギルドは数字持ちに関わるなど指示を出した。もし、傭兵として数字持ち達が関わるようなら、僕か蒼騎士が出ることになるね。ただし蒼騎士は王子の側面があるから、きつと僕がギルドから使命を受けるだろうね。待っているのは虐殺か調和か…ふふ。もしかすると、大会の期間中、ミグに彼らを任すかもしれない。」

数字持ちは着く街ごとにギルドに行かねばならない。

それは力ある数字持ち達を管理するためでもあるし、難題を減らすことも重要事項だ。

そして、1stとはギルドに冒険者達の管理監督、生殺与奪を任さ

れた狩人でもあった。

「そうならないことを祈ってる。魔物と違って、僕は人を斬るのが大嫌いだ。」

人殺しをしたことがないとは逆立ちしても言えない。

日本に生まれ育ってきた竜真にとって、冒険者になった最初の試練は人殺しだったのだから。

「ミグ、リーシャさん、終わったみたいだよ。」

竜真の口調はあくまで穏やかだったが、その中にある意志の強さを感じてリーシャには目の前の小柄な人物がミグよりも大きな存在に見えた。

「さて、君らの実力は見ることはできた。全員ランクCは間違いない。」

戻ってきた4人が一息ついた所で竜真は切り出した。

「で、君らには全員ランクBが上がってもらったため、今日から2日かけて獲物になってもらう。」

4人はそれぞれにおののく。

獲物とはなんぞや。

その疑問も竜真の次の言葉で判明した。

「ちなみに追い掛けるのは僕だ。僕から死に物狂いで逃げる。もちろん1人でだ。範囲はこの森の中。つまりはランクBまでの魔物がうるちよろするこの森の中、最初の1日で逃げる隠れる。2日目から僕との追い駆けっこだ。」

「竜真…」

竜真の意図に気が付いたのは、ミグだけだった。

ミグが追い駆けっこ経験者だからだが、他の皆は大いに困惑している。

「僕の際は2ndの魔物使いシェナビア相手に10日間逃げることだったかな。」

「俺は2ndの死の教授マイナー相手にやはり10日逃げ切れなかったな。…だがお前相手に2日はつらいだろ。」

「そうでもないよ。相手は4人だし、4人に対してそれなりに時間を裂く気ではあるから。」

周りは話の内容はよく分からないが、逃げなければいけない4人は話を真剣に聞いている。

これはこの2人に付き合うようになってから、学んだことだった。2人の会話にはヒントが隠されている場合が多い。

「確かに今の実力で大会は無理だからな。いつ指令が下るかわからないなら、今やるのは鍛えることだな。」

「さあ、今から2日間だ。頑張つてね。」

ミグとの話が済んだところで、頑張つてねと言われても、納得がない。

耐えかねて、シンが手を挙げた。

「シン、どうしたの？」

「リウマさん、意味が分かりません。」

「短期間に強くなるための訓練だよ。本来なら数字持ち上がるためのテストで、2ndから10日間逃げ切るものなんだけど、相手は僕だし、2日逃げ切れれば上出来でしょ。」

「なぜ3rdテストを我々が？」

ニヤルマーは竜真と離れるのが嫌なため悲しげだ。

「まずBランクの魔物を1人で倒せるようになること、食料や水の配分を見極めること。気配を消す技術を身につけること等様々な技能をマスターしてもらうためだよ。君達は正式にはEランクとDランクだからね。Bランクの試合は甘くない。」

「お前らが竜真とともに旅を続けるなら必須だ。なんせ1stの仕事は国の存亡や世界の存亡に関わるものも多いからな。早く数字持ちになってやれよ。」

竜真のためと書いてニヤルマーの生き甲斐。

ニヤルマーは自分の荷物を持って森に消えた。

「ミグ、ニアルマーの操作、上手くなったね。」

ミグを見上げ竜真は笑う。

「ニアルマーさん、あれでいいの？」

「いいんじゃないですか？幸せそうだし。シンさん、行きましょう。」

《頑張つて逃げます。》

三者三様に荷物を持ち、森に消えたのだった。その様子を見てから、竜真はすくとんと座る。

「リーシャさん。2日間退屈かもしれないけど、よろしくね。」

「待つのは私の仕事だわ。それにしても、リウマさんは綺麗ね。覆面していても物腰、立ち振舞い、姿勢、マナー、どれをとつても美しいと分かってしまう。ミグは丁寧止まりでまだまだ洗練しきっていないわ。」

竜真を見ながらリーシャは感心すると、ミグはため息をついた。

「1stと3rdの差だ。2ndのテスト迄には竜真を見て勉強するつもりだ。2ndになれば王族の家庭教師も可能になるからな。」

「ふん。」

「竜真、笑うな。」

ミグの意図に気が付いた竜真は覆面の中で笑うが、ミグはそれに気が付いて耳を赤くして怒る。
リーシャは不思議そうに2人を見ていた。

40・狩りの始まり（後書き）

ミグとリーシャをくつつけたい真咲です。
リーシャをその気にさせるのは難しそう。
ミグ頑張れ。

次回は追いかけて編

41・盲信的崇拜溺愛症？

シンは目の前に居る魔物を前にどうしたものと固まる。昨日の昼間、同じものを4人で倒したが、今は1人きり。しかも、もう少しで竜真が追い掛けてくる時間になる。すでに魔物には気が付かれてしまっているので、戦うか逃げるかだ。深呼吸を1回。剣を抜いて、間合いをとる。

「1人で倒せるか。だめなら逃げる。」

ランクBのブルハスは体長2メートルの黒い牡牛のような見た目で、角はもちろん肉食獣の牙、尾の蛇がやっかいな魔物である。そして、ブルハスはBランクアップの基準とされる魔物だった。

「弱点さえ知っていれば、倒せない敵じゃないんだ。」

間合いを詰めて、左側面から角の付け根を狙う。

「ふっ」

しかし、それは尾の蛇に阻まれ、牙が追撃に来る。

バックステップで避けると、まず、攻撃対象を尾の蛇に替えて走りだす。

「せいっ」

その一撃は蛇の頭を切り取った。

魔物から痛みを呪うような雄叫びが聞こえる。

今度こそと、右後ろから角の付け根を狙った。

倒れた魔物を尻目にシンはそつと森の木の影に隠れ、水を一口含むと辺りの気配を気にした。

「…」

ロイは木の影に隠れ、辺りを探る。

1日経ったから竜真は誰かを追うはずとロイはひたすら息を殺していた。

ブルハスと一度は遭遇したが、気が付かれずに済んだので、戦いは免れた。

「やあ、ロイ。」

「っ！」

「みいつけた。」

竜真が声をかけた瞬間にロイは草の中に体を踊らせ、全速力で走り出す。

時折、周囲でカサツとたつ音が追跡者の存在を忘れさせない。というよりも竜真が故意に音を出し、ロイを追っている。

ロイにとっては体感の数秒は数分、数分は数時間にも変わっていた。

もう、足がもつれるとばかりにロイが膝を付くと周囲には全く気配がなくなっていた。

気配を感じようとするが、周りには誰もいないようだった。

「なんで嬉しそうなんだ。：訂正、なんて嬉しそうなんだ。」

ロイを追い掛けている途中で、ニアルマーを見かけたので、竜真はニアルマーに標的を変えて、ニアルマーを見ていたのだが、次第にニアルマーが幸福しあわせそうに興奮し悦に入っていくのが遠目にも分かる。竜真に見つけられる、追われる、捕まると、想定するだけでこんなにも嬉しいなんてとニアルマーは本気で喜んでいる。

「…ニアルマーは時間ギリギリまで放置の方向でいこう。うん。」

竜真は鳥肌を発て、そっとその場から居なくなった。

バレイラは木の上、葉の中に居た。

けて低い樹と言うわけではない、地上から5メートル、葉が細長く針のように見えることから通称《針の木》と呼ばれている木の頂

上部に近いところで居眠りしている。

「……………また危ないところで……………」
竜真がバレイラに気が付いたのは、バレイラの黒板が地面に落ちていたからだった。

まさかと見上げれば、案の定葉の中にちらちらと見える服。
登ってみれば、すやすやと気持ちよさそうに寝ていた。

「寝ちゃあかんでしょ…」

起こすのも忍びなくなった竜真は仕方なしに方向転換を決めた。
それはロイが逃げた方角で、シンかロイを見つけ次第、バレイラ、ニヤルマーに捕まえる順番をしたのだった。

竜真が指定した時間を間近にミグ、リーシャの下にはシン、ロイ、バレイラが居た。

「6体目のブルハスを倒したところで竜真さんに見つかったら、逃げられなかった…出過ぎだろブルハス…」

シンはやたらとブルハス遭遇率が高く、なおかつ、逃げ出せない遭遇パターンでブルハスと戦いまくっていたところで竜真に見つかり捕まった。

「ブルハスとは1回戦ったよ。竜真さんと真面目に追い駆けつこしたの僕だけじゃないかな。」

ロイはどんなに気配を消しても、「みいつけた。」と、追い掛けてくる竜真から結局逃げられなかった。

《よく寝た。》

バレイラは熟睡していて、気が付いたら夜営地に戻ってきていた。

「竜真さんから伝言だよ。バレイラ。『木の上で眠るのはやめてね。』だって。」

ロイが言えば、周り全員が呆れている。

「バレイラは大物になるな。」

ミグは穏やかに笑った。

パチパチと火を囲み、やわらかな空気が辺りを包む。

「ニアルマーさんが戻ってこないけど、ニアルマーさんて、優秀なの?。」

「多分」

「そうではなくて」

《竜真さんとしては》

「捕まえたくないんだろう。」

リーシャの質問に全員でリレー形式に答えていく。

その際の皆の顔は生暖かく何かを思い浮かべるようだったのは言うまでもない。

リーシャは首をかしげ、困惑した。

「付いてくるな。」

「なぜ私だけ捕まえてくださらないのですか。」

最後のニアルマーの様子を見ながら、このままに放置しておきたい気分になった竜真が珍しく音を立ててニアルマーに気配を伝えてしまったその時、竜真とニアルマーの視線が交差した。

次の瞬間、竜真が反転していきなり逃げた。

ニアルマーは、ニアルマーで反射的に竜真を追い駆ける。

気が付けば立場が逆転した状態で、ニアルマーと竜真の追い駆けっこが始まったのだった。

「だああああ、もう試験は終わり。ね？終わりだから」

先に居た5人が寛いでいると夜営地に2人は攻守交替で戻ってきた。

「せつかくの竜真様に追い駆けられるという貴重かつ喜ばしい出来事でしたのに……」

さめざめと泣くニヤルマーに竜真が怯える。

「ニヤルマーさん」

「なんででしょう？ ロイ君。」

「お大事に」

ロイはニヤルマー肩をポンと叩くと、爽やかな笑顔で言った。まるで病気のような言い方に、ニヤルマーはロイをじっと見る。その場合、竜真盲信的崇拜溺愛症とでも名付けたらいいのだろうか？と数名は首をかしげた。

41・盲信的崇拜溺愛症？（後書き）

ニヤルマー…こんな人じゃなかったはずなのに…

42・愛の鞭

街道をひたすら歩いている一行がいた。

男5人女2人と言う、比較的大所帯の冒険者パーティーに見えるが、うち3人が子どもで、また女性のうち1人は危険と無縁の普通の女性であるようだ。

パーティーとしては、かなりいびつな彼らだが、実力は相当だと思われた。

気配が1人しかないのだ。

ただし、気配を常に隠して行動するのは怪しいにも程があり、同じく街道を歩く冒険者らは首をかしげている。

「はい、気配出しているよ。」

小柄な覆面の合図で場に人が急に増えたように気配が増える。

「シン3回、ロイ1回、バレイラは失敗なし、ニアルマー2回。ミグは気になるところあった？」

1度一行を止めて覆面が指摘してから、別の男へと振る。覆面に話を振られた男は首をかしげた。

「…ニアルマーは3回だ。さりげなく誤魔化していた。」

「じゃあ、シンとニアルマーは腕立て伏せ200回、腹筋を…100回。よーい始め。」

その場で少年1人と男が1人、覆面の男の指示で体を動かし始める。腕立て伏せをしている少年がシンで、男がニアルマー。

覆面の男は三島竜真と言い、竜真ことリウマが意見を聞いた男をミグと言う。

ペナルティを受けていない少年はロイ、少女はバレイラ。そして、女性がミグの姉でリーシャと言う。

一行は今、リユカ帝国の帝都で行われる冒険者ギルドの試合に向けて旅をしている途中だった。

ただし、試合に出れるのは一行うちシン、ロイ、バレイラ、ニャルマーだけである。

リーシャは一般人で、ミグと竜真は数字持ちだと言つのが出れない理由だった。

「97、98、99、100。竜真さん終わったよ。」

数えていたロイがミグと相談していた竜真に呼び掛けると、竜真は2人の下へ帰ってくるなりシンとニャルマーに失敗の反省点を指摘した。

それを終えて、竜真は時計を見た。

「今から《走る》からね。ミグ、リーシャさんを抱えて。遅れたら、さっきの通り、ナマユナの街で合流ね。」

竜真の走るは一般人のそれとは違う。

ミグはリーシャを抱えようとした。

「走るくらいなら、抱えてくれなくても大丈夫よ。」

「リーシャ、竜真が走ると言ったら、最低でも30キロを1時間ペースだ。1人で走るなら1時間に60キロは出るだろう。俺でもキツイ。」

リーシャはその言葉に顔を青くした。

「おとなしく抱えられてくれ。 竜真、リーシャの荷物ぐらい持てよ。」

「了解。」

竜真とミグの支度が終わると、竜真は周りを見渡した。

「行くよ。3、2、1、走れ。」

シン、ロイ、バレイラ、ニヤルマーが走りだし、ワンテンポ置いてから竜真が走り出す。

竜真の後に付くようにミグが駆け出す。

リーシャはあまりの早さにミグに固く抱きついた。

「…」

声も出せない程にシン、ロイ、バレイラ、ニヤルマーの4人は疲弊していた。

シンとロイは文字通り大の字になり地面に倒れ、バレイラはべたりと地面に座り込む。ニヤルマーは壁を支えにすることで辛うじて立っていた。

4人の共通点は息が荒く、肩でようやく息が出来ている風体であること。

「竜真、あの殺気は怖すぎだろ。」

竜真を後ろから追っていたミグだったが、竜真が4人に向けて放っていた殺気は、4人を急使の早馬のように走らせていた。

「さて、今からかくれんぼをしようか。君らが隠れて僕が鬼ね。」

「そ…ま…」

「いく…も…」

シンとニヤルマーが腕を竜真に向かい伸ばして首を横に振る。

「そんな、待って…と、いくらなんでももう少し休ませて…とかかな？ でもね、君らがそんな状態だからやるんだよ。そうだなあ。後、8分で正午の鐘が鳴るから、それまでに隠れるんだよ。僕はギルドに行ってくる。ミグとリーシャさんは宿を押さえてくれる？」

軽く息が上がっているだけのミグに竜真は走りだした。

リーシャはミグに驚きの視線を送る。

「ミグ…凄いのね。」

「竜真に付き合っただけの経験が人より多いからな。多分、2ndでもここまでの居ないと思う。…ところで、お前ら隠れなくていいのか？ 後5分で始まるぞ。」

リーシャに向かって微笑みながら話していたのを、地面や壁と仲良くしている4人に意地悪い笑顔を向けて話し掛ける。

4人はのそりのそりと立ち上がり、ゾンビの様にふらふらと街中に消えていく。それを見ながらミグはくすりと笑い、今宵の宿を決めるべくリーシャに行こうと勧める。

「なんで、かくれんぼなの？」

「敵に襲われた後、あんな風にへばった後に再び敵に教われないようにするには、気配を消し、見つからないのが1番だから、あの状態にさせて訓練するんだ。それをこうして教えてもらえるのは幸せだぞ。大抵は実地で本当にヤバイ時に気が付き、できなければ死ぬこともある。所謂、生死の別れ目の技術だからな。」

ミグは苦笑して続ける。

「竜真は一人前以上になるように彼らを育てるつもりなんだ。」

全員が数字持ちになるんだろうかと、ミグは近い未来を想像したのだった。

42・愛の鞭（後書き）

どうも前話からスパルタ強化になっているようです。
さて、いつまでスパルタなのかは竜真さん次第。

おおよその流れはあるんですよ。

大きな流れるなヤツは…ただし、その流れのうちの5分の1ぐらい
しか進んでません…スローペース過ぎます。

43・縁は異なるもの

「…」

竜真が目を覚ました時、視界に入ったのは複数人の下卑な笑いだった。

本日も絶好なかくれんぼ日和と竜真はミグとリーシャを除いた4人に隠れさせていた。そして、ミグとリーシャに昼御飯を頼み、竜真は池の辺で昼寝していたのだが、どうも熟睡し過ぎたらしい。

「覆面なんかしてお嬢ちゃんはどうな顔をしているんだい？」

竜真はそう言っただけで覆面に手を伸ばして来た男の好きなようにさせてみる。

想像以上の反応だった。

1人は拝み、1人は恐怖を浮かべ、1人はまるで媚薬を打たれたように興奮しとバラバラの様子に竜真は呆れた。

「私をどうするつもりですか？」

僕は女神の仮面を被る。と、念じてからイメージで女神と言う威厳と落ち着きと女性の温かみある声を出してみると2人が土下座した。

女神信仰があるのはどこだっけ？

そんなことを考えていると、1人の男が興奮しきって、ナニをこれでもかと立たせ、血走った目で近寄ってきた。

あんときの馬鹿なみか…

あんときの馬鹿、もといリーシャを身請けしようとし、竜真に性格矯正された男を思い出し、竜真は…悲鳴をあげてみた。

すると、土下座していた男達が慌てて竜真の傍に近寄った男を取り押さえる。

しかし、暴れる男に2人は吹っ飛ばされた。

「そろそろ、かくれんぼの時間だから、相手してられないや。」

次の瞬間、竜真の左拳が男の腹部にめり込む。

右の拳が顎にヒットし、だめ押しに回し蹴りが側頭部にあたり、男は森の巨木にめり込む形になった。

「君らは盗賊？」

何もなかったかのように振り返った竜真は艶やかさを念頭におき声音を操ると、戦慄に固まる2人の男に尋ねた。

「お、俺達はビダル山賊団…」

「そう…かくれんぼにはちょっと邪魔だね。」

次の瞬間、2人は地面に崩れ落ちていた。

手刀で気絶させたようだった。

「力と技と団結が合図だね。」

全くその場の状況と噛み合わないことを呟いた竜真はまずはシンを

探すために辺りの気配を探ったのだった。

「皆、確実に進歩してる。」

夕食を取りながら、竜真は満足そうに笑っていた。

「竜真相手にあれだけ時間が稼げるならAランクまでなら軽く騙せるな。」

ミグも嬉しそうに笑っている。

柔らかな雰囲気の流れているようだが、竜真とミグ、気が付いていないリーシャ以外は険しい顔をしている。

「さて、問題です。何人いるでしょうか？」

リーシャはきょとんとしているが、その言葉で竜真とミグ、リーシャ以外は臨戦対戦に入っている。

「ビダル山賊団の皆さんようこそ。」

竜真の声に周囲からの気配が変わる。

そして、1人の男が出てきた。

男は右目を黒い眼帯で覆い、鋼色の洗いざらしな髪が野性的で雄だと主張している色男だった。

「納得だ。相手は1stのリウマだったんだな。」

皮肉な笑みがまた似合う。

男は一行の近くまで来ると、その場にあぐらをかく。

「俺はビダル山賊団のミックだ。副頭目をしている。部下が手酷くやられたようだから、様子を見に来たんだが…」

やられるのが当たり前だなとミックは爽やかに笑う。

ミックが笑っていると、森の中から数人の男がやってきた。

「副頭目、何笑ってるんすか。」

「いい女も居るし、やっちまいましょうよ。」

噓し立て、リーシャを値踏みする男達に、ミックは一喝した。

「やめておけ。…ただし、死にたいなら勝手にしろ。俺はこの方に恩がある上に実力も知っている。お前ら全員が瞬殺されるのが落ちだ。」

一同が反発するか引くかの見極めをしていると竜真が首をかしげた。

「ミック…前にあつたか?…」

「まあ、あなたにや何でもないことさ。そうだな、シュミカでバムズの時と言えばわかるか?」

竜真の頭を過つた光景はバムズと戦う4人の男女。

「鋼色の髪の男がそう言えば居たな。あれ？確かパーティー組んでただろ？」

「ああ、あの後、アナって女剣士とちよつとあつてな。俺だけ放り出された訳だ。でもって、ここまで来たのはいいものの、結局は山賊にスカウトされて、気が付きゃ副頭目よ。」

悲哀と不真面目の境目の表情で答えるミックに竜真はニヤニヤ笑う。

「どんなことがあつたにせよ、その眼帯、いかしてるよ。男臭い色気が5割増だ。」

竜真の冗談にミックが豪快に笑いだした。

「なあ、俺もあんたに付いていつていいか？」

「副頭目」

男達はぎよつとして、

「わりいな。やっぱりガラじゃないんだよ。ミック、中々いい人材でしたのに…残念です。」

「頭目！」

場違いな涼やかな声に一行が目を向ければ、金髪の蠱惑的な美女がそこに立っていた。

山賊の頭にしては些か美女過ぎる。

「ロアン、わりいな。」

「ミック、気にするな。」

ミックの肩を山賊の頭目ロアンがバシッと叩く。

「ロアン…ロアン…ロアンナ・ビダル…ロアンナ・ビディ」

それまで傍観していたミグが、山賊の頭目を見、名前を聞いた時から反応していた。

ロアンが驚いているとロアンの脇から男が出てきてミグに刃を向けた。

「…ジグ、よせ。皆、今日はしまいだ。ねぐらに帰れ。」

ロアンが号令をかけると、山賊の一団はその気配を消した。場に残ったのはロアン、ミック、ジグと言う男と、竜真達一行だった。

「やっぱりか。ロアンナ・ビディアル。現ビディアル公爵の異母妹じゃないか？前ビディアル公爵の恋人ハンナ様に良く似ている。」

リユカ帝国の良き父と言われていた前ビディアル公爵には冷めた関係の妻と温かい絆を作った恋人が居た。

しかし、一昨年に前ビディアル公爵が他界してからハンナとその娘ロアンナの行方が不明になっていたのだった。

母の手前、公に捜せなかった現ビディアル公爵は前公爵夫人であったソフィアが去年に亡くなってから、ハンナとロアンナを捜すように命じていた。

現公爵にとつては美貌を鼻に掛け、プライドに固執する産みの母よりも温かく抱き締めてくれたハンナを母と思っていたのだった。

ミグも城を離れた時には捜すようにとお願いされていた。

「アデイルはハンナ様とロアンナ様を懸命に捜している。」

「3rdのミグ様でしたか。失礼しました。前公爵デイビッド様の護衛をしておりました。ジグドと申します。以前1度だけお会いしました。」

ジグモといジグドは剣を引き、ミグに謝罪した。

副頭目は竜真と、頭目はミグと妙に縁ある山賊とかかわり合いになった一行だった。

43・縁は異なもの(後書き)

ミックは2話目に出てきたあの人ですよ。

44・選択肢

ロアンナは前公爵が付けてくれた2人の騎士と母ハンナと共に前公爵が死ぬ前に帝都から逃げ出したのだが、途中、無理がたたってハンナが他界した。

他界した場所から程遠くない、この森の中で隠れ暮らしていたところ、いつの間にもやら30人からなる山賊団になったのだと言う。

「私はここでの山賊稼業が合っている。ここで暮らしていくよ。」

「ロアンナ様」

ジグドと話の途中で合流したもう1人の護衛騎士ザナンが悲鳴染みた非難の声を上げる。

前公爵が生きていた時には、立場上愛人の娘と言えど、上流貴族としての暮らしをしていたロアンナに、畑仕事をさせたり、狩りをさせたり、商人に通行料と脅してみたりと割と真面目ながらも山賊生活させていることでさえジグドとザナンには耐えられないのだ。

「私がここにいなければ、誰が奴らの面倒をみる。今なら畑仕事をさせたり、狩りをさせたりで本当の山賊らしきことはあまりさせないでいられる。だが、私が居なくなれば、この森は旅人の殺戮現場になりかねない。無責任なことではできん。」

なかなか真面目な女傑であるらしいロアンナの説得できないものとジグドとザナンは頭を掻きまわった。

ミックがジグドとザナンを見るに見兼ねて口を挟んだ。

「じゃあ、あいつらを雇ったらどうだ？本当に犯罪者なのはリウマ

さんにぶちのめされたやつぐらいだ。後は俺みたいな冒険者の行き倒れやらをあんたが保護してくれたのが始まりだ。あんたへの恩と敬意は並じゃないぜ？雇ったとしたら責任と言う意味は取れるだろ。」

「お前らを雇うような金銭的余裕なんぞない。」

「…」

ミックの提案にジグドとザナンが首を縦に降っているとロアンナはぶったぎる。

3人が提案し、ロアンナが却下するそんなやり取りが続いていると、眠気にかけてか竜真とミグ以外の5人は夢の世界へ旅立った。

「はい。ちょっといいかな？」

竜真がどう話に入ろうかと、とりあえず手を挙げてみる。

その場の起きている全員の視線を竜真は集めた。

「君らが話している内容をちゃんと彼らも交えて話した方がいい。」

竜真の視線はビダル山賊団幹部を通り越し、木々の中を見ている。

ミックは出てこいと声をかけた。

申し訳なさそうに出てくる男達にロアンナは深い深いため息をついたのだった。

「頭…」

「…………お前ら、山賊辞めて、私の騎士になるか？自由になるか？」

情けない声で自分を呼ぶ男達に僅かな沈黙の後、ロアンナは選択肢を投げつけた。

ロアンナはこの森を出ることを決めたようだが、先程の面倒を見るだけの金はないと言ったばかりなので、男達は首をかしげた。

「お前らの大半が冒険者だ。元奴隷も居るが、この1年で体力も気力も学問の力もかなり基礎ができていると思う。それで、もし私と来るものが居るなら組織的な冒険者となるのもありかなと思ったのだがどうだ？ついてこない者は自由にしてくれ。」

言うだけ言うと、ロアンナはアジトに向けて歩きだした。

その場に残された男達はどうしたものかと一同うなだれている。

竜真はそんな彼らに静かに語り掛けた。

「好きならついてく、嫌なら離れる。途中着いていけないようになったら暇を請う。行くか行かないかは個人裁量。それだけの話じゃないか？彼女は選択した。いつまでも、こうしていられないと気が付いているからだ。君らはどうする？人間とは“もしも”を考えながら選択して生きていくものだよ。もしも彼女がここにいる選択をしたら？年若い彼女がそのまま森のなかで野郎に囲まれて過ごすのが健全だと思うか？人間、良くも悪くも選択をし続けていかなければならない。常に岐路が道に置かれているんだ。あの時こうしておけば良かった、ああしておけば良かった、後悔してもいいが、その時に後悔に捉われて、最善への道に進めない間違いを犯してはならない。こんなことは人に言われるまでもないことだけど、言ってもらわないと気付けないこともある。僕らは冒険者だ。冒険者だからこそ、1つ1つの選択が大事に至る。元奴隷と言うなら、彼女の保護下にいることをお薦めするよ。」

竜真の言葉をじつと聞き入っていた男達は考え込んでいた。しばらくはそれを見ていた竜真だが、苦笑して、また男に声をかけた。

「アジトに戻って、ゆっくり一晩考えなよ。こんなにはたくさん人が居ると、彼らが深く眠れない。」

仲間を気遣う竜真にミックが代表して謝罪と感謝を述べると男達は去っていったのだった。

竜真はそれを見ながら、ふうつと一息ついて、気配が無くなるのを確認してから、その場に横になった。

45・結局のところ

「で、話は決まったの？」

竜真達が朝御飯を食べていると、ミックがやってきた。

「決まったんだが、1名だけ問題児がいるんだ。」

「ああ、アレね。」

アレとはもちろん竜真に襲い掛かった命知らずのことである。

「で、つい最近、うちに来た奴が少し前にサーナターナで1stの
リウマが誰だかの性格矯正をしたって話をしたんだ。」

「僕にあいつの性格矯正をしると？」

2人の間に妙な緊張感が湧いてくる。

1人事情を聞かされていたミグは明後日向き、リーシャは首をか
しげ、他の4人は興味津々にこちらを見ていた。

「ダメか？あいつを警らや騎士団に出すと、こっちもやりにくくな
っちゃう。かと言って、今のままだとなあ。放置も危険だし、連れ
ていくのも危険なんだ。」

「…確かにギルドにパーティー登録するのに、犯罪者が居ると不可
出されるからね。いいよ。連れて来なよ。」

竜真はいつもの軽い口調で言い、ミックはホッとした顔になった。

連れて来られた男は挙動不審な状態で竜真の前に座らされた。ミツクが傍らに立ち見張っていると竜真に危険だからミグらと居ろと言われ、ミツクはしぶしぶながら一行の側に寄る。

「さあ、始めようか。」

爽やかに優しく諭す声が男にとっての地獄の始まりだった。

竜真が覆面を外し、男に何かを呟いているうちに、男はガタガタと震えだし、恐怖に身を固めて涙を流していた。

一行やミツクからだと竜真の背中と男の青ざめた顔しか見えないため、何が起きているのか分からないが、男が今にも気絶しそうなほどに怯えているのは確かだった。

「おわったよ」。彼、これからは真面目に暮らしていくってえ。それと、皆が耕してきた田畑は彼が引き継ぐそうだから労ってやってね。」

竜真は振り替えると、ミツクに向かって言ったのだが、初めて竜真

の顔を見たミツクは茫然自失に陥り、固まっている。

「……………ああ！ゴメン、ゴメン。」

世にも神々しすぎ、美しすぎる美少女が微笑んでいるのを見て動かなくなったミツクをミグが慌てて竜真に背を向けさせ、その隙に竜真が覆面を取り付ける。

他にもリーシャは息を呑み硬直していたし、ニアルマーは天に昇ってしまいそうな顔をしていた。

流石に子ども3人も驚いていたが、ニアルマーをやバク感じたのか、正気に戻すために必死になっていた。

「顔面凶器もここに極めり…かな？」

竜真は諦め半分に少し落ち込んだのだった。

竜真達が支度を整えていると、ビダル山賊団が現れた。

「ミグ殿、兄上によりしくお伝えください。それではいずれまた。」

「ロアンナ様、お先に帝都でお待ちします。」

ミグとの話を終えた竜真は金貨を20枚ロアンナに渡す。

ロアンナは驚いた顔で竜真を見つめる。

「大した金額じゃないけど、皆で町まで行って稼ぐだけのクエストをもって言うとかなりかかる。だから、少しだけ新たな冒険者にカンパだよ。それと、これ。」

ロアンナに手紙を差し出す。

ロアンナは手紙をじっと見つめてから竜真に視線を戻した。

「紹介状だから、登録する時にギルドマスターに渡してね。きっと融通をきかせてくれるはず。」

「重ね重ね、お世話になりました。」

「気にしないでいいよ。新進の冒険者育成も僕の仕事だから。」

ロアンナの礼に竜真は答えてミックに向かう。

「ミック、数字持ちへの昇格審査を受ける準備が整ったら、審査前に僕へ連絡してきて。」

「融通効かせてくれるのか？」

「いやいや、審査を僕がするから」

竜真の楽しそうな声にリーシャを除く5人がミックを哀れそうに見る。

「なっなんだ？」

ビビるミックの肩をまず何も言わずにミグが2度叩いて、森の出口に向け歩きだす。

シン、バレイラも同様に歩きだし、ニヤルマーは一言、「頑張ってください。」と告げ、歩きだした。

「ミックさん、知ってる？数字持ちへの昇格審査は普通2ndがやるんだよ。」

「え？」

「更に目が肥えた1stが審査するって大変だね。」

普通の美少年であるロイがかすかに笑いながら去っていくのを呆然と見ていると元凶がミックの肩を叩いた。

「早く実力上げて来なよ？ふふつ、楽しみだなあ。」

去りゆく偉大な1stをミックは泣き笑いに見送った。

ミックは竜真一行に加わることはできず、さらにはロアンナを助けてやれと言われてしまったがために、結局はロアンナ傭兵団に加わったのだった。

のちにミックが受けた数字持ちへの昇格審査は竜真により2回程落とされ3回目で合格。

2ndへの昇格は史上3人目の早さで上がり、2ndの赤い彗星ミックとして活躍したのだった。

「さあ、思ったより時間がかかったから次の街まで走るよ。」

その言葉に反射してシン、ロイ、バレイラ、ニヤルマーが疾走し、ミグはリーシャを抱えた。竜真はそんな様子を見ながら、後ろの森を振り返った。

「新たな冒険者に幸あれ。」

咳いてから先に走りだした一行を見る。

「次は何があることやら。」

そんな咳きは風に乗ってあたりに散らばったのだった。

45・結局のところ(後書き)

そう…ミックは3倍速い。

46・芸術家（前書き）

また変な人が出てきた…

46 芸術家

美しい…

魔なのか…

森の中の清らかな泉で身体を清める美しき人。

「…いつまで舐めるように人のこと見てるの？」

息を潜めていたのに、こちらを刺し殺すような鋭い眼差しで見ている。

ドキツとしていると、その人物が近づいてきた。

どうやら男らしい。

顔から見ると少女、しかも極上の美少女なのだが…

「ねえ？お金取るよ？」

均整の取れた細身の上半身に薄く肌のラインが出る衣を纏い、かの人は残酷に美しく微笑んだ。

「リウマ様、そちらは？」

ニヤルマーが早速食い付いたのは、竜真が引きずってきた1人の男だった。

「覗き。全く失礼しちゃうよね。僕の顔見て失神するなんてさ。」

竜真が水浴びをしていると気配を押し殺した視線を感じた。視線を辿った所に居たのが竜真が引きずってきた男だった。

「竜真…」

「リウマさん…」

「…とうとう顔で人殺しを…」

「ミグ！シン！」

リーシャとロイがクスクス笑っていて、バレイラは何故か嘆いているニアルマーを慰めている。

「ニアルマー、何に嘆いているんだ。その前に鼻血なんとかしなよ。」

そう言つて、竜真は鞆から覆面を取り出した。

やがて起きた男は複数に囲まれていることに気が付いた。

「起きましたね？」

柔らかい微笑みを持つ水色の髪的美少年が男が目覚めますのを確認すると、複数の人物の視線に男は貫かれた。

それなりに整った顔の人達に囲まれて男はぎよっとした。そして次の瞬間、男はロイの手を握り締め、こう言った。

「俺の女神はどこに？」と…
さめざめ泣きながら…

帰ってきたのは一行の爆笑だった。

「竜真…洒落にならん。」

「ミグ、笑い事じゃないよ。ニヤルマー、泣くな。シン、ロイ、バレイラ、リーシャさんも笑い事じゃありません。切実なんだって」

覆面の人物が頭を抱えた。

「あなたが女神様ですか？」

「男だから女神じゃないよ。覗いてたんだから分かるでしょ？」

「俺、僕、私、彫刻を生業にしているザドニデスと申しま「嫌です。モデルはしません。」

「そこをなんとか」

途中まで一行が見守る中、ザドニデスと竜真のやりとりは朝まで続いたのだった。

覆面を外せば、なだらかな背中に黒い髪が舞う。

人外な程の美しい顔が現れた。

均整の取れた肉体に傷らしい傷はなく、白い肌がまた美しい。物憂げな表情はどこか投げやりだが、それがまた美しかった。

「3時間だ。3時間だけ時間をあげる。僕を見て覚える。皆は先に行ってて。」

そう言つて竜真が上半身を脱いだところ、ニヤルマーが首を振つた。

「ニヤルマー、鼻血の出し過ぎで死ぬぞ?」

「本望です。」

本当に残念なイケメンで居るんだよね。

竜真と離れたがらないニヤルマーの腹に1発食らわせ気絶させるとミグに預けた。

「先に行つて。これ以上予定を後らせたくない。」

「ああ、わかつた。」

ミグに促され、竜真を残して一行は歩を進めたのだった。

「はい、3時間だ。泣くな。え?お礼?...そうだなあ、ロベルのシユミカにある夜更けのエリアにリウマ宛てに出来上がった作品を1つ送ること。」

時間切れとばかりに身支度を整えてしまった竜真をザドニデスは泣きながら引き止めようとしたが、竜真にびしゃりと叱られる。それでも自分の目の前にある竜真の顔を網膜に焼き付けんばかりに見ているザドニデスは時間を稼ごうと必死だ。

「僕のコレクターもそこそこ居るから、売り上げの1割も一緒に送ること。」

竜真の言うことならば、何でも聞くとばかりに顔を振る男を苦笑しながら袖にして竜真は先に進んだ一行を追い掛けた。

もちろんザドニデスはその別れに号泣したのは言うまでもない。のちにザドニデスは名匠として世界に名を上げたのだった。

47・愛し愛され

「いいの、いいの。私にできることなんてないんだから、私にもさせて？ね？」

休憩になり、リーシャが鍋を持ち小川に水を汲みに行こうとするのをミグが止めたのだが、リーシャは行ってしまった。

「ミグ。」

「ミグさん。」

「いつ告白するの？」

すかさず竜真とロイが近づいてミグに突っ込むと、シンも近寄ってきた。

「ミグさんを苛めちゃだめですって。ミグさんは完全に弟なんですから、リーシャさんの目から大量の鱗を削ぎ落とさないと男に見てもらえないんだから。」

このパーティーの良心となりつつあるシンがミグを慰めたようで袈裟切りに切り付けている。

「シン、分かってはいるんだ。」

ミグは落ち込んだ。

「まあ、こどもがいる所帯じゃあ、大人な迫り方がしにくいのは分かっていますし、リウマさんならともかく、ミグさんがそついう付き

合いに慣れていなさそうなのも分かってますから。」

慰めているのか、切り付けているのか分からないシンのコメントに竜真が追い打ちをかける。

「僕はともかくってシンねえ。でも訂正しておく、ミグは毎回毎回が本気でお付き合いする人だから、…それなりにお付き合いしてきてるんだけど、遊びの幅がない分お付き合い回数が少ないだけだから。ただ僕が知る限り2人には振られてるよ。」

「そうなんすか？やっぱ女の子より家事が巧すぎるのは駄目なんでしょう？それとも懐が広すぎて逃げられちゃうんでしょうか？」

「それ以上苛めないでくれないか？」

ミグが哀しげに巨体を小さくして落ち込んでいる。

『リーシャさん曰く、ミグさんは最高のオムコさんタイプだって』

バレイラの慰めも嬉しくなかった。

ニヤルマーとロイが生暖かにミグの背中を見ていると、リーシャが戻ってきた。

「あら、ミグどうしたの？」

「いや、なんでもない。鍋もらうよ。」

「ん、ありがとう。」

リーシャが華やかに笑えば、ミグは何も言えずにリーシャを見つめ

てしまう。

そんな自分の背中に視線を感じて呟いた。

「……………生暖かく見守るのをやめてくれ。」

「ん？どうしたの？あつそうだ。」

ミグの呟きはリーシャに聞こえなかったようでキョトンとされてしまったが、リーシャがポケットから出したものに今度はミグがキョトンとした。

「うふ。見つけたの。」

「青硝石の固まりだな。握りこぶしサイズは中々ない。加工してもいいか？」

「いいわよ。そうねえ。シンとロイとバレイラにお揃いのアクセサリーなんか欲しいなあ。」

思わぬところで自分達の名前が出て3人がリーシャを困んだ。

ミグは3人の顔を見回して少し考えた後、自分の鞆から薄い青の布と麻紐、針や鋏、トンカチを取出し、その場で何かを作り始めた。

「基本デザインは一緒だけど、個性に応じて変えてあるのね。シンはチョーカーで、ロイはベルト、バレイラは髪留め…凄いわ。ミグ天才！」

リーシャに誉められてほんわかと口元を緩めるミグにリーシャを除く全員がにやつく。

「リーシャさん。」

「何？リウマ君。」

「ミグってオムコさんにしたいタイプ？」

「…そうね。長身で力持ち、ギルドでも実力者でインテリ、帝都、城でも身分ある仕事に就いていて、更に家事一切が最上級レベルで顔も悪くない…女としては高物件よね。ミグ、あんた結婚する気なの？父さんと母さんがうまくいかなかったからって、あんたがうまくいかないとは限らないんだから結婚したらいいのに。」

本気の他人事でミグを心配しているリーシャにミグの表情が一瞬の陰りを見せた。

それに気が付いたのは竜真ただ1人。後は発言にあゝあ…と言う感想を持つ。

「じゃあさ、リーシャさんがもらってあげたら？」

「え？」

予想外の竜真の言葉にリーシャが驚いている。次の瞬間、リーシャの頬が赤く染まった。これには全員がおっ？となつて、目を見張る。

「ミグ、リーシャさんまんざらじゃないみたいだよ。さて、皆の衆、

僕らはちよいとかくれんぼしようじゃないか。」

ミグにニヤついた後のセリフにリーシャがギョツとするもミグもリーシャも止める間もなく一瞬で2人の周りから誰も居なくなつた。ミグが遠い目をしてため息を吐いた。

「全く皆何考えてんだかぁ。…ミグ？」

何かを誤魔化すようにリーシャがミグを振り替えると、苦笑気味にミグがリーシャを誘う。

竜真らの微妙な配慮の仕方にミグも覚悟をした。

「リーシャ、こつちに来て座らないか？」

「どうしたの？」

リーシャは恐る恐る近寄り、丸太に2人で腰を掛ける。

「リーシャはこれから先どうしたいんだ？」

「そうね。のんびり暮らしたいわね。」

リーシャの暮らしてきた日々はハードだった。

男女のことなど考えなくゆっくりと暮らしていきたいと思うのだが、ミグが誰かと結婚することを考えた時に胸の奥にツキンとした痛みが走る。

男女の睦あいと駆け引きが仕事であつたリーシャには何度か通り過ぎた身に覚えのある痛みであつた。

「…俺とのんびり暮らしていかないか？」

「ミグ？」

「城常駐の仕事もあるし、もうすぐ2ndテストも受ける。男としての甲斐性はある方だと思っっている。リーシャのこと、小さい時から好きだった。リーシャの面影をずっと追い掛けてきた。再会出来たら離さないとも決めていた。だから、のんびり暮らしたいというなら俺と暮らしてほしい。」

真っ直ぐで駆け引きのない必死な告白。

リーシャはどうしたらいいものか、頭のなかを大いに混乱させていた。

「…あんたみたいに綺麗すぎる人間とは釣り合わないわ。」

「リーシャはリーシャだ。俺だって冒険者で、それなりに汚いこともしてきた。人だって何人も切っている。花街の女を抱くことも勿論あったし、彼女達の事情や花街の事情も知らない年の男じゃない。俺の方がきつとリーシャに釣り合わない。でも俺はあきらめない。」

藍の瞳は強い意志を込めてリーシャを貫く。

「だって姉弟じゃない。」

「血のつながりはないし、今は姉弟じゃない。」

「元遊び女よ。」

「そこから連れ出したのは竜真だし、事情も知っている。そもそもリーシャをリーシャとして見ているんだから理由にはならない。」

「家事なんてしたことないわよ。」

「俺ができるから問題ない。辛い仕事をしてきたんだから、その分、甘やかしたいぐらいだ。」

言えば言っただけ甘ったるい言葉になって即返ってきて、リーシャは頭をクラクラさせていた。

「断る理由がなくて、俺が少しでも好きなら明るい返事が欲しい。もうここまで意志を表に出したからには、今まで以上に甘ったるく甘やかしてやる。覚悟してくれ。…少し頭を冷やしてくる。」

最後にはリーシャを柔らかく包み込むように抱き締めて、額にキスすると、ミグはあっという間に居なくなってしまうた。

「…」

ただただ顔を火照らせて、リーシャが動かなくなっていると、リーシャの前に誰かが立った。

顔を上げると、それは竜真だった。

「そのまま、怒らないで聞いてね。一緒に旅している時に、一応、大人の男な訳で、自分をコントロールするためにも定期的にミグを花街に連れていったのは僕。そんな中でミグが必ず選ぶタイプの女性が居るわけなんだけど、必ず髪と目の色が一緒なんだよね。僕が見たことある恋人も同じ髪と目の色。初めてリーシャさん見た瞬間に納得した。ミグは常にリーシャさんを求めてるって。ミグは初恋を大事にしていた一途な男だよ。別の人を抱いていても彼はリーシャさんを抱いていたってこと。ねえ、リーシャさんがミグを好きなのは僕は初対面から気付いている。リーシャさん。愛されてるなら飛び込んでみたら？ミグは本当にいい男だよ。」

言うだけ言って、竜真は居なくなつた。
そこへミグが帰ってくる。

あまりのタイミングの良さにリーシャの心臓は苦しいまでに高鳴っていた。

「ミグ…本当に私でいいの？」

「リーシャ以外は女じゃない。」

リーシャは一步、一步とミグに近づき、その大きな身体を抱き締め
た。

「私もミグが好きだつた…お客でもアツシユの髪だと、藍の目の人
だと喜んだ…」

「もう言つな。言わないでくれ…リーシャの口から他の男を聞きた
くない。俺だけを見て欲しい。」

ミグの激情に強く抱き締め返される。

リーシャはミグを見上げた。

「リウマ君からミグのこと聞いたわ。でも怒らない。だって私を抱
いてたんでしょ？ずっと音信不通で二度と会えなかつたかもしれな
い私をずっと…」

「そうだ。リーシャが欲しかった。ずっと欲しかった。」

ミグの熱い思いがままにリーシャと深いキスを交す。

互いが手に入った瞬間だつた。

「リウマ様、リーシャさんに何を言っただんですか？」

木の影で気配を隠して待機しているかくれんぼ組。

竜真の傍にニヤルマーが、シン、ロイ、バレイラはその足元に座っていた。

「いつになったら合流できるかなあ。」

《シン、馬に蹴られてきてよ。》

「いやだよ。なんで俺なの？ことういう役はニヤルマーさんでしょ。」

「「あ」「

擦り合っている、竜真が堂々と木陰から抜け出す。

「イチヤイチャは宿に着くまで程々にねえ。」

「竜真。」「リウマ君。」

真っ赤になったミグとリーシャが叫んだのだった。

47・愛し愛され(後書き)

ミグ、おめでとう！

書いたぞ。

砂吐くぞ。

48・らしい話

「これぞファンタジーの醍醐味。恋愛フラグを立ててくつつける。ミグは幸せ。僕も幸せ。」

「竜真、感謝しているが、程々にな。」

「ミグは大事な友人だからね。僕に深く関わる人達には極力幸せになつてもらおうのが、僕の夢なんだ。」

「そいつはいい夢だな。さて、帰ろうか。」

「了解。」

あと一山でナユタに到着する。

これでビシャヌラの神殿に行けば、ミグと竜真の契約が終わるといふところまで来ていた。

「さて、皆さんにお知らせがあります。」

いきなり立ち止まり、竜真が一行に向かい口を開く。

いつものことなので、皆はあまり不審に思うことなく竜真を見る。

「ナユタに到着するんだけど、シン、ロイ、バレイラ、ニヤルマーには個人で依頼を受けて、仕事してもらいます。今までパーティーでしか行動していなかったんだけど、ここは趣旨を変えてみたいと思います。つまりは個人の能力を挙げてもらいたい。ちなみに今

のままではレベルの低い依頼しか受けられないわけだけど、これからが課題だよ。」

全員を見渡して、竜真は一呼吸おいてから宣言する。

「ニアルマーはB、後の3人はCまでランクを上げること。…ただ・し、僕とミグが留守になり、戻って合流する3日の間にね。リィシャさんは暇だと思うけど、3日だけ旅の疲れを取ってゆっくりしてください。」

竜真の掲げた目標は3日で2階級を上げることだった。

「竜真…3日は厳しくないか？」

ミグが固まる4人を見てから聞いてみると、竜真は楽しそうに答えた。

「厳しくはない。やり方次第だよ。ギルドの特性を考えて、移動できる距離は君らはA以上のはずだ。ここだけじゃなくて、近隣の町や村に行ってみたっていい。君らの実力自体はすでにB以上なんだからね。自分達の個々の性格によってこの先の道が切り開けるはず。」

それぞれが真摯に竜真の言葉を受け止めようと全神経を向けている。

「例えば、盗賊ギルドに魔術師ギルドに登録するのもいい、このまま冒険者ギルドを登り詰めるもよし、どこかの国に仕官するのもいい。そういう先を見通すためにも、個々で依頼を決めて行動することも覚えたほうがいいんだ。ていうのもあるんだけど、本当は試合に出るためにはパーティーに一人はBがいらないといけないんだよね。」

いつでもBにあがれるだけの實力はあるからギリギリまで放っちゃった。」

ミグの目が途中まではまともだったのにと竜真をなじっていて、シン、ロイ、バレイラはまあリウマさんらしいと言っつかあと言った様子だが、鼻吸り音に全員が視線をある男に移した。

「リウマ様…このニヤルマー…生付いていきますう。」

大号泣する男に全員が残念な男だとドン引きしていたのだった。

48・らしい話(後書き)

書きやすいなあ……ニヤルマー落ち。

49・そう言えば

ナユタの宿屋につき、部屋だけは全員分リザーブしておき、リーシヤを残して宿から出ると、竜真は財布から金貨を取出し、子ども組に与えた。

「とりあえず皆に金貨1枚ずつね。」

「リウマ様…私には…」

1人スルーされたニヤルマーが哀しげだ。

「ニヤルマーは大人だし、給料もらってるし……………」

「ニヤルマーさん、誰から給料もらってるの？」

事情を知らない3人が首をかしげ、代表でロイが質問する。

「リユカ帝国フェブカ領、領主シグルド「マナタナル」フェブカ様あれ？話したことなかったっけ？」

ナイナイと、シン、ロイ、バレイラが首を振る。

竜真はあれ？とだけ思った後に楽しそうに言う。

「ニヤルマーはね、僕の顔に一目惚れしちゃった挙げ句、追い掛けてこようとしたんだけど、主人たるシグルド様が優しい人でね、そのままやめさせることなく、見聞を広げる仕事をしてってくれてニヤルマーが僕に振られても生きていけるように仕事にしてくれたんだ。つまり、ニヤルマーはこうして旅に出ているけど、実はシグルド様

の召使でもあるってこと。」

「間諜みただね。ニヤルマーさん。」

シンがぼそつとお人好しな貴族もいるんだなと呟いた。

竜真はそれを頭の片隅に入れておく。

きっと過去に貴族に対する意見が固まるようなことがあっただろうことは想像についたが、ニヤルマーが情けない声でロイに反論するのにシリアスな雰囲気から飛び出たと苦笑する。

「私が間諜などと、あるわけないですよ。」

「似たようなものだね。さて、皆頑張ってきてねえ。」

やると言ったらやるのが竜真だ。つまりは、頑張ってきてねえ。と言われたら、さっさと行けと同義語なので、3人はさっさと、1人はしぶしぶに一行から離脱した。

4人の姿が見えなくなると、竜真はミグを見上げた。

「…ミグ。僕らも仕事しようか。」

そういう竜真の口調は少し寂しげだった。

ビシャヌラで一巡りとなる今回の旅路、帝都でのギルドの試合が終われば、そう遭遇することない竜真とミグなのだ。

「竜真、…帝都まではまだ暫くある上に政局が不安定な場所もある。ヨルさんのところまで行って預けられないなら、うちで4人をあず

かっでもいい。」

良い人であるミグの言葉に竜真は目を細めた。

「ふふ…ミグ、ありがとう。リユカには下僕しか居なかったんだけど、やっと友人ができたよ。」

「……………下僕？」

竜真の口から出た不穏な言葉にミグの口元は引きつっている。次の竜真の言葉にそのままミグは凍り付いた。

「オルレイア・ヴァルフレイア」

「っ！宰相閣下じゃないか！」

ミグは竜真の両肩に手を当てて、覆面の目の中を覗き込むようにして見つめると、竜真の目は楽しそうに輝いている。

「彼…僕にめろめろだからなあ。ミグ、僕と旅をしたなんて彼に言ったら、泣かれるよ、号泣だよ。きつと資料室に立てこもられて僕についてグジグジ言われるよあ。」

「宰相閣下がか？あの？石（意志）を通り越して岩人間とか？鉄壁とか言われてるあのか？」

「彼、犬みたいだよ？僕を見ると尻尾ふりふり、可愛いんだよ。」

リユカ帝国の宰相、オルレイア・ヴァルフレイアは壮年の生真面目そうなで誠実、ストイックな中に男らしい色気も見れる、男が選ぶいい男である。

その仕事ぶりは外面がそのままに表れていて、生真面目に厳しい。ミグが言ったように岩人間と言うのが相応しい。

竜真が言うような印象が全くない、見受けられない、ありえない。勿論、ミグが知る宰相が号泣とかグジグジとか犬のようとか想像するだに…想像できない…したくないミグの顔色が悪くなっている。

「なんてね。蒼騎士には王弟と言う地位があり、僕には下僕希望者が大国にいるってこと。1stは怖いね。大会かぁ〜オルレイアに会えるかなあ？」

竜真が固まるミグの手を下ろすと、ふふっと笑い、ビシャヌラの神殿へと歩きだした。

「そう言えば、ヤシャル、父さんに力と知識をもらったから、僕、ビシャヌラからの報酬が無意味になっちゃったんだよね。」

道中、ふと気が付いたと竜真がぼつり呟く。

ミグもそう言えばとそんな報酬だったと思いついていた。自分に対してはその報酬はままでいいが、竜真には無意味かもしれない。

「うーん、あの変態から何か報酬もらえるものあるかなあ？」

「竜真…」

スケールの大きすぎるところもあれば細かいところもある。

そんな竜真の魅力にミグは魅せられているのは否定できないなあと

苦笑するのだった。

49・そう言えば(後書き)

オルレイア・ヴァルフレイア…って誰よ?な49話です。

竜真さん…下僕ってなんでしょう?!

作者泣かせにもほどが…

いえいえ、なんでもありません。

ありませんよ。

ありませんってば。

会えるかなあってことは会いたいってことですよね?はい、アポは取っておきます。頑張ります。

50・1人で…(シンの場合)(前書き)

区切りのいい話数になるとバラける気がする…

50・1人で…(シンの場合)

*シンの場合

シンは1人、ナユタから北に3つ程行った街にいた。

「アルダに到着だな。ギルド、ギルド…お！あつたあつた。」

シンはギルドの扉を潜る。

迷わずに依頼掲示板まで行くと、ランクCの依頼書を取り、受付まで向かう。

受付では赤毛の狐目の女性が待機していた。

「…あなたランクEよね？」

「3日でランクCにならないといけません。依頼を果たす実力がある、ないし、違約金が払えるなら格上の依頼を受けてもいいんですよね？」

受付に居た制服のお姉さんに怪訝な顔をされ、シンは苦笑気味に答えた。

「わかってるならいいけど…」

しづしづながら受付の女性は印を押し、依頼書をシンに戻した。

「気を付けてね。無理だと思ったら、引くのも大事よ。そうそう、私はメイレン。3日ってことはここであげるのかしら？」

「『忠告、ありがとうございます。シンと言います。少しの間ですが、よろしく願いします。』」

「頑張つてね、シン。」

事務的に依頼を受けるとシンはそのまま出ていく。受付の女性は心配そうにその後ろ姿を見ていた。

「あら？」

「はい、依頼を完了しました。」

メイレンがその少年を見かけたのは昼過ぎだった。

少年は掲示板をじっと見て、一枚剥がしてから受付に来た。

「……………久しぶりの大型ルーキーね。」

依頼人からの終了印を確認して、メイレンは依頼書をしまう。

「で、次はこれをお願いします。」

「確かにランク2つ上まで自由に取れるならCをこなせば、少しの依頼で早くランクがあがるわ。とはいえ…いいえ、気にしないで。あの依頼をこれだけの時間で終われるなら、実力はあるのね。」

依頼書を見て目を見張る。

シンをしばらく見つめてから、印を押して、依頼書をシンに返した。

「気を付けてね。」

「ありがとう。」

シンは再びギルドを出た。

「おめでとつ。Dランクよ。」

依頼書を回収してメイレンはシンのランク上げの書類を処理し、ギルド証を預かるとDランクの処理をした。

「これでランクBの依頼が受けられますね？」

「そうね。できるわ。」

シンは依頼掲示板の前に行き見るとBランクの依頼書は多くなかった。

「…ブルハスの角を3頭分…これにするか…」

シンは己が楽だと思つ依頼書を持ってメイレンの前まで行くと、依頼書を差し出した。

「あらあら、早速ね。ブルハスはランクBの象徴だけど、大丈夫かしら。」

「大丈夫ですよ。ブルハス退治は慣れましたから。」

Eランクが慣れるほどブルハスを退治していることに、職業上、ランクを上げるのにどれだけかかるかの平均を知っているだけにメイレンは驚く。

「…今までギルドランクを上げてこなかったのが不思議だわ。」

「育ての親の方針で…他にも一緒に引き取られた奴らがいるんですが、一応、年長者だからには2ランクアップどころか、3ランクアップしたいなあ」と…俺一番才能なさそうだし…」

ニヤルマーは別としてロイとバレイラには負けたくないのが本心だ。

「3日で3ランクアップ？」

それは無謀とメイレンはシンに忠告する。

「やれるだけやります。」

「応援するわ。シン。じゃあ、頑張ってきてね。」

こうしてシンの1日目最後の依頼に駆け出していった。

*

「まさかここまでやるとは…掲示板の依頼がD以下しかないなんて…」

シンが持ち去ったランクA最後の仕事を持ち去った後、C、B、Aの依頼掲示板が板だけになったのを感じしながら見ていた。3日目の朝に最後の依頼が持ち出され、他に冒険者が居なかったことに安堵のため息をつく。

3日前の朝、このギルドに着いたEランクの少年が今やBランク目前である。

この依頼を終えて返ってきたら、Bランク昇格だ。

こんな大型ルーキーをメイレンは初めて見た。

メイレンも冒険者としてAランクではある。地味に地道に上げてきたが、自分の実力に限界を感じてギルドに転職したのだった。

メイレンは数字持ちの卵とはこういった存在なのだろうかと思嘆した。

「メイレンさん戻りました。」

「シン、お帰りなさい。」

煤けた顔をさせてシンが戻ってきた。

「あらあら」

メイレンはハンカチを取り出すと、シンに渡した。

「処理が終わるまで、拭いていて。顔が真っ黒よ。」

「ありがとうございます。」

「ふふふ、ダルコニアに灰を掛けられたのね。」

「火炎攻撃かと思ったら、ぼふって…しかも足早いし」

ダルコニアは弱いものの。その逃げ足の早さでランクAの魔物だ。ダルコニアの灰は火傷の薬として珍重されているのだが、その足早さでレア度を上げている。

しかし、竜真に追い掛けられて修行をしたシンには何のこともなかった。

話している間にも、メイレンは書類処理をし、シンにランク証を返す。

「ランクBよ、おめでとう。」

「ありがとうございます。あ、ハンカチもありがとうございます。」

「

ランク証とハンカチの受け渡しが終わる。

「もう行くのかしら？」

「はい。約束の日付なので。」

メイレンは受付を出て、足をドアに向けたシンを追う。

外に出て、シンがお世話になりましたと、さわやかに言っのを気持ち良く送った。

「シン、気をつけてね。」

「はい。お世話になりました。」

そのまま風のように走り去ったシンにメイレンは感嘆した。

「ダルコニアなんか遅いわね。」

メイレンはギルドの扉をくぐると、掲示板を見て一言、これはしばらく暇だわ。と呟いた。

50・1人で…(シンの場合)(後書き)

シンはトントントン拍子にランクを3つ上げました。

51・1人で…（ロイの場合）

*ロイの場合

ロイはナユタから西に半日走った場所にいた。

「ニアルマーさんにナユタ取られたからなあ。まったくバレイラ譲つてあげれば良かったのに」

ニアルマーが大人気なくナユタのギルドに入り込んだのをロイが呟いたのに対してバレイラは《リウマさん命だから、優しく見守つて上げよう。》と書いていた。

「バレイラは優しいね。」

そんな会話をしてからシンとバレイラと別れてきたのだった。

「ギルド…うわあっ！」

ギルドの前で佇まいを見ていると後ろからどつかれて、ロイは壁にぶつかりそうになった。

柄が悪い3人組がロイをどかしてさっさとギルドに入っていく。それをムツとした顔で見送って、ロイもギルドに入った。

ロイがギルドに入ると、数人の冒険者が居た。

うち、何人かはパーティーを組んでいるのだろう。

ロイは何人かの視線を感じつつもランクCの掲示板に行き、見繕った1枚依頼書を取ると、受付にすつと行く。

「君、ランクEじゃないの？」

受付の青年はロイを見て聞くが、ロイは微笑みを浮かべて青年に聞いた。

「実力がある、ないし、違約金が払えるなら、2ランク上の依頼を受けても良いとなっているはずですが。」

「…そう、分かっただけの行動なら止めないよ。名前は？」

「ロイです。3日だけお世話になります。」

口調は可愛らしくないが、可愛らしくほほえむ少年ことロイにバルジャンだと名乗り、受付の青年も微笑む。

「おい、ここは小僧がくるところじゃねえ」

そこに割って入るダミ声の男、先程、ロイを押し退けた3人組の1人だ。

「自分の意志が表示できる年齢であれば入会できる。ギルドで仕事は出来ます。」

一見貴族の子弟に見えなくもないロイに冷静にいなされて、男はいきり立った。

「お前みたいなチビが何の依頼を受けるつーんだ。あ？」

「あまり時間を失いたくないので、ご用件は手短かに。因縁をつけるつもりなら、別の人を相手にしてください。」

ロイが冷静であればあるほど、男の怒りのボルテージが上がるようだった。

「くそガキがあ、可愛くねえガキが俺はでえきれえだ。」

「僕は別にあなたに嫌われようが気にしません」

ロイの脇を剛拳が走り、柵に男の手がめり込む。

「危ないじゃないですか。」

「うるせえ」

男の拳が再びロイに向かう。

まだ少年としか言いようがないロイが男に殴り飛ばされると周囲に緊張が走った。

しかし、その緊張が走る原因になるような音より派手な音が立ち、周囲が目を見張る。

「強さは見かけでは判断してはいけない。あなたは冒険者として勉強してこなかったのですか？」

ロイは涼しい顔して立ち、怒り狂っていた男は気を失い床に沈んでいた。

「…ロイ少年強いなあ。」

それまで黙っていたバルジャンが暢気に手を叩いて受付で笑っている。

「カウンター外の冒険者同士のもめ事は個人裁量だからねえ。さあ、依頼受付再開。」

「はい。よろしくお願いします。」

何事もなかったようにしている2人を遠巻きに冒険者は呆気に取られていた。

「依頼を受けた後、僕に追い付けなかったから帰ってくるのをギルド前で待ってて、しかも結果ボコボコにされたと。」

涼しい顔した少年は倒れている3人組を見下ろしていた。

「これで実は体術は専門外で魔術が本業とか言ったら嫌がられるかなあ？」

それを聞いた途端、男達は青い顔をして悲鳴を上げて逃げていった。「ひどいなあ。」とだけ呟いて、ギルドの中へ入っていく。

その日、ロイは依頼を2件こなし、1日目を終えた。

「でねえ、エリーちゃん…」

「バルジャン？ほら、待ってるわよ。」

2日目、ロイが最初の依頼からギルドに帰ってみるとバルジャンは女性冒険者と親しそうに話をしていた。

「これを」

「ホント美少年だわあ。」

依頼書を出したロイをまじまじと見た女性冒険者が目をぱちぱちとまばたきさせた。

「でしょ？腕つぶしも強いし、顔は可愛いし、中々でしょ？」

バルジャンは机越しにロイの頭に手をやり撫でまわす。

「バルジャンさん！」

「いや、うちで飼ってるピナルの子どもみたいでさあ、ちよ／＼かあいんだけど、ロイみたくツンツンしちゃうのが可愛すぎて」

ピナルとは猫の様な生き物で自分の機嫌が悪くなければ、どんなに慕っている主人だろうと、ツーンと外方向くが、機嫌が悪ければ、甘えてくれる愛玩動物。

ロイはわしゃわしゃと髪を撫でくりまわすバルジャンを無視して、依頼書突き出した。

くおゝたまんねえ」と言いながらもバルジヤンはロイの依頼書の処理をする。

「皆はどうしてるかな…」

悶える気持ち悪いバルジヤンを視界から外しつつ、ロイは遠くを見た。

バルジヤンがあまりに悲壮な顔なので、ロイは口元を引く尽かせていた。

「俺のロイが」

「誰があんたのだ!」

ビナルのように毛を逆立ててバルジヤンを拒否するロイにギルドの職員がゲラゲラ笑っている。

「濃い3日だったな。」

バルジヤンの肩にギルド長の爆笑しているアーサーの手が掛かる。

「アーサーさん、お世話になりました。」

「こちらも驚いた。2ランクアップは久しぶりに見たよ。」

「Bランクまであげるつもりだったので残念です。…邪魔がなければ…」

邪魔が…のところでロイがちらりとバルジヤンを見たことにバルジヤンはホロリと涙を流す素振りを見せて、ロイの顔をしかめさせていた。

「君を見ていると1stのリウマを見ているようだよ。君は数字持ちになれるだけの素養がありそうだからね。楽しみにしているよ。」

「ありがとうございます。」

可愛らしく微笑み、挨拶するロイに職員、場にいた冒険者らともどもが可愛いと声を上げる。

「では待ち合わせの時間ですので、失礼します。」

「ロイ、頑張れよお。」

バルジヤンの声を背にロイは去っていった。

52・1人で…（バレイラの場合）

*バレイラの場合

バレイラはナユタから東に半日走った場所に居た。真っ直ぐにギルドに向かい、まず依頼掲示板に直行した。そんなバレイラの様子をギルドの受付をしていた男が見ていた。

《この依頼受ける。》

バレイラは黒板に文字を書いて、それを受付の男に見せながら、選んだ依頼書を男に見せた。

「あら、お嬢ちゃん、喋れないの？」

筋肉のついた体から出るのはダミ声だが、その口調は柔らかい。バレイラはこくと頷いたのを見ると、男はにっこりと微笑んだ。その微笑みにバレイラの後ろからは呻く声が続くか立つ。

「あたし、ダーラって言うの。あたし見て表情を変えなかったの久しぶりだから、サービスしちゃっわ。」

ダーラの自己紹介にギルド職員が呻く。

《私、急ぎたい。3日でランクを2つ上げます。》

「…あら、分かったわ。頑張ってちょうだい。応援するわよ。」

周りが引いてる中、ダーラは可愛らしく？笑いながら2つの大きな拳を2つに割れた顎の下に置き首を傾げた。

《ダーラ、可愛いね。》

「……バレイラちゃん！」

受付越しにも関わらずダーラによってバレイラはカー杯抱きしめられた。

「ダグ、そろそろ止め」

「…何だって？」

止めに入ったギルド職員がダーラの地を這うような低く恐ろしい声に止められて、カッチカッチに固まってしまった。

「あたしはダーラよ。ダグ…って何て言おうとしたのかしら？」

まさに固まったギルド職員は冷や汗をたらたらと流している。

「ダーラ、デルタで遊ぶな。そろそろ譲ちゃんが苦しそうだ。」

苦笑して現れたのはギルド長のベジタだ。

バレイラを抱え込み、デルタと言うギルド職員を威嚇しているダーラに注意する。

「あら、ごめんなさいね。さあ、頑張っていてらっしゃい。可愛いお嬢さん。」

バレイラは3歩程よろけてから、高速で飛び出していった。

「あら、早いわね。2ランク上の依頼を日暮れ前に終わらせて帰ってくるとは思わなかったわ。…今日中にもう1件終わらせたい。凄いわ。」

バレイラの最初の依頼書进行处理しているダーラはバレイラの黒板に書かれた言葉を読んで処理速度を上げる。

「次の依頼行っていいわよ。」

《ありがとう。》

素早く掲示に近寄り、依頼書を取るとバレイラは直ぐ受付に戻り、ダーラはその依頼書进行处理してバレイラに渡す。

2回目の依頼にバレイラは早々に出かけた。

そして、バレイラが戻ってきたのはギルドの受付が閉められる直前だった。

何事もなかった様に涼しげな顔で現れた少女にダーラの顔が輝く。

「バレイラちゃん！お帰りなさい。」

《ただいまです。》

「待つてたわあ〜」

バレイラが提出した依頼書の処理をダーラが手早く済ませると、ダーラはバレイラの手を見た目のごつさとは反対の繊細さでソツと掴んだ。

「バレイラちゃん、今日のお宿は？」

《野宿上等》

「い…意外とワイルド路線なのね。じゃなくて、バレイラちゃん、今夜は家へいらっしやい。女の子1人野宿は危険よ。」

「ま、待てよ、ダグラ」

昼間、ダーラに余計な一言を言ってシメられたデルタと言う青年が再び口が滑らせシメられる。

「だから何だった？」

どすの利いた地獄の一丁目の様な声にデルタはおののく。

「…聞いてよバレイラちゃん。俺とこいつな、ずっとパーティー組んでやってきたんだわ。そろそろ体力も無くなってきたし、ギルド職員にでも転職しよかって話になったんだよね。そしたらな、こいつ…！本当はダグラスグエハっ！」

ダーラの本当の名を語ろうとした時、ダーラのカ一杯のアップーがデルタの顎を直撃する。デルタは天井とキスをした。

《ダーラって素敵でかつこいい》
やはりどこかがズレている感が否めないバレイラだ。

「食べてちょうだい。」

バレイラの前に広がる大量な料理に目を輝かせていた。ヒラヒラのレースがふんだんに使われたエプロンをしたダーラがふむふむと頷いている。料理が魅力的なのをダーラと組んできて知っているデルタがご飯食べたさについてきていた。デルタはエプロンを視界から外しつつ、料理に先に手を出そうとしてシバかれている。

《美味しそう》

「美味しいわよ。さあ食べて。」
《ダーラさん、ありがとうございます。いただきます。》

そのバレイラのスルー力についてデルタがダーラに失礼なことを聞いた。

「なあ、なんでお前、こいつに突っ込まねえの？」

《私のいるパーティー、いろんな人居る。》

ダーラをスリー出来る人間が集まったパーティーって？とデルタは興味深そうだ。

《あまりに美少女顔過ぎて覆面じゃないと表を歩けない男の人とか、その人に心酔し過ぎて生活を捨てた男の人、毒舌な美少年にお母さんの様に気が利いてしまう男の人とその奥さん、まわりに振り回され過ぎちゃう少年と私》

「…濃い人に囲まれて」

「美少女顔過ぎて覆面じゃないと表を歩けない男の人？男の人？」
引きつるデルタときめくダーラ、そんな2人を余所にバレイラは書き足す。

《養い親が無駄に顔がいいパーティーだって言った。》

「……その場合、誰が養い親？」

バレイラが書き出した中で子どもの養い親と言えるのは、お母さんの様に気が利いてしまうと言うダーラと似たり寄ったりそうなスキルを持っていそうな男とその奥さん。

奥さんと言う辺りで全うな男のようだ。

デルタは興味津々にバレイラが黒板に書いている。

《美少女顔過ぎて覆面じゃないと表を歩けない男の人》

想像外の人物が掛かれています。デルタは目を見張り、ダーラは何故か

きやあきやあと騒ぎ立てる。

「美少女顔過ぎるってどうなの？勿論バレイラちゃんは顔を見たことあるのよね？」

《神秘的なまでに艶々しい髪、少し猫目みたいだけど、すつと通った鼻筋に色白の肌。唇は薄く色付いていて、あまりの美しさに群衆が遠巻きに見守り、押し倒そうとするもの、拝み倒そうとするもの数知れず…な25歳の成人男性》

「何？それ？美少女顔過ぎるってマジ男なわけ？」

《拝み倒されそうなら逃げ出し、襲ってくるなら性格矯正して撃退するの。強くて綺麗で可愛い格好いい人です。》

「うわあ、想像できねえ〜」

デルタが頭を抱えているとダーラはデルタの頭を叩いた。

「ほら、まずはバレイラちゃんにご飯食べさせてあげて。あんたが話し掛けてばっかだと、ご飯食べれないでしょ！バレイラちゃん、ご飯食べてね。腕によりをかけたんだから。」

ダーラは叩いた拳でデルタの頭をグリグリとめり込ませている
デルタは目の端に涙を浮かべてイタタタタタと悲鳴を上げていたのだった。

「もう行ってしまおうの?」

号泣のダーラの大きな手をバレイラが小さな手で包む。

《Cランクになった。そろそろ待ち合わせの時間になるから、ナユタまで急ぐ。》

「ナ、ナユタですって?」

バレイラのメッセージを読んだダーラが目を見張る。

《走れば半日》

「半日?うそでしょ?あそこまで馬で半日じゃない!」

《養い親直伝の馬以上の走りできる。ダーラの涙止まった。良かった良かった。じゃね!ご飯と宿をありがとう。デルタと仲良くね!》

バレイラは手を振ると、ダーラが引き止める間もなく、全速力で走って行ってしまった。

その早さにダーラはただただ啞然とするだけだった。

「デルタと仲良くねってあたし達は夫婦じゃないわよ。」

呟きと共に苦笑するとダーラはギルドの中に入った。

ダーラの悲しい気持ちはバレイラにバツサリ斬られたように爽やかになっていったのだった。

52・1人で…（バレイラの場合）（後書き）

濃い…何？この濃い人…

今年最後の更新です。

不定期なお休みをいただいでしまい、すみませんでした。

さて皆様お気づきでしょう！

来年はニヤルマー始まりです。

主役差し置いて（笑）

竜真さんはいっ戻るやら

皆様良いお年を

53・1人で…（ニアルマーの場合）

*ニアルマーの場合

ニアルマーはナユタに居残った。

それもこれも待ち合わせ場所を離れたくないその一心である。

さつさと竜真の命令通りにランクを上げるべく、ギルドに向かった。知る由はないが、他の3人と同じくギルドに入って、まずは掲示板の前に立った所で1人に冒険者に声をかけられた。

華やかなと言う形容詞がよく似合う茶色い髪の若い女性である。

ニアルマーは邪魔するなと眉を潜めつつも、対応した。

「あの、すみません。」

「何かご用でしょうか？」

「私と結婚してもらえませんか？」

顔を真っ赤に染めながら言った女性にニアルマーは空いた口が塞がらない。

「え……………つと？もう一度言っただけですか？」

当惑し、相手の正気確かめつつ、ニアルマーは女性を見つめると、女性はポツと頬を赤く染め、ニアルマーを見つめ返す。

「ああ、素敵。私と結婚してください。」

「なぜ、そうなるんですか！」

ニヤルマーの背中に冷や汗が流れる。
女性は目を潤ませてニヤルマーを見つめ続ける。

「あなたの子どもを産みたい…」

ニヤルマーは、浮かれ、逆上せた女性の呟きが耳に入った途端、一歩ずつ後退し…そのまま脱兎のごとく逃げ出した。

その際、ニヤルマーの「ご遠慮させていただきまう〜」と言つ情けない声が響いたのは言う迄もない。

「撒けたでしょうか…」

ナユタから逃亡して数時間、森に林に川に山、洞窟に街中、逃げ隠れしてきたが、何故か追い付いてきた女性にニヤルマーは心底うんざりしていた。

「このままではランクを上げられません。」

暮れていく日に途方にくれる。

息を潜め、気配を消し、周りに気配を配る。

そのまま、夜が来て、朝が来て、日が上り、夜が来て、朝が来た。

「ナユタに帰らなければ…ランクを上げることなく3日経ってしまいました…」

息を潜め隠れ続けたニアルマーの頬はげっそりと痩け、気を張り詰
めすぎたせいかわ、目が虚ろになっている。

綺麗な顔が憔悴していて、憂い顔の貴公子のようで色っぽい。

彼を追い掛けている女性に見つかったら、そのまま連れ去られ既成
事実まっしぐらに違いなかったが、耳に入ってきたその声に、ニヤ
ルマーは天の采配に感謝した。

「ねえ、ミグ、あそこでよろよろとしてるのはニアルマーかなあ？」

「多分そうだろう、やつれてるのが気になるが……」

「……………リウマ様…ミグさん…助かりました。」

ニアルマーが竜真とミグの声に反応して振り向き駆け出したその時
だった。

「ダーリンみっけ！」

弾けた女の声が聞こえたと思ったら、ニアルマーの姿が掻き消えた。

「……………ニアルマー居たよね？」

「居たな。」

「今の2ndの魔物使いシエナビアだったんだけど……」

「ダーリンとか言ってたな。」

「助かったって言ってたね。」

「「……………ニャルマー!」「」

竜真とミグはシエナピアに拉致されたニャルマーを追い掛けたのだ
った。

53・1人で…(ニヤルマーの場合)(後書き)

予定通りニヤルマーですが…ニヤルマー誘拐事件発生！
攫ったのは過去に名前のみ登場の彼女ですが…
ニヤルマーの貞操はいかに？

54・2人で…

竜真とミグはビシャヌラの前に立った。

白金の狼の状態でお座りをして尻尾を左右に振って2人の前に居たビシャヌラは竜真の姿を見ると腹を見せた。

「…ミグ、これは何？」

「降参か撫でるか…」

「違う！ヤシャルの匂いを嗅ぐところになってしまふのだ」

ビシャヌラはマリシユテンに興奮し、ヤシャルには服従してしまうらしいとわかると竜真はクスクス笑った。

「依頼通り、全部の神殿に行ってきたよ」

「楽しませてもらった。そして、これが通信玉で、ここが最後だ。全部で5つが繋がっているが、ヤシャルは繋がらないかもしれないな。彼はこの世界に居ない場合がある」

ミグから人型になったビシャヌラは通信玉を受け取り、首をかしげた。

「この世界に居ない？」

「ヤシャルは異世界、リユカリルリユーラの創った世界から外れた場所で結婚して家庭を持ったんだよね。まあ今までは1000年に1度帰ってみたいだよ。これからはちよくちよく来るみたいだし、

連絡取れるでしょ。やってみる？」

次々と驚くことが竜真の口からポンポンと飛び出てビシヤヌラは目が回りそうになったが、竜真が通信玉を出したのを手の平を前に出して止めた。

「その前にいいか？ヤシャルが結婚して家庭？まさかダーリンがヤシャルの子か？」

「誰がダーリンだ！」

「そわそわする。俺を撫でろ！」

ビシヤヌラは犬型…もとい狼型をとり、竜真に擦り寄る。

「なんでだ！」

撫でろ、嫌だの応酬が続き、一人暇になったミグは壁画を眺めては作業に没頭する。

そのうち疲れたか、面倒になったのか、ビシヤヌラと竜真は言い争いを止め、ミグの背中を視線で追いつめたのだが、ミグは熱中しているようだった。

「ビシヤヌラ、壁面の字は君が書いたの？マリシュテンは壁を日記扱いしてたけど…」

「いや、ここは元々皆で住んでいて、皆で書いた。あの辺り」

天井の隅を差し、ビシヤヌラは半笑いに言った。

「ヤシャルの猥談が書いてある。女にモテるにはとか…あっちは別の隅をビシャヌラが差し、竜真が顔をそちらに向ける。」

「マリシユテンが私の悪口を書いていった。で、そっちが、ヤシャルが書いていった料理のレシピだ。」

「…父さん」

父親が猥談を壁に書いていたことに若気の至りだろうと想像がついたが、それでもビミョーと竜真は虚ろになる。

「…帰ろうかな…今ならゆっくりナユタまで歩いても予定日の朝には着くだろうし…ビシャヌラ、僕帰るからミグが正気に戻ったら帰るように言っというてね。」

竜真はふらふらふらと脱力のままに部屋から出た。

ミグがそれに気が付いたのは数時間後、竜真が担当するはずだった通信玉の使い方説明をミグがしてシャヌラに通信玉の実験を手解きした後、慌てて竜真の後を追ったのだった。

残されたビシャヌラは通信玉でなぜかマリシユテンに怒られていた。

「ミグ、お疲れえ」

「竜真、何故声をかけてかないんだ。」

「あまりにも熱中してたし、僕もちょっと衝撃で一人になりたかったから」

ヤシャルの猥談はやはりいただけでない竜真だった。

ともあれ、ナユタにはそろそろ着く位置まで来ていたところ、目を疑う事件が発生した。

道をふらふら歩くニアルマーを発見したと思ったら、まさかのニアルマー拉致事件が発生したのだ。

ニアルマーを連れ去ったのは、ちよつと厄介な2ndのシエナビア。かつて竜真が数字持ちの試験をした際の試験官だった。

厄介なと付くには相応の理由が付くわけだが、その厄介に竜真が巻き込まれたことは一度もなかった。

「ニアルマーって確かに僕の熱狂的ファンじゃなかったら、ただのイケメンだもんね。」

竜真は本日二度目の虚ろな目をニアルマーが消えた方角に向けたのだった。

54・2人で…（後書き）

ヤシャルってばお茶目さんと思いつつも、マリシュテンの方にはツッコミ入りたい

55・ニヤルマー救出

ニヤルマーが目を覚ました時、それを知覚した。

全裸で拘束は嫌です〜リウマ様あ〜

真つ暗な部屋の中、キシヤーとかビヤジュジワだとかの鳴き声が微かに聞こえ、人間ではない生き物の気配が漂い、ニヤルマーは半泣きだった。

男たる者…なんて格言よりも、真つ裸で両手足を暗闇で拘束されているニヤルマーとしては泣き言の一つや二つ言いたくなるものだった。

「あつ、ダーリン？起きた？ごめんなさいね。この部屋、明るくできないのよ」

ニヤルマーはその声に聞き覚えがあった。

「あなたの仕業ですか…」

それは日頃一緒にいるパーティーの人間が聞いたことのない冷たい声だった。

「私も男なので、この状態はいただけません。手足を解いて服を下さい」

威厳の“い”の字もない格好だが、その声には相手を切り付けるような鋭さがあった。

「いや！ダメ」

ニアルマーをこの3日追い掛け回していた女は可愛らしい声で駄々をこねた。

「私には共に行動する友であり、仲間が居ます。あなたとこうしていることは私に仲間との約束を破らせることになります」

ニアルマーの苛々感が場の空気を凍らせ、人外の苛立ちを増させる。しかしここで空気も読まず駄々をこねた女はニアルマーの上にもたがった。

「ね？いいよね？」

「駄目に決まっています」

上にまたがった女が何も身につけていない感触にニアルマーは慌てた。

何をいいのかと聞きたいが、怖くて聞けたもんじゃない。

ニアルマーは身を振り、女を振り落とそうとする。

しかし女は何をしてもニアルマーの上から落ちないどころか、しっかりホールドされてしまった。

ニアルマーは…掴まれた。

「いったただつきま」

「待った。シエナビア」

その時、扉が開いた。

魔術で作った光の玉を明かりにし、タイミングよく竜真が入ってきたのだ。

「…ニアルマー、お邪魔だった？」

「まさか！ありがたい」

「邪魔よ！帰って」

異口異音の返事に竜真が笑う。

「ニアルマー、シエナビアは美人さんだよ？」

「私は私の意志に反して、こういったことをされるのは、不愉快以外の何でもありません。裸に拘束は趣味でもありません」

「というわけで、僕の仲間が非常に嫌がっているんだけど、解放してくれる？」

ニアルマーは…掴まれた状態なので、身動きが取れない。

それをいいことにシエナビアの指先が踊るようにニアルマーの身体の上を走る。

「こんなに好きな人、久しぶりなんだから、食べさせてよ。リウマくん」

「でもニアルマー、嫌がってるし」

「なら勝負しましょ？私を1時間以内に捕まえられたら、彼を帰してあげる」

「嫌ですよ。こういったことは嫌々するもんじゃない…いいの？ヨルに言い付けるよ？」

その一言にシエナビアは止まった。

シエナビアは竜真の師匠ヨルに216回プロポーズし、216回断られているがまだまだ諦められなくて、ヨルの店に特攻しては撃退されている。

「い…いいもん。ヨルったら最近冷たいんだもん」

「……………いいんだね？言ったらアリア入店禁止になるよ？ヨル、シエナビアに見向きしなくなるよ？あの人、年下に走られるの猛烈に嫌いだからね？」

シエナビアはそそくさとニヤルマーの上から降りた。

「リウマくん、お願い！言わないで！ヨルに嫌われたくないわぁ」

シエナビアは竜真に泣き付き擦り寄る。

「シエナビア、服ぐらい着なよ」

シエナビアから距離を取りつつ、拘束されたニヤルマーの脇に立つと竜真はおもむろに剣を引き抜いた。

「ニヤルマー、動くなよぉ」

一瞬の太刀筋が煌めく。

ニヤルマーはピクリとも動かず、竜真の動きをじっと見ている。

「はい。さっさと服着てね」

「リウマさまぁ」

「バカ！服着ろ！真っ裸で抱きつくんじゃない！」

竜真は寝台脇に置いてあったニヤルマーの服をニヤルマーに投げ付けたのだった。

「ニヤルマー…良かったな」

家の外で待っていたミグが言ったのだが、助かって良かったあの意味合いではなく、竜真に担がれている今の状態に付いて良かったなと笑っている。

「仕方ないじゃない。シエナビアったら、ニヤルマーに変な薬飲ましてたんだもん。解毒できるまで、ニヤルマーを担いでやらなきゃ動けやしない。ミグ、担ぐ？」

「そのままの方がニヤルマーにとって幸せだろ」

ニヤルマーはだらんとしたまま、とろけそうな笑みでまさに至上の幸福真っ最中と言った有様だ。

「ニヤルマー、3日間逃げ続けてランクを一個も上げてないんだって…Bが居なかつたら計画倒れになるんだけど…」

ニヤルマーはBランクに上がらなければならなかったのだ。

「考え直さなきゃね」

竜真はフウと息を吐いた。

「シン…なんて素晴らしい」

ナユタに戻り、全員が合流して、宿でそれぞれから事情を聞いた後、竜真はシンを称賛した。

「ロイ、バレイラも惜しかったね。後1件か2件でランクがBに上がったろうに。うん。頑張ってきた。」

「…リウマさん…あれ、どうしたんですか？」

ロイにあれと言われたのは言わずと知れたニヤルマーだった。何せ彼はランクを一つも上げてないどころか、依頼を一つもこなしていなかった。

「ニヤルマー、よくやった。あのシェナビア相手に3日も隠れたのは流石だ」

ミグがひたすらフォローしてやっている。

そこへリーシャが茶を入れ、持ってきて、しばし和むとそこからは一行はいつもと変わらない雰囲気に戻っていた。

しかし、その後「シンがBになってくれて、助かったあ」の竜
真がポツリ呟いたのが聞こえたニヤルマーが再び撃沈されたのは言
うまでもない。

55・ニヤルマー救出（後書き）

とりあえずニヤルマーを脱がしてみました（やめなさい）

後はミグだけかな？

いつミグは脱ぐのか（だからやめなさいって）

リーシャはいつ脱ぐのか？

リーシャさん脱いだら月に行ってしまうので、こっちじゃ自粛します（笑）

そのうちに気が乗ったら二人には月で脱いでもらうことにしましょう（おい）

101回どころではないプロポーズをしているシェナビアですが、ヨルはどう思っているやら…

56・ミグ宅

「今日はうちに泊まっていけ」

ミグに案内されて帝都リユリタに近い街シャロルのミグの家に来ていた。

シャロルのリユリタ側の出入口に近い場所にあるその家はシャロルで二番目に大きく3階建てで、その一階部分には食堂と服屋が入っていた。

「ミグらしいね。」

竜真はその一言で終わらされたが、他の皆は寝耳に水状態だ。

何せミグ宅の一階にある食堂は帝国一うまいと評判で誰もが食べてみたいと噂する店リーシャライルの本店。

そして服屋リーリーと言う貴族のご婦人ご用達の人気店。

シン、ロイ、バレイラは何のことだか分かっていないが、その事に気が付いたのはニヤルマーとリーシャである。

ちなみに竜真は知っていた。

「ミグ、ちゃんと甲斐性あるって言うてたでしょ？ミグは3rdで城に職を持って趣味からお店まで経営してるんだ。そこらの貴族なんかより財力あったりしてね。あくまでも趣味からのお店だから、お店の方は職業と思ってないみたい」

収入力は実は竜真と並ぶ程にあるミグに他者は啞然とするのみだ。

「ミグさんの料理美味しかったし、可愛い服を作ったりするけど…」

「まさかですねえ」

《ミグさん、凄いんだね》

竜真の説明の途中から、リーシャの顔色が悪くなっていく。

シンがニヤルマーがバレイラが誉めて行った。

リーシャは目を見開き建物を見てから、ミグを見る。

「…どうした？リーシャ？」

次の瞬間、リーシャが反転し逃げ出した。

「「「あ「「「」」」」

周りが短く声をあげたが、リーシャ以外の一行から見たらその逃げ足は遅い。

あっと言つ間に竜真に掴まった。

そこはミグが捕まえるんじゃないのかと思われそうだが、竜真はミグに目配せして動くなと指示していた。

「ミグ。リーシャさん借りるよ」

リーシャの足をすくい、あっと言つ間にお姫様抱つこの形に抱き上げ、瞬時に消えた。

ミグは竜真の走り去った方を不安そうに見つめた。

「少しは落ち着いた？」

竜真はリーシャを座らせ、宥め、様子を見てから隣に座る。

「…弟が立派に育つてたのに驚いた？」

リーシャは顔を背けたまま、小さく座っている。

「自分とは釣り合わないと思った？」

「ミグにはもつと可愛らしく見合う彼女ができると思ってる？」

小さく震えるリーシャの背中を撫で、竜真は続けた。

「シャロールのミグ。3rdのミグ。冒険者ギルドでの二つ名はリユカの追究者。リユカ帝国の資料室の管理者。リユカ帝国の歴史について彼以上に詳しい者は居ないかもしれない。つまりは帝国にとつて見過ごせない人物なんだ。だから、彼はシュミカに居を構えさせられている。」

食堂と服屋については食堂と服屋はミグの昔のパーティー仲間が頭に座ってる。店に名前についてはリーシャからとつたらしい。

歴代の彼女は二人。

髪と瞳はリーシャと同じ色。

結局振られていて、今は完全なる独り身…

えっとおゝ他には…そうだそうだ。マイヤー侯の次女、エバンゼリン・マイヤー嬢に口説かれてるらしいが、眼中になし…」

竜真がいきなり始めたミグの経歴説明にリーシャは竜真を見つめる。竜真が何を考えているのか分からなかった。

「女の子って地位や財力ある男が溺愛するとなると、逃げるのが一般的なんだよね。ペラペラ喋ってきたけど、つまり、何が言いたいかと言われたら、ミグはイイ男だから愛してくれているままに愛されなさいってこと。人間、言いたくない過去、知られたくない過去なんて、さらにあるんだ。特にリーシャは選ぶ道なく春を売っていた。でもそこから助け出したのは誰？僕でしょ？その場にミグも居た。でもミグの想いは変わらなかった。リーシャと言う人間が好き。身分違いなんて嘆かないでね。僕もミグも貴族でも王族でもない、しがない一般人なんだから」

こんなしがない一般人が居たら、他の者は何になるやら。竜真のおどけた言い様にリーシャは吹き出してしまった。

「そうそう。リーシャさんは華やかに笑っているのが良く似合う。ミグなんか顔が少し良くて手が器用で背が高い好青年ってだけなんだから、何にも気にしないでミグにしっかりと抱きついてなさいって」

次の瞬間、リーシャは身体が浮いて驚きに固まっていると、ままたげられた。

「竜真、投げるな！」

気が付くとリーシャはミグの厚い胸板に頼りがいのある腕に包まれていた。

「ミグ？」

「リーシャ…何を気にすることなく、その身一つで嫁に来てくれ。」

「…本当に私でいいの？中央にも私の客が何人も居たわよ？」

「気にするな。これからは俺とずって一緒なんだ。何か言われたら…実力を持って潰してやる。俺はリユカの歴史研究者…王家転覆並みの黒歴史も…3rdを舐めるなよ？…まあ竜真には負けるが…」

ミグとリーシャの傍に来ていた竜真に最後の言葉を言えば、ミグしか見ていなかったリーシャは近くまで来ていた竜真にビクツとした。

「ふふつ。僕が本気で何かしたら世界がおかしくなるから」

ふふつじゃないって…

リーシャはアハハとだけ笑って済ませることにした。

竜真、リーシャ、ミグが戻ってきた時、そこは混沌としていた。

「…忘れていた」

ミグが遠い目をしていて、ポツリと呟いたので、竜真とリーシャが不思議そうに見つめる。

「うちの従業員は…好みが俺と似ている」

…つまりは…竜真は回れ右したが、ミグに掴まった。

「…わかった。逃げない。それにしても」

見事に可愛らしく飾られたバレイラ。

それに対になる格好で可愛い女の子にされてしまってるのは口
イ。

若草物語のジョーのみたいだ。と、竜真が笑うのは勝ち気な少女に
されてしまっているシン。

そして、しくしく泣く姿が儂さを演出してしまい、妙に色気ある美
人にされてしまっているニヤルマー。

「…てんちよー、オーナーがきたよお」

同じ意匠で対に作つてある白い服の少年と黒い服の少女が、同じ顔
をして店の奥に声をかけた。

「お！ミグ、帰ったか」

ミグ以上の身長は初めてかもと、竜真は苦笑した。

てんちよーと言われた男はミグを越える長身で、アフロでちょび髭
の樽の様な男だった。

「ダイオン、帰った。ところで…これは一体…」

「マモーとミモーの仕業だが…俺にも何故女装させたかは分からな
い。まあ、飾りたてがいのあるやつを家の前に放置した奴が悪い」

どんな理屈だよ…ツッコミは心の端に追いやり、リーシャを見れ
ば、リーシャは既に着替えさせられ済みだった。

変態の巢に來たようだ…竜真は足を一步下げた。
瞬間に竜真の両腕に絡み付く物体どもを…竜真はミグと樽…もとい
ダイオン目かけ投げたのだった。

56・ミダ宅（後書き）

マーモー！ミーマー！って分かる人いるのか？

リーシャに逃げられ、結局お宅拝見できませんでした…

57・凸凹夫婦

無事だったのは竜真とミグだけで、他は皆、大変なことになっていたが、何とか男は男ものに着替えることが出来たようだ。

「それにしても……」

目の前にあるのはリユカの宮廷料理にゲテモノ料理、竜真が知るかぎり8カ国の田舎料理はある。

「節操がないって言うか」

「それはここが追究する飯屋だからだ！」

突然の声の乱入に見てみれば、ベリーショートの金髪で碧眼が燃え上がっている印象の褐色の小さい美女が料理人の服を纏い、お玉片手に仁王立ちしていた。

「この店は料理を追究する奴が集まる店。料理長のミルワだ。ダイオンと共にミグと旅していた。冒険者ギルドのランクはA」

元気と言つか活発なと言うべきか、ミルワは華やかな笑顔の持ち主だった。

その脇に、先程の服屋の店長が並ぶとミルワは小さな子どもようだった。

「改めて自己紹介だ。俺はダイオン。ギルドランクはミルワと同じくAだ。それから一つ言っておく！ミルワが可愛いからって手を出すなよ？ミルワは俺の嫁だ。可愛いだろ？」

完全な惚気に一同どん引きである。

「可愛いはよせと言ってるだろ！木偶の坊！マモーとミモーは？」

「お仕置きの本まつり縫いの真っ最中だ。全く、その手の趣味がない奴に女装させるのはいかがだと思っよ。あ、マモーとミモーは俺達の子もだ。飯屋の方に長男のリオーが居る」

過激な凸凹夫婦のやり取りを止めたのは、慣れているミグだった。

「さて、こちらも自己紹介するぞ？まず覆面がリウマ、その隣がニヤルマーで、シン、ロイ、バレイラだ。それから、ミルワ、ダイオン、やっとリーシャを見つけた。リーシャ、来てくれ」

ミグはリーシャを自分の脇に立たせる。

「リーシャだ。俺の花嫁だ」

驚いたのは次の凸凹夫婦の行動だった。

ミグの腹に二人の拳がめり込む。

「ミグ、おめでとう」

手荒な祝福に竜真は笑い、リーシャ以外は唾然、そして、リーシャはくの字に折れたミグにオロオロしていたのだった。

「あゝ硬かった」

「肉体労働から離れているくせに硬くなるんだ」

思い思いに感想を言い、手を振りミグの腹を殴った反動の痛みを逃している凸凹夫婦。

「よつやく2ndに上がるだけの経験値に上げたんだ。当然だろう？」

「「受けんの？」」

「受ける。リーシャを嫁にするなら、そのぐらいの甲斐性は必要だ」

堂々と言い張るミグにリーシャは困っている。

この言い合いに竜真はニヤニヤしながら「目の前の料理をニヤルマー、シン、ロイ、バレイラに説明しつつ食べていた。

「まったくミグの男の甲斐性のレベルの高さはありませんよ」

「リウマ様、あなたは人のことを言えません」

「ニヤルマーさん、言うじゃないですか！」

「にしてもリウマさん、料理のことまで詳しいですね」

《美味しい》

竜真がにやつき、ニヤルマーが苦笑。ロイがニヤルマーにツッコミ、シンは感心している。そして、バレイラはゲテモノ料理を食べながら感動していた。

「バレイラ…君には是非とも連れていきたい店があるよ。」と、竜真は嬉しそうにしている。

そんな彼らはさておき、ミグ達は男の甲斐性について話し合っていた。

「元々、俺がリーシャを見つけたら、店をお前らに経営まで任す予定なんだ。俺の稼ぎが減るならベースアップは絶対だ。」

「経営委譲なんかしたら、作っていらなくなる。経営はお前がしろ。」

ヒートアップする彼らを余所に、食事チームはギブアップしたニヤルマーとシンがぐったりしているのを尻目に食事を続けている。

「ミグ、貧乏くじ〜」

「趣味も程々ですね」

《おかわり》

竜真とロイは冷やかし、バレイラはマイペースに食べている。

「バレイラに負けた」

「シン君…私達は人間でいましょうね」

「ニヤルマーさん…」

ニヤルマーとシンは友情を育んでいる。

何とも言えない空気が漂うなか、ミグお帰りなさい会はミグとリーシャが何も食べないうちに食料が尽きそうだった。

57・凸凹夫婦（後書き）

濃い夫婦が出てきた…

さて、前回のマーモー！ミーマー！のネタ分かった人はきつと25
オーバーだ。

にしても…お宅拝見！orz

58・リウマ旅立つ

「ミグ、凄くないか！この人、1stのリウマだって？」

食事会にようやくたどり着いたミグをバシバシ叩く凸凹夫婦にミグはため息をつく。

「いくら物理防御魔術をかけといっても無駄そうだね」

竜真は実に楽しそうだった。

ピンっと指を弾く度にミグが叩かれている部分が鈍く光っている。

「やっぱり絶対物理防御は難しいなあ」

「……………竜真、俺で遊ぶな」

ミグはすっかり脱力してしまった。

「かなり呑んだな？」

「ふふつ。美味しい料理には美味しいお酒は大人の嗜みでしょ？ね？ニヤルマー」

見ればニヤルマーはミグに助けを求めようと手を伸ばし、首をナマケモノ並みのゆっくりさで振っていた。

早く振ったら一発で昇天するだろう。

その背中をシンが擦り、ロイが水を差し出している。

《火酒の樽をあけたよ。》

バレイラの説明にミグは再びため息をつく。

「火酒…」

「ニアルマーなんかコップ五杯しか飲んでないのに」

「五杯はよく呑んだほうだ！」

「まだ呑める〜」

「シン、ロイ、バレイラ、竜真を止める！三人なら手荒なことはされん」

ニアルマーにジョッキを持たせようとしている竜真を三人に止めさせた。

空になっている樽を見てミグはゾツとする。

酒に弱いなら一口、強いと自負するものでもジョッキ三杯で昏倒する代物を一人で樽ほぼ全部呑んでも昏倒しない。

「それにしても…笑い上戸の絡み酒だったんだな」

初めて見る竜真の酔った姿にミグは呆れたのだった。

ニアルマーをダイオンが担ぎ、ミグの居住部分へと向かう。

居住部分は二階には外階段と繋がる玄関があり、台所、食堂や書庫、

書斎があり、服屋と飯屋の事務所があり、双方が内階段で繋がっている。

三階が主寝室や客間だった。

凹凸夫婦らは別に家があるが、ミグが長期留守になるときには、たまに泊まるように客間の一つが凹凸夫婦とその家族用になっていた。

「ほら入った」

ミグが鍵を開け、まずダイオンを入れた。続いて、リーシャ、バレイラ、ロイが入り、シンが入ろうとしたときだった。

シンの後ろから玄関を覗き込もうとしていた竜真の更に後ろから声がかかる。

「1stのリウマ様ですね？」

昼間、ミグの家に来る前に寄った冒険者ギルドの受付にいた青年だった。

「ん〜？そっだよ？」

「ブジュールム王国とバナハス王国の間で開戦しました。ギルドからの撤退要望にも関わらず、3rdがブジュールムで二名。ランクAが六人バナハスに組していることが判明しました」

サナラン半島でマケロ鉱山を巡るバナハス王国とブジュールム王国の戦いは最悪の道を辿ったようだ。

「お仕置きに行つてほしい？」

竜真の目が怪しく光る。

「ギルドの規定により、ギルド命令無視への制裁をギルドハイマスタ―連合より通達いたします。」

青年は一礼すると階段を降りていく。竜真は肩を落とした。

「ミグン家入りたかったけど、ハイマスター達の通達かあ…ミグ、予定通り宜しくしていい？」

「仕方ないな」

ミグのその一言が切り替えになり、竜真が手摺りからまま一階に飛び降りる。

「後、お願い」

竜真が駆け出す。

紅い火の塊はシャロルの出口に向け、目に求まらぬ早さで闇に消えたのだった。

「ニヤルマーには…明日の朝は無理だろうから明日の夜にでも話しか…シンも入りきって扉を閉める。話は明日になってからだ。部屋割りはバレイラは一人で使え。ロイとシンは同じ部屋で構わないな？さあ、今夜は遅いから寝ろ」

「私は？」

心細そうにリーシャがミグを見上げているとシンがにやけ、「もちろんミグさんここですよねえ」とリーシャの背中を押し、ミグに押しつける。

そんなシンにミグがニヤリと返すと、リーシャを抱き上げた。

「当たり前だ…リーシャ、もう待ったはなしだからな」

ミグは当たり前だとシンに返し、後はリーシャの耳元で囁く。リーシャは困惑しながらミグの腕に納まっていたのだった。

それは紅い風だった。

人も魔も僅かなものしか認識できない。

紅い風が戦乱の地へ駆けていく。

「ギルドの命令無視の代償は…怖いよ」

風は小さく呟いたのだった。

58・リウマ旅立つ(後書き)

竜真さんお宅拝見ならず…

ミグ…お預けだったんだね？

59・念のため(前書き)

久々の一人行動：

59・念のため

シャロルを発ち、三日目の昼間、戦況を見た後、竜真は戦場地に一番近い村に居た。

戦場は生き物のように活発に息づく場所を変化させる。

そのため、竜真が着いた先の村人達は、いつその天災以上の人災が自分達に降り掛かるのか、息を潜め、戦々恐々としていた。

そこへやってきた覆面の竜真を村人達は自分達に何かするつもりではないかと怯えて戸内に潜り込む。

「…仕方ないか…でも…冒険者ギルドから来ました。村の代表者はいらっしやいませんか？」

竜真はため息とともに村人らの様子にぽつり呟くと、思い切り息を吸い、声を大きくし、家に籠もった村人らに聞こえるように叫んだ。しばらく待っていると初老の男性と野良仕事で鍛えただろう体格の良い若者が来た。

「1stのリウマです。冒険者ギルドハイマスター連合から、この村の村長に協力を請い、また、周辺の村に戦火を飛ばすなと命令を受けております。朝、戦場に近い町や村を見てきましたが、この村に来る確率が一番高いようです」

竜真の説明に初老の男性は頭を軽く横に振る。

「わしらはこの村から離れん。離れたところで生きてはいけんのじやよ」

「……………早くて今夜、バナハスがこちらに来ます。明け方にはブジ

ユルムがこちらに来る。その前に戦闘を止めてみせましょう。しかし、万一があるといけないので、村の方々の避難所を作りたいと思います。協力いただけますか？」

村人らが諦めていようと、竜真のやることは変わらない。

ハイマスター連合からは冒険者達の立ち退きが依頼だが、日本人として、戦争について学んできた人生が村人を見過ごせないのだ。ここに来る前に立ち寄った村にはこうした避難所を作り上げてきた避難所位置を部外者が知ってしまうは無意味かもしれないが、それでも今回の戦については戦災を免れる可能性を少しでもあげられら、それで良いと思っっている。

竜真は有無を言わず村長を自分の家に案内させた。

家に入ると、床板の一部を外し地面を露出させる。

「さて…村長さん。村の総人口と男女の割合を教えてください」

「今は戦に人手をとられとるから…四十六名、男が十三名、女が十三名じゃよ」

「五十人ぐらいが目安か…」

竜真は地面に手を当てて、場に居る村人には聞こえないように詠唱する。

次の瞬間、深い縦穴が竜真の手のひらの下に開いた。

村人達の動揺を余所に、「まだ近づかないでくださいね。」と、注意してから竜真はその中に飛び込んだ。

村人が何も言えず、その行動を見守っていると、何度も地面が揺れ、穴から土煙が上がる。

近づくなと言われている手前、村人達は近付くことができない。

しばらくしていると、地下から声が聞こえてきた。

「ロープを垂らしてくれますか？」

村の若い男が長いロープを持ちに行き、大黒柱に括ると、ロープを穴に垂らした。

竜真は穴から出ると、その長いロープに数ヶ所に瘤を作り、再びロープを穴に戻した。

「これをロープではなく、縄梯子に変えて下さい。ここに掛ける場所を作り、そこに作った縄梯子をかけて下さい。このままだと探索にかかった場合に見つかります。それから、村長と代表者…三名程付いてきてください」

ロープに瘤を作ったのは、村人が降りやすくするためのようだ。竜真が降りた後、村長は縄梯子作りを残る者に命じたのだった。

「これは…」

「大きさ的には五十名が横になって入れます。区切りもあるので、男性と女性を分けることも出来ます。」

そこには巨大な地下空洞があった。

所々に壁があり、強度を保っているようだ。

村長を含めた四人が絶句している。

また天井を見れば拳大の穴が散らばっており、光線が下へと伸びて

いた。

「縄梯子が出来しだい、身を隠してください」

「……………重ね重ね、ありがとうございます」

「僕の目の前でうるうるされると、気が散って戦えない。だから、隠れていてください」

竜真の業は派手なものが多く、地形的にこの場所で戦いたくとも、村人が居ると、行動に支障が出るのだ。

「ありがたがれる筋合いはないのですよ。仕事ですから。もしかすると、明日の朝にはここが焼け野原になっているかもしれないですよ」

「命さえあれば、何とかなる。あなた様のお好きなように動かれると見え」

竜真の表情は覆面で見えずとも、その声や態度からは村人達への労りが隠れている。

村長は竜真にありがとうと礼を言ったのだった。

ありつただけの食料を持って村人達が地下に潜った後、竜真は村を一望出来る丘の上に居た。

「全く、ギルド命令には従って欲しいよねえ…まずはブジュール
の3rdからって言いたいけど…僕を動かした罪…ブジュールとバ
ナハス、両方に償っていただきましようかね」

覆面の緋色の布が闇夜になびいた。

59・念のため（後書き）

今回は土竜真せいらまでした。

さてさて竜真さんたら、村人さん達に対してツンぱいですね…なあに考えてんだか…

60・命令違反の理由(前書き)

おちよくり：戦い 8：2ですが、軽く戦い描写あります。

60・命令違反の理由

「うわぁ！」

その男は悲鳴を突如として上げた。
周りに居る人々、ブジュルムの兵士達も動揺している。

「安定感が悪いからじっとしていてくれる？」

そう楽しそうに言うのは全体を様々な赤でコーディネートした覆面の男だった。

ただし立っている場所が大問題だ。

なんとブジュルムの兵士達の総指揮しているブジュルム王子ザムンダ王子の頭の上に立っているのだ。

「さて、ブジュルムに組している冒険者を呼び出してもらえるかな？」

その異様な光景に周囲は混乱している。

しばらくしていると、二人の男が近くまでやってきた。

「まさか…」

うち一人の男は覆面の男を見て、心当たりがあるのか、途中から速度を上げて近寄ってくる。

「はいはい。そのまさかだよ！心当たりあんでしょーに！ちゃんと命令聞かないから僕が出張ってくる羽目なんのさ。プロスの良かったかもしれないけど、僕で我慢してね？」

蒼騎士の方が一国の王子として育ってきた経緯があるため、緋色のリウマよりは公平で公正だと言われている。

「さてさて、君らがギルド命令を背いた理由を………あっちの物影で教えてくれるかな？」

次の瞬間、竜真が消えた。

ただし竜真が上に乗っていた王子も一緒に……

「君は母親、で、君は嫁さんが人質なわけだ。やだなあ〜ブジュルム……契約違反じゃん」

軽薄な言葉遣いだが、契約違反を唱える声はゾツとする程に冷気を含んでいる。

3rdのムサフはお決まりでブジュルムの都に住む病気の母親が捕らえられていた。

もう一人、3rdのアダは都で薬屋を営む妻を人質に取られていた。

「さて、王子様。戦に撤退令の出ている冒険者を人質として使うのはギルドとの契約違反だ。…ブジュルムからギルドは撤退する。この意味…王子様なら分かってるよね？」

冒険者ギルドが国から消える。

つまりは流れてくる外貨が消える他、冒険者に関わる仕事をしてきた者の仕事が失われる。

さらに冒険者ギルドに仕事を妨害されなくなれば盗賊ギルドの力が増す…

国が混乱することは間違いない。

「さて…3rd諸君。1stが協力を求めたら？」

「…ご足労をおかけしました。どうぞ、思う存分にお使い下さい」「非常時の1stは絶対です」

膝をつく二人に竜真はこれまた楽しそうに言った。

「バナハスの総大将も拉致ってくるんで、これをヨロシクね。ここから西にある両軍の間の村においでね。お先に」

これ…とは勿論ブジュルムの王子である。

3rdらはブジュルムの王子に刃を突き付けてブジュルム兵に囲まれながら竜真の指定した村を目指したのだった。

バナハスでは六人の冒険者が密談していた。

彼らはそれぞれが小隊長格で働いていたが、故郷も違えば、バナハスに忠誠を誓ってるわけでも、定住しているわけでもない。

共通点があるとすれば、宿に女を連れ込んで、寝ている隙にギルド証を盗まれた、ちよつと残念な人達と言うところだ。

「…俺、別件の依頼途中なんだよなあ…違約金発生しそうだよ」

「いや、それを言うなら俺だって…」

「なあ、ギルドから撤退令出たからには来るよな？」

「…俺ら死ぬかもな」

「一か八かギルド証を取り戻しに行くか？やっぱダメだ、自由がないのなら生きてる実感しねえ」

「そんなことしたら、あいつらの命もねえ」

ボソボソと話している彼らは小隊長と言えど、戦用の兵器でしかない。

彼らが逃げ出さぬ様に、ギルド証を取り上げ、見張りを立てている。見張りと言ってもこちらには関心もなく立っているだけだ。

ただし、見張りは彼らだけでなく彼らの小隊にもついていて、反抗すれば自分の部下も人質にされてしまう大変な厄介な目に合っていた。

誰とて自分のために命を簡単には捨てさせられない。

「ふ〜ん、ギルド証を取り上げられて、物質ものしちがあるから参戦するしかないんだあ〜…」

「だ、誰だ？」

自分達に関心のない見張りにしか囲まれていないはずなのに、いきなり真後ろから声上がり、六人の冒険者はギョっとして戦闘態勢に入る。

それは闇から突如現れた暗い炎。

戦場で尚且つ緊張状態のランクAに気配を察知させず近寄れて、さらに覆面をした赤を纏うのはただ一人。

1stのリウマ。緋色のリウマが断罪に来たと冒険者達は悟ったのだった。

「冒険者がギルド証を取られるなんて、きつとどうしようもなく問抜けな理由だろうけど、あいつらの命って誰を人質にされてるの？」

確かに問抜けな原因だが、ギルド証を盗みだそうと思えば出来ないわけではないが、自分達が原因で何の関係のない奴が死ぬのはいただけない。

「俺らは小隊長格にされているが、反抗すれば部下にされた奴らの命をもらうと言われている」

「うわあ〜下劣う〜！ブジュルムも馬鹿たれだけど、バナハスもお馬鹿ちゃんだ。…なんせ、僕を動かしたんだから」

竜真の笑みを含んだ声にある刺と冷気で、バナハスで身動きが取れなくなっていた六人は恐怖に固まった。

「じゃあ、お馬鹿ちゃんの総大将を拉致に行くから、あそこに見えるブジュルムとバナハスの間にある村において」

竜真がまるで街中を歩くように離れていく。

ただ常人には見えない速度ではある。優雅だが細かく蠢く手の先でしなる鞭に半径五メートル以内の全てが一瞬にして薙ぎ倒されていく。全く気配がしないため、気が付いたら倒されている兵も少なく

はない。

時折聞こえる呻き声にバナハス軍は混乱に落ちた。

「無双発動つてね」

竜真はバナハスの陣を見事に真つ二つにして、尚且つ、殺さずにその兵力を八割も減らしてみせた。

こうして竜真は総大将であるバナハスの名将ガルメッツを六人から離れてからたった十分で見事に拉致してしまったのだった。

60・命令違反の理由（後書き）

サブタイを拉致、無双、理由のどれにしようか迷いました。
不殺ですが竜真さん無双です。

そーいや、竜真さん、剣を抜かないなあゝ

戦闘描写（？）何日ぶりだろ？

基本的にはほのぼの系旅日記を目指しています。

61・守護神

ブジュルム王太子ザムンダとバナハスの名将ガルメッツが一つの席に着いていた。もとい、着かされていた。

脇に立つは1stのリウマ。

覆面の奥に隠された目が笑っている。

それを囲む総勢八千の兵はその異様な光景を息を呑み、見ていることしかできなかった。

「お二方ともギルドとの契約違反で冒険者ギルドが両国から撤退するがいいか、ブジュルムがマケ口鉾山を諦めて不可侵条約を結んだ上でバナハスがブジュルムに魔石の輸出を他国よりも譲歩するのがいいか、選んでください。」

「そんな一方的な」

「一介の冒険者が」

二人が竜真の理不尽を責めようとするが、竜真のポツリ呟いた言葉ガルメッツには「サルムのシャインちゃんは可愛いですね」、王太子には「貴方の素晴らしいコレクション…国民感情を悪化させるでしょうね」と呟いたのに顔を青くしている。

「「な、何故それを…」」

異口同音に青ざめるのを竜真は鼻で笑う。

「1stのリウマについて知らないんですか？じゃあ気にしないで下さい…情報はどこからでも入ってくるですよ」

竜真の愉快そうな様子に臍を噛む二人は国に相談すると言い出した。

「その前に冒険者達の人質及び物質の返却をヨロシクね。…これはギルドへ対する契約違反だ。これを見過ごす代わりがさっきの講和の提案ってこと、忘れないで下さいね。さて…回答は明日の昼までに」

竜真は冒険者達に着いてくるように言って、その場を離れたのだった。

「うん…滅ぼしちゃってもいいかな？ブジュルムもバナハスも」

竜真は鞭をしならせた。

結果から言えばブジュルムとバナハスはギルドの数字持ちとは言え、十人満たない数しかないことから口封じしてしまえと夜半に冒険者達に攻撃を仕掛けてたのだ。

「不殺で生き残ってね」

ランクAの冒険者達は竜真の付けた不殺の条件に口を引きつらせたが、それぞれに武器を取り出している。

3rd達は頷き、各々の武器を構える。

そして…竜真はいきなり巨大な水の塊を二十発程にぶっ放し、混乱状態が発生すると、水の塊が当たった辺りに次々と雷撃を飛ばす。その後は鞭を使い、包囲していた敵兵を倒していく。

「なあ…俺らいらなくね？」

「強すぎる…」

ランクA達の動揺を苦笑して3rd達が剣を構えなおす。

「おい。お前ら良く見ておけよ？あれが1stだ。2ndの戦いは見たことあるが本当に格違いだな…」

目の先には吹き飛ばす人の群れ。

竜真を中心とした10メートル以内に誰一人近付けない。

それどころか弓隊は魔術で迎撃される上、魔術攻撃は完全防御されている。

「俺達も少しぐらい働かないと後で怒られそうぞ」

「ああ。そうだな。行くぞ」

3rd、Aランク達も包囲陣突破に駆け出したのだった。

その間も竜真は動き続ける。

紅い風となり、敵陣を翻弄し続けた。

目の前に片膝を付く男に竜真は命令する。

「ここにブジュルム、バナハスからの冒険者ギルドの完全撤退を宣

言する。闇羽あんう、ハイマスター連合に連絡してください。」

戦いが始まり一時間。

八千人で出来た包囲網は冒険者達を残して誰一人として起きている者は居なかった。

竜真以外の八人は汗だくに疲労で立っているのもやっとだが、竜真は精力的に動いている。鞆から通信玉を取り出し、火の賢者アサムへと繋ぐ。

「通信玉……こつちだ…アサム様、夜分申し訳ありません。リウマです。ブジュールムとバナハスから冒険者ギルドが撤退します。盗賊ギルドも動かしますので、魔術師ギルドの対応をお願いします。……いやですね。ギルド撤退はブジュールムとバナハスによる契約違反が原因ですよ。僕、基本的に最悪にはならないように機会はありませんから、契約違反と僕の善意の踏み躪りでお仕置きです。……ええ。ハイマスター連合の命令で動いています。……はい。では」

通信玉をしまつと、竜真は指をパチつと鳴らす。どこから現われたのか、竜真の足元に男が現れ片膝をつく。

「影、大首領会へ連絡。冒険者ギルドはブジュールム、バナハスから撤退した。庶民に手を出さないように。ただし期間は一週間に限る」

闇羽はハイマスターの手足。

今回はハイマスター連合と竜真の間に入り連絡役をしている。影とは盗賊ギルドでの竜真の部下達のことだ。

今回は保険として盗賊ギルドの部下を連れてきていた。誰一人として死ぬことなかった戦場で竜真の声が静かに通る。

これからブジュルムとバナハスはツケを払うことになる。
ツケの中に王族、貴族の血が交ざることがあるかもしれない。

「ちとやり過ぎではないかの？」

「まさか…せつかく見逃してやろうとしたのに僕を侮って闇討ちしようなんて思うからいけないのですよ。僕ら1stは冒険者達が自由を謳歌するための守護神。1stは国を滅ぼす。それを実証しただけです」

ハイマスター連合への報告のため、竜真はギルドの総本部に来ていた。

覆面をとり、ゆったりと椅子に座っている竜真にハイマスターの一人がからかうように問えば、当然のことと答える。

「八千対九人か」

「実質五千対一、三千対八と言ったところじゃないのか？」

「少しだけ骨が折られましたよ。時間も長かったし。それにあいつら国に僕が出した案件を持ち帰りもしなかったからには本国には多少の配慮しました。ちゃんと期間付けたんですから、いいじゃないですか。冒険者ギルドとしてはギルド撤退。僕の個人的なお仕置きは盗賊ギルドを使つての蹂躪。まあ、魔術師ギルドは一応傍観つて形で我関せずですし…まあ、三日の後次第では国が潰れる可能性は

ありますが、善政を敷けていけば、潰れないでしょう。それだけの話です」

竜真が五千対一を少しだけ骨が折られましたとだけいい、にこりと笑えば、ハイマスター達はニヤニヤとして笑いあう。

「1stに逆らう云々よりも緋色のリウマに逆らってはいけないのかもしれないな」

「僕に逆らってもいいですけど、僕よりも納得できる理由を持って逆らってもらいたいですね」

竜真はにやり笑えば、会議場全体の空気が緩む。

「リウマの顔は本当に鑑賞に値する」

「あはは。ありがとうございます」

「そう言えば養子を三人迎えたらしな」

「可愛い子達ですよ。ギルドの試合に出そうと思います。Cの試合とも思いましたが、Bの試合に出してみるつもりです」

「ほお、優秀らしい」

・
・
・

しばらく竜真とハイマスター達の歓談は続いたが、竜真が席を辞し

て、この会議は終わり、ハイマスター達の一人が呟いた。

「楽しい1stがいるおかげで退屈しないですみますわ」

会議場に残っていたハイマスター達は異口同音に言う。

「史上最高の1stをこれから鑑賞していただくではないか」と…

61・守護神（後書き）

なんか竜真さんの権力が強すぎ……
やりすぎです。

62・コーディネート(前書き)

ロイ君の飲酒シーンあり。

ファンタジーです。日本でもなければ実在しない国のお話ですよ。

62・コーディネート

「ところでリウマさんはいつ帰ってくるんですか？」

バレイラ、シン、ロイが竜真から接近戦の一つのやり方として教わった合気道の基本型と組み手、空手の型の練習を終え、ミグが待つ夕食の場へ向かう。

食卓につき、食事が始まり、シンはミグに聞いた。竜真が居なくなつた翌日、二日後には都に向けて出立する予定だ。

「そのうち帰ってくるんじゃないか？とりあえず、竜真帰つてこよと来なかつと都に行かなければエントリー出来なくなるから」

ミグがミモー特製ひらっひらエプロンをしていようと誰一人突っ込むこともなく朝食はあっさりと過ぎていく。

《ミモーちゃんのエプロン、やっぱり可愛いね》

いや、一人気になっている人物が居たようだ。

ミモーに朝から全身コーディネートされているバレイラは毎食変わるミグのエプロンを気にしていた。

一緒に食事をしていたミモーがミグに聞いた。

「ミグおじさま。バレイラさんの衣装はどうかしら？本番前までに動きやすく可愛らしい服を作りたいの」

「この服では防具は付けられないだろ？」

「父様に頼んで胸当ては一体型になっているわ。暗器使いであるバ

レイラさんだからこそその袖のひらひらだし、腰回りも薄地の帷子を織りこんであるから、結構丈夫なの」

「重さは大丈夫なのか？」

胸当てが一体型で帷子が折り込まれているとなると、重いのではないかとミグが尋ねる。

《錬武を通してでも平気だよ。ただ、このスカートだと蹴りにくい。》

彼ら四人の訓練は厳しいものだ。それに耐えうるなら、大丈夫なのだろうが、バレイラは体術なら関節技と蹴りを得意としているため、蹴りがやりにくいのは大問題だ。

「……………なら前に使った竜真の意匠で……………こんなのはどうだ？」

以前、竜真がデザインした物を見せれば、マモーミモー、そしてダイオンが目を輝かせる。

「なるほどな。こうすれば、裾に広がりが出るから、足技が出しやすいのか、足はズボン…よりも形が出やすそうだが、品は悪くない。スカートの中は見えないな」

「タックをとると竜真は言っていたな。ただ、袖が微妙にバランスが悪い気がするから…こうして上着にしたらどうだ？いや、むしろ……………」

ミグがデザインを書き終え渡せばリーリーの店員達の目が光る。

「ニヤルマーさんにロイさん。シンさんもバレイラさんと似た意匠の色違いになるわけですね！……出立前までに仕上げます」

マモーミモーはそれから全速でご飯を食べ、ダイオンを急かし、リーリーへと走り去っていった。

「俺らがデザインした意匠を着た新米冒険者のギルド戦か…目立つな」

「……………」

「ニヤルマー、言いたいことがありそうだな」

バレイラとお揃いの意匠と聞いて、ニヤルマー達の視線がミグに集中する。

きっと初日のことが根にあるのだろうと思うとミグは吹き出さずにはいられなかった。

「大丈夫。ちゃんと男物だ。それぞれの得手に合わせて意匠を作ったから安心しろ」

「さつき横から見たら、とても素敵でしたよ。きっとバレイラを守る騎士のように見えるわ」

リーシャが援護したが、それを聞いてバレイラがふふっと笑っている。

「体術で言ったら一番巧いかもしれないバレイラを守る騎士か…もつと鍛練しないとな」

バレイラは持ち前の器用さで関節技が巧みで、バレイラとの組み手は注意が必要だ。
組み手と言っても型を使つてのものなのだが、本気で戦えば近距離攻撃に暗器とかなり苦戦する相手である。

「そうだな。バレイラはスカートだが、暗器が納める場所が多く、体術に応じてスカートは広がりやすく、剣も使いやすくしてある。シンはショートソードと得手の足技と盗賊用ツールを隠し持てるように変えた。ニアルマーは暗器、弓、格闘と盗賊用ツール。ロイは魔術師とばれないようなものにしてある。結局槍を持つと決めたいだから、まず魔術師とは思われないだろうがな。色違いで同じ服を二着と礼装になるような同じ意匠の服を一着作ってやる。これが俺からの別れの贈り物だ。まだしばらく一緒だが、直にお別れだ」

「そうでした。すっかり忘れていましたが、あなたはリウマ様と依頼関係にあるのでしたね」

妙にしんみりとした空気が流れたが、それを打ち壊す声が響いた。

「ミいグさぁーん」

「……………ロイ？ダイオン？」

「え？ロイ？飲まされてる？」

《べろんべろんだね》

「昨日の私に引き続きですね……………」

ダイオンが面白がってロイに飲ませていたようだ。

それに気がつかなかった各々はそれぞれに反省していた。

「さて、今夜はお開きとしましょうか…ロイ君は私が預かるとします」

ニヤルマーがロイを担ぎ上げる。

シンはニヤルマーに付き添い、ロイに飲ませる水を用意しに炊事場へ行く。

バレイラはダイオンにガンガン酒を注いでいた。それをミグが笑いながら見ている。

「ダイオン。バレイラに飲ませるなよ？」

「ミグ、お前の差し金か！バレイラにそんなこと出来ん。」

「バレイラ、へべれけにしてやれ」

バレイラが頷き、ニコニコとダイオンに注ぎ続ける。

ダイオンが杯を空けねば、竜真直伝の笑顔でごり押し、空ければ即座に注ぐ。

こうして竜真留守の日の夜は過ぎていった。

62・コーディネート（後書き）

改めて、口づるさく。ロイと同じ年の頃の方はお酒なんて呑んじや
いけませんよお〜。

お酒は現実の日本では20歳からですからねえ〜。

63・受付

「リウマ様…」

「ニヤルマーさんがおかしい」

「ニヤルマーさんがおかしいのはいつものことだよ」

「お前ら、もう少しニヤルマーを労ってやれ」

《ニヤルマーさん、リウマさん中毒なんだね》

「竜真中毒か…言いえて妙だな」

「きつと一日一イジラレしないとイケないんじゃないですか？」

吐息混じりに竜真を想うニヤルマーに変と直球なのはシン。

それをバツサリ斬るのはロイで、フォローするミグに巧いこと命名するバレイラ。

リーシャは大会当日にリーリーの都支店に来るリーリーやリーシャライルの皆と来ることになっている。

バレイラに納得するミグに竜真中毒とはと、またもバツサリ斬るロイをシンはまあまあと宥める。

「ロイ君の言う通りです。軽快な話術で巧みに交わすリウマ様との会話がこんなにも恋しいなんて」

「ニヤルマー（さん）、それ以上言ったらリウマさん（竜真）からしばかれ（る）（ますよ）」

異口同音に近い男三人からの忠告にニヤルマーはバレイラに慰められていた。

曰く、《それだけリウマさんと居ることが当たり前になったんだよね。》と…

彼らは今、都に入ろうとしていた。

リーリーのオーダー服を揃って着た一行は周囲の注目を集めている。だが、誰一人として周りの視線を気にしてはいなかった。

「まずは受付。終わったらご飯にしよう。」

ミグの提案に全員が頷く。

《お腹ペコペコだよ》

「いっぱい食べて力つけようね」

バレイラとロイが食べる気満々なのを他三人は生暖かく見守るのだった。

「さあ、受付に言ってこい」

ギルドのリユカ闘技場入口まで案内するとミグはその場に止まり、四人に促した。

少し緊張した様子の四人は受付の前へ行く。

身なりの良い若い四人に場にいる少々品が足りない冒険者達から野次が飛ぶ。

「坊っちゃん嬢ちゃんが来る所じゃないぜ」

そのダミ声にロイが視線を流す。

「また…ボコボコにされたいの？」

初めて聞く冷気漂うロイの声にニヤルマー、シン、バレイラはロイが声をかけた先を見る。

三人組の冒険者のようだったが、みるみるうちに顔を青ざめさせ、飛ぶように逃げて行く。

「何あれ？」

《ロイ、知り合い？》

シンとバレイラが首をかしげていると、ロイが薄ら笑いに答えた。

「お痛をする、ちょっとしたお間抜けさんに教育的指導をしたただよ」

それを見たシンがブルツと震え、ニヤルマーが呟いた。

「……………一瞬、ロイ君がリウマ様に見えました」

《受付行こう。受付…》

バレイラが話を変えるとロイは可愛らしく笑い、そうだねと答えた

のだった。

「ロイさん、バレイラさんC、シンさんがBでニヤルマーさん…D…本当にこのメンバーでAランクの試合に出るのですか？…Bランクが居るパーティーでしたら、一つ上のランクの試合にも出られると説明いたしましたか…」

受付のギルド職員が自分で説明したことからの結果ながら、まさかの選択に困っていた。

「Bランクの試合になさらないのですか？」

「ん〜僕らの養い親なら間違っことなくランクAの試合に出させるので問題ありません」

「むしろ面白がって出るとおっしゃります」

「Bじゃつまらない」

《CランクでAと戦ったらカッコいい》

誰一人として職員の忠告を聞かない目の前のパーティーに嘆息した。職員が気を確かに動揺を宥めると職員はキュッと口を引き締め、覚悟を持って話を続けた。

「資格はあるので、もう何も言いませんが、自己責任でお願いしま

す。では説明を続けます。一回戦はパーティー数も多いので複数のパーティーに同時に戦ってもらいます。闘技場の舞台内に5人が残ったところで試合終了になります。残った5人の所属するパーティーが二回戦に進みます。二回戦以後は一对一の戦いになります。ルールは舞台から落ちる、降りると失格、殺すと失格、後は期間内に闘技場外での乱闘は失格になります。ふっかけなれても相手にしないように。この試合、決勝戦に勝ったらですが、全員ランクAになります。こちらが日程表になりますので遅れることないように集合をお願いします。ご健闘を」

最後に日程表を渡された一行はミグの下へ戻る。

「Aランクに出ることにしました」

そう告げたニヤルマーにミグは目を見開く。

「一人でもそのランクがいなければ、ランク戦に出られないんじゃないか？」

「最近になってルールが変わったそうで、Bランクが一人でも居ればAの試合に出られるそうですよ。上からのお達しらしいです」

ニヤルマーの説明にミグは首をかしげ、はたと何かに気付いて頷く。

「まあ、曆もランクもないお前だが、竜真と俺が教えてきたんだ。優勝できるかもしれんな」

疑問はミグの中で昇華されたようだった。

「「ミグさん！ご飯」」

シンとロイがミグを見る。
バレイラもこくこくと頷き、ミグを食事場に連れていくように促す
のだった。

63・受付(後書き)

ロイが竜真化中…

64・ランク戦(1)(前書き)

生ぬるい闘い描写あり

64・ランク戦(1)

それはランクAの第五試合だった。十チーム、約七十人が舞台の上で轟^じめいていた。

これは今までの四試合もさほど変わりない状況だったのだが、試合状況もその四試合はランクが拮抗していたからか、第五試合程の見所もなく、乱戦からいかに自分のチームが一人生き残らせるかと言った内容だった。

しかし、第五試合は最初から違った。

まずは十代前半らしき少年、少女が居たのだ。

予選から試合を見に来ている観客も、その舞台の上に居る彼らも首をかしげていた。

ランクの低いメンバーを上げるために来ているため、幼い彼らを守るように展開していくのだなと観客は思う。舞台の上で少女と少年の傍に居る者は、彼らが一人で居ることを疑問に思っていた。だが、それも試合開始の合図が始まる前までだった。

開始合図とともに舞台の四ヶ所で人が弾けた。

歓声が轟く。

それは誰もが予期していなかった展開なのだった。

「作戦を考えましょうか？」

「ハイハイ！個人戦にしたい」

受付後、ご飯を食べて、まったりとした空気の中、ニアルマーが口火を切った。

それにシンが飛び付いた。

「他には？」

ニアルマーはスルーした。

「皆でバラバラになって誰が一番多く倒したか、競争しませんか？」

しかし、そう問屋も卸さない。ロイも個人戦でヤル気満々である。

「他には？」

《私が一番》

三人の意気込みは十二分あるようだ。ニアルマーは長いため息と沈黙の後、確認を問う。

「……………わかりました。しかし、全員が舞台の上で一回戦を終えますか？」

「当たり前」

「負けるつもりはないです」

《私が一番》

ニアルマーが頭を抱えていると、そこまで黙っていたミグが聞く。

「ランクAの実力を知っているのか？」

「ミグさんより弱いのは確かだよ」

確かに俺よりは弱いが…とミグも頭を抱えた。

「シン、ロイ、バレイラ、俺としてはまとまった方がいいと思う。ランクAまで到達できたものは、ベテランが多いからな。しかも今回はBの奴らもお前ら同様に入ってきているはずだ。油断はけしするな」

《じゃあ、意表をつくのは？》

「作戦があるのか？」

《最初は皆でバラバラ、それから敵をやっつけながら、真ん中に集まる。そしたら、いつもみたいにニヤルマーさんの指示での団体戦ってどう？》

「…確かに、特にロイとバレイラがそんな動きを見せたら意表をつけるかもしれん…他には？」

やる気に満ちた目を見回して、ミグは満足そうに頷いた。

「なら、初戦だ。負けるなよ。」

「「「《はい「「「

舞台の四分の一に突如水がかかる。

闘い開始直後なので、まさに寝耳に水だろう。更に電撃が走ったことにより、舞台右上四分の一に居た選手の内、約九割が気絶した。そこから水色の小柄な少年が舞台中央に向かう。

それは少女の周りで突如起こった。

一人目二人目と戦闘不能に陥り、三人目四人目と大の男達が派手に吹っ飛ばされ、五人目六人目は肩肘手首の関節が外れ地べたで悶絶している。

そして赤が印象的な少女はその場から消えた。

一見黒に見える深い緑の服を着た、貴族の子弟のような身なりの良さの十代半ば程の少年が居た。

戦闘開始直後、少年の左右に居た男達が舞台に沈んでいた。

手刀とショートソードの柄を首に落としたらしい。

そのまま前へ突っ込み、魔術師の腹へ蹴りが入ると魔術師は舞台に崩れた。

その魔術師の仲間が大剣を少年目がけて振りかぶっていると少年は態勢を低くし、大剣を持った男の足を払い、腹に踵を落とし気絶させる。

若い少年らしい柔軟さで周りを翻弄していたが、少年は舞台中央に向かい走りだした。

少年に注意していた周りは呆気にとられていた。

一人の男が居た。

周りはその異様な出で立ちに、憂いの含まれた色気ある立ち振舞いをする優男に苛立ちを感じていた。

「なぜ私だけピンクだったのでしょうか…」

優男は薄紅色の服を着ていた。

一見なよつと見えるがイケメンだけに周囲の殺気は増している
試合開始直後、周りの振りかぶられた剣が一斉に男に振り下ろされた。

次の瞬間、剣を振り下ろされた男達は悲鳴をあげた。

男達の手にはナイフが刺さっている。

優男はと言うと、振り下ろされた剣の中心に立っていた。

「私も大人である手前負けられませんからね」

回し蹴りに裏拳にと男達が落ちていく…が、周りの殺気は異様に高まる。

「イケメン許すまじ！」

「イケメンなんて沢山いるじゃないですか！」

「お前のその服が嫌味なんだよ！」

優男は舞台中央に向け逃げ出した…

64・ランク戦(1)(後書き)

あれ？ロイ君が竜真さんに見えてきました

65・リンク戦(2)(前書き)

まだまだ生温い戦いが続きます

65・ランク戦(2)

赤の姫を守る三人の騎士、観客は服を揃えた彼らを見て感歎した。だが、舞台上のその一行の周りは余りに決まった様子に殺気立っている。

「ロイ君、皆の手足に強化の付与を。はい。シン、バレイラ、翻弄しますよ」

ロイの術に全員の足が青く、手に赤い光が纏われた。

「バレイラと私、ロイとシン、背後を守りながら、とりあえず、もう少し減らしましょう」

ニアルマーの指示に頷き、互いのパートナーの背中を守る。

バレイラが構え、ロイは手の内に電撃の塊を用意する。

シンは剣をしまい、無手で構えなおすと、ニアルマーは鞘を抜かずに構える。

乱戦が始まり、十分立った。

舞台の上は三分の一に減っているが、その淘汰された分、敵は強い。気絶や戦えなくなった者は、ギルド職員達により舞台から下ろされていく。

「うわあ〜」

ロイは風を操り、舞台の外に次々に落としていく。

「ぐあ」

ニアルマーが男を一人気絶させると、シンがかなり体格のいい男と戦っているのが見えて、シンのフォローに回る。目配せでシンを一歩下からせると、ニアルマーが男の後ろから側頭部に蹴りを入れた。男はそのまま崩れ落ちた。

「ニアルマーさん、すげえ！足長いとかっこいいわ」

シンが呑気に手をたたく。

「シン、ロイの傍から離れないでください。バレイラは……っと」

バレイラは大柄の女性に苦戦していた。

ニアルマーはバレイラの傍に寄ろうとしたが、大柄の女性の仲間らしき男に邪魔された。

「退いていただきます」

「お前ら、そんな格好してるから、いいとこの坊っちゃん嬢ちゃんかと思いきや、結構やんのな」

剣の鞘同士がぶつかり合う。

大会のルール上、ナイフ等の小さいものはいいが、槍や剣等は布を巻くか鞘をつけたままで戦うことになっている。

「ロイ、シン、バレイラの援護に行け」

ロイとシンが動きだしたことを目視したニアルマーは目の前の男を如何に対処するか思案したのち動く。

「ちっ！体術も使えんのか」

それは竜真にしょっちゅう食らっているチョークスリーパーだった。

「ああ、確かに男性にかけるものではありませんね」

竜真が嫌だ嫌だと言う割にニヤルマーを昇天させるのに多用する業
だった。

「くっ…」

男の体から力が抜ける。

「やれやれですね」

ニヤルマーがバレイラ、シン、ロイの居場所を把握しようとして首を回
せば、舞台には規定の十人が残るばかりだった。

「ニヤルマーさん」

「やっぱり僕ら」

《強いでしょ？》

十人中、四人はニヤルマーらだ。残りの六人も三人が同チーム、二
人が同チームだったため、この第五試合は四チームが次の試合に進
むことになった。

65・リンク戦(2)(後書き)

ニヤルマー格好いいよ!大丈夫だよ(何が)

66・リンク戦(3)(前書き)

生るぬい…生ぬるい戦闘描写あり

66・ランク戦(3)

「試合始まっちゃってんのに、何で僕は足止め食らってんだろ…予想通りでやんなっちゃう」

竜真はとある村で暫く放置されていたらう数字持ちクエストを受けていたのだが、その敵は思いもよらぬ者だった。

「結局、対人型とか嫌だ、暇潰しで人間で遊ぶなよ。面倒くさい」

「我相手に無駄口を良くきけたもんだ」

「余裕だからに決まってるでしょ」

竜真の剣が一線を切る。

人型は竜真の様子に楽しく戦えそうだとニッと笑った。

「全部で二十四チームによる勝ち抜き戦の後、残りの三チームでの総当たり戦になったようですよ」

「意外に多いよな」

「少ない方だと思うよ」

《六分の一ぐらいかなあ?》

「それだけランク上に挑戦する奴らも多かつたんだろつな。早くランクアップする数少ないチャンスでもあるんだ…どうだ？このご飯は」

「「美味しい」」

《おいしい》

「昨日に引き続き、おいしゅうございます」

戦いが終われば腹ごしらえがチームの方針。

すでにロイとバレイラでシン、ニヤルマー、ミグの二倍程を腹に収めていた。

「ご飯の後は型と組み手と柔軟して身体を解しましょうね。最後は瞑想で今日はおしまいにしますから。明日は朝イチから試合になりましたので、早く眠ること。いいですね？」

「「はい」」

《はい》

ニヤルマーが中心になり、パーティーは順調に成長しているのをミグは微笑ましく見ている。

童真の思い通りだな。

ミグは食後のお茶を啜りつつ、ビシャヌラの神殿からの帰り道に今後を話し合った時の童真を思い返していた。

「ミグ、きっと僕はギルド戦と一緒に居られない」

「なぜ？」

「僕の予感はよく当たるんだよ。お仕事が来そうだ。だから、ここからは僕からの依頼だ。大会が終わるまで、彼らの引率をお願いしたい」

竜真はミグを真剣に見ている。

ミグはゆっくり頷いた。

「ただし、大まかなところだけをお願いしたい。細かいあれこれはニアルマーを中心にさせて、彼らに考えさせる」

「…親バカだな」

「ふふ、当たり前前でしょ？大会が終わるまでに合流できなかった場合は都の見物にでも時間を充てて」

「そんなにかかるのか？」

「わからない時には保険をかけないとね？」

そう言って竜真は苦笑していたが、実際にその通りになっている。

「ミグさん、そろそろ行きたいのですが」

「ああ、悪い。少し思い出していた。ところで、バレイラとロイは思う存分に食べたのか？」

ミグが話を変えるように二人を見れば、そこには一人につき、ミグの三倍量の皿が積み重なっていた。

「八分目しておかないと、動けなくなりますから」

「それで八分目か」

《まだ食べれるけど、おしまいにしておくの》

ミグは苦笑して視線を移すと、シンはうっかり彼らに釣られてしまったようで、久しぶりに気持ち悪そうにしている。シンの前の皿を見ると、いつもよりかなり多い。

初めての試合での興奮が見誤らせたのだろう。

「シン…修行不足だな」

「無理…」

シンは机に俯せた。

「ニヤルマーさんのくじ運凄いね」

「最初に戦っていれば、後は気楽だもんな」

二十四組を三分にし、三組になるまでの勝ち抜き戦。各組を勝ち抜いたもの達が次に総当たり戦をして勝ち数二のパーティーが優勝と
言う形式になったようだ。

予選後、残ったものはクジを引き、ニヤルマーは一のクジを引いた。
つまりは一回戦の一番目の試合となる。

「《パダの狼》 舞台へ」

舞台上上がったのは、ニヤルマー達の予選に居たパーティーではない見知らぬ五人組の冒険者だった。

「はい。《1stを追う者》 舞台へ」

このパーティー名を考え付いたのは意外にもシンだった。

実にニヤルマーが考えそうな名であるのだが、事実、自分達は竜真に憧れ、いずれは竜真の様に第一線で戦う1stになりたいのだ。

1stを追う者。

シンはそうでありたいとニヤルマー、ロイ、バレイラに告げたとこる、この名に決まったのだった。

その名を背負い、四人は舞台上上がった。

「パダの狼、1stを追う者は四人組なので、代表四名を選出しなさい」

五人組の男達は、ギルドの審判員に言われた通りに話し合った。

パダの狼と言うことから、試合を見ていたミグはゴルゴダ国出身なのだと気が付く。

「あそこ出身なら、強い魔術使いが居るな……」

一人呟いていると、ミグは話し掛けられた。

「ミグじゃないか！暇か？試合見てるぐらいなら暇だよな！そーかそーか暇か！ならばカナガスタ様が仕事をやるう」

「待て、話を聞け。俺は依頼を引き受け中だ。お前に付き合うのはランク戦が終わってからだ」

ミグが反論する隙を与えずに仕事を押しつけようとしたのはカナガスタと言ურიユカ帝国の宰相補佐官だった。

赤み掛かった茶色の髪を一括りにした外見的には硬派なのに中身は軟派でミグにとって疲れる相手である。

宰相オルレイア・ヴァルフレイアは石を通り越した岩人間との評判だが、カナガスタは軟派過ぎて正体がわからないと評判だった。

「何、あの子達になんかあんの？」

「ああ、特別さ。俺の友人の子ども達だからな」

ミグの表情に何を見たのか、カナガスタはニヤリとする。

「何々、友人の子ども達とか言っつて、本当はミグの隠し子じゃね？」

「馬鹿たれ」

ミグは目下、始まった試合を竜真の代わりに一挙手一投足見逃さないようにカナガスタを無視したのだった。

「始め」

「はい」

「バレイラ、剣で行きましょうか。シンもね。ロイ、相手に沈黙、予選と同じ付加を身体に、全員の武器に風をエンチャント…ロイの魔術が終わり次第、突っ込みます。」

ニアルマーの指示に三人が頷くとやはり、相手チームにも魔術師が居たのか、同じように付加を付けているようだが、ロイの魔術の効果で付加が与えられない。結果、ロイの付加が先に終わり、四人がパダの狼に突っ込んだ。

態勢を立て直す暇を与えず、まず魔術師をバレイラが昏倒させると、シンがショートソードの男を倒した。

ロイが槍を杖術の要領で使い、相手を倒すと頭を槍の持ち手でスコーンと殴る。ロイの相手は気絶した。

ニアルマーが当たったのはパダの狼唯一のランクA、一番強かった。剣では勝てないとニアルマーは剣を捨てた。

その行動に相手が笑った瞬間、ニアルマーは小型のナイフを相手の手に投げつけた。ナイフは相手の剣を握る手に突き刺さる。

相手の男ははつとして手に突き刺さったナイフからニアルマーに視線を移すと、ニアルマーが上段蹴りの動作に移っていた。

次瞬間、男の頭部に蹴りが炸裂した。

「パダの狼、戦闘不能。1stを追う者の勝利」

一回戦、四人は無事に勝ち進んだ。

「だから余裕だと言ったでしょうに」

竜真が戦っていた人型はすでに塵と消えていた。

「でも、流石に疲れたかも。…皆は頑張ってるかな…」

激しい戦いの爪痕が残るとある山の頂きで、竜真は仰向けに寝そべり、空までの近さを堪能した。

66・リンク戦(3)(後書き)

エンチャント…魔法をかける

テーブルカードゲーム用語

パダに反応した人は流石に少ないだろうなあ

67・リンク戦(4)(前書き)

まだ生ぬるい戦い続きます。

67・ランク戦(4)

「ふっ」

「確かに二回戦だ」

「…」

「嬢ちゃん、やるじゃないか」

「接近戦もできるのですね」

「…」

「なんだ、そのふざけた服は」

「不可抗力です」

翌日、二回戦が始まった相手チームは紫の夢と言う、対人依頼を中心に受けているチームだった。

剣士とシン、体格のよい女とバレイラ、魔術士の女とロイ、盗賊とニアルマーが各々に戦っている。

試合開始直後、ロイに相手の沈黙の術が決まってしまい、付与の術が使えなくなってしまうた。

その瞬間、ニアルマーが全員に目配せする。

「ゼスラ、こいつらやるよ。付与をくれ」

「この坊っちゃん、隙をくれないよ」

「付与なしの勝負ですね」

「本当にこいつはふざけた服着やがって」

「だから、不可抗力ですつてば。胴ががら空きですよ」

ニヤルマーが薄紅の服をひたすら貶す男の腹を布を巻いた剣で強打した。

男が苦悶の表情をして膝から崩れる。

「デズマ！」

魔術士が男の名を叫んだ。

魔術士もなんとか術を使おうとするものの、ロイの攻撃の手が休まらない。

「ぐっ……」

バレイラが相手を押さえ込み、腕の関節を決めている。

「キーナ！」

シンと戦っている男が叫ぶが、その一瞬の隙が仇になった。

男の首元にシンのショートソードが添えられ、勝負がついた状態になる。

「……………」

「きゃっ」

ロイの棒を避けそびれて魔術士が倒れた。ロイがその喉に棒の先を

突き付ける。

「終了」

ギルド職員の声で歓声が広がる。

ニヤルマー達はそれぞれに手を貸し、相手を起き上がらせた。

「君ら、強い上に性格もいいのな。いいパーティーだな」

「ありがとう。おっちゃんらも強かったよ。俺はシンです」

「ジョエルだ。どこかで会ったらよろしくな」

シンが剣をしまつと相手の剣士がシンらを誉める。

シンもおどけて返すと、互いに握手した。

「で、また食べるのな」

ミグは目の前の大食い大会に苦笑した。

そして、…

「食べ過ぎだろ」

隣の席から呆れ声が聞こえる。

それは先程の戦いの相手の一人だった。

「シンはいいとして、そっちのチビ二人の腹はどうなってるんだ？」

「底なし沼ね」

女魔術士ことゼスラも苦笑いしている。

「バレイラ、ロイ、そこら辺にしておかないか？店主が目を白黒させているぞ」

《まだ六分目》

「僕は七分目、魔術使わなかったから、お腹の減り方が違うよ」

バレイラもロイもまだ食べたそうだった。

「そう言えば、あんた試合に出なかったよな」

ニヤルマーの相手をしていたデズマがミグに聞いた。

「俺は付き添い代理だ。参加資格がない」

ミグは曖昧に笑って答える。キーナが参加資格がないの一言に眉を動かす。

「まさか数字持ちか？」

「3rdのミグだ。友人の子達が世話になった」

「…そりゃ強いよ。教える奴の最初のレベルが違う」

「それもあるかもしれないな。何しろ1stの愛弟子達だ」

ミグの爽やかで穏やかな声で何事もなうように言われた一言に紫の夢の一行がギョツとしている。

「赤？青？」

「赤ですよ」

食事を終えているニャルマーも会話に交ざってきた。

「1stのリウマの愛弟子？そりゃ無理だ」

紫の夢一行は驚いたまま、机に突っ伏した。

「シン、右側が甘い。ロイ、詠唱破棄の練習を相手に先手をとられないように。」

「はい」

「バレイラ、もっと正確に突いて」

「…」

食事の後、宿の中庭でミグがシンとロイを見て、ニャルマーがバレ

イラと組み手をしている。

「ニヤルマーはかわし方をもう少し小振りにしろ、次の動作まで口
スができる」

「はい」

その様子を紫の夢一行が見学している。

「おしまい。君らも組み手してみるか？」

柔軟から入り、変わった運動、体術らしき型に組み手、最後の瞑想
までの一連の訓練に一行は良く見ていた。

「ハードだ」

ジョエルが呟いた。

「これを毎朝、毎夕繰り返す。ジョエル、キーナ、デズマ、ゼスラ
来い。シンはバレイラとロイは詠唱破棄の練習、ニヤルマーは…分
かっているな？」

ミグは紫の夢の一行を呼びつけると次々に指示を出す。

紫の夢一行は戸惑いながらもミグの傍により、シンとバレイラは向
き合っている。

ロイは一人集中していて、ニヤルマーは桶に水を汲みにいき、宿か
ら布を借りてきた。

「吐く…」

ジョエルがふらつきながら、生け垣に顔を突っ込み、キーナ、ゼスラは顔をニヤルマーから渡された濡れた布で隠すようにして倒れている。デズマは放心状態でただ座っていた。

「シン、ニヤルマーは避け方が大振りだ。」

ミグが木と木の間で縄を結び付け、その間を小振りに避けながら往復百本を指示する。

「バレイラはもつと相手を翻弄するフットワークを…ここからこの線の間を五分で往復百本。ロイは棒の型を百本」

「…まだやるのか…」

デズマが呆然としている。

「俺が決めた分、まだメニューは楽な方だぞ」

ミグの一言に紫の夢一行は固まったのだった。

68・ランク戦(5)

「二人ですか…さて誰が行きましょう」「俺」「僕」《私》

今回は相手チームが二人組みであるから、ニアルマー達も二人と制限される。

相手をよく見ると、それは予選で最後にニアルマーとバレイラを相手にしていた男女の剣士二人組みだった。

「…僕らは一度お相手してますから、ロイ君とシン君がいきますか？それともシン君ではなくバレイラにしましょうか」

微妙に遠慮した様子のニアルマーにシンとロイは視線を合わせてからニアルマーに言う。

「じゃあ再戦で決着つけたらいいさ」

「負けちゃ駄目だよ」

「ですが、確実に勝つ為にロイ君に出ていきたいのです」

《ニアルマーさん、大丈夫。勝てる。行こう》

押し切られる形でバレイラとニアルマーが舞台上上がることになった。

「マリシュテンの瞳、1stを追う者、始め」

ギルド職員の間で戦いが始まった。

出だし、ニアルマーが相手の男に向けて布を巻いた剣で切り掛かる。男はそれを避けるとニアルマーの胸に向け長剣を振るが、今度はニアルマーがきつちりと避ける。

「お前ら、やっぱつええや」

「あなたもお強いですよ」

二人はつばぜり合いをした。

バレイラは相手の大柄の女と対戦している。

バレイラは体格差含め諸々の差をスピードで埋めることにした。

得物は使わず、女の行動を阻止するツボ狙いで手を繰り出す。

女の顎先にバレイラの蹴りが擦ると、女は一瞬ふらついた。

バレイラはその隙を逃さなかった。

すかさず呼吸投げを決めると女は背中から落ち、さらに受け身に矢敗、気絶した。

「ジュリアー！」

「よそ見はさせません」

ニアルマーと男との戦いはヒートアップしている。

つばぜり合いから打ち合い、互いに体術も駆使し、蹴りが飛んだりもする。

男がニヤルマーに向け、長剣を振り下ろした時、ニヤルマーは剣で受けるのではなく、剣を落とし、相手の攻撃のバランスを崩した上で剣を振った腕を取ると、小手返しを決めた。男はすんなりと投げ飛ばされたことに驚く。さらに右手の手首、肘、肩への違和感に足から落ちた衝撃による打撲により試合の続行不能を知ると、ギルド職員へと合図を出した。

職員が終了宣言をすると、ニヤルマーは男の傍に寄る。

「まさか投げられるとは思わなかった…」

「立てますか？」

男が首を横に振るとニヤルマーはロイを呼んだ。

「治療しますか？」

「お願いします」

ニヤルマー達の行動に男は感謝した。女の方はギルドの方で治療している。

「俺はザイロだ。またどこかで会ったら、よろしくな」

「私はニヤルマーと言います。よろしくお願いします」

ニヤルマーの丁寧な物言いに男、ザイロは苦笑するのだった。

「ねえ、もう行くの？」

「君みたいな美人にはいつまでもお相手して欲しいけど、そろそろ帰る時間なんだ」

女は村を救った覆面の英雄に縋ったが、覆面の男は女の髪を梳くと、顎に指を這わせ、ねっとりとした口付けをする。

女は心地よいそれを享受し、更に寄り添った。

「居なくなるのに、こんなことされたら、忘れられなくなるじゃない」

濡れた唇を舌で舐め取られ、はあと、脱力した女は未練を全面に出して男を非難する。

「君との一夜は楽しかったよ」

男は女をあっさり離すと扉から出ていっしまう。
女は悔しそくに枕を扉に投げつけた。

「明日から決勝の総当たり戦です。一回でも負けたら優勝はありませんからね」

ニヤルマーが見渡すと、シンもロイもバレイラも良い具合に意気込んでいる。

ミグが手を叩き、四人の視線を自分に向けさせた。

「他チームだが、《嵐の前》は三人組、《リュカの炎》は五人組。嵐の前は前衛だけで成り立っているが、一人、数字持ち並のランクAが居る。リュカの炎はバランスチームだな。こっちと同じタイプだが重量級が居るのに注意と言ったところだ。きっと魔術士にこの重量級は確実に入ってくるな」

夕飯の席でしばし意見を出しあい、五人は翌日の試合の為に作成を練るのだった。

68・ランク戦(5)(後書き)

竜真さん：何してるやら

作中の技は合気道技です。受け身とれないとえらいことになります…

さて、活動報告にも同じことが書いてありますが、もうすぐ1stのリウマがお気に入り千人様と言う、万歳万歳で小太り…もとい小踊りしたい真咲です。

お礼と言ってはですが、番外編を用意したいのです。そこで内容相談です。

1・竜真の女装で任務(単独時代のお話)

2・ミグとリーシャの初夜(月光行き、がつつり18禁)

3・竜真とミグの出会い編(なぜミグが変態と言われたのか)

4・竜真とヨルの旅の一部風景(師弟漫才)

5・ニヤルマー×竜真の下剋上BL(絶対本編ではありえない設定な上、がつつり月光行き笑)

以上5つの中から2つ選んで拍手より、こそつと教えて欲しいのです。

一番人気を書きたいと思います。

2と5は申し訳ないですが、18以下お断りとさせていただきます。

また拍手が表示されない方はこのリウマ68の更新予約とお願いの

活動報告にコメントとして書いて下さいませ。

基本的に拍手にはお返事しません。

拍手は私の心の栄養とさせていただきます。

69・リンク戦(6)(前書き)

お待たせしました。本日は今週分で二話お届け

69・ランク戦(6)

ランク戦も三組による総当たり戦に入って二日目。連日の戦いも今日が最後の一日だった。

一日目はまず1stを追う者とリユカの炎が戦った。体格差をもるともせず戦い、1stを追う者が勝てたのは、リユカの炎の想定範囲外にロイの魔術の腕が上がっていることにあるだろう。風魔術の沈黙効果が相手チームの魔術師の口を閉ざしたこと、その他補助魔術がランク戦期間の短期練習で確実にレベルアップしていることで、発動時間が短縮、効果の強化されていること、また、一人、一人のスキルも確実に上がっていたことが勝因だった。

二日目はリユカの炎と嵐の前の戦いだった。

前日に負けているリユカの炎が力みすぎ、嵐の前の中で能力がずば抜けている男に叩きのめされる。

ミグが言っていた通り、数字持ちに近い能力があるようだった。その他の二人もランクBは現実のようで強敵だと戦いを見ていた1stを追う者とミグは作戦の練り直しを図り、今、三日目を迎えている。

「では、予定通り、私、シン、ロイの三人で行きます」

「はい」

《いつてらっしやい》

決意新たな返事のシンとロイ、その二人を見てニヤルマーは頷いた。そして、バレイラを三人は微笑ましげに見る。

「バレイラの為に勝ってきますよ」

「見てろよ！」

「頑張るからね」

三人はバレイラを囲み頭を撫でていると、職員に呼ばれたので、舞台が上がっていった。

ロイがニヤルマーに強化を掛け、ニヤルマーが一番強い男を、まず五分だけ押さえる。その間にロイとシンが他の二人を不能にさせる。

作戦は功を奏し、二人を戦闘不能にしたのだが、ニヤルマーと男の戦いに入るタイミングが掴めない。

膠着状態が続いていた。

「中々、やるな」

「く……ありがとうございます」

つばぜり合いは止まらない。

しかし、そこでニヤルマーの目が見開く。男越しに何かを見たようだった。

シンとロイもそれに気が付いたのか、ニヤルマーの視線を追う。

「なるほど」

「ニヤルマーさん。いいところ見せよう」

シンとロイは男をニヤルマーに任せたようだ。

「ふん。俺との戦いの最中余裕じゃないか」

力は全く抜けないくせに、顔は自分越しに恍惚としているニヤルマーに男は舌打ちした。

ニヤルマーのその様子に観客、特に女性からほおくとため息が出た。色気駄々漏れのイケメンになったニヤルマーに一部以外の大多数の男性観客が舌打ちをする。

「おかえりなさいませ」

ニヤルマーは視線の先に届くように、心からの声をかけると同時に男を見もせず、その胸に剣をたたき込んだ。

「ニヤルマーさん、かつこい〜」

「リウマさんが居ると強くなるんだねえ」

ニヤルマーが相手の男が蹲るのを見ることがなく、舞台の端まで駆け寄ったところで、シンとロイに止められる。

「やっぱダメだわ」

「ニヤルマーさん。ギルドの合図あるまで舞台降りちゃダメだってば」

そこで観客達も舞台脇に人がいることに気が付いたらしい。

「試合、まだ続けますか？」

ロイがニヤルマーを押さえ付けながら、舞台中央に蹲る男の様子を

見ている判定役のギルド職員に話し掛けた。

「試合続行不能、1stを追う者の勝利です。」

その声を聞いた途端、ニヤルマーは舞台から降り、とある人の下へ駆け寄る。

それを見た観客の一部から落胆の悲鳴が上がった。

「リウマ様……ああ、リウマ様です」

「ミグ……なんで悪化してるの？」

「さあ？」

ニヤルマーが感激に感涙していると、竜真は苦笑いして隣に立っていたミグとバレイラに聞く。

《リウマさん欠乏症候群重症患者。リウマさんおかえりなさい》

「ただいま。バレイラ……中々毒あるネーミングだね」

バレイラの頬を軽く撫でると、舞台上でギルド職員の話聞いてから、ニヤルマーを追い掛けてきたシンとロイが寄ってきていた。

「「おかえりなさい。リウマさん」」

「ただいま。シン、ロイ。優勝おめでとう」

「ありがとう。でも誉めるなら、ニヤルマーさん誉めてあげてよ！ニヤルマーさん、全試合出場したんだから」

「一番強い人倒したのニヤルマーさんだから」

この短期間にニヤルマー達の結束は固くなったらしい。
シンとロイ、バレイラのニヤルマー擁護に竜真は顔をしかめる。

「……ニヤルマー、中々格好良かったよ」

「りっ、リウマさまぁ〜！」

「うわ！抱きつくな！」

ニヤルマーが竜真を追い、竜真が逃げる。それをミグと子ども達が
生暖かな目で見守る。一行は相変わらずと言ったところだ。

69・リンク戦(6)(後書き)

ニヤルマー……残念!

全員にランクAの授与がされ、宿に戻ってきた一行は宿に隣接した酒場に来た。

リーリーの従業員とリーシャも合流している。

「まずはランク戦勝利おめでとう」

竜真がグラスを持ち、挨拶を始める。

ニヤルマーは今までの不在を埋めるようにつつとりと竜真を見つめていた。

「さて、これからのことを言っておこうか。まず、リュカから出てロベルのシュミカに行って、僕の師匠に会う。それからハルマ国ケザイン地方に向かう」

「竜真、それは」

「いいよ。ミグ。後は皆に僕のことを教えてあげる。部屋に戻ったら僕のところおいで。それから、ミグ。これが今回の依頼料金。これがリーシャさんとの結婚祝いだよ」

ミグの前に竜真が二個の袋を置いた。片方はカチャリと鳴り、片やコトリと音がした。

ミグは結婚祝いと言われた方の袋を開けると、時計と指輪が出てくる。

「この二つ、僕の時計と同じ作だから」

途端にミグが時計を落としかけ、慌て掻き抱き、青い顔して竜真を見る。

「帰り際にディスクアの工房に寄って、半日で作らせたんだ。いい仕事だから、大事にしてね。親友」

「き……に」

「2ndに上がるなら超一流を持ちなよ。金庫に入れとくなんてダメだからね。出来るだろ？ミグ」

声すら出さず震えるミグを珍しいものを見たばかりに皆が注目する。確かに時計は高級品だが、ここまで怯えるものではないだろうと、一行は見ていたが、ふと、ロイ、シン、バレイラの三人以外の全員が思いつく。元々高級品の時計だが、作り手によってはそれこそ城ぐらい買える代物になる場合もあると。

「リウマ様……もしや」

ニヤルマーが竜真に耳打ちして聞けば、竜真は良く分かったじゃないかとあっさり言う。

しかし、聞いたニヤルマーはガタガタと震えだし、ミグの手元を注視する。

「僕の居たところだと、伴侶の左手の薬指に指輪をはめる習慣があったんだ。こちらじゃ左手の薬指に指輪は禁止じゃないみたいだから、ミグの手からリーシャさんに指輪をはめて上げて。これだって、あれに作らせたんだから。ミグ、リーシャさんもきちんとして守れよ」

机の上にある物をミグに無造作に渡した。

そう、無造作にだ。

ミグが心臓が止まりそうなほど驚いたのは間違いない。

「時計も、指輪も原価で貰ってきたから、値段は気にすんなよ」

あまりにミグが震えるので、竜真はミグに耳打ちするが、その一言でミグは目を見開き更に驚く。

「ちゃんと払うって言ったんだけど、久しぶりに顔を見せたら、ただで良いって言うんだよね。それじゃ悪いからって、原価だけおいできたんだよ」

シユロウドが原価？

ミグはその異例さに眩暈がする。竜真の耳打ちにミグは口元を引きつらせた。

「早くしないと大声でどこの作品が公表してやる」

「わ、わかった。待て……………リーシャ、来てくれ」

竜真の脅しにミグはリーシャを呼んだ。

リーシャはミグのギクシヤクした様子を気にしながら傍に寄る。

近づいてきたリーシャに膝を付き手を取ると、リーシャの左手の薬指に指輪をはめた。

「命をかけて守るから」

ミグはリーシャを大事に抱き締めた。

竜真はそれを満足そうにニヤニヤと笑ってミグの背中を叩く。

「さあ、祝いだ。ランク戦勝利と若い二人の新たな門出、今日の飲み食いは僕持ちだ、大いに飲んで食べてくれ」

竜真は酒場に居た全ての人に告げた。

活気にわいた酒場では、その日一晩宴が繰り広げられた。

70・宴（後書き）

竜真さん……困ったもんだ。

時計ネタは29話以来…

シュロウドさんは竜真さんの下僕希望の一人です。
竜真さんにとってミグは大事な友人です。

71・事実説明

優勝と結婚の祝いの宴の翌日、竜真は宿の自室にニヤルマー、シン、ロイ、バレイラの四人を呼び出した。

「おはようございます」

「リウマさんおはようございます」

「おはようございます」

《おはようございます》

「おはよう。旅の支度の前に皆に言っておきたいことがあるんだ」

部屋に入ってきた彼らは竜真の前に立つ。

「今までミグと旅をしてきたのは依頼だと話していたよね？」

「ええ。聞きました」

ニヤルマーが律儀に相槌を打ち、ほかの三人も頷いたのを竜真は見回して確認する。

「ミグからの依頼はとある遺跡の調査だった。その遺跡は今から三千年前から存在するもので、この世界の創生にまつわる神殿なんだ。僕は一度、その関係にある遺跡に入ったことがあるんだ。で、ミグからの依頼だけど、そのことを踏まえた上で神殿調査をすることだった。」

神殿につくとそこには神の一人が居て、僕が見つけた神殿とその神殿以外に後二つの神殿があることが分かった。

僕はその神に依頼を受けて四つの神殿を巡ることになり、こうしてリユカの中を巡る内に君達と出会うことになったわけだ。」

竜真の話聞き洩らさないように四人は真剣をして聞いている。

「神の竜マリシユテン、神の狼ビシャヌラ、神の鳥アルシユラ、神の獅子ヤシャル、創生神リユカリルノーラが最初に創った動物達がこの世界を司る四神として祀られた。しかし、時が経ち、当時この世界を支配していたリユカの王によって神殿に仕えていた者は殺され、四神が祀られた神殿は閉鎖された。ちなみに今のリユカ帝国には、その前身たるリユカの王の血脈は続いている。が、血脈は続いているらしい」

竜真は一息ついて続ける。

「ここからが本題なんだけど、僕らは四神の神殿を巡って、四神達に会ってきたんだけど、その中で僕にとって完全予想外の人に出会った。獅子ヤシャルこと三島師子王、僕の父親がそこに居た。つまり僕には四神の一人の血が流れている。半分人外。さっき三島師子王と言ったけど、僕の名前は正式には三島竜真と言って、三島が家名、竜真が名前。この世界とは違うところから来た。つまり僕は異世界出身者なんだ。神殿の封印で人間に嫌気がさした父は異世界へと渡り、僕の母と出会った」

竜真が周りを見回せば、四人の八つの目は竜真に集中している。真剣に竜真が言うこと聞き漏らさないようにしているようだ。

「以前、ニアルマーは僕の魅力が上がっていると言っていたね」

「ええ、出会った時よりも更に輝きを増しました。ええ、その神々しさにどんなに……」

「ニアルマーさん、そろそろ黙って」

ロイの毒舌がニヤルマーに釘を刺す。ニヤルマーは一瞬だけシユンと落ち込んだが、竜真に視線を戻すと、話を続けるように促す。

「それは父さん、つまりヤシャルにだけど、父さんから受け継いだ力を引き出されたからなんだ。おかげで神殿めぐりする前から規格外だったのに、規格外どころか問題外になったかんじだよ。そこで聞きたいんだけど、……こんな僕だけどこれからも仲間として着いてきてくれる？君らの力的にはランクAとして問題ないし、ランクAともなれば食うに困らない程度の収入は手に入るはずだ」

「リウマさん、僕らがリウマさんから離れるわけないでしょ？」

「リウマさんと一緒にいる方が楽しそうだし」

《第一ニヤルマーさんが離れるわけがないですよ》

「リウマ様…いえ、竜真様、わたくしはあなたとは何が何でも離れません！」

ロイはふふつと笑い、シンはあつけらかんと、バレイラはさも当然と、ニヤルマーは竜真に抱きつかんばかりに近寄り、竜真に後頭部を抑え込まれて床とキスしていた。

「ありがとう。これからもよろしくね」

「おい、竜真、お客さんだ。竜真の言っていたことは本当だったんだな……ニヤルマーは何をしているんだ？」

部屋にノックが響き、竜真が返事をする、ミグが顔を出した。

「まさか……レイアか？」

「そのまさかだ……そしてもう二人ほど顔なじみが来ている」

「誰だろ？このあたりで僕に会いたい人っていうと……」

「部下が何をしているか気になるんだらう」

「シグルド様と奈美恵さんか」

そこで床とキスしていたニヤルマーが立ち上がった。

「シグルド様が！」

「どこで待ってる？」

「下の食堂だ」

「さあ、行くよ」

六人は竜真の号令で部屋から階下へと向かっていった。

71・事実説明（後書き）

竜真命……

72・二人の下僕

「リウマ様、お久しぶりでございます」

満面の笑みを浮かべる宰相に護衛についできた騎士二人とミグ、シグルドは口元を引きつらせて、目の前の宰相から目を背けている。彼らの脳内には同じことが浮かんでいる。

あの宰相！が、満面の笑み！！を浮かべている誰かに言っても、きつと誰にも信じてもらえないだろう……と

「オルレイア様、お久しぶりでございます。お呼びだし下されば、わたくしからお伺いしましたものを」

「リウマ様に来ていただくなんて滅相ありません。ただそのお顔を拝謁できましたら、恐悦至極にございます」

宰相のあまりの低姿勢ぶりに目を白黒する騎士とミグ、シグルドの五人。

他は宰相について詳しく知らないせいか、何故五人がびくついているのか分からないようだ。

リユカ帝国の宰相オルレイア・デイベロア・ヴァルフレイアは岩人間と言われる程に真面目な人間で、あまりに真面目でストイックなために尊敬も集めているが近寄りがたい男だった。

更に家族さえ笑った顔を見たことがないとも評判の壮年男が、恋い請わんばかりに膝を折り見つめているのだ。

話を聞いていたミグでさえ驚き、騎士やシグルド達は腰を抜かす寸前だろう。

「では二階の部屋へ移動を願えますか？」

「リウマ様がおっしゃるのなら」

「皆は待っていてくれ」

竜真が身を翻し階段へ向かう。

「リウマ様がいらっしやる限り安全だ。お前達、ここで待機していろ」

竜真の姿が見えなくなると、そこには岩の宰相が居た。

宰相も居なくなれば、場の空気が和らぐ。

騎士達はへなへなと床に座り込むまでには行かないものの少々脱力気味で、シグルドは呆然としている。

ミグは己を取り戻し、ニヤルマーをシグルドの元へ呼んだのだった。

「ニヤルマー…報告書にはリウマ殿以外のことも書きなさい」

シグルドの下にニヤルマーから送られた報告書はその九割九分が竜真の素晴らしさについてだったため、シグルドは直接会う機会があれば真っ先に他のことも報告しろと伝えようと思っていた。

シグルドの言葉を聞き、旅の仲間達は心の中でこう思っていた。

ニヤルマー、報告書を書いていたんだ。と……

竜真のことしか書かないなんて、なんて、らしいんだ!と……

「なあ、あんたら、あの覆面は誰なんだ？」

脱力していた騎士の一人がパーティーに話し掛ける。

「1stのリウマですよ。騎士様」

シンが柔らかく答える。

1stとはいえ相手は一介の冒険者、宰相が膝を突くべきものではない。

「竜真が言うには宰相殿は竜真の熱狂的ファンらしい」

ミグは押さえ気味に熱狂的ファンと言い換えたが、正解は下僕希望者だ。

竜真の顔や立ち振舞い、過激なところのある性格などにご執心らしい。

「寝ても覚めても、リウマ様のご尊顔は常に夢つつつの気分にならせていただけます」

「ニヤルマーさんは夢つつつから戻ってこれないけどね」

うつとりと竜真の顔を思い浮かべるニヤルマーにロイは相変わらず毒あるツッコミを入れる。

シグルドのその様子にこの一行の日常を見た気がして、確かにニヤルマーは寝ても覚めても竜真一色なのだと笑った。

「ニヤルマー、元気そつで何よりだ」

「もったいないお言葉です。シグルド様」

「竜真がいなければ、まともなものにな。ニヤルマー……」

「まともなニヤルマーさんなんてつまらないよ」

ロイがクスクス笑っていると、ミグは「それもそうか」と肯定する。ニヤルマーは「酷い」と背を丸め、シンが騎士達に「同じパーティーでさえ、こういう症状が出る程にリウマさんは美人さんなんです」と半笑い気味に言えば、騎士の一人がなんとなく納得したように同僚の傍に戻っていった。

72・二人の下僕（後書き）

奈美恵とバレイラはどこに？

それは次回！

73・奈美恵の異能

「あなたの名前はなんて言うの？」

会話がテンポが早く、その上に大勢過ぎて、早々に会話に入る気を無くしたバレイラが角の椅子に腰を掛けると、それに目を止めた奈美恵がバレイラの隣に座る。

《バレイラよ。あなたは？》

バレイラの書く早さはかなりのものだが、それでも直に話すより劣る。

会話の流れを読む能力のあるバレイラだからこそ、こうして黒板を使つての会話も早い。

「私はナミエよ。竜真さんと同郷の者よ」

《本当は黒いの？》

バレイラは黒板を一瞬だけ奈美恵に見せて、すぐに消す。そのバレイラの配慮に奈美恵はほほえんだ。

「そうよ。ところで、あなたの声は生まれつき？」

《前は出た。怖いことあつて出ない》

「話せるようになりたい？」

《なりたい》

「そっか……少し症状を見てもいいかな？」

バレイラが頷くのをみると奈美恵はバレイラの目を閉じさせ、その額に自分の額をくっつけた。

「緊張しないで、身体のを抜こうか……口で息を吐いて、吐いて、鼻でゆっくり吸って……うん。いいよ。また吐いて、身体のを抜いて、はい。吸って」

バレイラに深呼吸させて、身体から余計な力を抜かし、奈美恵はバレイラに精神を同調させる。

額から何かしらの力を感じたバレイラは一瞬息をつめたが、先ほどの深呼吸をして身体から力を抜いた。

「うん。怖いね……ああ、竜真さんが来た。強くて綺麗。バレイラちゃん……何を伝えたい？」

奈美恵の心に伝わるバレイラの半生は酷く困難な道程だが、バレイラの竜真に対する憧れはそれに勝るものがある。

竜真に声を聞かせたい。そんな思いがバレイラから伝わってくる。

「竜真さんが居れば、あなたの中の怖いのは出てこない。もう怖くない。怖いのは竜真さんが倒しちゃう。もう居ない。だから……最後の貴女、表に出てらっしゃい。うん。いい子。私に掴まって……もう檻の中に居なくてもいいよ。大丈夫、表には最強の彼がいる

！」

「……あ……」

バレイラの口から微かに音が漏れる。

「今まで声帯を使ってないから、徐々に馴らして行く」

「あ……………う」

「うん。大丈夫。あなたの気持ち、とつても伝わってきてるわ」

奈美恵はバレイラを抱き締める。

あなたは守られていると……

「オルレイア」

「リウマ様」

部屋に入り、竜真がはらりと覆面を卸すのをじっとオルレイアは見
ていた。

「ああ……………」

「まあ、君にとって僕は生きている美術品かもしれないけど、なん
でそんなに僕が好きなの？」

竜真が窓際に寄りかかり、オルレイアを見つめている。

オルレイアは感嘆の吐息を吐きながら、竜真をつつとりと眺めている。

「あなたを見た瞬間、世界が煌めいた。私にこんなことを言わせるのは陛下とあなたぐらいだ。陛下が初めて立った時と同じ感動をあなたは会う度にくれる」

「初孫の成長を喜ぶじいちゃんのようなだね。オルレイア……………奈美恵さん、謁見したんだって？癒し姫だとか」

竜真が笑みを深め、オルレイアに向かって言えば、下僕から一国の宰相へと顔を変えた。

「ナミ工殿と知り合いか？」

「彼女は同郷、彼女は教え子、彼女は……………まだ内緒」

凧ぎのように穏やかな声だが、竜真が内緒と言えば、以降、口を割らせることはできない。

だが、そんな様子すらオルレイアには神々しく思える。

「麗しいな」

「大事にしるよ。彼女は要だ」

父、獅子王が奈美恵に会った後に連絡してきた。奈美恵は要……………リユカ帝国、皇帝ジーディリアルベルアの要になる。

「オルレイア、彼女を守れ。できなければ帝国はきつと飲み込まれる」

竜真はオルレイアを見つめた後、覆面をつける。その時、竜真は奈美恵の魔力を感じた。

「そろそろ戻ろうか？オルレイア」

オルレイアは静かに頷くと、竜真の予言めいた言葉に身を震わせたのだった。

「りっ……ま」

竜真が階下に降りた時、微かに聞こえた声に目を見開いた。

「バレイラ！バレイラなのか？バレイラ！声……」

「りっ」

竜真は階段の残りを飛び降り、それに驚いた下にいた全員を避けるのではなく飛び越え、バレイラを抱き締めた。

「声……奈美恵さん！ありがとう！」

「竜真さん、バレイラちゃんを守って、絶対不可侵に……バレイラちゃんに大事な人ができるまで」

奈美恵のことを守れとオルレイアに言った竜真だが、奈美恵にバレ

イラのことを守れと言われた。

奈美恵の目が竜真にこう告げていた。

バレイラの声の鍵は竜真、あなただと。

73・奈美恵の異能（後書き）

具体的説明……きっと次回、奈美恵さんが語ってくれるはず……

いやいや！竜真さん！伏線貼らないでえ！

72と同時進行なお話でした。

74 指針

パンっ

竜真が一拍手を打つ。

奈美恵は何か遮断されたのを感じた。

「ちょっと内緒話したくて」

竜真と奈美恵の周りに人の気配はない。実際には周りは竜真の一行や宰相とその護衛にミグやシグルドが居るのだが、今の奈美恵の世界には竜真しか居ない。本当なら奈美恵と竜真の間にはバレイラがいるはずなのだ。

「内緒話？」

「そう。内緒話。」

竜真は奈美恵の向かいにある椅子に座ると、覆面を取った。

奈美恵も竜真から流れてくる真剣な雰囲気を感じ取り、聞く態勢を整えた奈美恵を確認した竜真が話を始めた。

「父さんと会って、奈美恵さんがどうしてこの世界に呼ばれたか知ったよね」

奈美恵は頷く。そして、自分が途方もない何かに巻き込まれていることを知り、これまた途方に暮れたのは少し前のこと。

「まさかよね。自分がこの世界にやってきた理由があなたのお父さんだなんて」

ある夜尋ねてきた美丈夫は、竜真の父で、母が飾っていた昔の職場の写真に居た男だった。

奈美恵に会い、何かしらの事情を知った獅子王により、奈美恵は何がどうして今の現状があるのかを知った。

「この世界の神の力のかけらが胎児だったあなたに入っていたなんて父も知らなかった。祖父の付き人だった父と一緒に働いていたあなたのお母さんの中にいたあなたに、まさか自分が身につけていた他の三神の欠片が吸い込まれていたことを気が付いていない辺り、どこか抜けてる話だけだね」

「私だけが今のこの帝国で流行り始めた病気を治せることで、この世界が私を導いたと三島さんは言っていたわ」

「そこに僕も関わってくる。四神の力を持つ異世界人が、この世界には必要だった。僕は魔の上位種を減らすため、奈美恵さんは魔以外の世界に溜まった負を取りのぞくためだ。この世界はもともとリユカリルリノーラが作り上げた世界だけど、正や陽しかなかった。一つに偏った歪な世界だったわけだ。もちろん四神も正の存在だけど、彼らには人間の負を中和できるだけの力があつた。しかし、彼らの力が閉ざされたため、世界に負がたまり形になった。それが魔と病。僕ら二人は四神程の世界に響いてしまうほどの力はない。けれど四神に準じる力はある訳だ」

「この世界、こんなにも魔法の力、魔術の力が発達しているのに病は決して回復できないのよね。何かしらの病のあるヶ所は黒い靄が見えるのは黒が魔だから？」

「多分そうだ。この世界は負のものを処理しきれないから。正負揃

っているからこそ世界は整うと思うんだけどね。まあ、僕とミグが四神を目覚めさせたから、少しはマシになると思うよ」

「私はこの帝国から現れた病を癒すことと神殿を復興させることを目標に都に来たの。ヤシャル神殿で現代に戻るかもって試したけど、通れなかったし、何かクリアするべき問題があるのね」

「それなんだけど、父から伝言だ。四神が集い今の状況を鑑みた結果、僕らはこの世界に四神の力を持つ神子を誕生させなければならぬ。必ず四人居ること、更に言えばこの世界の人間の血が流れることが制約になるそうさ。つまり、こっちで一度結婚する必要が生じた訳だ。僕の中からその子にヤシャルの力を継承させる。奈美恵に至っては三人に力を継承させることが必要ってわけ。若返った理由はそのにありそうさ。多分、こちらに奈美恵さんが居られる期限があつて、それが元の年齢になることだと思う」

「ん〜……やっぱりかなあ？この皇帝陛下見た瞬間にそんな予感がしたんだよね。相手は彼よね？シグルドなら良かったんだけど、皇帝陛下は今の実年齢だと年上だけど、精神的には年下なのよね。複雑だわ。それに彼、心臓に何か抱えてるのね……あの靄、なんとかしないと早死にするわよ……しかも結婚しても一生涯を共にするわけでもないとか複雑だわ」

「その前に何も知らない人と結婚に疑問はないの？」

「とりあえず正妃は居ないし、未だ後宮もないみたいだし、若くてイケメンな上、今、私には元の世界に恋人も居ないもの。条件としては破格よ？しかもこの人の子どもが産みたいなんて、一目惚れとしとは最上級でしょ？」

「皇帝を気に入ったんだね？」

複雑よねと言つわりには、前向きな奈美恵に竜真は笑うしかない。

「私はともかく、竜真さんの方はまだ出会っていないんでしょ？」

「そうだねえ……これからどうなるんだか。今のところこちらの世界じゃ不老になってるから、しばらくうろつろしてても問題ない。それでも奈美恵さんが帰る前には子どもは出来てるんだろうな。そうじゃなきゃ条件が整わない。」

「1stの竜真さんの武勇伝は色々噂に聞いたから、気が付いたら子どもの一人や二人や十人ぐらい居そうよね」

「それは酷いよ奈美恵さん。居ないと思うんだけどね。相当に気を付けてるから」

奈美恵の軽口に竜真は苦笑した。

竜真がぱちんと指を鳴らすとどこからともなく竜真の手にはソーサーとカップ、カップには並々と注がれたコーヒーが現れた。

「冗談はともかく僕らの当面の目標が出来たわけだ」

奈美恵はその様子をただ驚くだけで、口を開いている。

竜真は軽やかな手さばきでコーヒーを奈美恵の前に置くと、もう一つ出して、自身の前に置く。

「それはいいんだけど、さっきの手を打ったのから、コーヒーから気になっているの。突っ込み所でもいいのかしら？」

「これ？日に日に便利になるんだ。父さんをお願いしたら、向こうから取り寄せができる召喚とこれは創造も込みの魔術になるかな。他には新たなチート、無詠唱魔術が出来るようになったんだよね。奈美恵さんと会った時にはちゃんと呪文を唱えてたのに今じゃこれだよ」

竜真が頭に向けて指すと髪が黒から赤、赤から青、青から茶色に色が変わっていく。

「竜真さんだけズルいわ。私だって醤油とか味噌とかだしの味に飢えてるのよ！」

竜真が両手を合わせて手のひらを上に向け前に着きだすと……そこにはお椀に入った豆腐とネギの味噌汁と箸。それを奈美恵に渡すと奈美恵は感極まって涙する。

「いいの？いただきます。この匂い、この味……だし最高、味噌素敵」

奈美恵の感激に竜真はヤシャルに出会った後の自分の料理を食べた時のことを思い出して、やっぱり味噌汁はソウルフードだよと奈美恵に言えば、奈美恵は何度も頷く。

「奈美恵さんにプレゼント。醤油二リットルと味噌二キロと顆粒だしを一箱につゆのもとね」

次々とテーブルの上に出してくる竜真を目を輝かせて奈美恵は見た。

「神様、仏様、竜真様、感謝します」

奈美恵はどこかに向かって、ありがとうと叫んでいた。

74 指針(後書き)

75・伝説級

「竜真さん。竜真さんに誘われたのをきっかけに、あの後すぐに魔術士ギルドに入りまして、癒しの魔法だけを突き詰めて勉強してたの。その後、私のところに来た三島さんに連れられて、あの方々の所に行つて、それぞれの欠片の能力を開花させてきてからここに来たの」

奈美恵は極上エメラルドの輝きを持つ魔力玉を手に出現させた。

竜真はそれを見て真似するように極上とは言わないまでも美しいエメラルドの輝きを持つ魔力玉を出現させる。

「賢者もビツクリだ」

竜真は初めて見た時の翡翠色からの進化に驚いていた。

奈美恵は竜真の軽口にクスリと笑うとエメラルドの魔力玉を左手に寄せて右手に巨大な真珠を思わせる魔力玉を作り上げる。

「なるほど。分離したんだね」

「正解です。術の精度はかなり上がりました」

前に見た時には翡翠色だった魔力玉は見事なエメラルドと真珠になつていた。

奈美恵は自分の魔力玉を竜真の魔力玉に押しつける。その行動を竜真は黙ってみていた。徐々に交わる魔力玉。最後には一つの球体になつた。

そして、奈美恵は片方に出した真珠色の魔力玉をそれに混ぜるため、また押しつける。エメラルドは翡翠色に変わりながら、一つの

球体になった。

「他人の魔力玉を混ぜてしまうのか……すごいな」

「ですが、ここからです。三島さんから教えていただいたので、うまくできればと」

奈美恵は魔力玉を両手の上へ乗せていたが、両手を大きく開いた。同時に魔力玉は同じ大きさの二つの球体になる。その片方を竜真に渡した。

「これが四神の力で安定した癒しの力になります。まずは緑同士を混ぜることによりヤシタルの癒しを取り入れて、次に私独特の負の払拭する真珠色を混ぜました。これで負を払拭する力を竜真さんにも渡せることになりました」

「……あれ？奈美恵さん、他に適性の属性ないの？」

「ありません。残念ながら癒し特化ですよ。なので、旅先で竜真さんには頑張ってもらわないと！私は子ども三人も産まないといけないんだから、その間、竜真さんにはフォローしてもらおうってさっき決めたんです。魔力玉の混合自体は三島さんに教えていただいたので、竜真さんと会ったら必ずするようにと」

話をしながら二人は作られた魔力玉を体内に収め、魔力の巡りを確かめる。

二人してそれほど違和感を感じないらしく、奈美恵にいたっては翡翠色からエメラルドと真珠に似た魔力玉へと分離させてみたりと試している。

「うわあ、それは忙しくなりそうだ」

獅子王にそこまで言われなかった竜真は盲点だったと目を塞いで天を仰ぐ。

「そりゃそうか、皇帝相手なら奈美恵さんはここから動きづらくなるわけだ。うんうん。……僕が動けるだけ動くわけか」

「後は情報交換することあります？」

「……………そうだ。君のことを大事にするように宰相に言い付けといたから、便利に使つといいよ」

「宰相をこき使つていいの？」

「そう。それから……………」

次々とリユカにまつわるあれやこれの黒歴史やその他使える人間云々を竜真が教えてくれるにつれ奈美恵はなぜこつも一国の内情ただもれに知ってるのか口元を引きつらせる。

「1stにまつわる噂は伝説級だけど初めて信用する気になったわ。規模が大きすぎて嘘だと思っていたの」

奈美恵は先程の竜真とは逆に手で目を覆つと下を向いた。

「そんなに誉めなくていいよ」

「誉めてないよ」

「奈美恵さんも実は伝説級だよ」

「世界を滅亡させそうなの1stさんと同じ位置には立てられないって」

「負を相手にできるのは、今のところ四神と僕と奈美恵さんだけだもの。ほら、ね？伝説級」

女神の神々しくも花開くような笑みとも言える可憐な笑みを浮かべた竜真を見ながら、その並びに入るのは本当に嫌だと奈美恵は遠いところを見つめて思ったのだった。

76・リウマ様

話を終え覆面姿に戻った竜真が手を打てば戻る喧騒。

先ほどまでのことが何もなかったかのように感じた奈美恵が戸惑いを顔に出すと竜真は人差し指を口元にあて、ないしょと口を動かす。

話せるようになったバレイラをシンとロイが囲み、ニヤルマーはシングルと話をしている。ミグは宰相に捕まっけて嫌そうな顔をしていた。護衛は宰相に何かを期待する目を向けていて、その場に宿の人間は出ていない。

「ミグ来てくれ」

「ああ」

奈美恵から視線を動かし、宰相相手に話しているミグを呼ぶと宰相が切なそうに竜真を見つめている。護衛二人は何故だか嬉しそうに宰相を注視していた。

「何か用か？」

「ミグに頼む。奈美恵さんをよろしく頼む。詳しい事情は奈美恵さんから聞いてくれ。そして出来るかぎり支えて上げてほしい」

「何かあるのか？」

「うん。あるよ」

「それは規模がでかいのか？」

「僕が関わるんだから当然。ね？奈美恵さん」

「一緒にされたくない。一般人で居たかった」

「トリッパーに無理な話だね」

「ひどい」

「とりっぱー？」

「僕や奈美恵さんみたいな人のこと」

奈美恵は覆面で見えにくい竜真の目が強く輝いた気がして、竜真から背ける。その内心と言えは 男だと分かってるのに……と、先程まで外されていた覆面の中の顔を思い浮かべて、 本当にかわいい男っているのね……と、やるせないため息をついていた。

「竜真さんて、存在そのものが罪作りね。老若男女の壁をもともせず落とせるに違いないわ」

「そんなこと」

「あるわ」

「あるだろ」

ミグと奈美恵に肯定され、竜真は大抵の人間を落とせるとは知っているものの、他人に断言されるのは妙な気持ちになる。

「現に君らは落とせてない」

「落ちた後に夢から覚めただけ」

「いつの間にそんなに仲良くなったの？」

「竜真に關した突っ込みだけ」

「タイミングが合うのよ」

二人の息があつた突っ込みに竜真は首をすくめる。

「まあいいさ。さて、奈美恵さん、頑張ってくださいよ。僕は明日リユカを発つから、今夜でしばしの別れになる。そこで……ねえ。ミグ。ミグの料理が食べたいな」

まさに悪魔のおねだり。なんだかんだで竜真のお願いを聞いてきてしまったミグは暫く会わないならばと包丁を持つことに決めた。

「私も食べてみたいです。ちょっとシグルドにお願いしてきます」

何をお願いするのか、奈美恵はニヤルマーと話し込んでいるシグルドの下へ向かい、再び戻ってきた時にはピースサインを竜真に出していた。

「竜真さん、ミグさん、シグルドの屋敷を使ってください。飲めや歌えのドンチャン騒ぎも可です」

その声にもっとも反応したのは宰相だった。普段ではありえない慌てぶりで竜真に近づき、膝間つく。

「わ……わた……私の屋敷へとお出で下さいませ」

「……………うーん……………どうしようかなあ」

竜真が長い間を作り宰相を焦らしていると、竜真の後ろ手は宰相と護衛以外の全員がひそひそと話している。

「放置プレイないし焦らしプレイとは竜真さんたらやるわね」

「ほうちぶれい？じらしぶれい？」

「シン君。それはね、相手が我慢できるかどうかを見極めながら次の手を練り出す遊びの一つよ。悦ぶ人は悦ぶ手法なの」

「じゃあ宰相様は喜んでるんだね」

「ロイ君。間違いなく悦んでるわ」

「ナミエさん。それ以上は子どもに教えるべきじゃないですよ」

「でもこのパーティーは常にレベルの高い放置プレイに焦らしプレイ見てるわよね？ニヤルマーさん」

「ニヤ……………マーさん？」

「やん。バレイラちゃん正解！やっぱ竜真さんはどSキャラじゃないですよ」

「ナミエさん。どえすつて？」

「ミグさん、どえすつて言つて……………ひっ！」

奈美恵が嬉々として質問に答えている途中で奈美恵の頬すれすれを小型ナイフが飛んで真後ろの壁に突き刺さっている。

「リユカ滞在最後の日だもの……………僕の芸術的なナイフ投げを見せてもいいよ」

「待つて竜真さん。もう見せてるから。華麗で初動すら見えない素敵なナイフ投げ！」

「奈美恵さんがこんなにもお調子者だなんて思って……………いたよ」

「そこはいなかったって言って」

「それは置いといて、宰相様御自らのお屋敷をただ飲み食いするだけに使うことなど、一介の冒険者には到底無理なお話でございますので、申し訳ございませんが」

「嫌ですよ。リウマ様、一介の冒険者？とんでもない。ジーンしかリザナツプしかり、あなたとたまたま出会えた者は巨匠と言える芸術家に短期間に申し上がり、巨匠と言われるシュロウドですら、あなたの虜だ。他にもあなたに心酔しあなたに見合う腕を持ちたいと寝食忘れて腕を磨く名工達は数知れないと聞きます。同じ1stの蒼騎士以上にあなたの熱烈な信奉者は多いのです。裏表問わない実力者であるリウマ様は自分の国をお持ちになるうとすれば三日経たずに作れてしまうだろう方です。そうなればきっと大勢の名工名匠集まる芸術の都になるでしょうね……それに付随して商人が集まり、人が集まり……」

宰相が一人悶え萌えながら熱弁を奮っているのを尻目に竜真は気配を消すようにパーティーに促すと宰相と護衛を置き去りに宿から立ち去る。それを見ていたシングルドと奈美恵も気配は消せないが静かに宿を出た。ちなみに宿は前金のためそのまま出ていっても可だ。護衛の騎士達はその素晴らしい技術に感心しながらもどうやって宰相の熱弁を止めるかを視線を合わせて協議していた。

77・下僕会

「数字持ちの必須科目に料理もあるの？」

「まさかこれは昔からの趣味。でも数字持ちはだいたい料理うまいよ。夜営も料理下手だと味気ないからね」

何故かミグに並び竜真と奈美恵も包丁を手に具材を切っている。全員手際が良く見ているパーティーの面子やシグルドは呆気にとられていた。特にシグルドは奈美恵が料理をすることを知らなかったので、ただ口を開くばかりだ。

「そういう奈美恵さんも手際がいいね」

「一人暮らし始めてからご飯作っていたの。竜真さんは？」

「母さんは天然のおっちょこちよいで包丁は握らせれなかったから、父さんか僕、もしくはひい爺様の所からシェフが来て作っていたかな」

「竜真さんセレブ？」

「一応セレブ。だって三島双衛門のたった一人の女孫の子だから。母さんのことを心配する孫ばかなひい爺様がたまに派遣してくれていただけ」

「……そうだった。母さんがお仕えしていた方のひ孫にあたるのよね……ところでミグさんのご飯目的じゃなかったのかしら？」

「奈美恵さんも作るっていうから、僕も作ってみようかなと……」

宰相から逃げ出した一行はその足でシグルドの都の屋敷へと向か
……わなかつた。

まずは明日からの旅生活のための支度を整え、今夜の食材を
い足してからシグルドの都の住居へと向かったのだ。竜真達が
買い物をしている間、なぜかシグルドも一緒になって歩き回っ
た。

貴族であるシグルドとしては物珍しさも手伝って楽しい時間だ
たらしい。奈美恵は都に来てから初めての買い物と言うことで、意
気揚々と値引きをしては買い物をしていた。

一行が引き上げてシグルドの館へ入った後、まずはミグが厨房に
入ったのだが、買い物ときたら料理もしたくなつた奈美恵が厨房に
入り、それを見た竜真も料理がしたくなつて厨房に入る。

髪と瞳をこちらの一般色のブラウンにして覆面を外してから厨房
に入った竜真にニヤルマーが泣いて喜び厨房から叩きだされたのは
余談だ。

「日本食が久しぶりに食べたくなつたんだよ」

「私は自分の味が食べたくなつちやつた」

二人が調理に交ざつたところで大量の品が必要なんだから構
つたことじゃないかと、ミグは二人が厨房に居ようが気にした様子
はなく淡々と料理を作っていた。

「流石に作りすぎたか」

「食べるよ……ニヤルマーが」

「私がですか？」

ミグが出来上がった料理の数々にやってしまった的な顔をすれば、竜真が飄々とニヤルマーを弄る。ニヤルマーが慌てて反応したのを生暖かな目で見守る。

「それは冗談として」

見事なスルーで前置きしてから、作る量は加減したから食べきれでしよと笑えばニヤルマーはとろけきつた笑顔で竜真を見ている。

「きれいな顔の素敵なおれ男とこれまた可愛らしいツンツンか……友達が見たら狂喜乱舞するに違いないわ」

「そうしたら凶器も乱舞しちゃうかもよ？」

竜真の手には小さなナイフが一本見え隠れ。

奈美恵は目を泳がせた。

「リウマ殿もその辺で。珍しい料理があるので私も早く食べてみたいのです。子ども達も皆食べたそうですよ？」

「そうです。リウマ様が作られた料理をいただけるなど1stのリウマ下僕会のメンバーとしては外せないところです」

「うわ！宰相様！」

「どこから生えた！聞き捨てならない言葉が聞こえたけど」

突然後ろから声が聞こえ、シグルドは飛び跳ね、どこから生えた
と失礼なことを言つて竜真は心底嫌そうな顔をした。

「あはは下僕会つて……せめてファンクラブ」

奈美恵の笑いのツボを刺激したらしい宰相の台詞に竜真は怒りの
ツボが押されたようだ。

「で？誰が首謀者かな？」

「ああ、リウマ様美しい……主宰はリウマ様の盗賊ギルドの部下
の皆様です」

怒る竜真も普段より凜とした印象になり美しく、宰相は陶醉して
口からポロリと言葉が零れる。

「……出てこい！」

決して大きな声ではない。しかし、その怒気と殺気に場に居る者
は背筋を正して目を泳がせ竜真を直視できない。

「怒っちゃイヤーン」

「ごんの馬鹿タレが……！」

どこからかふらりと男が現れた。色男でどこから見てもチャライ
その男は竜真が怒っているにも関わらず、しゃべり方が竜真をおち

よくる。

その男は罵声とともに投げられた鞭に絡められながらもヘラリと笑っている。

「たつて旦那の情報って高く売れるんすよ？各国の芸術家達の旦那モデルの作品の売買の仲介とかあゝおかげでギルドーの上納金出せてウハウハあゝ」

「あははははは可笑しいゝどこの芸能事務所だあゝ」

この竜真が殺気立っている中、大笑いができるのはこの女以外いないだろう。

「奈美恵さん！他人事だと思って！」

「他人事だもん。1stどんなけえゝ」

奈美恵に大笑いされ、力の抜けた竜真が苦笑する。

「しょうがないなあ。上納金はギルドーなんだな？」

「盗賊なんぞするより、ぶつちぎりいゝ。頭が旦那だと悪いことも出来んから上納金をどうしようか悩んだけどおゝシユロウドが旦那にぞつこんになったのをきっかけにいゝ旦那の作品の仲介始めたり？」

「そうか。上納金一位なら構わない。ところでお前も食っていくか？」

「食べる食べる！旦那の料理なんて世界中で注目だしゝ！会報の

次の記事ネタあゝ！」

「会報まであるんかい！」

竜真の部下の間延び口調の男が料理に手を出して食べだしてしまつたのを皮切りに皆が料理に群がった。

78・別れと旅立ち

「ニヤルマーちよつといいか？」

食事は混沌のまま終わり、各自あてがわれた部屋に散らばった。ニヤルマーは一人使用人棟の自分の部屋へ向かおうとしていたが、竜真に呼び止められ導かれるまま竜真の部屋に入った。

「そこに座つてくれる？」

竜真はすでにに座っていて、ニヤルマーは指示された向かいの椅子に座った。

「ちよつと大事な話だから結界を張らせてもらつよ」

そう言つと竜真は手を打った。

「単刀直入に言つとニヤルマーにはパーティーを離れてもらいたい」

ニヤルマーは目の前が真っ暗になって竜真を茫然と見る。

「これには理由があるんだよ。ニヤルマー」

「理由ですか？まさか私がそんなに嫌なのでしょうか？」

竜真は竜真で手になり足となりパーティーに居てくれたニヤルマーはウザくても嫌いではない。むしろ居ないと三人との潤滑な関係が崩れるのではと思うほど重要な人間だ。ただニヤルマーがものすごく喜びそうなので、折を見てニヤルマーが挫折しそうになったらきにミグにでもフォローに言わせようと心に留め置きながら、ハラ

ハラと涙を流すニアルマーをどうやって落ち着けようか悩む。

「ニアルマーにはお願いしたいことがあるんだ。僕、奈美恵さんの事情を知っていて、シグルド様、そしてミグに関わりがあり、それなりに強い人はニアルマーしか居ないんだよね」

「確かに」

ニアルマーはボソリと呟く。竜真はそれを見てニアルマーにお願いできるだろうと安心する。

「この前、僕の事情は話したんだけど、僕と奈美恵さんの関係、そしてこれから僕が何をするかを君に話すから、それを聞いてから判断して欲しい」

そう前置きしてから竜真は静かに説明を始めた。

「そんな説明されたら断れないじゃないですか！」

立ち上がり怒るニアルマー。内容が内容だけに断れない。この仕事はニアルマーにしかできないとも分かってしまった。

「リウマ様……ズルすぎます……」

ニアルマーは力なく椅子に崩れた。竜真は確かにイエス以外言えないように話を持っていったことを自覚しているだけにズルいと言われて苦笑いするしかなかった。

「うん。ズルいね。ニアルマーの優しさに付け込んでいる自覚があるよ。でもニアルマー、断って付いてきても良いんだ。僕のギルドの部下をそこに当ててもいいんだから。シグルド様にも話は通してあるからニアルマーの好きにしている。一晩考えておいで」

そう言つと竜真は手を打って結界を解いた。

「……わかりました。失礼します」

ニアルマーは竜真を見ねずに席を離れるとドアの前まで歩き、取っ手に手をかけてあげた。

「リウマ様……わたくしは……いえ、ゆっくりとお休みくださいませ」

「おやすみニアルマー。選択は君の手の中だよ」

ゆっくりとドアが閉まり、ニアルマーの背が消えるのを竜真は見守った。

翌朝、シグルドの館の入り口には旅支度をした竜真、シン、ロイ、バレイラ、そして夕べの食事に乱入したチャライ竜真の部下がいた。

「リウマ様、あなたのお願いを私が聞かない訳がないじゃないですか」

半分泣いて半分笑顔。そんな表情で朝一に竜真の前に立ったニヤルマーは執事服を来ていてそう言った。

「ありがとう」

まだ覆面を付けていなかった竜真は会心の笑みでニヤルマーの肩に手をやり揺すった。

結果……ニヤルマーは竜真の笑みを見たことによってその場で気絶したのだった。

「竜真、ニヤルマーを起こしてやらなくて良かったのか？」

「そうです。リウマ殿。ニヤルマーが寝ているうちに行ってしまうなんて酷いのではないですか？」

ミグとシグルドに言われた竜真はクスッと笑う。

「ニヤルマーとはさようならを言いたくないからいいんだよ。ミグ、奈美恵さんのことよろしくね」

竜真が腕を出すとミグも答えて腕を絡めて手をがっちり握った。

「ああ。竜真、それにシン、ロイ、バレイラ。気を付けて元気出な」

竜真から手を離すとミグは声をかけてくれた順番に三人の子ども達の頭をガシガシと撫でていく。

「はい。ミグさんも元気で。ニヤルマーさんにも元気でって」

「リーシャさんとお幸せにね」

「ありがとうロイ」

「ミ……さん、あーと」

「バレイラ。声が出て良かった。君の幸せを祈っている」

「さてお別れ済んだかな。ニヤルマーに見つかる前に出発だ」

ミグが三人と別れの挨拶をし終えたのを確認して竜真は出発の合図を出す。

そして四人は新たな旅路に新たな一名を加えて旅立ったのであった。

「リウマさん、僕達もニヤルマーさんとお別れしたかったです」

シンが三人を代表して意見すると竜真はにやりと笑い答えた。

「ニヤルマーにならしばらくしたら会える。だから、さようならは言わないのさ」

「それは言い訳でリウマ様はニアルマーさんの号泣が実はすんげえ苦手え〜」

チャラい竜真の部下が竜真をおちよくる。

「ところでリウマさん。この人誰？」

ロイが指を差すと男は自分を差しニイ〜と笑う。

「リウマ様の盗賊ギルドの中での側近の一人でえ〜、『アカイ』って言うのぉ〜。因みに側近はオレとお、『アオイ』と『キイロイ』って三人ねえ〜。本名は違うけど、『アカイ』って読んでねえ〜」
竜真はアカイの話し方に頭痛いと頭に手をやる。

「アカイ、よーしくね」

「……うわぁ〜なにこのかわいい〜いきものぉ〜」

アカイはそう言ってバレイラに抱きついたのだった。

79・出会いは

「なあ〜ラーノオ〜新入り来たぜえ〜」

赤毛の若い男に話し掛けられた小麦色の髪の男が新たに扉から現れた小柄の覆面の人物を細い目を更に細めて見た。

「リケラも見なよ。あれは表か裏か」

小麦色の髪の男、ラーノに藍の髪の男が振り替える。

「最近調子に乗ってる冒険者でリウマと言っらしい。表だな」

藍の髪の男はリケラと言い、左目を眼帯で覆っている。リケラはいつも行動する三人の中で情報担当していた。

ラーノやリケラの言う裏や表とは、盗賊ギルドの表面と暗部を指し、表面は遺跡の発掘調査での罫の解除や鍵開けの技術を授ける。暗部はその名の通り盗賊を束ね、暗殺や人身売買などの闇の商売も押さえている点である。

冒険者の中には遺跡の発掘調査のために盗賊ギルドに在籍する人間も居る。竜真もその分類だと思われたのだろう。

「調子に乗ってる冒険者ねえ〜ん〜ちよっかいかけていい〜?」

ラーノに話し掛けた男、赤毛のテラが人差し指をくいくい第二関節で曲げて竜真の財布を擦りたいと意思表示する。

「気を付けるよ。相当にできるらしい」

「わかったよおリケラあ〜」

テラはふらりとしながら竜真の背後に近づいた。

「もお勘弁してえ」

結果から言えばテラの挑戦は失敗に終わった。

竜真の鞭に捕らえられ、ギルドの中庭の木に頭を下に吊されている。

「新入りだからって甘く見るのはどこの……いや、魔術は懇切丁寧だったね。まあ、冒険者ギルドもここも変わらないね」

「テラ……だから気を付けろと言っただろうが」

リケラが頭を抱えて俯く。

「リケラあ〜助けてえ〜」

「自業自得だつて」

リケラに助けを求めれば、ラーノが呑気に笑い飛ばした。

「ラーノあ〜きい〜もお〜ちい〜わあ〜るう〜いい〜」

ぶらりぶらりと揺れるテラはより間延びした声でラーノやリケラに助けを求めたが、竜真から発される妙に怖い気配を感じてラーノとリケラは首を横に振る。

「そんなあ〜」

テラの間延びした悲鳴はギルドの中庭に轟いたのだった。

「これがリウマ様との出会いだったねえ〜。すごいんだあ〜。ギルド入会時にい〜上納金をお〜頭目クラスまで払ってえ〜、あつと〜う間にい首領になつたんだよあ〜」

間延びした口調でアカイはへらへらと笑いながら竜真との出会いを語っていた。

シン、ロイ、バレイラの三人はその光景を頭に浮かべながら歩いていく。そして、竜真は気持ちげっそりしていた。

「アカイ、なんでアオイやキイロイを連れてこないんだ……」

「アオイはあ〜リユカの支部にい〜上納金を払いに行った後お〜リユカをまわつてえ〜下僕会のお〜会員集めえ〜、キイロイはあ〜ブルジュルムとかあ〜あつちの事後処理い〜！俺暇あ〜！」

竜真の額に交差点が浮かび、口元がヒクついている。ただし覆面

のため周りには分からない。分からないが、シン、ロイ、バレイラはそつとアカイの傍から離れた。

「んにゃ〜〜!」

竜真から縄が放たれ、あつという間にアカイを捕らえる。竜真は飛び跳ね七メートル程の高さの太い枝に縄の先端を括り付けた。縄の長さは五メートル。アカイはぶらぶらと揺れた。

「さあ、行こうか」

実に清々しいといった様子で竜真が歩きだす。

「リウマさんいいの?」

「煮ても焼いても縛ってもアイツは追い掛けてくるから大丈夫だよ。ロイ」

それは大丈夫なのか?という疑問をロイは浮かべた。

「僕の盗賊ギルドの組織『紅砂』の一員で右腕の三人組の一人だから多少のことじゃびくともしないよ」

竜真は何でもない様に歩いていく。バレイラは気になり振り向いた。

「オレのバレイラあ〜!」

「きゃっ!」

振り向いた瞬間、バレイラの目の前には満面の笑みを浮かべたアカイの姿。何時の間にもやら抜け出したのか、シン、ロイ、竜真の手からそれぞれにナイフがアカイの顔目がけて飛んだ。

「バレイラに触るな変態！」

アカイは三人の怒りを見事に買ったのだった。

79・出会いは(後書き)

テラ∥プテラノドン(赤)

リケラ∥トリケラトプス(青)

ラーノ∥ティラノザウルス(黄)

オーズプトティラコンボが元のネタ(笑)

「バレイラちゃん」

「アカイうざいです」

バレイラから鞭が放たれ、アカイの額にでこぴん並みの強さで当たる。ピンポイントで見事なコントロールにアカイはギャンと悲鳴を上げて蹲る。

「そうそう。バレイラ上手だよ」

竜真が自分の持つ技術をバレイラに教え込んでいた。バレイラだけに教えているわけではなく、もちろんシンやロイにも教えているのだが、バレイラには特に熱心に教えていた。

「いいかいバレイラ。自分に近寄ってきた変態は念入りに撃退しようね」

「アカイは変態？」

「バレイラにとっては変態だからボコボコにするんだよ」

「なんてこと教えているんですかあ〜リウマ様あ〜」

バレイラが繰り広げる鞭による連続攻撃をひらひらと舞うように逃げながら竜真を非難するアカイにロイとシンからナイフが投げられる。

「お前の回避力はギリギリ人間の範囲つてぐらいには高いから、この子らを鍛えるために役立てようかと思ってるね」

リユカ帝国を離れる前に三人を（アカイは用を言い付けて引き離していた）連れてヤシャルの神殿へ連れて行って三人を紹介した竜真はそこでソーラー充電器と大容量の記録媒体、それから多機能電子辞書と予備の電池をゲットした。竜真は父に食料以外でたまに必要そうなものをこちらへ召喚するためのアイテムボックスに入れてくれるようにとお願いした。

今居るのはリユカ帝国とロベル王国の国境を越えて一日のんびりと歩いた場所だった。

休憩がてら訓練中だ。

竜真の用事を果たしたアカイはロベルとの国境に近いアラナビタと言う村に滞在して一行が来るのを待っていた。村で合流も竜真からの指示であったのだが、村にある唯一の宿の入り口で行ったり来たりを繰り返して、竜真を見た瞬間に架空の尻尾を最速で振っているような喜びにアカイは犬のようだと言ったと言ったと言ったと言った。

「リウマさん、アオイさんとキイロイさんはどんな人ですか？」

シンに聞かれ、竜真はアカイを見る。

「アオイはレアンナでキイロイはゴージャだな。」

レアンナとゴージャはともにランクAの魔物である。レアンナは煌めく青鱗を持つ蛇のような魔物、ゴージャは黄金の美しい毛並みを持つ熊のような魔物。

「アカイはディーガだったかな」

竜真の半笑いにシン、ロイ、バレイラは首を傾げた。

デীগは通称狼王の名を持つ巨狼で満月になると血のように赤い目になる。やはりランクAの魔物だ。

カイ、アオイ、キイロイは彼らが一般人に使わせる偽名で、デীগ、レアンナ、ゴージャとは盗賊ギルド内で使われている名だった。現在、本名は竜真が命令を下す時だけに使われている。

紅砂のデীগと言えば、間延びした口調が特徴的だが、残虐性はギルドでもぴかー。一度暴走を始めたら満月のデীগのように血に飢え、とめられるのは今のところ三人だけだ。紅砂のレアンナと言えば、漏れる色気と情報網はギルドでも有数。紅砂のゴージャと言えば、その人となりの良さそうな外見に反する腹黒さに計略と交渉のプロ。

「組織はギルドでもかなり実力あるけど、僕の主義で基本的によい子が集まってるんだよね」

「お仕置きはギルドのどこよりも厳しいからねえ」。紅砂の会則破るとお、リウマ様によるすんげえお仕置きい」

「会則……ですか？」

攻撃をひよひよい避けるアカイにバレイラの息が切れてきた。

「ん、他の組にはあまりないかもね。僕のところはね、暗殺、強盗、強姦、弱者を狙う詐欺は原則禁止で遺跡の調査等の表の仕事は推奨。ただし紅砂に入れるのは冒険者ギルドのランクB、魔術師ギルドで導師並みの実力があることが条件になっている」

街道沿いの岩の上に寝そべりあくびをしてアカイに飛び掛かる三人の様子を眺める竜真。

「そろそろ出発しようか」

「ん〜。おしまいだよ〜」

アカイがバレイラの鞭を絡め取り引き寄せるとバレイラの体制が崩れる。シンのナイフを投げ返し、ロイの間近に迫ると腹へとキックが決まる。

シンはナイフを避け、ロイはくの字に体を曲げたがその場にとどまる。

「ロイ、耐えたね」

岩から降りると竜真はロイの頭を撫で、シン、バレイラの頭を撫でる。

竜真に頭を撫でられた後、三人は体が軽くなったのを感じて自分の体を眺めた。

「体が解れたね。次の村に着いたら依頼を受けるよ」

後ろを振り向きまだ驚きの最中にいる三人に竜真は言った。

81 未来へ駆ける

「……師匠、帰りました」

竜真は激しく嫌そうな顔をしていた。それは覆面に隠れて見えな
いが、声にははっきり表れていて、ロイ、シン、バレイラの三人の
視線を竜真に集めた。因みにアカイはシュミカの手前でどこかに消
えた。

「リウマ！ようやく帰ってきたな！」

興味に目を光らせ豪快に笑うヨルに竜真の目が泳ぐ。竜真は思っ
た。ここには弄られるために帰ってきたんだ。と。

「昨日、お前宛てに荷物が届いたんだけど、成人未満閲覧禁止な銅
像を店で広げちまって大騒ぎだった」

「……………」

竜真は頭を抱えた。成人未満閲覧禁止な銅像ってそんないか
がわしい物を作ったのか！あの覗き魔め……。と、そんなことを
考えていると、バレイラからクスクスと漏れ聞こえてくる笑い声。
シンとロイも釣られて笑い出す。

「バレイラ？」

「リウマさんが視姦されました」

竜真の顔が青ざめた。ただし覆面で周囲には見えないのだが。

「……誰かな？バレイラにそんな下世話な言葉を教えたのは」

「ニヤルマーさんに決まってるよ。リウマさん」

ロイとシンが声を合わせて言った。もちろんこの言葉からは竜真の殺気が引き出される。

「何々、面白そうな話の予感がする。オジサンに話してよ嬢ちゃん坊っちゃん」

「ニヤルマーさんて言う」

「リウマさんが大好き過ぎて仕方ないダメ人間が」

「たまに呟く人間としてどうか言葉をバレイラが聞いていたんです」

バレイラが話しだしてロイがぶんどり、毒に塗れなロイの発言をシンがカバーする。カバー出来るかどうかはともかくとして、一応カバーした。

「お前ら面白いな。俺はヨルだ。この店のオーナーでリウマの師匠な」

「俺はシンです」

「僕はロイです」

「私はバレイラです」

「師匠、この子らは僕の養い子ですよ。ランクAになったばかりです」

「おう。聞いている。リウマに隠し子が「カッ！」

ヨルの言葉を遮る竜真のナイフ。子ども達三人はこの二人の関係をしっかりと把握した。ヨルに対してはリウマさんで遊ぶ強者。リウマさんも呆れながらも楽しくそれに付き合っているんだな。と、判断した。

竜真がナイフをかざし、ヨルはふざけた態度で避ける。そんな二人の様子を店内にいたランチの常連客がゲラゲラ笑う。

「お店的にいいのかなあ？」

そんなロイの呟きに新たに入り口から入ってきた誰かが返事をする。

「いいのだよ。リウマとヨルの漫才はこの店の名物なのだから養い子諸君。私はシュミカのギルドマスターでハアンと言う。君らの名前を聞いてもいいかな？」

「俺はシンです」

「僕はロイです」

「私はバレイラです」

「よろしくお願いします」

それぞれに名前をいい、三人揃っての返事にハアンは目を細めた。

「良い目をしている子達だ。流石に短期間でランクAになっただけある」

「期間としては僕なんかより余程早いですよ」

ヨルとの追い駆けっこを止めて戻ってきた竜真が誇らしげにしている。

「とりあえずシユミカには二週間の滞在予定だよ。依頼を受けてもいいし、好きに行動していい。僕は家に居るか、この店で働いてるかしてるから。因みに寝泊りは僕の家だから」

「え？リウマさん家があるの？」

シンが素直に驚くのを竜真が驚く。

「ミグにだって家があったでしょ？数字持ちになれば相応の収入があるから、あちこちに家がある奴もいるぐらいだよ」

「実はリウマは各国に家があるくせに寄るつともしないんだ」

「あれは貢ぎ物。それに各国つて程にはないよ……リユカ含めて五ヶ所つてとこだよ。二ヶ所は孤児院になっているし、後の三ヶ所は部下達のアジトになってるから厳密に家があるとは言わないの」

竜真の知らなかった一面がまた現れた。紅砂が孤児院の運営を手懸けていて教育は紅砂や魔術師ギルドでなされ、この孤児院に居るは子ども達は各ギルドや下僕会のメンバーが目を付けて目を掛けていた。とは言っても孤児院は竜真がシン達三人と出会った後に紅砂に命じて運営が開始されたものである。子ども達は各国のスラムや路上生活中の子から集められている。因みに下僕会は紅砂より孤児院について知り勝手に支援している。

「君らを養い子にした時に今まで気にしていたことを実行したまで

なんだ。子ども達には保護と教育が必要だからね」

竜真は三人の頭を順番に撫でると空席に座るように手で促す。もちろんバレイラの椅子を引くことは忘れない。竜真も椅子に座ると竜真の前の席をハアンが確保した。

「リウマさん、あなたの始めたことに乗りたい人が多くてですね、冒険者ギルドでも孤児院を開設することになったんですよ。設置場所はまだ一ヶ所ですが、冒険者達、特に数字持ちの方には教師をしていただくと言う話があります」

「噂には聞いたよ。……本当にやるんだ。国立の孤児院はそこかしこにはあるんだけど、あまりに質が悪くて見兼ねていたんだ。数字持ちの条件も識字率の悪さから見て高い壁だからね」

シンは竜真をじっと見ていた。売られる前、シンはリユカではなく別の国の孤児院に居て暮らしていた。竜真が言うとおりの質が悪い場所で食事も出さなければ教育もしない暴力をふるう的にした上に子どもを売り飛ばす。それがシンにとっての孤児院だった。だが、竜真や冒険者ギルドの孤児院は違う。シンは考えていた。

「なあ、リウマさん」

「どうした？」

「紅砂に入んのどうしたらいい？」

「……入りたいの？」

優しく「どうした」と聞いた竜真の声が僅かに低くなり、ロイとバレイラがシンと竜真に視線を向ける。シンは真剣な表情で竜真を見ていた。

「バレイラは剣使いだしロイは魔術が使える……俺だけ特出したもんがない。しいて言えば手先が少しだけ二人より器用だ。そして紅砂が孤児院を運営しているって聞いた。なら盗賊ギルドに紅砂に入りたい」

「理由はそれだけ？」

「パーティーバランスも考えても俺が鍵開けや罠解除スキルが学んだ方がいいとも考えてる。ロイはともかくバレイラにやきつと無理だ」

「弟妹思いだねシン。でも将来的に三人がパーティーになるとは限らないよ」

「俺、予感がするんだよ。だからここで盗賊ギルドに入る」

竜真はシンの目の奥に光る決意を見てとる。　なんでまた一番素直な子が盗賊ギルド所望かねえ。とため息をついた。

「予感ねえー……アカイ」

「なあーに？リウマ様」

「え？」

「うわっ」

「え？」

アカイが竜真の隣に立っている。三人三様に驚いていた。因みにハアンもアカイと呼ばれた人物の登場に顔には出さずとも驚いていた。

「近場の盗賊ギルドでシンの入会案内してやって。上納金はシンに払わせて。紅砂には……実力がついたら入るといいよ」

「リウマさん」

「リウマ様あ過保護おー」

「親バカで何が悪い。シン行ってこい。夜までには帰って来るんだよ」

アカイの間延びした軽口に竜真は笑った。そして、シンに行くように促す。シンは喜びに竜真に抱きつく。

「ありがとうございます。行ってきます。行こうアカイさん」

シンは荷物を持つと夜更けのエリアから掛け出ていった。

「アカイ、よろしくね」

「はい」

アカイもゆったりとエリアから出ていくのであった。

81・未来へ駆ける（後書き）

また設定が増えた……作者も知らんまに設定が増える。

いやー……（涙）

そんなこんなでシュミカにつきました。

え？80話で次の町に着いたら依頼って言った？

いや、ちゃんと彼らは依頼を受けてましたよ。（書いてないけど）

80話の前フリのことを忘れてたなんて……ね……スミマセンでし

た。（土下座&逃走）

追伸：アカイさんがくらの様で困ります。

82・改築しましたよ(前書き)

リウムのターン

82・改築しましたよ

ヨルから鍵を受け取り、竜真は三人をとりあえずヨルの店へ預け自宅へと戻ってきた。

竜真が先に戻ってきたのは、成人未満お断わりな彫像をなんとかするためだった。ヨルが「お前んとこの玄関に置いといたから」と言う気軽な台詞にまずはそれを子ども達に見せないようにしなくてはならない。そして魔術を使い家の改築をすること。今のままでは彼らは休む部屋がなかった。

竜真の家は玄関を入ってまず右手側に台所と六人掛けのテーブルがある。左手側本棚がいくつつかあり、何だか色々置いてある。その奥、パーティーションの向こうにベッドがあり、テーブルの奥には浴場とトイレが個室になっている。普通に見たかぎりではだいたい三十畳ほどの広い空間が台所、寝室、書棚に分けられていて一区画壁がありそこは風呂とトイレになっている。少し広いがシンプルな家だ。平屋の家。もちろん竜真の家がそんなにシンプルでいられる筈がない。彼が貯めた貴重品がどこかにあるはずだ。竜真は一番ベッドに近い書棚とパーティーションの間の床を剥いだ。階段が表れる。竜真は玄関に置きっぱなしの自分の姿の卑猥な二メートル程の像を軽々小脇に抱えると階段を降りた。

そこは高さ五メートルで約六十畳の巨大な空間にソファと机、椅子、様々な調度品に発掘品、書棚に大量の書物があった。

竜真は像を自分の絵画や像の密集地帯に置くと一階へ戻り、玄関から部屋全体を見回す。

竜真は目を閉じ頭にイメージを浮かべた。ベッドの奥の空間。今まで壁になっていたところは廊下とその廊下には七つの扉があるのを想像する。

「うん。こんな感じ」

新たに作られた扉に近づき一番奥の扉の把手を握った。再び頭にイメージを浮かべる。扉を開けて机に椅子に窓に寝台。クローゼット……本棚……窓にはレースのカーテンに寝台の周りにもレースをあしらう。机の端には花瓶に水そして花。竜真は完成された女の子らしい一部屋を頭に作り上げて扉を開けるとそこには想像通りの部屋が出来上がっている。クローゼットに姿見を取り付け、櫛なども置いておくことを忘れない。まずはバレイラの部屋を完成させた。

竜真はバレイラ、シン、ロイの部屋を作り、一番手前に自分の部屋を作る。他の部屋よりも少し入り口を大きく作り、自分が使っていたベッドを放り込み、自分が寝室に使っていたスペースにソファーとローテーブルを置き、寛ぎの場を作り脳内の想像と魔術の創造を止める。

「こんなもん？なんか疲れた……それにしてもあの像何！ありえないんだけど……あそこまで再現しなくても」

頭を抱えて作り上げたソファーに早速ぐったりと座り込んだ。それはそれは本物に忠実に作り上げた代物は服を着せれば動くのではないかと言う程の裸像。特にバレイラには見せられない。先に片付けに来て正解だった。

竜真はだらーんと体から力を抜くと今度は気合いを入れて立ち上がった。そして夜更けのエリアへと向かうため、玄関へと歩みだしたのだった。

「お待たせ。準備できたよ」

竜真が迎えに来たとき子ども達三人は夜更けのエリアでヨルの手伝いをしていた。

「準備できたつて、お前んとこ平屋じゃないのか？」

「そこは問題ないですよ。三人をありがとございました。さあ色々買物しながら行くから」

竜真はさつさと夜更けのエリアを出る。少し待っていると何かの包みを二つ持ち子ども達は出てくる。

「今日の夕食用だそうですよ」とロイが説明する。

「僕が持つから貸して」と竜真はシンとロイから荷物をぶんどる。

竜真は家を気に入ってくれるだろうか楽しみにしながら自宅へと三人を連れて歩きだしたのだった。

82・改築しましたよ（後書き）

《お知らせ》 番外編置き場にお気に入り登録千件御礼のリウマとミグの出会い小話置きました。

はい。どう考えても家の広さに見合わない改築の仕方ですね。地下はちゃんと掘ってあったのあの広さなのに……それは次回です。

83. 案内(前書き)

規格外規格外。

83. 一案内

「リウマさん……見た目と中が違いすぎるよ」

そう言っただけで脱力したのはシンだった。生活雑貨を買いながらアリアから来た四人はバレイラ以外は荷物を持ち、シンとロイに至っては両手が塞がっている状態で竜真の家の前まで来て、意外とこじんまりとした平屋の家に内心驚いていた。そして竜真が「どうぞ」と促して三人を入れると三人三様に顔に驚いたのが出た。まずシンは外見と内部の容量差にロイも外と中のちぐはぐに目を見張っていた。バレイラは内装に清潔感があり植物や花が生けてあるのに目を見張っていた。

「奥は異空間になってるから、僕らが認めたものしか入れないよ。認めてないのが入るのはあの植物が置いてあるところまでね」

竜真はソファアの脇の観葉植物を指すとツツコミ所満載の家の紹介を始めた。三人の頭の中に思い浮かんだのは「異空間で何？」だった。

「ロイ、カップを出して」

そんな三人の疑問の目をスルーして竜真はロイに指示をした。指示されたロイは買い物袋から陶器のカップを出すと竜真の指定した場所に置く。

「ここが炊事場。奥の扉が風呂とお手洗い。こっち側の本はどれを読んでもかまわないよ。それからついてきて。ここは掃除用具が入ってる。ここが僕の部屋、反対のここは客間で僕の隣はシン。向か

いはロイ。シンの隣がバレイラになる」

「あの扉はなんですか？」

バレイラの向かいの一番奥の扉をロイが指差す。

「まだ決めてない」

一つ一つ扉を開けて丁寧に教える竜真に雛鳥のように付き従う子ども達。自分の部屋が開けられたときはそれぞれに目を輝かせていた。最後の扉についての「まだ決めてない」はどう解釈すべきか三人は考える。

「だから開けちゃダメだよ。どうなっちゃうか分からないからね」

竜真の言っていることは大半が本気なので三人は真剣に頷いた。

三人に自分の荷物を片付けさせるため部屋に籠もらせると、ふと思いついた竜真は七つ目の扉を見つめる。七つ目の扉の前に行きノブを握りながら中を想像する。八十畳の広間で三面を鏡張りにし、手前半分は床張りで奥半分は畳張りにした。

「訓練場の出来上がり！」

竜真は扉を開けてみて、想像通りの出来ににやりと笑うと子ども達を呼んだ。

83. (一)案内(後書き)

異空間で……ちなみに各自の部屋の窓からから出ると裏庭にポイッて放り出される仕組み。ただしまた家に入るには玄関からと言う面倒な代物。

深く考えたらいけません(笑)

竜真さんめちゃくちゃです。

84・麗しの鬼姫（前書き）

ごめんなさい……なんか……はい。ごめんなさい。

84・麗しの鬼姫

竜真の家に着いた翌日、朝食後のお茶を飲んで子ども三人達が寛いでいると、一番奥の部屋から竜真が廊下に首を出して三人を呼ぶ。なんだろうと首をかしげ、三人はカップを片付け竜真に呼ばれた方へ向かった。三人は竜真がいるのが例の謎の部屋だと気が付く。

「大丈夫。部屋を作ったから入ってきて」

竜真の声に三人は入ってみることにした。そうすると目の前に広がる広間にそして竜真に驚く。

「訓練場を作ってみたんだ。これから朝ご飯後は毎日ここに集合ね」

そう言った竜真の姿はミグの意匠らしいドレス姿だった。美しいマーメイドライン、喉仏を隠した襟元で袖は袖口に向かい広がっている。色は薄紫で銀糸で刺繍の模様がある。髪は結上げてあり、真珠の飾りが清楚に生える。それはそれは美しい令嬢、姫姿だった。

「三人とも着替えて」

竜真が取り出したのはミグがバレイラの盛装にと竜真に預けた薄い黄色のドレス。ロイとシンはこちらもミグが作った盛装。三人は再び首をかしげながらも訓練場を出て自分の部屋へ着替えに向かった。

竜真達の盛装はミグにリユカの帝都出発前に頼み竜真達のシユミカ到着後に追いついたオーダーメイド。竜真のドレスは竜真に一度ドレスを着せてみたかったミグによる渾身の作だ。この場にニヤルマーが居なかったことは幸いで、後に三人から竜真の美しさを語ら

れた時に悶絶するほどにニヤルマーは悔しがった。

戻ってきた三人に竜真はニッコと口の端を釣り上げて笑う。

「バレイラ綺麗よ。シンとロイも似合っているわ。流石ミグね。貴方達には各国のダンスや礼儀作法の練習をしてもらうことにしたの。数字持ちの大事な訓練の一つですからね」

裾を軽く持ち上げて最上級の礼の形を取る。

「バレイラ真似してね。そして出来るだけ言葉使いは丁寧にしなさい。シンとロイもよ。シュミカにいる間は丁寧な言葉使いを心がけること。それから礼儀作法は男女両方とも覚えます。シンとロイには可愛い服を着て裾捌きから覚えてもらいます。わかりましたか？」

竜真お得意の鬼の訓練になりそうな予感に三人三様に口元を引きつらせている。

「お返事はどうしました？」

「はい」

三人の戸惑いが隠しきれない返事を聞いて竜真が更に付け足した。

「シンとロイには丁寧な女性の言葉使いも覚えてもらいますので、二週間頑張ってくださいね」

まさに花が綻ぶと言った笑みに三人は見惚れた。

「これからするのは世界共通の女性の作法です。まずは一の礼、そして二の礼、そして最上級礼ですわ」

次々に繰り出す華麗な動きに三人は立ちすくんだ。

「バレイラ」

「はい」

バレイラは見よう見まねで竜真の動きを追う。そして竜真はもう最上級礼の見本を再度見せると膝を折ったところでピタリと止まる。

「バレイラ止まっていなさい」

竜真はバレイラの傍に近寄ると首の角度、手の位置、膝の角度を直していく。

「この位置で動かない。次シン、ロイ」

バレイラがプルプルとしているのをシンとロイがびくびくしながら見ていた。

「男性の礼の取り方、一の礼、二の礼、そして最上級礼。次、一の礼」

シンとロイが真似る。

「二の礼。そして最上級礼……二人とも動かないように」

バレイラと同じように手の位置をそして腰の角度を直す。

「三人ともこれが礼の仕方です。貴族階級ではこの三種の礼を使い挨拶します。大まかに言えば一の礼は身近な人。二の礼は目上の敬意ある人、もしくは最上級礼を使わない時と場所です。最上級礼は基本的には王族相手だと考えて下さい。はい。崩していいですよ」

まずバレイラが崩れた。

「リウマさん、足がプルプルします」

「そうね、あの角度は辛いわね。わかるわ。でも数字持ちは貴族や王族相手に家庭教師が出来るだけの教養と何者にも負けない強さが必要なの。実際、数字持ちの中には裕福な商家や貴族、王族の妻や婿になる人もいるのだから。それに依頼の中には潜入調査もあるから男女がまわなく練習しなくてはならないのよ」

「なぜリウマさんは今女性の仕草言葉使いを？」

「決まってるわ。これで男言葉話していたら気持ち悪いでしょ」

確かにこれで男性らしい仕草や言葉使いをされたら気持ち悪いぐらいに竜真は絶世の美少女だった。

こうしてシュミカに滞在の午前中は作法の授業に費やされるのであった。

84・魔しの鬼姫（後書き）

シンとロイに女装、バレイラに男装フラグ……ゲホゲホ

シュミカに着いてから一週間目。午前中にひたすら行儀作法の練習をしている三人は午後は思い思いに過ごしている。今もそんな午後の一時。竜真はこの日シュミカから一人離れて以前鍛冶屋の息子と来た湖の近く、竜の巣に来ていた。

「……ジャラハラおいで」

その一言だけで竜真の脇に一人の男が立つ。以前のように呪文はを唱えなくても召喚も可能だ。

「我が麗しの主……主？気配が……我らの王のような」

「君らの王？もしかしてマリシュテン？」

ジャラハラは竜真を見て目を見張る。

「僕はこの世界のただの人間から逸脱した存在になったからね。僕はヤシャルの息子なんだよ」

その告白にジャラハラは竜族の最高礼をもってかしづく。

「我ら竜族は王達の僕。主よ、我らが里にお出てくださいませんか？人間どもに王を封じられてより王より預けられた品をお返しすること叶いません」

「それなら大丈夫だ。僕が封印を全部解いてきたから神殿への行き来はできる。行っておいで」

「主、ありがとうございます」

そのまま反転してどこかに行きそうになるジャラハラを竜真が止める。今回の呼び出しの目的はジャラハラに褒美を与えることだった。ロドよりこっち、一人になる機会があっても面倒だと今までジャラハラへ褒美を与えていなかった。

「今回の呼び出しの目的はご褒美だよ」

「そんな褒美などと主君筋に当たる方から」と一歩退こうとして竜真に捕まえられる。

「だけど僕らはそういう契約だ。ほら手を出して」と竜真は手に五十センチメートル級の巨大な赤い魔力玉を作り上げるとジャラハラに押しつけた。

「……主……前に増して何と甘美か……」

竜真も以前と比べると巨大な魔力玉を作り上げても体の辛さがなくなっただけに驚いている。以前は練り上げるのにも時間と体力がかかり面倒なことだったのだ。魔力玉を取り込んでいくジャラハラは恍惚と表情を緩めていた。

「マリシュテン様のお力も感じます……衰退してきた竜族にとってマリシュテン様のお力は甘露。ありがとうございます」

竜真は自身の魔力にマリシュテンの力を少し添えていたことにジャラハラは取り込み気付く。

「つきましてはしばらくお側を離れてもよろしいでしょうか？」

「なぜ？」

「この三千年の間にマリシュテン様のお力が弱まり竜族の弱体化と少子化が進んでおります。こうして新たにマリシュテン様のお力を授かりましたので子をなしてきたいのです。勿論お呼びとあらば直ぐに馳せ参じましょう」

竜真はそれを聞くとふと考えて自分の手にマリシュテンの力を抽出する。それを鞆から魔術の媒体になる水晶に詰め込んで袋にしまいジャラハラに渡した。

「マリシュテンの力を水晶に詰めたものを渡しておくよ」

「……ありがたき幸せ。では御前を失礼いたします」とジャラハラは人の身に翼だけ生やして西へと飛び去った。

竜真はジャラハラを見送ってから、ここまで来たついでに魔術の媒体である鉱石を拾い集めようと辺りを見渡したのだった。

85. じ褒美（後書き）

竜真とジャラハラの間にはびーえるな関係ないですからね？二十話近辺でのフラグ回収です。

86・冒険にはつきものです

「ただいま」と夜更けのアリアの戸を潜れば、三人の給仕が花が開いたような笑顔で「おかえりなさい」と返事をする。ジャラハラと別れて鉱石を集めて帰ってきた竜真を出迎えたのは彼の養い子達だ。

「リウマ、おかえり。こいつら凄く使える！ 一人俺に出来ない？」

「寝言は寝ていても言わないほうが身のためですよ？」とナイフが一本、竜真の手の中にある。

「機転は効くし礼儀正しいし愛想いいし可愛いし」

「当たり前です。誰が育てていると思ってるんですか！ 可愛いに決まってるでしょ！ この子達がどれだけ努力しているか僕が知ってます」

素晴らしい竜真の親バカ発言にシンとロイは照れて薄ら笑いを浮かべて竜真から視線を外す。バレイラは絶賛感激中だ。

「うへ！ 親バカだねえー」

「ところでお昼の混雑は済んだようですが、この子達を引き上げてもいいですか？」

「おう。構わないぞ」

温度差ある師弟の会話に何をつっ込むことなく三人は竜真の傍に近寄ってきた。

「あのおっさんからの給料はふんだくつていいからね」等と半笑いに言っている竜真に「俺はけちじゃねえよ」とヨルが食って掛かれば竜真が過去の話を持ち出す。

「誰でしたか？屋台の串肉を僕に盗られて隣町まで追い掛け回していたのは」

「当たり前だ！ 食いものの恨みつーのは恐ろしいに決まってるだろ！」

大人気ないのはどちらだろうか？

戯れあう二人をとりあえずスルーすることに決めた三人はヨルの前に手を出した。

曰く「給料下さい」と。三人の報酬は日雇い扱いだ。

「ここシユミカには探検するにはちょうどいい洞窟が近場にある。駆除しても駆除しても何故かいつも魔物が出てくる不思議な洞窟でランク的にはDからAぐらいの魔物が居る。腕試しがてら遊びに行こうか？」

夜更けのエリアを出た四人。竜真の家に戻りがてら、竜真がこの提案をすると三人が嬉しそうに返事をし翌朝は行儀作法の練習せずに洞窟へと行くことが決定したのだった。

「洞窟や遺跡に入った時にはマッピングするのが大事だよ。僕はこの洞窟に何度も潜っているから何がどうとかは知り尽くしているけ

ど、君らは初めてだから……技能的には盗賊のスキルだけど、全員で練習してみようか？マツピングと言っても書くわけじゃなく、頭の中に作り上げていくんだ。ざっくりとでもいいから歩いた所を頭に描く。歩いた歩数やかかった時間、距離なんかも補足情報として入れるとなおいい。マツピングが混乱してきたら手を挙げて教えてね。さあ入るよ」

翌日の朝、三人を前に意気揚々と洞窟に入るための注意事項を述べた竜真。三人は初めての経験に少し戸惑い気味だ。

「まずはシン、バレイラ、ロイの順番かな。盗賊、剣士、魔術士のパーティーならオーソドックスな列の組み方だ。シンはこの一週間でアカイから少しは教わったんだろ？」

「は、はい」

「緊張してるね。ほら、三人ともその場でジャンプを十回ぐらいして首や手首を回してごらん。落ち着いて。僕が補佐するんだから安心すればいい」

背後を竜真が守ってくれるという絶対的安心感をシンは胸に抱き、洞窟内に足を踏み入れたのだった。三人が前向きになったことに竜真がこっそりほくそ笑んでいたことを三人は気付かなかった。

86・冒険にはつきものです(後書き)

RPGでは王道の洞窟探検です。

87・洞窟にはつきものです

「うわ！」

「あーあ、失敗しちゃったね」

短い悲鳴の後、右足を縄に絡めとられて逆さ吊りにされたシンをロイ、バレイラ、竜真の三人が囲む。

「シン、敗因は？」

「紐の解く向きが違ったんだと」

「そうだね。三つ目の紐の解き方を間違えていたかな」

洞窟に入って十一個の罨を解くのに失敗し吊されたシンは竜真によって理由を求められる。

「ロイ、バレイラ、助けてあげなよ」

リウマさんは助けられないの？ そんな二人の眼差しに竜真は「僕が助けたら意味がない」と答え、それを聞いたバレイラとロイがシンに近づいた瞬間にロイとバレイラも罨に引っ掛かり逆さ吊りになる。

「うん。こうなると思った。シン！ 遺跡や洞窟にはこういった複数に連鎖する罨もあるんだ。君の失敗が二人の命にかかわるかもしれないと学びなさい」

「あい」と頭に血が上りつつあるのかシンは半泣きな返事。

「それから二人もうかつに近寄らない」

「はい」とロイとバレイラも神妙に返事をすると竜真が三人を解放した。

「一つ一つ、ちゃんと教えるから失敗を恐れないで先に進もうか」

この場にヨルやミグが居たなら親バカなことだと吹き出されていたことだろう。ちなみにニヤルマーの反応は「なんとお優しい」と感激していた可能性は高い。三人は改めて気合いを入れ直し、竜真の胸を借りまくるつもりで洞窟の踏破を決意を新たにしていたのだ。

それから三人は様々な罠に突き当たっては破り、時には引つ掛かり、ようやく一階から地下へ降りる階段を見つけた時には消耗しきっていた。

「な……何個罠があるんだ……」

一番活躍し尚且つ被害にあったシンが床に倒れこんだ。

「確か……百七十三個だったかな。一階の罠の多さは異常なんだよね。まあ、半分は僕が付け足したんだけど」

竜真は実に楽しそうに言った。三人はぎょっとして竜真に注目する。

「僕が初めて突破した時は八十個近い罠があつてね、分かりやすい場所にあるのに今まで何故制覇できないのか気になっていたんだ。どうやら面倒過ぎて誰もが途中で断念してきたらしい。依頼を受け

て潜ったのが最初なんだけど、色々な罫の解除が楽しくなった後は作るのにも熱が入っちゃって、結局誰も通れなくなっただけ。だからと言ってはなんだけど、ここは紅砂の試験場にしたらだよね」

竜真のせいで難易度が異常に高い洞窟になったのを利用して紅砂の入会試験をしているらしい。何せ罫も多いがそれ以上に魔物もランクAと強いものも出る。

「シンはいずれ一人で踏破させるからね。まあ、今日はシンだけじゃなくロイヤバレイラも扱くから楽しみしていなよ」

そういう竜真は楽しそうに笑った。

「ところでマツピングはできてるかな？」

竜真の問いに三人は顔を青くさせる。どうやら罫の突破やエンカウトしてくる敵に夢中に忘れていたらしい。

「じゃあ今日はこのぐらいにしてバレイラ先頭で帰ろうか？」

バレイラが「えっ？」となったのも無理はない。何せ覚えてないのだから

「これも練習だよ」と竜真の声にバレイラのやる気が出る。しかし全ての罫が解除されたわけでもなく、解除された罫が出っぱなしになっているかと思われていた罫は最後尾だった竜真が入り口側からしか発動しないように直しながら通ってきたため罫の形跡もない。

三人が途方に暮れながらも入り口に向かいとぼとぼと歩いていくのを竜真は「午前の練習を洞窟踏破に切り替えようかな」と呟いて見ていた。

おまけ

とある屋敷にて、どっかの一行が旅立った日の夜のこと

「シグルド様、なみえ様、ミグさん、お待たせ致しました。夕食の準備が整いましたので食堂にお越し下さい」

燕尾服をビシッと着たニヤルマーが控えめなノックをした後、シグルドの許可を得て部屋に入り、恭しく言う。シグルドとミグはそんな時間かーと言う感想を胸にしまい、奈美恵は美形生執事さんかーと一人現代女子の感想を胸にしまい、ニヤルマーを先頭に部屋から出た。

「ニヤルマー、今後のことがあるから今夜の給仕はお前がして人払いを」

「かしこまりました」

これまた恭しく主人に頭を垂れるニヤルマーをミグがおかしいものを見るように笑いを堪えている。

「ニヤルマー、その切り替えは素のようだな」

「ミグさん？」

以前に言っていた天然に間諜をできるのもある種の才能だなとミグはにやにやしなから見ている。

そんなミグの内心はシグルドに伝わったようで、シグルドもくすりと笑みを浮かべた。

「ミグ殿、ニヤルマーは素直なのですよ」

「ええ、そのようです」

何のことだか分からない。そんな様子のニヤルマーにシグルドとミグは吹き出す。ニヤルマーが困った顔をするのとたまらんとばかりに二人は大笑いした。いきなり笑う二人をニヤルマーと奈美恵は不思議そうに見ていた。

しばらくして食堂に着いた三人が席につくとニヤルマー以外の使用人達が出ていく。全員居なくなって食堂には四人しか居なくなりニヤルマーが給仕を始めたのち四人は今後のことを話し合い始めた。

87・洞窟にはつきものです（後書き）

拍手でニヤルマーが求められていたので垣間見程度に（笑）

88・痴漢撃退は教え通りです

シュミカに着いてから一週間してから作法と洞窟探検が交互に午前中を埋め始め、午後は各々がそれなりに過ごしていた。今回は紅一点バレイラの話から始まる。

今バレイラは一人シュミカの町をぶらついていた。

シンはアカイと出かけてしまい、ロイは竜真と魔術の勉強中でバレイラは珍しく暇を持て余してしまった。そこで町中に出てみようと思いついたのだ。

お気に入りの服を着て家を出ようとしたところ飲み物を取りに来た竜真がバレイラを呼び止めた。バレイラの髪を編み込んでサイドで止め、さらには白粉と紅で簡単に化粧を施し「はい。かわいいよ。お嬢様風の出来上がり。絡まれたらぶちのめすんだよ」と物騒極まりない台詞を言って送り出してくれたのだ。

普段とは違う自分に違う状況はバレイラをウキウキとさせ足取りを軽くさせた。そこへお約束のごとくダミ声がかかる。

「お嬢ちゃん、おっちゃん財布が空ですよー。ちつと金を分けてくれねえーか？」

下卑た笑いで近寄ってくる三人の男達をバレイラは慌てず騒がず路地裏へ誘導して投げ飛ばした上で男にとって一番守りたい場所を力の限り踏み潰した。

「ぎゃー」と言う悲鳴を上げて失神した男二人にバレイラを止めるように立たない腰で逃げようとする一人の男。

「こつ見えてもランクAなの。おじちゃん、女の子だからって舐めたら痛い目に会うんだよ」

とつても可愛らしい女の子の口から出る癡猛な台詞に男はガタガタと震えた上に身に覚えがあった。

「あ、あんたにもしかして仲間がいるか？」

「いるよ」

「もしかして同じ年ぐらいの男か？」

「あれ？ロイのこと知ってるんだ」

男の頭の中で何かが崩れた音がした。

「もう、もう許してくれ！」

男はその場に崩れガタガタ震えだした。男達三人はロイがランクを上げた場所でロイに振り返り討ちにあった男達だったのだ。

「お金は働いて稼ぐものだからね。人から盗っちゃだめなんだよ」
「ごもつともだ。」

男に説教をするとバレイラは立ち去った。男は大きな息を吐き、「まっとうに働こう」とポツリ呟いた。しかし、彼とバレイラとの縁は更に続いていたことはまだ誰も知らない。

再びメイン通りに戻り歩きだした。雑貨屋に寄り簪タイプの髪飾りを二つ買つと武器屋に寄つて髪飾りの先を削ってもらい尖らせる。長針のような簪を手に入れた。

「やっぱり女の子は護身用の武器を持たないとダメだよ」と先程の男達が聞けば戦慄する一言を呟く。

またしばらく歩いていると前から見知った男がやってきた。

「よお！バレイラ」

「ヨルさん！」

「ヨルおじさまって呼んで」

その瞬間、ヨルの目の脇を何かが飛び去る。

「師匠、すいません。手が滑りました」

それはバレイラの真後ろから聞こえてきた。

「うん。笑いながら言う台詞じゃないよな？」

「大笑いしてもいいと思ってますよ」

頭の上でのやりとりをバレイラは見上げていると、横からロイが来た。

「バレイラ、バレイラが三人の男に囲まれてるって見ていた人が教えてくれたけど無事だったみたいだね」

「それで来てくれたんだ。リウマさんが教えてくれた通り投げ飛ばして力の限り踏み潰したけど」

にっこりと輝かんばかりの笑顔で答えるバレイラにロイがうつすら顔を悪くする。ロイは竜真に出会ってすぐの頃竜真がバレイラ

に教えた痴漢撃退法を見ていたのだ。あの頃はか弱かったバレイラもランクAと一人前の冒険者だ。

ロイはそつと自分の股間を押さえた。

「リウマさんが教えてくれた通りにしただけだもん」

ただ可愛らしいバレイラがこの見た目通りではないことを知るロイは見知らぬ、実は知ってる男達に「自業自得だけど使い物になるといいね」と呟いた。

ヨルに連れられバレイラと合流したロイと竜真は夜更けのエリアに居た。お茶を飲み安らいだ三人。

バレイラがヨルに聞いた。

「ヨルさん独り身なの？」

「バレイラちゃん嫁に来てくれる？」

「ヨルさん？夢は寝てから見てね」

「ぐはあ！ バレイラちゃんがバレイラちゃんが……リウマの様だ」

嘆くヨルに竜真が笑いながらバレイラに言う。

「シエナビアって女性が居るんだけど、この人、何度も振ってんだよ。美人なんだけどね」

「ヨル様、その隣にいる若い女誰！」

竜真は自分の声を遮って大きな音を立てて扉を開けた人物を見て頭を抱えた。まさに今話している人物だからだ。

「シエナビア、僕の養い子だ。ヨルなんかにはやらないから安心していいよ」

「あら、リウマくん。いつから子持ちに？」

「この前会った時のしばらく前に……師匠逃げるな」

シエナビアの視線が竜真にそれた途端、ヨルはすかさず逃げ出したのだが、竜真とシエナビアの鞭によって拘束されてしまった。

そのあつという間の捕獲劇をバレイラとロイは呆然と見ていたのだが、ふとあることに気が付く。

「ねえロイ」

「うんバレイラ」

二人は見覚えのある竜真の鞭からシエナビアの鞭に視線を移す。

何かが蠢いていた。

「シエナビア、まさぐるな！ 触手プレイは趣味じゃないって言うてんだろっが！」

見た目は確かに鞭なのだが表面が何やらつごつごつしている。視線をヨルに移せば、鞭の先が何気なくヨルの首筋をそろそろと擦っている。

「シエナビア、子作りしておいでね」

それを言うのが早いか竜真は自分の鞭をすでに閉まっている。

「あ！ リウマてめ」

「ダーリン！ さあ逝くわよ」

どたばたと抵抗しているが大柄な男が美女に階上へ簡単に引き吊られていく。流石は現役2ndだ。竜真はこっそり手を合わせ二人が消えた後を拝んだ。師匠、成仏してくださいと。

「ロイ、バレイラ、エプロンを着けてヨルの代わりに仕事をしようか」

そう言った竜真がやけに清々しそうだったとバレイラとロイはこっそり思ったのだった。

88・痴漢撃退は教え通りです（後書き）

南無。ヨル成仏してくれ。

私にもどつしてこの展開になるのかわからない。

竜真は二人が寝たのを確認してから夜更けのアリアへとやってきた。

何やら悄然した様子の店主に常連客はどう声をかけていいかわからない様子だ。魂というか生気を吸い取られてしまったかのようなヨルを竜真は少しやり過ぎただろうかと思いやるが、やり過ぎたのはシエナビアである。

「ありやー男を辞めたくなるわ」とぼつり呟くヨルを竜真はどうやって立ち上がらせるかと思案する。シエナビアったら何したらこんななるのさ。

シエナビアを何故ヨルが断固拒否するのかを知りたかった竜真のいたずらはヨルに大ダメージ与えたらしい。

仕方なく竜真は店を手伝いながら閉店までヨルを観察した。やがて客が居なくなつたのを見計らって竜真が声をかけた。

「師匠、少しお願いしたいことがあるのですが……」

「おー」

あまりに気の抜けた返事に竜真はナイフを取り出すとおむもろにヨルに投げつけた。

「うわっ！」

派手な音を立てて壁に刺さるそれに反応してヨルは覚醒したようだ。

「まだ寝ぼけているのかと思ひまして」

「……親切な起こし方だな」

「で、お願いしたいことがあるのです」

「話聞けや」

「僕が相手をしてるだけでは経験的に物足りないと思ひまして、あなたにバレイラの剣の相手をしてほしいんです」

不貞腐れるヨルを無視して話を続ける竜真にヨルはため息一つで気持ちをかえた。

「今までミグやアカイにも相手をさせたのですが、まだまだ経験不足なもので」

「待て待て、あの三人が冒険者になってまだ半年経つかどうかだろ！　すでにランクAならお前並みに成長してる」

「でもバレイラだけ足りないんだ……他の子達には別ルートが既にあるんだけど、バレイラはなんて言うか器用過ぎて突出しない。簡単な鍵開けが出来たり、初歩的な魔術は使えるがシンやロイには至らない」

「……なんじゃそりや、いやいや、あのかつあげ連中の退治の仕方とか凄かったよ？　投げの初動早すぎでしょ！　しかもあの金潰し！　俺見てて自分のに手を当てたよ。まじあれ潰れてなかったか」

ヨルはその時の光景を思い出したのか顔色を悪くすると竜真は爽

やかにこう答えた。

「女の子に悪さする奴のは潰しちゃえと教えていますから……それよりも師匠、見ていたのに助けなかつたんですか？」

「ちよつと待て剣を抜くな！」

竜真の手が柄を握る。ヨルは慌てて両手を前に出して振った。

「ヤバそうなら止めに入るつもりに決まってるだろ？ それにお前と一緒に旅して、ランクがAだとは言えバレイラはまだ小さい女の子だ。実力がどの程度か見たかつたんだよ。あれが最低限の強さだとするとお前等凄いわ」

竜真の手が柄から離れたのを見てヨルはホッと胸を撫で下ろした。

「体術ではロイとシンはバレイラに勝てません。器用さや人当たりはシンが、魔術と賢さではロイが一番です」

実に才能ある子ども達が集まったものだと言ルは感心する。

「ランクAまでなら比較的楽ですが、僕の目標は彼らに数字持ちになつてもらつことですから」

「全員1stのパーティー目指すって？ んなこと誰も成し遂げれてないぞ！」

もやもやんと頭に想像図を描き、頭を振ってそれを払うヨルは竜真の大それた目標に驚いている。実際に数多居る冒険者の中で今現在二名しか1stが存在しないと言うことがパーティー全員1st

ととか言う異常な目標だと指し示す。

「まさかそれだけで満足するもんですか。あの子達に僕が出会った。これはある種の運命かと……僕自体の役割は粗方分かりましたが、あの子達にはそれぞれにこの世界ですべきことがあるのではないかと最近思っていますよ。つまり才能がありすぎるんです。ならばその時に彼らが行き詰まらないように僕は持てる力と知識を彼らに与えようと思ひまして」

「親ばかめ」

「ありがとうございます」

ふふつと笑って竜真が言えば、しょーがねーなーとヨルが苦笑する。

「師匠がシエナビアを忘れたようで良かったですよ」

途端にヨルが激しく落ち込んだ。シエナビアは禁句のようだ。海溝の奥まで沈み込んだヨルに竜真は首を竦める。

「仕方ないなー」と竜真はヨルを放置して帰ることにした。扉を開けて半歩出たところで何かを思い出したらしく振り返った。

「あつ、言い忘れてました。僕達三日後から旅に出ますから、それ前にバレイラをお願いしますね」

「……………何だつて！」

ヨルが意識の海溝から戻ってきた時には既に竜真は居なくなっていた。

「バレイラ、踏み込みが甘い。リウマ、かなり我流で教えたる！」

「僕のやり方だとバレイラがこれ以上伸びれないから教えを請うたんですってば」

「そりゃそうだ。リウマは力と速さと器用さが異常なだけで剣技は素人に毛が生えたようなもんだからな。つとと……軸が振れる。バレイラ」

翌日、竜真、シン、ロイの三人が見守る中、早朝からバレイラはヨルにしごかれていた。ヨルは元々大国に仕えていた軍人で剣技をもつてしてある程度出世したのだが、質の悪い貴族の令嬢に見初められ逃げ出して冒険者になった。

元々が強かった上、騎士として礼儀正しさもあり、ランクはあつという間に3rdまでになった。

「……よし。俺は店へ戻るから、バレイラ、素振り二千。シンとロイを借りるぞ」

街中の時計塔からの金の音でヨルは指導を中断させる。

「ん。シン、ロイ、日当は高めにもらえよー」

素振りを始めたバレイラから視線を移すことなくロイとシンに竜真が手を振る。

シンとロイは肩を竦めながら顔を見合わせるとヨルについてその場から離れたのだった。

89 指導(後書き)

ヨル……女から逃げまくり

90・お好みは？

「さあ、これが最後の一本だ。こい！バレイラ！」

「ふっ！」

バレイラが跳躍しヨルに攻め込む。その後は激しい剣のぶつかり合い。バレイラは小柄さと俊敏さを武器に戦い、ヨルはブレのない基礎上に極めた剣技で応戦する。

「男女差や年齢差が根底にあるんだ。お前に合ったやり方があるのはわかったな？」

「はい！」

「お前は女だ。しかもまだ幼くて身体が出来上がっていない。基礎も甘っちょろい」

「はっ」

「男の剣なんぞ真っ正面から受けようとすんなよ。流すんだ。流した上で体勢を崩させる」

「はい！」

ヨルは竜真に旅立ちを一日先送りにさせて今日一日店を竜真とシン、ロイに任せバレイラをしごいていた。

「型練習は毎日しなさい。自分じゃやらないがリウマも型は覚えて

いる。監督してもらえ」

ヨルがバレイラの攻撃を受け止め、バレイラが体勢を崩したところへヨルから体当たりを食らう。もちろんバレイラは吹き飛ばされたが、ダメージ軽減のため自ら跳んだこともあり、飛ばされた距離と比較してもダメージはさほどない。

バレイラの立て直しは素早く、ヨルの次の攻撃を立て続けに避けた。

「肩で息してきたな。まだまだスタミナ不足だ。それを補うためにも弱点は的確に突くんのだ」

「……はい！」

「こつしてな」

バレイラはヨルの一打に膝をついた。避け切れず流すこともさせてもらえずに剣で受けることになったのだ。

「はい。終了」と、ヨルは剣から力を抜いて、バレイラに手を貸して立たせる。

「いい感もしているし、そこそこ器用だ。太刀筋も素直だから真面目に練習を続ければ二つ名の付く剣士にもなれそうだ。バレイラ、頑張れよ」

ヨルはそう言うとバレイラの頭を撫でてぐしゃぐしゃにした。バレイラも疲れ切って言葉は出ないが実に嬉しそうだ。

「ヨルさん……はあはあ……ありがとう……ござい……ました」

息が整ってきたバレイラがヨルに礼を言えば、ヨルはバレイラの

目線に合わせて屈み、バレイラの髪を優しく梳く。

ヨルがふと言いにくそうに言った。

「おー。お前は強くなれるよってあんまり強くなりすぎててもなあーシエナビアみたいに男に対しても強くなりすぎるなよ?」

「私より強くないと認めちゃダメってリウマさんは言ったよ?」

「強い定義が違う。男より実力で強かったっていいんだ。ただ女の強さは内面の強さで男より柔軟でしたたかなところなんだよ。肉体的に男を屈伏させる強さよりも、精神を鍛えたほうがいい。まあ男女構わず精神も鍛えるに越したことはないがな。男女はここそここがもとより別の生き物だ。お前は女の子だってこと忘れんなよ?」

ヨルは頭と胸を指して示すとバレイラは頷いた。

「さあ店に行こうか」

「はい!……ところで何でシエナビアさんと結婚しないの?」

「……家事が壊滅的で性格やもろもろが合わないんだよ。あいつ、いい加減諦めねーかな」

ヨルはうつんざりした眼差しでどこか遠くを見つめた。

「おかえりなさい」

「おかえりなさい」

「おかえり」

エプロンを着けた三人が店を出迎える。カウンター席は女性冒険者でいっぱいだ。テーブル席とカウンターでは華やかさに違いがありすぎる。テーブル席は野郎がちくしょーと酒を浴びていた。

「お！相変わらずリウマは覆面しててもハーレム作るんだな。どうやったらそんな技が使えるんだ？」

「今日は僕だけじゃなく魅力的な少年達も居ますからね」

カウンターに空いていた一席にバレイラを座らせるとヨルは着替えるために奥に一度引っ込む。簡単に頭から水を被って着替えてきたらしいヨルがエプロンをしながら出てくるのはしばらくしてからだ。

ヨルが奥から出てくるとカウンターはますます盛り上がる。

野性味のある大人の魅力があるヨル。覆面はしていても目元や口元から美しさが漏れだしている竜真。正統派な純朴少年シンにどことなく腹黒が見え隠れな美少年ロイだ。

女性に声を掛けられ戸惑うシンにかわいいと言い、照れながらもクールな受け答えのロイにきゅんとするお姉様方にヨルと竜真も苦笑する。

「バレイラ、着替えが持つてきてあるからついておいで」

「はい。リウマさん」

竜真がバレイラを連れて奥に入ると女性の一人がポツリと呟いた。

「あの子……結婚できないわね」

「かわいそうに……」

それに反応したシンが飛び付き、ヨルがなんとなく感じたことを洩らす。

「いい男に囲まれすぎなんだよ」

「自画自賛ですか？」

「ロイは中々言う子だねー。あの子の周りには色んなタイプの良い男が揃ってるのさ。ミグやもう一人旅仲間、アカイも含めてね」

ロイの切り返しに笑うとヨルは手元のグラスを拭きながら答える。その答えが正解なのか女性達が一斉に頷いた。

「あの覆面さんもかなりの美形と見たわ」

「マスターだって素敵だし」

「シン君もロイ君も将来有望そうだし」

「目が肥えちゃえば、そこらの男なんて砂粒よ」

「そうそう。あなた達並か以上じゃないと結婚できないわよー」

シンは女性陣のお喋りを頭の片隅にミグとニヤルマーや自分達に

囲まれたバレイラを頭に浮かべてなんとなくわかった気がした。逆にロイはいまいち分からないようで首をかしげている。

「あいつ自体がランクAだから、実力はそれ以上じゃないとリウマが認めないだろ？つーかその時点で相手は数字持ちか？もしくは王侯貴族かもな……そのうちどっかの王妃にでもなんじゃねーの？まあ、バレイラの趣味次第だろうがな」

「これだけの男に囲まれて構われて並の男に走ったら凄いわ……いえ、ありかもしれないわね」

お姉様方はバレイラの行く末に並々ならぬ関心があるようだ。そこへ着替えを終えたバレイラが竜真と共に帰ってきた。エプロンドレスの可愛らしい少女の登場に店内が騒つく。

「ねえ、ねえ、あなた。これだけの男前ばかりいるけど、タイプはいるの？」

「リウマさんみたいに強くて、ミグさんみたいに家事も出来て、ニヤルマーさんみたいに一途な人！」

お姉様の一人がバレイラを捕まえて直に尋ねた。どうしても気になるらしい。

対するバレイラの返しにカウンター内の男達は明後日を向く。

バレイラそれはそうそう居ないよ。とバレイラの婚期はそう簡単に訪れないだろうとバレイラと行動を共にした男達は思ったのだった。

90・お好みは？（後書き）

バレイラちゃん：居ない居ない。

91・旅立つもそうぞう

早朝に家の鍵をヨルに預けた竜真達一行はシュミカを旅立っていた。今回アカイは竜真に命令されて旅に同行していない。竜真、シン、ロイ、バレイラの四人はシュミカから西に向かっていた。

行き先は魔術士達の叡知の塔。魔術士ギルドの総本部である。

「次はロイの番だね。僕も塔には目的があるからね。塔から次の目的地までも近いし」

「次の目的地ですか？」

「まあまだ先は長いんだから、焦らずに小銭を稼ぎながら進んでいこう。シュミカにはろくな依頼がなかったしさ」

シュミカのランクAの依頼はシンら三人により根こそぎこなされていた。

「この国の都もそれなりに大きいから楽しいかもよ」

意気揚々と歩む竜真。まさか次の街で早くも歩みを止めるとは誰もこの時は思ってもみなかった。

シュミカの隣街ジリュアカに到着したのはちょうど昼時だった。近場の店に入り、腹を満たして表に出たところ、事は起こった。

「嫌です。離して下さいませ」

「いいじゃねーか！うまくすりゃあ王子様の子種がいただけで側妃様だ」

「そんな！つい先日結婚したばかりでございます。お許しくださいませ」

嫌がる街娘を連れ去ろうとする兵士。遠巻きにする民衆。冷たい目で見る竜真。

「あんの馬鹿王子……こんなことをするのはザナイド・ロベル。この国の第二王子だな……おい！」

「はっ」

「うわ」

ロイの脇に一人の女性がたたずんでいる。気配なく現れた女にロイが驚く。

「ロベル国王に伝えてよ。二度目はないって」

「かしこまりました」

「シン、ロイ、バレイラ。ちょっと聞いてくれるかな？」

王子様は何をやらかして、こんなにも竜真を怒らせたのかと三人は身を竦めながらも竜真の説明を聞く。竜真が説明を終えるとシンとロイは二人から荷物を受け取り離れた。

竜真は髪色を栗毛、瞳を碧に変えてから覆面を取ると簡単に髪を

結わえる。更にバレイラも同じ髪色に染め、瞳を青にした。そしてバレイラの手を取ると問題を起こしている兵士の視界ギリギリを通り抜けようとする。

「お！」

女を掴んでいた兵士が目の色を変え、掴んでいた女を突飛ばし、竜真とバレイラの方へ向かう。突き飛ばされた女はシンとロイに保護され野次馬の輪を抜けた。

「お前。来い」

「い……いやです。いきなり何を」

「お姉ちゃん！」

兵士の新たな贄を野次馬は動揺しつつも見守る。

幼い娘もさながら幼い娘が姉と呼んだ人物の美しさにどよめきが起きた。冒険者風の姉妹に野次馬達はかわいそうにと呟く。

「レイ」

「リウ姉ちゃん」

妹を抱えて守ろうとする姉の姿に兵士は興奮を覚えて無体を働こうとする。

「妹はご容赦願います」

「姉ちゃん！姉ちゃん！」

「妹の命が欲しければ、姉妹揃って来い！」

妹に剣を突き付け兵士が引き摺ると姉が堪忍と大人しくなる。それに兵士は満足し引き摺られる妹と姉は兵士に着いて行つた。野次馬達はあの娘達はもう生きて街には戻れまいと解散した。その中にシンとロイも居る。シンはロイに目配せすると兵士と姉妹の三人を追いかけ、ロイは四人分の荷物を持ち、冒険者ギルドへと向かつたのだつた。

湯浴みをしると風呂場に入れられた姉妹こと竜真とバレイラは交代に湯に浸かると用意された服に着替える。元の服は風呂場に持ち込んだため、武器やその他諸々が取り上げられることはない。二人は持てる武器を片っ端から身につけると風呂場から出た。

二人が出てくるのを先程の兵士が待つていた。

竜真がほくそ笑む。事情が詳しく知らされていないバレイラは竜真が猛っている理由が分からない。だが竜真がこういう笑い方をした後、何かしらが起こることは知っている。

「この部屋でしばらく待つている」

竜真達は兵士に部屋に押し込められた。どうやら侍女達の待機部屋のようだ。竜真は窓に近寄り、塀の外にいるだろうシンを探す。

「よし。居るな。バレイラ」

「はい」

バレイラも窓に近寄るとスカートの中から折畳みの弓と短い矢を取り出すとシンに向かって矢をいった。矢はうまくシンの足元へ届き、シンは二人の居場所を矢の来た方向から探り突き止める。

「シンは気がついたようだね。よくやったバレイラ」

竜真に誉められてバレイラは花が綻んだように可愛らしい笑顔を見せる。それは長く続かずバレイラはハツとしてスカートの中に弓矢を隠した。

「ほら入れ」

竜真達をつれてきたのではない別の兵士が一人の可愛らしい少女を連れてきた。

「リウマさん」

「よし。ロイも来たね」

可愛らしい少女……もといロイはふっと笑うと窓に近寄りシンに向けて手を振った。

「うん。配置に付いたね。後は馬鹿が来るまで休んでいようか」

「至急ザグナラルを呼べ」

近年見たことない王の焦りっぷりに侍従は驚いた。普段はそう動くこともない顔の色が土気色だ。そして怒鳴り声も近年聞いてなかった侍従としては王の怒りと焦りに身体を精一杯動かし、どれほど早く第一王子ザグナラルを呼びにいけるか、王の要望を満たすかだ。滅多に走らない王の侍従が城内を駆ける様子に騎士や女官、文官達もが何事かと様子を見る。

「殿下、王がお呼びです」

「ライベル……お前らしくもない」

自身の執務室に入ろうとしたザグナラルはいつもならこんな声のかけ方はしない王の侍従に片眉を上げて驚く。

「陛下に何やらあったらしく大変慌てていらっしやって殿下をお呼びになったのです」

「……父上が慌てている？」

王の慌てたところなど近年見たこともないザグナラルは王の侍従ライベルを伴い王の下へと向かった。

「ザグナラル殿下をお連れしました」

「入れ」

王の声に室内に入った二人は驚いた。威厳に満ち、いつも冷静沈着な王がげっそりとし、落ち着かない様子でうろちよろちよろとしている。

「ザグナラル……まずいぞ……ザナイドが……ザナイドが……」

「陛下……」

「ザナイドがいかされました？」

ロベル国王はザグナラルにふらふらと近寄り、力なくその肩に手を置く。

「……あやつが不祥事で中枢から去ったのは知っているな？」

「ええ、一介の冒険者に暴かれたとか」

「……その一介の冒険者とは当時2ndだった紅のリウマだ……つい先だつてのサナラン半島の戦への介入をやつてのけたあやつだ！」

ザグナラルは1stの冒険者が戦争に介入し戦いをやめさせた報告を聞いたことを思い出した。

「……各国の有力者とも知り合いで本人は盗賊ギルド、魔術士ギルドでも高い地位にいる。これはザナイドとのがあつた後により強化されたことだが……ザナイドをジリユアカの領主に封じたのも隣のシュミカにあの冒険者の拠点があることなのだよ……なのにあやつはあやつは……」

「父上？」

「ザグナラル。この書状をザナイドに火急に持っていくのだ。そして、ザナイドに一平民として死ぬがいいと告げよ」

以前、国の端で第二王子とその側近による不祥事が起きた。民を虐げ、女人を拉致し、好き放題にしていたその事件で第二王子は失脚。王家から席を外され、竜真が拠点を置くシユミカの隣、ジリュアカの領主として封じられ、一貴族としてまっとうに暮らすようにと親心と言う手心を加えた厳罰が処せられた。

「街の住人にまたも無体を働いているらしいのだ」

ザグナラルは王としては甘い采配だと当時思ったが父としてロベル国王の息子に生きて欲しいと願う姿は好ましいと思っていた。この王は優しいのだ。

「あの痴れ者め……火急の如く拝命つかまつります」

父の優しさを裏切り、その地位に胡坐をかき無為に過ごし、王に死ねと言わせた弟に怒りが湧くザグナラル・ロベルは護衛騎士三名を引き連れ、ジリュアカへと馬で駆けた。

92・あつ！

「どつどつ」

馬の首を叩いて労い三騎の騎士は連絡所で新たな馬に乗り換える。ここまで二頭を乗り潰していた。

荒い息を押さえ込み、連絡所の騎士が持ってきた水を一息に飲み休憩も束の間、騎士達は再び馬上の人になり駆け出す。

どのように性根が腐っていても息子に生きていてほしいと願っていた優しき父王が下した結論に三騎の先頭を走るザグナルはひたすらに駆けた。

色とりどりの衣を身につけた女達に囲まれて、ザナイドは下品な笑い声をあげている。女達は積極的にザナイドに擦り寄ろうとする者、怯えてその場に震える者様々だが圧倒的に後者が多い。

「……見るにも聞くにも堪えないね」

そんな呟きが隣から聞こえて、どのタイミングで暴れだそうかと考えている様子の竜真を横目にバレイラは竜真に寄り添うように怯えている様を装って座っている。

ロイはザナイドに媚を売りに、ザナイドの側でわいきゃいしていた。

「きゃっ」

「レイ！」

竜真にしがみつくようにしていたバレイラが別の男によって女の中心に居るザナイドの方へと引き摺られて行く。嫌々と暴れるバレイラに男が手を上げようとした時だった。

「そこまでだ！ 馬鹿者め！」

くたびれた姿の騎士が男からバレイラを引き離した。

竜真は出るタイミングを逃したと気配を消しバレイラを受けとめたまま騎士の後ろへと下がる。もちろんロイにも下がれと目で合図を送ってだ。女達は突然の乱入者に混乱している。

「ザナイド！ 貴様は父上の思いを何度踏み躪ろうと言うのだ！」

ザナイドの頬をザグナラルが殴った。ザナイドは態勢を崩し怒れる兄を見つめる。

まさかの兄登場に頭が付いていかないザナイドはザグナラルを見たまま動けない。

「陛下よりの下知である。一般の民となり死ぬがいい」

怒り心頭なザグナラルの荒げられた声にザナイドは自分の人生が終わったことを知った。

怒声の後の静寂。

女達も怯え誰かの喉が鳴る。

「はいはい！ もうその人は平民なんだよね？」

「リウマさん！」

ザナイド、ザグナラル、二人の視線が一人の女に向かう。

手をぱちんと叩き、場の空気を一気に制する美少女。隣に立つ少女はそのタイミングに驚いてしまっている。ザグナラルは眉間に皺を寄せ、ザナイドはそこに居るのが誰か気が付きわなないでいる。

「おばかさんだねー……ザナイド殿下ったら平民にまで身分を落としちゃうんだから」

「男か？」

「正解です。ザグナラル殿下」

心底バカにした物言いでザナイドを皮肉る姿と見合わぬ男の声にザグナラルはふと呟いてしまった。

「この男、僕がいただきます。僕の下で人間の生き様を平民と蔑む民の在り方を教えましょう」

ここまで美しい礼がとれる者は久しく見ていない。着ている服が女性の者だからか、見事に優雅な女性の礼の型を作るリウマにザグナラルは見惚れた。

「リウマと言う一介の冒険者にございます。殿下。まずはお人払いを」

「お主がリウマか……良い。下がらせよう」

ザグナラルは自分の護衛騎士に頷いてみせ、騎士達は敬礼すると女達やごろつきに似た男達を部屋から連れ出す。それを確認してか

ら竜真が再び口を開く。

「ロベル王は何と云ってもその優しさが特徴の王。息子を本当に死なせたくないと王族からの抹消ですませようとかなりの努力をしたんだけど……泡に消えましたね。かの王から死と言ふ言葉が出るとは」

首を傾げて唇の片端だけを引き伸ばした皮肉な笑いを浮かべ立ち上がる。その側に二人の少女が寄り添った。

「バレイラ、ロイ、先に行つて。シンと合流して宿に先に入つていてくれるかな？」

「はい。リウマさん」

「リウマさん、ご飯までに合流できますか？」

「大丈夫……じゃないかな」

ザナイドをじつと見ながら答える竜真。まさに獲物を捕らえる寸前の肉食動物のようだ。

「では僕らは先に失礼させていただきます。行こうバレイラ」

淑女の礼をもって退室する二人にザグナラルは再び眉間に皺を寄せる。

「彼らも男か？」

「片方は女の子ですよ」

「……………」

場に流れる奇妙な空気を再び破る竜真。

「まずザナイドじゃこの国で目立つからイナザに名前を改名しようか。今日から君はイナザね。そんな豪華な服もいらぬ。さあ支度して冒険に出かけようね？」

さあ遠足に出ようねと言わんばかりだ。ザグナラルとザナイドが意見する間もなく決定事項のように話す。

「ちなみに僕と同行するにあたって、先程の少年少女にもう一人少年が居る。彼らはランクAだから甘くみたら駄目だよ？ ほらいつまでも惚けてないでくれる？」

竜真がザナイドの側に歩み寄る。ザナイドの目に白い肌理細やかな肌がヒラヒラとしたレースの奥に見えた瞬間、ザナイドの体に衝撃が走る。

「ガッ！ くっ」

壁に体がぶつかった衝撃。ザナイドはうめき声を上げた。

「リウマ殿！」

「なんででしょうかザグナラル殿下。こいつは殿下とは全く関わりのない民ですよ」

「……………そやつは我が国の民だ。民を守るは我ら先に立つ者の務め」

竜真はザグナラルの答えを聞き、ザナイドもといナザに向かつて言い放つ。

「イナザ、これが優しき王になる者の資質だよ。あの村を蹂躪した時のあんたにこんなこと言えた？今のあんたに言える？」

「……………」

第一、第三王子は王妃の、第二王子のザナイドは側妃の子であり、この側妃がある種の国の不安材料でもあった。

側妃の横柄さ横暴さはまさにザナイドに継がれ、ザナイドの性格に良く出ていた。

側妃の王妃への思いはままザナイドのザグナラルへの思いとなっていた。

「……………俺にそんな民を愛する心なんぞ教えてくれる奴なんか居なかったよ」

「知ってる。でも王族として知らないままでは許されないことだったよ。……………ザグナラル殿下、僕は今からこいつの家庭教師としてピシバシ鍛え上げますから」

竜真はウインクした。竜真の意図が正確に伝わったのかザグナラルの口元に笑みが零れる。

「……………いつかザナイドが帰ってこれるように父に助言をしよう。感謝するリウマ殿。……………ザナイド羨ましいぞ。1stは王族への家庭教師もできる能力を持つ。しかもリウマ殿は最高の1stとも誉れ高き者だ。私も教えを請いたいほどだよ」

「兄……上……」

「ザナイドじゃなくてイナザですよ。殿下」

「そうだったな」

場が和む……のはザグナルと竜真だけ、未だ釈然としないザナイド、改めイナザは床に座り込んでいる。

「軽く蹴ったつもりだけどね……イナザ、行動が遅れると怖いよ？ さっさと着替えてこい。僕が良いと言うような服をちゃんと選んで来るんだよ？」

そういつと竜真は襟首を掴み、無理矢理立ち上げた。

「そなたは力が強いな」

「1stですから」

なにやら和やか過ぎるザグナルと竜真によく分からない恐怖を感じながらイナザはその場に立ちすくむ。服飾管理を執事に任せていた彼は冷や汗を背中に大量に流しながら呟いた。

「どこに服があるか分からない……」

「……自分で聞いて着替えてこい！！」

的確な竜真の蹴りにより、イナザは扉と一緒に廊下に吹き飛ばす。

「すまん。リウマ殿……」

「構いませんよ。殿下の下へお返しする時には誰よりも使い道のあ
る子に成長しているはずですよ」

につこりと笑む竜真にザグナラルはふと疑問になったことを尋ね
た。

「そなたは一体何歳だ？」

「……殿下より年上ですよ？ まあ帰すまでにそんなに年月を要し
ませんから、ちゃんと国内の掃除は済ませてくださいね」

「ああ。分かった」

一瞬凍った竜真の雰囲気はもとより、イナザが戻ってくるまで暫
し和やかな空気がその場を包んだ。

92・あつ！（後書き）

シリアスにしようとしてコメディに終わりました。そしてザグナラ
ルが居ると竜真がオチ要員になりそうです。

93・恐がらないで

竜真達はロベルの王都に居た。酒場の喧騒の中、覆面のリウマにシン、ロイ、バレイラ、そして髪と瞳の色を変えられたザナイードもといイナザが居た。ザグナラル王子が次の領主が着任するまでジリュアカに滞在するのを尻目に竜真は一行を連れてさっさと移動し翌日には着いていた。

「お疲れな顔だね」と声色さわやかに言われたのは竜真一行の期待の新人イナザである。

「……」

「喋るのも億劫だと」

ブスツとしていれば竜真に言いたい放題にされる。かと言って何かしら反応したら反応したでどうにかされるのも確実だ。

竜真がこんな調子なものだから子ども達は一日ですでに順応している。

「あ、イナザさんそのサラダ下さい」とロイ。

「私にも」とバレイラ。

「俺にも」とシン。

「僕にも」と竜真。

それぞれに皿を差し出し、笑顔が入れると言っている。素晴らし

い順応性を見せている。一方イナザは昨日の今日で苦虫を噛み潰しているかのようだ。

「早くくれる？」と竜真の催促に毛を逆立てる猫のようなイナザ。それにとつとつ堪え切れなくなった三人が笑う。

「大丈夫ですよ。噛み付きませんから」

「俺達はお兄さんと仲良くしたいんだから、そんなに威嚇しないで欲しいな」

「ご飯ぐらい笑顔で食べよ？」

ロイのセリフに幼い頃から何度も見たことのある有名なアニメを思い出し竜真は一人笑いを噛み堪えている。

子ども達に言われてイナザは眉尻を下げてため息を吐くとサラダを四人に割り振った。

「あの速さで普通の人間が対応できるわけないだろ」

イナザの胃の中は未だ盛大に暴れている。元気に飯を腹に入れる四人を信じられないものを見るようにイナザは見ている。

「わかります。わかります。俺も経験しましたから。ただ今日のよりも怖かったですよ。河原の石がゴツゴツな場所を今日の倍速でリウマさん走りましたから」

経験者は語るである。シンのみが経験したりウマに持ち上げられての移動。今日は歩みの遅いイナザを人目がない時に限りリウマが持ち上げて疾走したのである。

「まだ吐きそうだ」

「イナザは意外に弱いね」

「生まれ自体はいいもんでな」

「でも僕にそう言い返せるならいい根性を持ってそうだね」

竜真の声は妙に嬉しそうだった。そしてイナザの耳に子ども達の声が入る。

「気に入られちゃったね」

「頑張つて欲しいね」

「しばらくハードになりそうだ」

実によく分かっている子ども達だ。明日からイナザの教育が始まり、なおかつ自分達も頑張らなきゃいけない状態になることを既に予想していた。

「リウマさん、もっとお肉食べたい」

「僕も」

「俺はごちそうさまです」

何のことだかよく分からないと言つ風情のイナザを尻目にバレイラとロイが竜真に頼む。シンは一人目の皿を片付けていた。竜

真はバレイラとロイに苦笑しながら新たに五人前を頼む。そして竜真が更に追い注した料理が来た時、ようやく少し腹に食べ物を入れる事が出来るようになってきたイナザは信じられないものを見るように三人を見て、それをあーやっぱりとシンが笑いながらフオローするのだった。

93・恐がらないで(後書き)

まるで迷子のキツネリスのよう

94・頑張ります

翌朝、竜真達はギルドに居た。ギルドでイナザの冒険者登録し竜真は一人数字持ちの依頼ファイルを覗き、シン、ロイ、バレイラはランクAの掲示板を見ていた。
イナザはと言うとランクEを眺めさせられていた。

「草刈り、買い物代行……自分でやれ。家事手伝い、薬草採集……」

ランクEで出来る仕事をするようにと言われ、まだ納得できない部分が多々あるもののイナザは竜真が怖いので指示に従っている。

「イナザさん、決めました？」

「シンだったか……」

「シンで合ってますよ。もしEでもの足りなければDも探してみたらどうですか？Dなら討伐系も少しあるみたいだし」

「いや、Eでとあの男に指示されているから勝手はできん」

意外にも融通が効かないことにシンが驚いていると竜真がフラリ現れた。

「シン、任せた」

「任せたってリウマさん！」

焦ったしなないシンが名前を呼べば、肩を竦めて鼻で笑う竜真が少

し機嫌が悪そうに答える。

「王都のくせに数字持ちが今居ないらしい。2ndの依頼が二件もあんの。僕はとりあえず一件を片付けるから……予想的には五日はかかるかな。イナザに世の中を知ってほしいからシンに任せたいんだ。ロイとバレイラには少し荷が重いからね」

竜真の不機嫌の原因である王都のくせに数字持ちが居ないことがわかり、シンもすんなりと了承した。

「リウマさん……わかりました。ロイとバレイラは依頼を受けたんで俺はイナザさんと行動します。リウマさんは手伝いりませんか？」

シンの気遣いに竜真はシンの頭を撫でた。誉める時に頭を撫でるくせがあると知っているシンは嬉しくなり満面の笑みを浮かべた。

「ん。僕の方は大丈夫だよ……そうだ。もし王都で僕を見かけても話しかけないように二人にも伝えてくれる？」

「はい。わかりました。イナザさん、Dランクまでの二人で出来る依頼を探してください。俺はロイとバレイラに話をしてきます」

シンがロイとバレイラのもとに向かうと竜真はイナザの方へと顔を向ける。覆面の奥で口角が上がるのを見てしまいイナザは目を泳がせた。

「Eの仕事は基本的に子ども達のおこづかい稼ぎなんだ。でもその分、民達の生活に密着しているとも言える。……僕は行くから三人に迷惑かけないでよ？」

「ああ」

シンがロイとバレイラを連れてきた時には既に竜真がギルドを離れていた後だった。これにロイとバレイラがヘソを曲げたが、シンが頑張り二人を依頼へ向かわず。

「で、どれにするか決めた？」

「……これだ」と差し出された依頼書をシンが受け取る。

「三日間家事代行……イナザさん料理出来る？」とシンはふと気が付いたことを聞いてみる。

「家事に料理も入るのか？」と聞き返してくるのに王子様にしたって世間知らず過ぎると心の中で絶叫するシンは軽くハハッと笑う。

「まあ……うん……二人でってなるとEなら仕事ないし仕方ないか……イナザさん、三日間よろしくお願いします」

「迷惑をかけるかもしれん」

「誰でも通る道ですよ」

もうこれは一からってことですよね？と心の中で竜真に語り掛けてシンは依頼を受けるべくイナザを連れて受付へと向かうのだった。

94・頑張ります(後書き)

あれ……シソてこんないい子だった？

「しつこい！ 離れる！」

竜真は腕に掴まり離れない少女に手荒に扱えない存在に苛立っていた。それも竜真をよく知る存在なら傍に近寄りたくない程度に苛立っていた。

普段通りなら「離してくれませんか？」や「離してね？」と言っ
口調から見ても苛立ちがよくよく見て取れる。

巻き髪をツインテールにしたその少女は私のものは私のもの。あなただつて私のものと言わんばかりで傍に居る従者はオロオロと戸惑っている。

「申し訳ございません」

「謝るぐらいなら、さっさとこのご令嬢を連れて帰って下さい。迷惑です」

きつぱりと言いつ切る竜真に従者は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ここがヘルムート万屋の本店か」

近隣王国三国にまたがる商家ヘルムート万屋の本店がここロベル王国にあった。そして竜真が受けた今回の依頼はヘルムート万屋から出ていた。

「すみません。冒険者ギルドから依頼を受けてきました」

竜真は入り口で店員に指示を出している人間を素早く目に留め近寄るといつものように挨拶をする。

「へ？ あ！ 少々お待ちください」そう言つて奥に消えた人がしばらくすると壮年の男性を伴い戻ってきた。

竜真は積みまれている商品を見ていたが声を掛けられ振り向く。

「君が訪ねてきた冒険者か。名は？」

「……初めましてリウマと申します」

上からの高圧的な態度、覆面をしている竜真への不信な眼差し、竜真は久しぶりにこれこれとテンションをあげる。低い身長に怪しい覆面。依頼人がこういった態度を取るとは多々ある。だが、大概は名乗ることですそれは解消される。

「リウマさんですか？」

壮年の男性の威圧感は見事に消えた。かと言ってへり下る訳でもない。竜真に対しての敬意も伺える。

さつすが商売人と竜真が心の中で揶揄し、ゆっくりと頷いた。

「……本物が確かめても？」

「いいですよ。最近、偽者が増えていて困ってます。はいギルド証です」

男性は気軽渡されたギルド証を検分し竜真に戻す。

「どうぞ奥へ。ご主人様がお待ちしてます」

男性は手を奥へ向け、竜真を誘導する。

竜真はなんだこの人が主人じゃないのかと少々驚いていた。

「初めまして」と壮年の男性が案内してくれた先に居た青年が握手を求めていた。なんと言うか薄幸のと言うか、儂いと言うか、たおやかと言うか、線が細く優しげと男性にしておくにはもったいない形容詞が付きそうな人だと自分を棚に上げて判断した竜真は「初めまして」と返した。

先程の使用人の方がよほど主面している。だが、雰囲気は女々しくともどこかそこはかたなく腹黒の匂いがするあたり竜真はなるほどと心で呟く。

「昨日の今日で数字持ちの方にいらしていただけとは思っていませんでした。ヘルムート万屋の主人、ディオルと申します。お名前をお聞きしても？」

「1stのリウマです」

「ああ。あなた様が」

ディオルはにつこりと擬音がつく笑みを浮かべている。竜真を椅子へ座るように促し、ディオルも座る。そして竜真を案内した後、居なくなつた先程の壮年の男性がお茶を持ってきて出し、壁に控えたところで竜真は切り出した。

男性に話を聞かれても構わないのだろう。

「依頼は人探しとありますが……数字持ちへの依頼ですよね？」

「ええ。人探しです。騎士団にも動いていただいてはいますが」

人探しと言う依頼は本来数字持ちへの依頼にはならない。しかし、依頼者がヘルムート万屋の主人であり、なおかつ裏ルートでギルドへの依頼がされたことから数字持ち、更に緊急指定がされた依頼とされていた理由だろう。竜真はギルドで緊急指定を見てこちらの依頼を受けたのだが、依頼書には人探し、緊急指定としか書いていない。その場合はギルドが受けようとする冒険者を査定して依頼内容を話すと言つ形になる。竜真がギルドにこのタイミングで現われたことを感謝されたのは当然の話だ。

「ギルドでも聞いてきましたが、お話をお伺いしても？」

「ええ。ギルドにも伝えていないこともありますので」

竜真もそれは分かっていたことだ。頷いてディオルの話を促す。

「娘が居なくなりました。マリーナと言って歳は十二になります。居なくなつた時に近所の菓子屋の娘ヤルナと鍛冶屋の娘ベツイヤも一緒でしたが、同じく居なくなりました。ヤルナは十、ベツイヤは十三になります」

「お嬢さんはどちらで居なくなられたのでしょうか」

「マリーナ達はハイルマン伯の私塾で習い事をしており、その帰り道です」

「護衛は居なかったのでしょうか」

「いつも三軒で交代に出しておりまして、件の時には鍛冶屋の当番でした。しかし鍛冶屋の人間が三人を迎えに行った時には既に姿はなかったそうです」

「ハイルマン伯は何と？」

「ハイルマン様の所では迎えが来たので送ってもらったと……それはうち、ヘルムート万屋の者だと……」

竜真は淡々と事情を聞き出していく。

「ハイルマン伯の側でなせヘルムートの人間だと判断したのでしょうか？ 迎えが当番制ならば来る順番等も伯の側で分かっているても可笑しくはない。順番が入れ替わって来る人間がいつもと違いは警戒してもいいはずですよ」

「それは当日、ハイルマン伯の門番が新人でまだ私どもの人間を見ていないことが原因かと」

「私塾は毎日開催されていないのですか？」

「三日に一度です」

「では万屋からの護衛が本物か分からない上、順番についてもうやむやでも可笑しくはないですね……目撃者は門番が最後ですか？」

「今のところ」

「……あなたなら裏社会にも伝手があると思いますが、裏とは今回

のことでやりとりをしましたか？」

「大首領の一人と懇意にしていますがまだ情報はきていません」

「……市場用ではないと……後は魔術用か変態か……」

考え込む竜真の一言にディオルも頷く。竜真のしている想像はディオルも考えたことだ。

「騎士団はなんと？」

「未だ搜索中と」

「駒が少ないねー……わかりました。依頼を受けましょう」

「よろしくお願いします」

ディオルが立ち上がり握手を求めると竜真もそれに応えて立ち上がり、ディオルと握手をする。

「さっそく搜索に入りたいと思います。では手始めにお嬢さんの部屋を拝見しても？後、菓子屋と鍛冶屋へも向かいたいので僕がここに雇われだと言う説明ができる文をお願いします」

ディオルは竜真を娘の部屋へ案内するように傍に控えていた男に命じた。

「かしこまりました。ではこちらに」

竜真は娘の部屋へ向かうべく男に促され部屋を出た。

ディオルはふうと肺から息を押し出すと椅子に沈み込んだ。

「流石1stです……」

竜真から確認の合間に飛んできた眼光はディオルの心の内を曝け出そうとするかのようだった。温くなってしまうたお茶を喉に流し込んだ。

娘の部屋へ案内された竜真は魔術の目印になりそうなもの等を探してみたものの何も出てこない。

「えっと、あなたの名前は？」

振り向いて案内してきた男に名前を聞いた。

「ザックと申します」

「ではザック。この部屋はお嬢さんが居なくなっしてからこのままの状態ですか？」

「はい」

竜真は使用人ザックの顔をちらりと確認しながら、何かしらのヒントがないかと見て回るが何も出てこない。嘆息混じりに一息つくるとザックに鍛冶屋と菓子屋に行く胸を伝えた。すると先程頼んだ言伝の手紙を持ってきますとその場に待たされた。

結果として何の証拠も何の当ても出てこなかった。鍛冶屋も菓子屋もだ。関係者の憔悴を見るに早く解決させたいとおもいつつもヒントのヒの字も見事に出ない。

往来を歩いていた竜真はふと立ち止まり、考え、身を翻し近くの酒場へと入るとその酒場の店主にチップを渡す。

「リベラルラウに会いたい。赤い覆面が来たことを伝えて欲しい」

それだけを告げると竜真は店から出て騎士団の詰所へと向かった。

騎士団詰所内部に入った……否、忍び込んだ竜真は小柄な従騎士を見つけると音を忍ばせて近寄り、当て身で気絶させると人気のない部屋に連れ込み、「ごめん」と服を脱がせてソファアへと寝かせた。

従騎士の服を着、髪色を気絶した従騎士と同じくした竜真は人気がなく誰にも会わないことをいいことに堂々と資料室へと向かう。

「詰所がこんなに無用心でいいのか」と小さく呟いた竜真は目的地に入り込むと少女が失踪した事件を片っ端から探して読み漁った。

読み解いていくと二年に一度ぐらいの割合で少女失踪事件があるらしい。王都で起こったのは八年ぶり。事件は二十年少し前辺りから定期的に起こるようになっていく。竜真がギルドを通して一度目をつけたある男がこの国の盗賊ギルドで幅を効かせ始めた辺りからと推測した。

「まあ、この国にお家を持ったからには掃除をしたいよね……あつとかなり時間がかかったな」

竜真は二人がかりで二日かかる資料の分析を半日で終わらせると資料を片付けて気を失わせた従騎士のもとへと戻ったのだった。

もちろん侵入を誰かに見咎められることなく、気付かれることなくだ。

収穫を手に、詰所に来る前に寄った酒場へ向かうと店主が竜真から一人の男へ視線を流した。

竜真は頷くと男の元へ向かう。

「ねえ、ラウは元気？」

あまりに気軽に自分に声をかけてきた覆面の男に男は驚いた。

ボスにつなぎを取りたがっている男がいると聞かされ、酒場によつてくるもソイツは出ていったと店主は言う。それでも待っていたのだが、いかんせん中々現れない。そろそろ帰ろうかと思っていた時だった。

ボスの名を気軽に口にする男。

そう身長も高くなく、小柄な全身を紅くした姿の男。

「お待ちしておりました。ご案内いたします」

姿を確認して男は覆面の男に最上級の礼を取った。“1stのリュマ”が今日の前に居るのだと男は気が付いていた。

「ラウラウやっほー」

覆面の男が入ってきた瞬間、部屋の奥に居た男、リベラルラウは茶を吹き出した。

リベラルラウは大首領と畏まれる身になって、元々のがっしりした体型に更に整った顎髭が威厳ある男に見せかけているのだが無駄になりそうな竜真の軽さだ。

「リウマさん。ラウラウは止めてください」

けほけほと咳き込んだ男にひらひらと手を振る竜真。男は非難した。

「ラウがここまで成長してるとは思わなかったよ」

竜真は咳き込んだ男に促されるまま、その上座へと座る。ギルドの大首領である彼が上座を譲ったことに竜真を案内してきた男は驚いていた。

「ガイナツク。この方は私の恩人。リウマさんだ。覚えておきなさい。それからとっておきを……」

「……かしこまりました」

案内してきた男、ガイナツクは（酒場で文句言わなくてセーフ）と静かに胸をおろしてボスのとっておきの酒を取りに部屋から出た。

「ラウ。僕が来た理由は分かるかな？」

ガイナツクを一瞥してリベラルラウに意識を戻した竜真の一言にリベラルラウがゆっくり頷く。

「三人のお嬢さんの話ですね。いかにもあなたが嫌いそうな話だ」

「そうだよ。万屋が情報はなかったと言うから直接聞きに来たんだ」

「……私のところには情報がある？」

「まあね」

「万屋からお聞きになったでしょう？」

表の者に言える情報ではない。

「うーん。例えば盗賊ギルド内で大首領同士の争いがあるでしょう」

竜真が何を言い始めたのかすぐに分かったリベラルラウは竜真の顔を凝視した。

「片やこの国を裏から支配し続けてきた老獪。片や若手から支持を集めている新人。老獪の方は目下、人身売買を基盤にしている。これはギルドの幹部にもなれば知らないでもない情報だ。売り先は多分高貴なる貴族階級。その気になれば一昼夜で人間を変えるほどの手技を持つ変態野郎に騎士団は目を付けていても排除まではできない。騎士団内部にも腐敗部があり、これを捕らえることはできない」

「そこまで分かっていたらっしやるなら！」

「だから君を巻き込もうと思った。そしてもう一人」

竜真が人差し指を立てた。

「この事件に巻き込みたい方がいる」

リベラルラウは（うわー）と目を泳がせた。現在、王都には二大勢力があり、一方を担っていると自分としてはこのぐらいで満足していたいなーと言いたい。

このままでは脱力のあまり立てなくなりそうだとリベラルラウは立ち上がり、脇部屋からティーセットを持ち出した。

「まああの変態をそろそろ失脚させたかったし、王国内の第二王子派を排除もしたかったんだ。第一王子の治世なら悪くはならなさそうだし、君と彼の相性も悪くない」

ああ、この人、巢作りしてんのかとリベラルラウは竜真がシュミカに家を持っていたことを思い出した。リベラルラウ手ずから入れたお茶を竜真の前に出す。

「本格的に落ち着くつもりで？」

「いや。落ち着くまでは至らないよ。ただ僕の手元に来た情報に不穏なのがあつて、僕の家がある国を荒らすのが嫌だから先手を打ちたい。そんな感じ」

竜真はお茶を啜ると「不味い」と呟いた。

「君にはこの国を裏から守ってもらいたい。それが出来るだろうか
らねラウなら……だって僕が目をつけたんだもの……ね？ ラウ」
「不味いって酷いですよ。そんな流し目されたら、わかりましたっ
て言うしかないじゃないですか！」

覆面の下を想像するだにリベラルラウは口元を引きつらせる。近
くにいると覆面では隠せない目元の色気を食らうのだ。

竜真としては百も承知なので繰り出しているのでリベラルラウが一
人焦る分に可笑しい。

「で、どこまでお知りですか？」

「そうだね。第二王子の母である側妃の浮気。変態の部下の出入り
が側妃様の近くで多い。万屋は何かを知っている。変態は結構国の
中枢に根を広げている。第一は悪くないかんじ。第二は現在僕預か
りで教育中。王様はあまちゃん……箇条に言えばこんなかんじ
かな」

「……………はあ……………あなたを忘れていました。1stにして首領、
そしてマスターだ。第一王子が先日、単騎同然に都を離れたのはあ
なたが原因でしたか。で、第二王子はあなたが原因で王族をそして
貴族すら辞めることになった」

「失礼な！ あれはあの馬鹿が悪い。僕を原因にしないでほしいな」

「まあまあ。とりあえず国から王子を一人消したとあって、あなた
の動向はかなりマークされてたんですがね……………まあ、情報に上がら
ない。上がらない」

リベラルラウが苦笑いして言えば、竜真はさも当然と答える。

「僕は紅砂の頭だし、君が言ったように1stでマスターだ。僕の情報は金になる。紅砂に報酬払えば1stのリウマ大好き人間の会、会報を売ってもらえるよ……多分ね？アカイ」

「……」

竜真が天井の角に視線を向けたのにリベラルラウも釣られてそちらを向く。

「リウマ様あバラさないてくださいよおー」

リベラルラウは頭を抱えた。竜真が見ていた天井の角がズレて人が一人降りてきたのだ。

「ラウ。僕の部下は優秀なんだ」

大首領が取り仕切る盗賊団の本部にいとも簡単に忍び込んでいる。それは優秀だろう。竜真がアカイと呼んでいたのを聞いていたリベラルラウは「紅砂の三幹部の一人じゃないか」と脱力していた。

「リベラルラウ様、警備が手薄過ぎですよ。リウマ様曰く変態の部下が居たので拉致っときましたー」

間延び口調に脱力していたリベラルラウが二言目の「拉致っときましたー」で復活した。不穏なことをさらっと言っつのはこの頭にしてこの部下と言っつのだらう。

アカイが竜真に一瞬お伺いをたてる視線を送ると竜真の口角が皮

肉そうに上がる。

アカイが指をパチンと鳴らすとアカイが出てきた天井の角から女が一人落ちてきた。

「まだ上に誰か潜んでるのか！」

「なんで亀甲縛りなの」

アカイの他にも入り込んでいる竜真の部下に驚くりべララウと落ちてきた女のように頭を抱える竜真。大首領と首領。二つの組織の頭を同時に脱力させることにアカイは成功した。

「ありがとうねえ。本当に助かりました」

枯れた老女の声は慈愛と感謝に満ちていた。

「礼を言われるようなことではな」

「気にしないで俺らみたいなヒヨッコは仕事があるだけで幸せなんだからさ」

イナザの背中を左手でつまみ、シンは右手で老女に向かって手を振る。

「じゃ、アリンさんまた明日来るからね」とイナザの背中をつまんだまま後ろに下がるシンに引きずられるようにイナザは後ろに下がる。

「な」

「それじゃねー」と文句を言おうとしたイナザを蹴飛ばして家から出るシン。

「あらあらまあまあ」と微笑ましげに老女は寝台の上に座り、掛け布団を膝に乗せながら二人が去るのを見ていた。

「まったく子は親に似ると言うがアイツと同じ角度で蹴りを入れるとは……」

「イナザさんに言われなくないよ」

シンは宿の方向へと歩きだす。イナザもシンのごもつともな一言に黙り付いていく。

「お」

「黙って無視」

そこで目の前に竜真が通りかかった。イナザを素早く牽制してシンは竜真から距離を取りながら歩を進める。竜真がすっかり見えなくなってからシンは路地裏に入りイナザの方を向いた。

「あんたの頭ん中は空っぽか！あんな往来でリウマさんに話しかけようだなんて」

「そんなに怒」

「るようなことだよイナザさん。リウマさんは見かけても話しかけるなど言っただから、それを守るのは当たり前でしょ？」

自分よりも背は低いが普段は一行の誰よりも温厚なシンの怒りは迫力がある。イナザは気圧されて一歩下がった。

「それにさっきのことも！ あちらは雇用主、こちらは雇われ。こっちが卑屈になる必要もないけど尊大になる理由は更にないんです」

「わ……わかった」

「これほど何にもできない大人を始めて見ましたよ」

「まあ何もするなと言われて育ってきたからな」

「それに甘んじていたから今に至ると」

「今日は辛辣じゃないか」

なんとなくシンだけは味方だと思っていたイナザはシュンとして肩を下げた。

「何もできないなら今からすればいい。覚えればいい。覚えなければ死ぬこともある。それが市井で民達の生き様だと知るんです。まずは生きること。生きるためには食べることに作る。食えるためには作るか買うかです。買うにはお金が必要です。だから稼ぐんです。俺達冒険者はハイリスクハイリターンで稼ごうと思えば高金額を稼げますが、次の依頼で生きるか死ぬか、次の依頼まで生きれるかどうか、その為には良い防具や武器、技術が必要です。これを得るためにもまた高額が必要になります。ですが、アリンさんからのあの感謝の言葉はお金では買えません。お金も大事ですが、アリンさんから感謝されて、少しでも良い気分になったら、その気持ちを忘れないでください。それが人間が根幹に持つ大事なものなんです」

シンらしい説教にイナザは皮肉に笑う。

「……礼を言ったことも言われたこともなかったな」

イナザは暗い雰囲気を纏いポツリと呟いた。

竜真は捕まった捕虜の縄を解き、アカイにこの国を暴くように命令をした。

リベラルラウは敵にまわしたら最後だなーとお茶を啜る。

「ラウ、邪魔しないよね？」

「しませんよ。なんせリウマさんは俺の政敵を破滅に追い込んでくれるんですよね？なら後押しするだけです」

突き刺さる竜真の視線にリベラルラウはやけくそ気味に言つと竜真はお茶を縄から解放されたスパイにかけた。

「起きなよ。ディアージャロウの部下さん」

力強く踏みつける。変態ことディアージャロウの手下は苦しそうに喘いだ。

「名前と任務を言え」

簡単に言えない二つを直球に聞く竜真は放ってリベラルラウは手紙をしたためる。

封をした手紙を持って廊下に向かい鈴を鳴らしガイナックを呼び付けた。

「ガイナック、幹部会呼び付ける。んで、これを奴らに披露。じゃ」

用件だけ言い、ガイナックに手紙を渡し、そそくさとリベラルラウは部屋に引っ込んでしまった。

渡された手紙に押された最重要、緊急の印にギョっとしてガイナツクは廊下を駆け出した。

「ラウ、動く時は盛大にね」

「わかってますよ……で、何か喋りましたか？」

「お口が堅くてね……ラウ、部屋に誰も入れるなよ？」

「かしこまりました」

リベラルラウの返事に竜真は覆面を取ると腰から鞭を取り出した。

「さあ変態と僕、どちらがより君を落とせるか……忠義があるなら耐えてごらん。耐えられたら逃がしてあげよう」

竜真の鞭が振り上げられた。

リベラルラウは新妻の顔を必死に思い出しつつ竜真と忍んできた者を見ている。そうもしなければ自分も倒錯の世界に渡ってしまいそうだった。竜真の色気は前に見たときよりもより艶やかに強化されていると腰を引きながら思う。(リーン、助けて)と一国の都の勢力の片方を担うリベラルラウは嫁の名前を心の中で叫んでいた。

「カリーアいい子だったよ……」

「リウマ様……」

竜真は男を褒め、男は肩で息をしたまま潤んだ目で竜真を見上げている。新たに結ばれた淫猥な主従の近くにリベラルラウは拍手しながら近寄った。

「すんげえの見ましたわ。ここまでの官能ショーを俺は見たことありませんよ。しかも男同士でお互いに服すら脱いでなくせにいやらしいやらしい」

貶してはいないが誉めてもない言葉に竜真はムツとしながら、覆面を自分の顔に巻き付けた。

カリーアと呼ばれた男は徐々に隠れていく竜真の顔を待てを強いられた動物のように焦がれている。

リベラルラウは竜真の手腕に賞賛していた。

カリーアのように忍び込み情報を盗むものは、勿論捕まっても相手に情報を渡さないように訓練されているし、敵になびかないよう徹底的に教育されている者が多い。それにも関わらず強力な教育を鞭一本で心を開かせ従順にさせるまでする手腕は自分の部下にはない。

「リウマさん、あんたんとこの団員みんな調教されてんですか？」

「……いや、まさか。基本的に僕に焦がれている腕がある変人揃い。なぜか僕に忠誠を誓っていて懐いてくるんだ。諜報部員はアホな上

に特に面白がりが多くてね。変なネタばかり集めてくる。まあ腕があるだけ質が悪いと言っておくよ。とりあえずコレの怪我の治療を」

コレと呼ばれたカーリアはその瞬間に体から力を抜かし意識を失った。

リベラルラウはガイナックを呼びつけ医者を呼ぶように言い付け、治療道具を持ってこさせた。

ガイナックは部屋に引き入れられ、倒れている男に眉をしかめた。

「幹部会の皆様、大変焦らせていらっしやいますが……」

「焦らしておけ。かまわん。で、医者は？」

「ゼフラー先生がもうすぐいらっしやいます」

「おっ」

「で、なんですか！ コレ」

ガイナックがリベラルラウに吠える。

「いや、気にすんな」

「気になります」

「……僕の下僕だよ。ちょっと手荒に扱ったから怪我しちゃってね。手を煩わすよ。ごめんね？」

「いえ、リウマ様。お気になさらずに」

リベラルラウを責めていたガイナックも竜真が一言言えば何も言えないらしく引き下がった。

しばらくして酒瓶片手にした無精髭のまさにやぶ医者 of 典型そんな見目のいかつい男がガイナックに通されてやってきた。

「ラウ、怪我人だって？」

その風体に見合ったダミ声で入ってきた男はゼフラーと言ってリベラルラウの盗賊団専門医だ。

「ああ。こいつを頼む」

「どこ怪我してるって？」

服は普通に着ていて、顔も綺麗なまま。倒れているカリーアはただ床に寝ているように見える。

「服の下は酷いと思うよ。きっと解熱剤は必要かな」

カリーアを攻め疲れたのか竜真はゼフラーが着いた時にはソファの上に寝転んで仮眠をとっていた。

「ガイナック、リウマさんにお茶を」

「はい」

「いや、いい」

ゼフラーは起きた竜真をちらりと確認する程度に見てガイナックに言った。

「ガイナツク、服脱がすの手伝えや」

「はい」

気だるげなりウマが二人を見ながらリベラルラウに言った。

「ラウ、女誰か一人見繕ってくんない？」

「お……うえ？」

背後からの気配にカーリアの服をはぎ取るのを見ていたリベラルラウは混乱した。

「高ぶってんの。一人でするのは嫌だからね」

「はい。え……っと思ってきます」

リベラルラウは混乱しているようだ。

「ガイナツク、来い」

それでもガイナツクを呼ぶことは忘れない。

リベラルラウとゼフラーに遠慮がちなガイナツクが部屋から慌て出ていったのを見ながら竜真は悠然と歩きだす。

ゼフラーを手伝い、カーリアの衣服を剥ぎとる。

「こりゃあ……」

ゼフラーは絶句した。

肌が露出した部分には一切の傷はなく、服は傷んではいくせに、服の下は一面蚓腫れである。

「あんたかい？」

「そうだよ」

「器用なこつて」

「知ってる」

「……………」

竜真とゼブラーの視線が交差する。

「あんた新入りかい？いや、違うか……………」

「ラウの友人さ」

「ラウの友人か。おれあゼブラー、ラウの専属医だが普段は街で医者やってんだ。あんた名前は？」

「リウマ……………二つ名は色々」と

「紅砂の頭かい。ラウがんなこと言ってたな」

「そうそう」

「いい腕してんなあー」

「ありがとう」

ゼフラーは関心を込めて言っているが竜真の声は冷たくほぼ棒読みだ。

そこへどたばたとリベラルラウが帰ってきた。

「リウマさん、遅くなってわりいね準備ができた。俺んこの一番の花だから手荒にしないでくれよ？」

竜真の流し目にガタンと音を立てリベラルラウは壁にぶつかった。

竜真は何してるんだかと肩をすくめた。

「男はともかく女は愛でるもんだよ？ラウ」

「……色気過多だな。ガイナックに付いていってくれ」

「ありがとう」

竜真は猫のような足取りで部屋から出ていった。

リベラルラウはふうと息を吐き、ゼフラーに近寄る。

「うわ。ひでえな」

「服が一ヶ所も破れていない。どうしたらこうなるのかちっともわからん」

眠るように気絶しているカーリアを二人の四つの目が困惑と感心で見つめていた。

99 (後書き)

ラウ。ばしられる……お頭なのに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827/>

1stのリウマ

2011年10月12日07時42分発行